



市民と専門家による仙台市役所本庁舎建替シンポジウム

CITY HALL

仙台ラウンドテーブル

-
- 第1回仙台ラウンドテーブル
「市役所（シティホール）を考える」
2018年11月26日〔月〕 13:00 - 18:45
 - 第2回仙台ラウンドテーブル
「みんなの市役所（シティホール）を模索する」
2019年1月27日〔月〕 13:00 - 18:45
 - 第3回仙台ラウンドテーブル
「地域コアとなる市役所（シティホール）を育む」
2019年4月23日〔火〕 13:00 - 18:45

主催

仙台市財政局理財部本庁舎建替準備室
一般社団法人 宮城県建築士会
一般社団法人 宮城県建築士事務所協会
公益社団法人 日本建築家協会東北支部宮城地域会

0.0	目次	2
0.1	仙台市役所本庁舎建替	3
0.2	論考	4
0.3	論考	4
0.4	論考	5
第2回仙台ラウンドテーブル「みんなの市役所（シティホール）を模索する」		
1.0	前半ラウンドテーブル	7
1.1	テーブル A1 様々な市民の視点から「大きな都市ビジョン」を考える それぞれが思う都市ビジョンを共有し、大きな都市ビジョンを官民連携で考える	8
1.2	テーブル B1 「これからの仙台を担う仕組み」を公共・市民協働の側面から考える 市民協働・新しい公共の在り方から「公共を担う仕組み」を考える	8
1.3	テーブル C1 「基本計画検討委員会資料」をレビューし、様々な市民目線を網羅する 既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカイラインの構成を考える	8
2.0	後半ラウンドテーブル	57
2.1	テーブル A2 様々な市民の視点から「大きな都市ビジョン」を考える いまここから、大きな都市ビジョンをどう形成するかをみんなで考える	58
2.2	テーブル B2 「これからの仙台を担う仕組み」を公共・市民協働の側面から考える 「市民と議会と行政」の関係から「公共を担う仕組み」を考える	58
2.3	テーブル C2 「基本計画検討委員会資料」をレビューし、様々な市民目線を網羅する 低層部を中心にレビューし、低層部の必要機能を考える	58
3.1	主催・企画委員会	115

市民そして専門家の皆様の熱意への感謝

はじめに、仙台市役所本庁舎の建替えに関し、仙台ラウンドテーブルの開催から報告書発行までの一連の活動にあたり、宮城県建築士会、宮城県建築士事務所協会、日本建築家協会東北支部宮城地域会の3団体の皆様が連携し、多大なご協力を賜りました。また、本市内外を問わず多くの専門家の皆様にご登壇いただき、3回の開催で全18テーブル、合計2,580分間の議論を通じて忌憚のないご意見を頂戴することができましたこと、そして何より、市役所本庁舎の建替えに関する皆様の熱意に対して心より感謝申し上げます。

市役所は誰のものか

市役所の本庁舎は通常、行政の執務と議会の運営がなされる場です。しかしながらその執務は市民生活に直結しており、市民が人生の様々な節目において少なからず利用する場でもあります。海外では市役所は「シティホール」と呼ばれ、様々な活動の場として利用されるとともに、市民が地域のアイデンティティを感じる場の役割も担っています。

このことから、市役所は職員が働く場、市民の手続きの場としてだけでなく、市民一人一人が思い描く地域の姿を象徴した「みんなの庁舎」であると考えられます。

庁舎の設計条件

自治体の公共建築物の建設では、行政の担当者が予算の中で建築物の内容を企画し、アンケートや説明会、ワークショップ等を通じて地域住民等の意見を聴き、設計条件を整理している事例が多く見られます。また、大規模な建築物や重要な建築物の場合には有識者等で構成される委員会で意見を聞き、設計条件をまとめる事例も見られます。

一方で公共建築物の設計条件整理の課題は、①全ての住民等の意見を聞く物理的・時間的余裕がないこと、②多数の住民の中から抽出した者の意見に頼らざるを得ず、抽出方法は行政が設定するため、フィルターを通した「地域の意見」となっていること、の2点と考えます。

このような課題を解決するため、意見を聞く人数を増やす事例や、ワークショップ、説明会を複数回開催など、各自治体が地域の特性に応じた意見の聴取方法で取り組んでいます。

ラウンドテーブルの特徴

仙台ラウンドテーブル形式は、次の特徴があると考えます。

①市民、専門家による意見聴取の場

各回のテーマ設定、登壇者選定、発言の形式などは全て建築設計3団体の主体的な企画提案によるものです。これは東日本大震災の教訓から皆で考えることの大切さ、そして仙台市民に市民協働の素地があったからこそ開催できたのではないかと考えます。

②検討委員会委員の情報収集・情報共有の場

基本計画の策定にあたり本市も有識者等による検討委員会を設置しています。

ラウンドテーブルを開催し、検討委員が参加することで活動支援

のひとつになると考えました。これにより情報収集や専門家としての共通認識の形成、新たな視点の発見の場として機能できたと考えます。

③ゴールや結論を求めない

各テーブルに結論は求めないため、意見の全体像から様々な方向性を見つけ出すことができると考えます。

ラウンドテーブルの活動を通して、従来の行政手法にとらわれず、仙台の地域性をふまえた意見聴取の場を設けることができました。今後は頂いた貴重なご意見をもとに「みんなの市役所（シティホール）」の実現を目指し設計に活かしてまいります。

仙台市役所財政局 本庁舎建替準備室

室長 菅原大助

ラウンドテーブルの面白いところは、

- ・ 建築に関わる三団体が、テーブルセッティングし、多方面の方々を招き、テーマについて自由に意見を出し合い、話し合ってもらったところ
- ・ 多方面の方々による討議が多岐にわたり、微妙に違うニュアンスで語られ、発展していくが、他者の意見や行政に対しての否定や批判はなく、結論は出さないところだと、思う。

ラウンドテーブルでちょっと大変だったところは、

- ・ 担当したテーブル討議をまとめなければならなかった時
 - ・ 140分のかかなり濃い討議内容の、深いもの、軽く発せられたもの、意見の強弱をフラットにして、さらに集約しなければならなかった時と、実感した。
- ラウンドテーブルについて建築士会は、主催ではなく、後援という立場になったが、
- ・ 誰もが一市民（県民）として自由に意見を出すことのできる、テーブルをセッティングし、多様な意見を共有することは、地域社会に関わる建築士として、意義がある
 - ・ あらゆる方面の多様な意見を聞くことは、刺激的でさらなる思考に繋がると、魅力的なことがたくさんあった。

今後もシティホール、大規模ホール、文化芸術施設、といったラウンドテーブルが開催されるかもしれない。そんな単語が目に入ったら、建築士の方には是非、ご参加頂きたい。

(一社) 宮城県建築士会 小林淑子

※建築に関わる三団体

(公社) 日本建築家協会東北支部宮城地域会、(一社) 宮城県建築士事務所協会、(一社) 宮城県建築士会

「建築家の責任」

私たち建築家は「建築士」としての資格で仕事をしています。一般に「士業」と称して弁護士や司法書士と同じで専門性の高い国家資格で建築物の設計・監理を独占的に請け負って生業としています。その業務は建物の安全性や、機能性、衛生面のみならず街づくりや、環境への配慮、景観、都市計画まで幅広く人々の生活に大きな影響を与えることからその社会的な責任は大きいものと考えています。また建築物は一度作ってしまうと50年以上存在し続ける、歴史を刻むものであることも考えると未来への責任があるとも考えます。

その建築を生業とする団体が3つあります。「建築士会」「建築士事務所協会」「建築家協会」それぞれに設立の趣旨が異なりますが、お互いに切磋琢磨して建築を文化に高めるべき、社会の質を上げるために日々活動をしています。

東日本大震災の時もこの3団体を含めた建築関係者が行政に協力をしていち早く建物の応急危険度判定に出勤して各地からの応援もいただき、安全、要注意、危険の判断をして震災の2次災害を防ぐべく活動しました。そのあとも国の復興補助を受けるために公共施設の被災判定に奔走いたしました。私たちに与えられた社会的責任を全うできたと考えています。

今回の「仙台ラウンドテーブル」もその延長線上にあります。

建築の作り方も近年大きく変わりました。公共事業をつかさどる行政も変わり、納税者である市民の意識も変わってきています。「仙台市役所の建て替え」という仙台市民にとってとても大きな買い物であり、日々の生活に密着する施設の計画に建築の専門家として役に立てることは何かあるのではないかとの考えから行政の方と一緒に私たち建築3団体が企画いたしました。

宮城県建築士事務所協会 石原修治

仙台ラウンドテーブル（以下SRT）の目的等は既に他の部分で説明があるかと思うので、ここではその発足の一部背景についてお伝えしたい。

SRTの協働の背景には、震災復興シンポジウム『みやぎボイス』（以下MV）での協働の経験が活かされている。ラウンドテーブル形式の討論スタイルもそうなのだが、その運営理念の根幹に、『団体ごとの垣根を超えた企画会議』と、『多様な主体』が同時並行的に『対話形式の議論を交わす』シンポジウムというところに特色があると考えている。

始まりは2013年。東日本大震災から2年が経過したころ、目の前の問題解決に重きを置く現場に対して、未来につながる課題解決型復興、さらにはまちづくりに向けた多様な主体による協働・共創のプラットフォーム構築の大切さを痛感した建築・まちづくりの専門家らの有志により立ち上がったMV。シンポジウムの参加者は、被災者、漁業者、農家、遠方から乗り込んできたボランティア、中間支援関係者、福祉関連支援者、土木技術者や建築家のような専門家、学識経験者、行政職員など、復興に取り組んでいるさまざまな立場の方々が一同に介し、お互いの意見を同時にぶつけ合うという混沌とした場であり、傾聴を強要させられる雑踏の中に放り込まれたかのような空気感は、多種多様な主体がそこに存在し、また意見や論点も混沌としているのだということがまさに表現されており、今もなお継続し開催している。

復興と建築まちづくりは地域ごとに様相が異なるため、平時からの継続的な「地域それぞれの地域経営の視点と活動」が大切だと言える。そこでは、制度や前例では応えきれない「隙間を埋め」「一人ひとりの特徴を知りそれに応える」ために、互いの「顔」を知り、地域社会の「全体像」を知る、その場となる体制・システム作りが重要であると考えている。

少子高齢化・人口減少社会での復興・建築まちづくりの進め方を見つけるために、震災後多くの復興計画でうたわれた「創造的復興」実現のために、関係する人と組織の「読解力」「連携性」を高めることができる協働の場がその役割を担っている。

そうした中で培われた、「連携と協働のプラットフォーム」と「経験と知見のアーカイブ」を「MV型プラットフォームの財産」とするならば、震災復興の場のみならず、次なる被災地を含めた、平時からの建築まちづくり活動にも大きく貢献できるものと確信している。まさに、仙台市役所本庁舎建て替えという、仙台市中心部において、建築、まちづくり、交通、経済、文化、歴史・・・地域に対し多大な影響を与える本事業に対し、多種多様な主体が、顔が見える場でそれぞれの意見を発することができ、その一方別の主張に対しても傾聴しなければならないという『対話型のSRT』の成果が、この代替事業の理念の根幹を担うことができたならば、被災地たる政令指定都市として、ひとつの立ち位置を示すことができると言えるのではないだろうかと考えている。

（ここで記述したMVにかかる内容は、みやぎボイス2019にかかるクラウドファンディングでの公表内容を加筆、編集したものである）



第二回 仙台ラウンドテーブル Round Table
「みんなの市役所を模索する」
 一市民と専門家による仙台市役所本庁舎建て替えシンポジウム

「仙台市役所本庁舎」は「仙台市」という街の姿を象徴的に示す建物であり、その建て替えは建築行為だけではなく、今後の行政、市民との関係・意識の在り方、仙台市中心部のまちづくりに大きな影響を及ぼします。この重要なプロジェクトに向け、仙台市と地域の専門家が集結して、みんなで考える場を設けました。

「仙台ラウンドテーブル」は、様々な立場からのさまざまな意見を集約し、あらゆる観点から見て納得できる合理性を追求することを目標としています。「仙台ラウンドテーブル」では、次の二つのことを大切にします。

- ① 互いにぶつかりあわれた場であること。 互角な意見を投げ合い取り入れること。
- ② 地域の専門家を中心として責任を議論すること。

「仙台ラウンドテーブル」は、何かを決定する場でもなく、見つけた論点を議事に押し付けるものでもありません。しかし「広く開かれ整理された論理」には、誰もが納得せざるを得ない論点があります。ぜひ皆様の貴重なご意見をこのテーブルに寄せください。

場所：せんだいメディアテーク1階オープンスクエア
日時：2019年1月27日（日）13時～18時45分
入場無料・登録不要/どなたでも参加できます

高座席	市民のための本庁舎建て替えプロジェクトをみんなで模索する。	開演	13:00～13:10 (10分)
テーブル席		開演	13:10～13:15 (5分)
Aテーブル	様々な現場の視点から、大きな都市ビジョンを考える。	仙台市役所本庁舎討論	13:15～13:30 (15分)
	①A1 それぞれの現場に即したプランを話し、大きな都市ビジョンを考える。	市民討論	13:30～13:50 (20分)
	①A2 様々な現場に即した都市ビジョンを話し、大きな都市ビジョンを考える。	休憩	13:50～14:00 (10分)
Bテーブル	「これからの仙台をどう構想し、新公共・市民協働の側面から考える。	仙台市役所本庁舎討論	14:00～14:25 (25分)
	①B1 市民協働・新しい公共の在り方から「新公共」を考える。	市民討論	14:25～14:40 (15分)
	①B2 「市民協働と行政」の現場から「公共をどう創るか」を考える。	閉演	14:40～14:45 (5分)
Cテーブル	「基本計画検討委員会資料」をレビューし、様々な市民協働を模索する。		
	①C1 仙台市役所本庁舎の議論と協議。建設大手側からプランの構成を考える。		
	①C2 民間部会中心にレビューし、民間部会の協働を考える。		
	※会場内のPCモニター、タブレットはすべて日本語で表示することができます。		

主催：
 協賛： 仙台市役所本庁舎建て替え推進委員会
 (一財) 地域経営塾
 (一財) 地域経営塾と事務局
 (社) 日本建築家協会東北支部

第2回仙台ラウンドテーブル
市民と専門家による仙台市役所本庁舎建替シンポジウム

「みんなの市役所（シティホール）を模索する」

市民のための本庁舎建替プロジェクトをみんなで模索する

せんだいメディアテーク 1F オープンスクエア

2019年1月27日〔月〕

13:00	挨拶・趣旨説明
13:10	前半 ラウンドテーブル
15:40	休憩
16:00	後半 ラウンドテーブル
18:30	閉会挨拶
18:45	閉会

仙台ラウンドテーブル

仙台ラウンドテーブルは、建築設計を生業とする地域の三団体と仙台市が協働して立ち上げた「市民のための社会づくり」を担うシンポジウムです。私たちは誰もが、一般的に言う市民であると同時に、様々な専門分野の専門家として日々働いています。バスの運転手は公共交通に関する専門家であり、福祉施設で働く方はその分野の課題を良く知り、公務員は行政手続きの専門家です。また、主婦の方々は教育問題や介護の問題を広く扱っています。私たちはそういった専門スキルを学び、それを業務として社会に参加し対価を得て生活を送っています。

百年前であればいざ知らず現代では、様々な分野が高度に専門化され、専門知識が無ければ、その専門の方に通用するまともな意見が出づらいつい状況にあると思います。よく耳にする「素人に意見を求めてもまともな意見が出ない」という行政側のボヤキの原因はここにあります。行政職員はどんどん高度に専門化し、しかし一方で市民は専門性を持たされない市民でしかありません。

仙台ラウンドテーブルは、市民でもある専門家が中心となって、専門知識を持って行政側の計画を分かり易い市民の言葉に変換し、また、市民の純粋な言葉に専門的な位置付けを与えて行政側に伝えます。普段は専門知識を業務として行って対価を得ている専門家が、未来の地域づくりのために、業務受注以外の社会参加を行う取り組

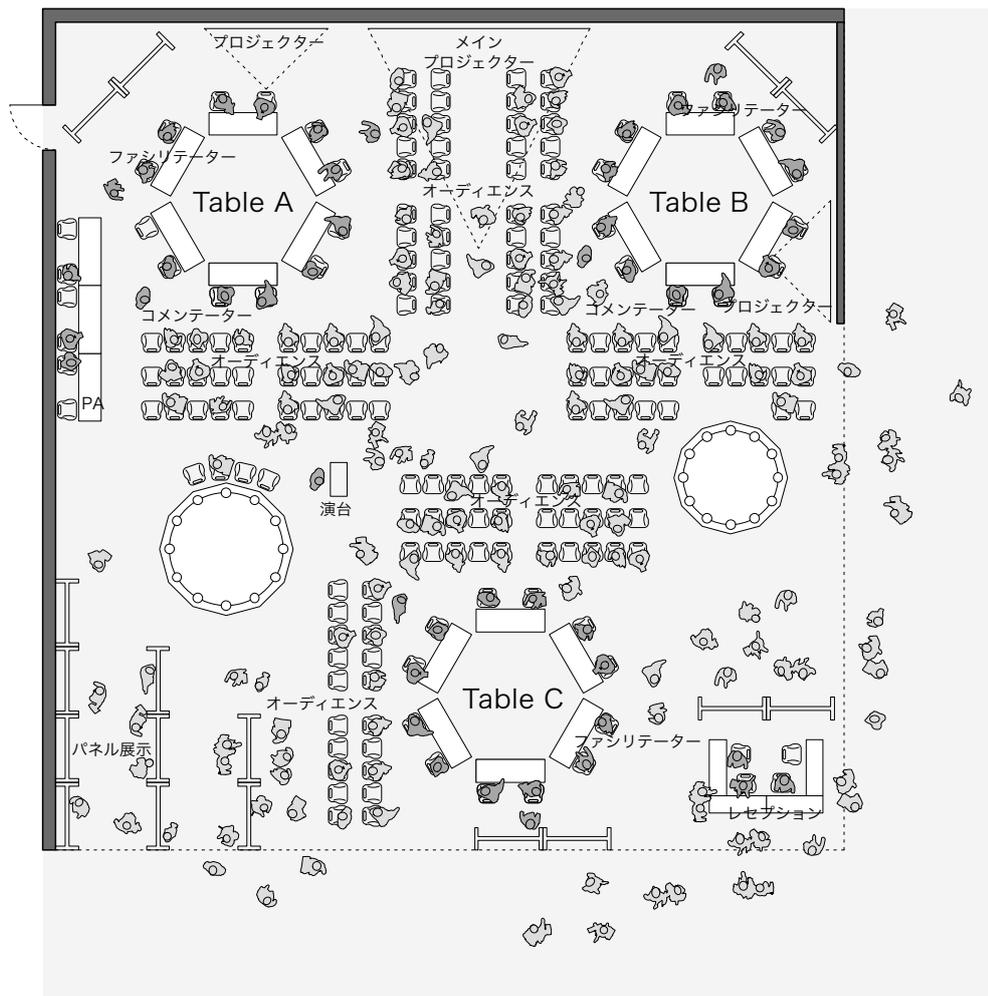
みです。この「仙台市役所本庁舎建替」については、私たち建築設計の専門家を中心となって担いますが、医療関係のことであれば医療従事者が中心になり、教育関係の課題であればその専門家が中心となってラウンドテーブルを行えば良いと考えています。

この仙台ラウンドテーブルは、何かを決める会ではありません。個人の意見はどうしても偏りますが、しかし、議論を積み重ねることにより「意見の広がりはどこからどこまであり、関心の中心はどこにあるか」が共有され、ひとつのぼんやりした共通認識が形成されます。こうした共通認識がみんなで共有されることが仙台ラウンドテーブルの大きな成果だと考えています。

時代の転換点とも言える、東日本大震災の復興を経験した私たちの社会は、震災復興の現場での合意形成の重要性とそれが社会運営の原動力となることを思い知りました。また、そういったみんなで考え、共同体を運営する力こそが「東北らしい力」であることを強く認識しました。それが、仙台ラウンドテーブルの出発点でもあります。

こうしたラウンドテーブル的合意形成の試みを「仙台方式」として、仙台市の未来をつくる様々なプロジェクトに広げてゆければと、運営に参加した専門家はみんなで考えています。

JIA 宮城地域会 手島浩之



せんだいメディアテーク1F / オープンスクエア

Table A1

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、 大きな都市ビジョンを官民連携で考える

文責： JIA 宮城地域会
佐伯裕武、阿部元希

第1回仙台ラウンドテーブルにおいて、仙台市役所本庁舎建替え計画に「大きな都市ビジョン」の欠如を指摘する声が多く寄せられました。仙台市役所本庁舎建替え計画や現在の仙台に必要な都市ビジョンとはどのようなものでしょうか。また、仙台に「大きな都市ビジョン」が無いのであれば、みんなでつくってみたいと思います。

テーブル A の前半 (A1) では、いま必要な都市ビジョンとはどのようなものかをみんなで共有し、その後、様々な立場の方々から、様々な視点による都市ビジョンを提案してもらいます。その先にぼんやりと未来の仙台の街の姿が見えてくればと考えます。

では、そうしてみんなで勝手につくった都市ビジョンはどのようにすれば、正式な都市ビジョンとして位置付けられるのでしょうか。「上位計画が先行するべきだ」との意見が尤もだと思いますし、「市民や建築まちづくり分野が自主的に (勝手に) 構想した都市ビジョンでは、行政手続き上の正当性・公平性が無い」との指摘を受けるでしょう。しかし大きな都市ビジョンが無いままに市役所の建替えを進めることにも大きな欠落があります。テーブル A の後半 (A2) では、みんなでつくった「都市ビジョン」にどうすれば正当な位置付けを与えられるのかを考えます。

Table B1

市民協働・新しい公共の在り方から 「公共を担う仕組み」を考える

文責： 宮城県建築士事務所協会
栗原将光、佐々木昌喜

第1回仙台ラウンドテーブルにおいては、様々な観点から、これからの公共を担う仕組みの見直しの重要性が指摘されてきました。スパイクタイヤ問題など市民活動が盛んな歴史があり、光のページェントやジャズフェスなど、市民主体のイベントも多く、「仙台らしさ」もそういった取組みからしか生まれないと指摘もありました。また、今後の社会ビジョンとしては、行政だけで公共を担うことの不可能性への言及も多くありました。

前回ラウンドテーブルでは、「行政と市民と専門家が負担と責任を負って何かを選択する仕組みは可能か？」という象徴的な問いがありました。テーブル B の前半 (B1) では、市民協働・新しい公共の在り方から「市役所」を考えたいと思います。

また、前回の「シティホールとは何か？」という問い掛けに対して、「欧米でシティホールとは、民主主義の象徴であり、議会と市民の関係こそがシティホールであり、仙台らしいシティホールとは、議会だけでなく市民活動・NPO 等多様な主体が公共を担う新しい民主主義を体現した空間ではないか」との指摘もありました。テーブル B の後半 (B2) では、「市民と議会と行政」を中心にこれからの「公共を担う仕組み」を考えます。

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、 建替え手順や建物配置・規模・スカイラインの構成を考える

文責： 宮城県建築士会
小林淑子

仙台ラウンドテーブルは、「仙台市役所本庁舎建替え基本計画検討委員会」と併走し、「基本計画検討委員会」での検討に必要な議論の厚みを提供し、「緩やかな合意形成を図ること (議論の範囲と中心の模索)」を大きな主旨としています。テーブル C では、「基本計画検討委員会での資料」を元に、様々な市民目線から、抜け落ちている視点を中心に検証します。

テーブル C の前半 (C1) では、建替え手順やスカイラインの構成を中心に「基本計画検討委員会での資料」の各案に様々な市民の視点を加え、議論します。

また、新本庁舎の低層部は、市民に開かれた部分として本庁舎の性格を決定付け、また定禅寺通や市民広場、県庁周辺との関係性を引き受け、周囲のまちづくりへの波及効果が大きい部分となります。テーブル C の後半 (C2) では、低層部を中心に「基本計画検討委員会での資料」をレビューし、低層部の必要機能について考えます。

キーワード

Table A1

- まち自体が自分の生活空間、リビングのようなまち
- 歩いたり自転車で回ったりするサイズが魅力である
- 文化資産や自然資源を生かして、懐の深い都市空間を醸成
- 日替わりでヒーローが生まれる都市
- 東北の都市は、内部でどのように経済を回すかを考えるべき
- 東日本大震災を経験した地域ならではの情報発信
- 「合意形成と行動のプロセス」がこの都市の力
- 市民力を徹底的に活かした実験的な取り組みを行っていく
- 今回の話が、市役所プロボの募集要項に載ることが重要

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、
大きな都市ビジョンを官民連携で考える

キーワード

Table B1

- 公民連携による経済効果と稼ぐ市民協働
- 地域に住むプロが繋がることで見えてくる新しい地域像
- 活動実績と同様に可能性、想像力を評価する視点
- 小さくても多様性の担保される社会
- 地域づくり、コミュニティづくりが、将来の人づくりの基礎

市民協働・新しい公共の在り方から
「公共を担う仕組み」を考える

キーワード

Table C1

- 既存の庁舎の価値（BCS 賞や建築学会の評価）
- 建築的評価と市民の愛着の乖離
- フットプリントとスカイラインは分けて検討可能
- 低層部・広場の重要性（歴史・通り抜け・都市景観・緑・防災・歩行者の視点）
- 歴史・文化の視点も含めた思想・ソフト計画、およびそれらを共有することの重要性
- 設計者の選定方法への言及
- 時間軸を念頭に置いた計画（使われ方・周辺との関係性）
- 議会の計画・位置づけ
- 市民より木を使った空間の要望

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や
建物配置・規模・スカイラインの構成を考える

Table A1

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、
大きな都市ビジョンを官民連携で考える

Table A1

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、
大きな都市ビジョンを官民連携で考える

企画

手島浩之
JIA 宮城地域会

テーブル補佐
佐伯裕武
JIA 宮城地域会

テーブル補佐
阿部元希
JIA 宮城地域会

テーブル補佐
江田紳輔
JIA 宮城地域会

Table B1

市民協働・新しい公共の在り方から
「公共を担う仕組み」を考える

Table B1

市民協働・新しい公共の在り方から
「公共を担う仕組み」を考える

企画・テーブル補佐

栗原将光
宮城県建築士事務所協会

企画・テーブル補佐

佐々木昌喜
宮城県建築士事務所協会

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や
建物配置・規模・スカイラインの構成を考える

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、
建替え手順や建物配置・規模・
スカイラインの構成を考える

企画

高橋直子
宮城県建築士会

テーブル補佐
星ひとみ
宮城県建築士会

テーブル補佐
小林淑子
宮城県建築士会

ファシリテータ
渡辺一馬
NPO 法人 せんだい・みやぎ NPO センター代表理事

ファシリテータ
手島浩之
JIA 宮城地域会

登壇
大澤隆夫
音楽の力による復興センター東北代表理事

登壇
紅邑晶子
(一社) SDGs とうほく代表理事

登壇
伊藤清市
NPO 法人仙台バリアフリーツアアセンター理事長

登壇
小貫勅子
東北大学キャンパスデザイン室

登壇
馬渡龍
八戸工業高等専門学校 環境都市・建築デザインコース

登壇
田邊いづみ
コピーライター

登壇
木村真介
上杉商事 代表

登壇
安本賢司
パシフィックコンサルタンツ株式会社

登壇
洞口文人
SRM 実行委員会 公務員 TF 代表 / 公民連携事業研究センター上級研究員

Table A1

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、
大きな都市ビジョンを官民連携で考える

ファシリテータ
坂口大洋
仙台高等専門学校建築デザイン学科

ファシリテータ
遠藤智栄
地域社会デザイン・ラボ 代表

登壇
新井信幸
東北工業大学工学部建築学科 准教授

登壇
川嶋吉幸
株式会社川嶋酒販 代表取締役

登壇
真壁さおり
宮城県サポートセンター支援事務所

登壇
田澤紘子
せんだい3.11メモリアル交流館

登壇
氏家滉一
株式会社都市設計 取締役

登壇
武修司
仙台市子ども会連合会副会長・元仙台市営繕課長

登壇
中居浩二
宮城県建築士事務所協会

Table B1

市民協働・新しい公共の在り方から
「公共を担う仕組み」を考える

ファシリテータ
内山隆弘
東北大学キャンパスデザイン室

登壇・説明
菅原大助
仙台市財政局理財部本庁舎建替準備室

登壇
針生承一
JIA 宮城地域会

登壇
佐藤健
東北大学災害科学国際研究所教授

登壇
崎山俊雄
東北学院大学工学部 准教授

登壇
渡邊浩文
東北工業大学工学部建築学科 教授

登壇
大沼正寛
東北工業大学ライフデザイン学部 教授

登壇
伊藤彰
久米設計 設計本部建築設計部統括部長

登壇
西大立目祥子
青空編集室

登壇
久保田敦
(株) 竹中工務店

登壇
渡邊宏
JIA 宮城地域会

登壇
安田直民
JIA 宮城地域会

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や
建物配置・規模・スカイライインの構成を考える

Table A1

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、大きな都市ビジョンを官民連携で考える

渡辺：

それでは、始めてまいります。皆様よろしくお願いたします。
先ほど、司会の方から趣旨の説明がありました。前はあまり建物のイメージ図みたいなものは出ていませんでしたが、きっと市民の大多数の目線からすると、「これ以上行政の建物にお金は使わない、できる限り安くしろ」ということだと思います。しかし、そうすると、のっぺらぼうなビルができて、それで本当によいのかという建築家の発言が一方であります。また、これは僕の立場でもございますけれども、市民協働みたいなことを進めていくための本庁舎が、市民が入りにくいような形、今のような形をそのまま継承していいのか、いろいろな人が入りやすい場所になつたらいいのではないかという議論ももう一方であります。
では、そっちの方向に仙台は行こうとしているのかというところで、議論が紛糾し、「都市ビジョンがない」とか、「都市ビジョンは本来的には総合計画で決めるものではないのか」といった議論が出て、前は何となく終わりました。
このテーブルだけではなく、他のテーブルでも、市民広場との接続や定禅寺通とのにぎわいをどのように考えるのかというときに、やはりにぎわいがあった方がよいに決まっているという意見ができました。けれども、そのにぎわいのために本庁舎が犠牲になるのはおかしい、それはどっちが先、何を決めるために何をやっている

Table B1

市民協働・新しい公共の在り方から「公共を担う仕組み」を考える

坂口：

このテーブルのテーマは、「これからの仙台を担う仕組み」である。ファシリテーターは前半が坂口、後半が遠藤さんである。前半が協働全般について、後半には議会との関係がさらに含まれている。全体としてAテーブルが理念的な話、Cテーブルが実践的な話である。Bテーブルは、AとCをつなぐ協働の在り方をいろいろな観点から意見をいただきたい。
協働にも様々な部分があると思う。登壇者に5分程度で自己紹介と協働の実践、或いは実践を行う中で主に重視していることやこれから取り組もうとしていることなどを紹介して欲しい。市役所の建替えがメインの課題ではあるが、少し横において、現在、仙台というまちでどういった協働が行われ、それはどのような課題

Table C1

既在本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライライの構成を考える

内山：

それでは、どうぞよろしくお願いたします。
まず、前回の振り返りをしたいと思います。昨年決まった基本構想の中の共通理念として、過去の伝統経験を未来に繋ぐと、真ん中に書いてあります。それを受けて、「過去から未来への視点から」というテーマで1つのテーブルが設けられて議論をしたものがこの内容です。
市役所周辺が歴史的空間としてどういった場所だったのか、という検討を行いました。その中で、あの場所が表小路という非常に象徴的な場所で、養賢堂の正門に繋がる広場のような道、道幅の広い道だったという情報がありました。それから、やはり杜の都というのは、名古屋の100メートル道路とは少し違って、土の臭いのする緑の豊かなところだというのが特徴的だろうという意見がありました。それから一番町から見える市役所、この一番町と市役所の関係性というのは非常に歴史的なものだろうという意見がありました。
それから、現市庁舎についていろいろな意見があつて、これについてはあまり議論を深めることができなかつたのですが、まず、前庁舎や前県庁舎がどうして壊されてしまったのか、という問題提起がありました。それを受けて今の建物については残すべき部分を考えたり、杜の都として特徴的であり歴史的背景を持った建

物をつくるには、どうしたら良いかの問いかけがありました。

仙台の都市ビジョンにはどういふものがあるのかとか、どんなものを作つたらいいのかとか、それを議論するのがこのテーブルです。
でも、そんな簡単に決まるとは思っていない。仙台にどんな都市ビジョンがあつたかというの、僕はあまり知りません。昔、「健康都市・仙台」というものがあつたとか、「杜の都・仙台」という言葉があるとか。「学都・仙台」というキャッチフレーズ、都市ビジョン的なものがあつたといいますが、もう一方では、仙台の方々が「ここは中途半端な都市だ」と言う事実があります。田舎でもないし、都会でもないし、そして山も近くて、海も近い。産業もそこそこ豊かで、ミニ東京みたいな、本当にのっぺらぼうなまちなんじゃないかということは、個人的には思っています。でも、仙台ってどんなまちなのか、というところも考えたいところです。
あまりここで時間をとると、皆様の時間がなくなるので、ここからどういふ風に進めていくかを説明します。論点メモを事前にも送っていただきましたけれども、お手元に印刷したものもあります。論点を大きく3つ用意しています。その3つの論点に関して、皆様にマイクを回しますので、お話しください。
1つ目の論点は、「都市ビジョンの意味と意義をみんなで共有する」です。まずは、皆さん自身の自己紹介も兼ねて、ご自身の立場か

を解決しようとして、どういふことができていふのかということ、共有できた段階で、次に市役所を考えるときに、このラウンドテーブル自体も市民協働の場かもしれないが、そういう点についても意見をいただきたい。

佐々木：

企画を担当する。仙台市には市民協働事業提案という制度がある。簡単に概略を説明すると、身近な課題について提案をいただき、仙台市と協働で解決していくという制度である。団体の専門性やネットワークを活かし、仙台市とともに取り組んでいくことで地域のニーズに応えられる効果が見込まれる事業を募集している。募集する事業は、分野やテーマは問わないが、次のすべての要件

物をつくるには、どうしたら良いかの問いかけがありました。
それから、モダニズムの建築は一見みんな同じように見えますが、その価値というのは、風合いとか、時間の中で生まれてくるものとか、そこにどういふストーリーがあつたかとかそういうものが重要で、それを決めるのは市民なのではないかという意見が出ていました。
また、災害の経験についてもたくさん出され、江戸期には8回の大地震があつて勾当台周辺がつくり直されていることや、短いインターバルで大地震が起こることは必然なので、そのことを前提に考えていく必要があるだろうという意見がありました。
後半は、前半で出たアイデアをどのように具体的に空間の中につくっていくかという話で、まず豊かなオープンスペースを確保したいという意見、それから緑の建築、杜の都に相応しい、緑を前面に出したような建築もあるのではないかという意見がありました。
また今、街歩きが非常に流行っていますが、その中で、歴史の痕跡を見つけるとすごく嬉しいものがあり、例えば四谷用水の本流が市役所の敷地を通過していたというような痕跡を今回の整備でもたくさん埋め込んでどうかという意見もありました。
また、人があまり行かない市役所ではなくて、迎賓館のような機能を持ち、いろいろ楽しいことがある、例えば美術館みたいな市

ら見てどんな都市ビジョンがあったらいいか、都市ビジョンがないことで市役所を建て替えてうまくいくのかという問題意識とか、お話をいただきたいところです。これは大体5、6分ぐらい、一回しつてまいりたいところです。だんだんみんながヒートアップして、音が飽和してくると思いますが、こちらも負けずに声を張り上げましょうと言いたいところですが、そうするといい逆効果だと思うので、会話ができるぐらいで進めてまいりたいと思います。

では、ランダムにお話を回してまいりたいと思いますので、前回もこのテーブルにお座りいただいた小貫さんから、自己紹介を兼ねてお話をいただきたいと思います。スライドを使われますか。では、ちょっとスライドを準備します。大体5分を目安にさせていただきたいので、10分も15分もしゃべり続けたら、止めさせていただきます。

じゃあ、自己紹介を兼ねてお話をいただきたいと思います。スライドはこちらに出ますので、皆様ご覧ください。

小貫：

最初になってしまいましたが、このテーマとラウンドテーブル自体の「みんなの市役所を模索する」というところをどう繋げていくのかについて、何回かメールでお尋ねしたのですが、なかなか

を満たすこととある。今日の議論とは関係ないにしてもこういった制度があるということをお伝えしておきたい。

その要件は、

- 1 公益的、社会貢献的な事業であり、地域の課題解決に資するもの
 - 2 本市と提案団体が協働で行うことにより、具体的な効果・成果が期待できるもの
 - 3 協働の役割分担が明確かつ妥当で、相乗効果が期待できるもの
 - 4 先進性、先駆性、独自性がある取組であるもの
 - 5 事業計画及び予算の見積もりが適正であるもの
- この5項目すべてを満たす必要がある。

また、対象とならない項目は次の通りである。

役所があってもいいんじゃないかという意見や、全ての機能を無理やり1つの建物に入れてそれで完結するのではなくて、例えば片平や川内など地下鉄の連携なんかも含めた、ネットワーク型の市庁舎を考えていくこともあるのではないかという意見がありました

防災の観点からは、複数棟の方が単体の棟よりも防災性が高いのではないかという議論がありました。複数棟については、建物と建物の間が横町のような空間になってそこで限界性が生まれ市民同士が立ち話をするような場所が生まれてくるといいのではないかという意見や、いろいろな技術を駆使し、例えばゼロエネなどにより災害時にも快適な場所にしたという意見、また庁舎自体が子供たちに防災について教えるような場所になるといいのではないかという意見がありました。

大体これが前回の議論ですが、この中で、やはり議論し残されているのは現市庁舎のところ。今回は議論を前半、後半に分け、まず前半では、都市の記憶としてどういった都市景観を後世に残していったらいいのか、景観の価値について皆さんからアイデアを出していただきたいと思います。後半は、その前半で出された価値をどうやって現行の計画の中に落とし込んでいけるか、それを基本計画の資料をレビューしながら話し合っていければと思います。

私自身よくわかっていない部分があってこの場にいます。

普段、私は、東北大学でキャンパスデザインの仕事をしています、Table A1
その他いろいろ東北の科学関係のビッグプロジェクト、国際リニアコライダーとか、東北放射光の方もちょっと携わらせていただいています。前回、実は出席していたのですけれども、大学の講義の関係で1時間ぐらいいいかなくて、話の内容がどういうふうに盛り上がったのかとか余りわからずにここにいるので、基本的には前回参加していなかった方と同じような立場だと思っています。

都市ビジョンを考えるといったときに、本当に都市ビジョンがないのかというと、多分そんなことはなくて、資料にもあったように既に、仙台市の基本構想というのがあります。「未来へ」ということで、キーワードとして赤で書かれた「市民力」とか「都市個性」を大事にしていくことを既に謳っているんですね。

市民力について基本構想でいろいろ述べていて、都市個性に対応した4つの都市像ということで、1番上から、「未来を育み、創造する学びの都」創造的な文化、風土を育み、世界性を持つ都市の個性が息づくまちと謳っています。それから2点目として、「支え合う健やかな共生の都」安らぎに満ち、心豊かな暮らしを支える安心・健康都市ということで、災害への十分な備えというものを大事にしていこうとあります。3点目として、「自然と調和し持続

1. 営利を目的としたもの
2. 特定の個人や団体のみが利益を受けるもの
3. 課題把握が不明確で、事業内容が具体的ではないもの
4. 一時的なイベントなど、特定の期間にのみ行われるもの
5. 仙台市の他の助成制度等で資金の提供を受けているもの
6. 公序良俗に反するもの
7. 法令、条例等に違反するもの

などが該当する。仙台市は市民協働という分野に注力しようとしている。本日の意見交換の前に述べさせていただきかけた。

坂口：

このような市民協働制度につなげることもあるし、今日いただい

それでは、自己紹介を兼ねまして1人5分ぐらいでご意見をいただきたいと思います。

まず、仙台市の菅原室長からどうぞよろしく願いいたします。

菅原：

改めて、仙台市役所本庁舎建替準備室室長の菅原です。よろしく願いいたします。

前回の議論で私も同席させていただき、皆さんから仙台市役所の旧庁舎について結構ご意見をいただいたので、うちの職場に残っている昔の古いアルバムの写真を参考に5分程度で紹介させていただこうかなと思います。画面をご覧ください。

(パワポで説明～現庁舎が完成し、旧庁舎がこれから取り壊されようとしていた時期の新聞記事など)

旧市役所庁舎について、昔のアルバムに入っていた資料をいろいろ出して見ました。この左上にあるのが昔の仙台市役所旧庁舎で、右側のほうにあるのが旧庁舎の裏側で、北側に現在の庁舎を建設し、こちらが両方とも完成した当時の写真になっております。この瞬間は両方とも残っていましたが、結局この前のほうにある旧庁舎が壊されて現在の噴水広場になりました。市民広場がここにあります。以前は建物が建っていて別の使われ方をしておりました。完成したときはこんな感じになっていました。

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、大きな都市ビジョンを官民連携で考える

Table B1

市民協働・新しい公共の在り方から「公共を担う仕組み」を考える

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライライの構成を考える

Table A1

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、大きな都市ビジョンを官民連携で考える

可能な潤いの都」ということで、環境負荷の小さい都市とか公共交通を中心とした都市、緑と水のネットワークや杜の都の文化風土を継承する個性的な都市景観が安らぎを醸し出す美しいまち、農林業の多面的な機能を都市の力に生かすまち。4点目として、「東北を支え、広く交流する活力の都」ということで、多彩で独自性のある都市の魅力が創られ、賑わいと活力に満ちたまちとか、高次な都市機能を持ち、東北の自立的発展を支えるまちというようなことがうたわれています。次に、それらを成り立たせるものとして、「仙台の未来に責任を持つ都市経営」ということで、市民の知恵や創意を都市経営に多面的に生かすため、多様な主体と行政の協働・連携を強めるとか、効率的な行政運営の徹底といったようなことがうたわれています。それをやるために、総合計画を推進しますということがうたわれていて、今言ったようなことがキーになってくるのが今の基本構想に書かれています。

実際、本当に重要なことはここで言われていると思うんです。ただ、これを基本計画に落とし込んだときに、まだ具体性というのが見えていないような気がします。その辺をどういうふうを考えていくか、この基本構想でうたわれている幾つかの重要なキーワードをどう考えていくかということが、見えていない都市ビジョンとか、なかなか伝わってこない都市ビジョンというものをつくっていくひとつの鍵になるんじゃないかと思います。そういったと

ころを踏まえて、市役所自体も考えていけば、何かいろいろ言えるんじゃないかなということなんです。

そんなところを踏まえて市役所建替えというところにフォーカスすると、こんなことが言えるのではないかとということで、「市民協働の市政を可能にする広く市民に開かれた庁舎」「杜の都の文化風土に根差した個性を持つ仙台市・宮城県・東北の顔となる庁舎」「周辺と一体となってにぎわいや活力を創出する庁舎」「新技術を取り入れた環境負荷の小さい持続可能な都市を体現する庁舎」「公共交通機関に隣接した利便性の高い庁舎」「災害時の速やかな対応を可能にする庁舎」「効率的な市政運営のために部局間の連絡が図りやすい庁舎」とあります。こういったことが、何かプランですとか、形、つまり、Cテーブルの方で議論される話とBテーブルの方で議論される話につながっていくんじゃないかと考えていました。

例えば、Cテーブルで議論される話として、低層にするか、形をどうするかという話があると思いますが、今挙げたような項目に対して、低層、10階以下程度がいいのか、高層がいいのかというのは、それぞれいろいろなポイントで評価もできるでしょう。そして、そういったことが最終的には市民が市役所というものを決めていくひとつの取っ掛りになっていくんじゃないかなということ、まだその基本構想で掲げている漠然としたことを具体的にどう落とし込んでいくのかということの、基本ビジョンという

Table B1

市民協働・新しい公共の在り方から「公共を担う仕組み」を考える



Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカイライターの構成を考える

今と同じように、現在の庁舎をつくる時も建設委員会を開いており、皆さんの目の前に模型がありますが、同じように昔も模型で検討していたようです。

そして、これが昔の新聞で、仙台市役所新庁舎の青写真、これが今の庁舎に近いようですが、実はこの案にはなっていません。左側のほうに点線で表現されているところは、将来、増築しようと考えてこんな青写真を描いていたようで、ちょっとわかりにくいのですが、ここに検討案B案と書いてあり、幾つか案が存在していたと考えられます。

最終的にはちょっと形が変わり、この増築するゾーンも含めた地上8階地下2階の現在の庁舎がつくられたようです。

そして、注目すべきは真ん中のところに赤で書いてあるところです。昭和38年の時点で100万都市を目指してと書かれています。新聞投稿の左側は、ほかの都市から引越してきて市役所に来たが、庁舎がばらばらに分かれていて非常に使いづらいという意見です。右側は、消えていく庁舎もったいない、何とか使えないかという意見です。この方は、せめて3分の2あるいは半分残して記念館とか市民会館にしてはどうかと投稿されています。市役所を壊すということが決まってから、やっぱりもったいないなというふうにご皆さん思い始めて、どんどん新聞で賑わっていったようです。美術館にしてはという意見が出たり、市議会の中でも解

体することに反対だという意見なども出たようですが、最終的には残したいけれども動かせないとか、この場所が後ろにできた建物とのバランスを考えると難しいということで解体のほうに話が動いたようです。旧庁舎の解体式で式典を行い、昭和41年の3月から解体が始まりました。

昔の市役所で何が残っているかという話では、メーンの正面に入ったところに大理石の階段があり、当時の設計者が自腹で調達したが破産して亡くなってしまったという事など書いてあるのですが、設計者の方のすごい熱意が感じられるような大理石の階段でして、これもほとんど壊されました。一部だけでも残したいということで八木山動物公園のほうに残っているようですが、動物園のどこで使われているのか、把握できておりません。

もう一つ、議会棟に入ったところにごく豪華な天井とか、柱とか、あったのですが、これももったいないということで、角田市の人が欲しいと言ってお金払って角田市に持っていったという話があるようです。

あともう一つ、玄関のところに花崗岩とイタリアから輸入した大理石もあり、そこは一部残して今でも市役所庁舎の中に残っております。

このように一部分的な部材を残しながら解体をするようになったのですが、その時の結構衝撃的な写真が残っております。右側の

より、「ビジョンを具体化するところが実は見えていないんじゃないか」と感じました。とりあえず以上です。

渡辺：

ありがとうございます。今おっしゃっていただいた項目は、皆様のお手元のA3用紙、仙台市の総合計画を横に並べたものに記載があります。すみません、パネラーの皆様だけで、ご観覧者の方には資料がなくて申しわけないのですが、今おっしゃっていただいたものは、2011年度（平成23年度）につくられた総合計画の中の基本構想の部分かと思います。

今のお話は、構想やビジョンみたいなものは元々あったんじゃないか、でも、それが計画に落ちるときに、何か光を失っているんじゃないかという論点だったと思います。

じゃあ、一回し、ザクザクとやってみます。結果的に全員に回りますので。では、安本さんに一回お渡ししていただいてよろしいですか。自己紹介とあわせてお願いします。

安本：

パシフィックコンサルタンツという建設コンサルタント会社で、都市計画の仕事をしています安本と申します。よろしくお願いたします。

た意見は模造紙に記録する。素晴らしい意見はスタッフの判断でフェアプレー賞として青の付箋。この場の意見で青が増えればいいと考えている。まず、川嶋さんから自己紹介とワインについてもいろいろな取り組みをされているが、お酒の販売や地域を含めていろいろな試みをされていると思うので、お話しをお願いしたい。

川嶋：

2011年7月に独立した。東仙台で日本酒とワイン専門の酒屋を開業した。17年4月に2号店を立町に同じスタイルで開店した。立町は東仙台に比べるとだいぶ活気のある街だとイメージしていたが、実際に商売を始めてみると活気がないというイメージ。

ほうにサイレン棟という棟が建っていたのですが、どんどん壊して最終的には崩れ落ちる様子の写真で、新聞にも2紙ほど載っております。

また旧庁舎解体のとき、棟上げをしたときに関わった人たちの名前が書かれた棟板が見つかったという話があります。そのほかにも現在の噴水広場について、左側のほうに書いてありますが、河北新報社さんが寄贈したという形で噴水を整備したという経過もあります。

このように沢山の話のとおり頑張ってたつった庁舎だったので、出来上がった当初の新聞には、地下の食堂に（ちょっと今ではかなりぼろい食堂ですが）皆さん、市民の方が殺到して人気だという記事が載ったことがありました。あと、人が混み過ぎて空気汚染になったり、出来上がった当初からいたずらされて備品が盗まれるとか、何で持っていくのかわからないのですけどトイレトペーパーとかに限らず時計の短針と長針が盗まれて時計の時刻がわからなくなったり、蛍光灯が持っていかれるとか、ずいぶんいろんなことがあったようです。

2代目の庁舎は、設計に携わった方が破産するほど情熱を持ってつくられましたが、解体を惜しむ声はたくさん出たものの、誰も自らお金を投じて保存したいという人はいなくて、最終的にごく一部を残して解体され、現在は寄贈していただいた噴水があり、

先ほど、小貫先生からいろいろ問題提起があったかと思いますが、私も前は今回のテーブルには座っていませんでした。けれども、後ろで聞いておまして、非常に気になりました。「都市ビジョンがない、ない、ない。」と皆さんがおっしゃるのですが、実は「総合計画」として存在しています。それが、ビジョンになっているかどうかは別ですが、一応「目標像」は提示されています。

今日、議論するに当たって非常に懸念していたのが、皆さんが思っている都市ビジョンという言葉自体がどういうものなのかといったところを共通の認識を持って進めないと、多分この話は発散していってしまうのではないかといいところ。それで、ちょっとこれは、別に定義されたものではないので、私が考えたものですが、「どういうまちであるべきかという理想のまちの姿」、そういうのを都市ビジョンというのではないかと思います。

私が前回の話を聞いていて懸念していたのが、実は仙台市は「ビジョン」を昔からお持ちですけれども、それを形にするのが余り上手ではないんじゃないかということです。都市をどうデザインしていくのか、まちをどういう形につくっていくのかといったところを、今議論しておかなければいけないのではないかと考えております。

先ほどもありましたけれども、総合計画で都市ビジョンというのは策定されておまして、お話が出ました、学都、共生、環境な

立町に人が集まらないと自分の商売もうまくいかないといい、イベントを企画するようになった。昨年は初めて西公園でマルシェを開催し500名程度、2回目はどんと祭の時期に開催し600名ほどが参加してくれた。それがきっかけで今回市役所から声かけされた。ただし、建物とか街づくりは素人なので何を話しているのか戸惑っている。

中居：

現在、宮城県建築士事務所協会の専務理事として働いている。建築設計事務所や土木コンサルタントに勤務し、都市デザイン部門に所属していた。仙台の街の道路、公園や建築もデザインしてきた。これまで何をやってきた協働を思い起こすと、仙台プランナー

市民のオアシスとなっております。

参考までにあと2つだけパワポを見ていただきたいのですが、1つは、今現在進められている川崎市役所の例です。川崎市役所さんも同じように古い建物が残っておりまして、それを復元することで高層ビルの手前、右側のほうに棟が見えていますが、その辺のところを復元したり、あとは、京都市役所ですけれども、京都市役所も古い庁舎を残して、敷地があるからという話もあるのですが、北側の敷地に新しい庁舎を建ててそれと繋ぐというような工夫をしている事例もあります。

佐藤：

東北大学災害科学国際研究所の佐藤と言います。基本計画検討委員会の委員の一人でもありまして、先ほど菅原さんから冒頭に説明があった、このラウンドテーブルと基本計画検討委員会の間の点線で示されていた矢印を少しでも太くする役目が私の役目かなというふうに思って先ほど聞いておりましたけれども、個人的には、防災が専門ですのでそういう側面からの貢献を期待されているとは思っております。前半のテーマの意匠的なことですが、歴史性の専門性はほとんどないのですが、歴史は大好きで、前回も申し上げましたが、第1回の木村先生の、歴史的空間に関するお話ですとか、四谷用水のお話とかは大変興味深く聞いておりま

Table A1

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、大きな都市ビジョンを官民連携で考える

Table B1

市民協働・新しい公共の在り方から「公共を担う仕組み」を考える

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライライの構成を考える

Table A1

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、大きな都市ビジョンを官民連携で考える

どが挙げられています。昔から言われている「杜の都・仙台」、環境に配慮した、スパイクタイヤの問題もありましたけれども、やはり市民の力でそういった環境問題に取り組んでいくというのは、やっぱりひとつの仙台市のアイデンティティーであり、これは非常に普遍的なアイデンティティーであると思っております。じゃあ、それをどういうふうに具体的にしていくのかをもう少し噛み砕いた形で皆様にお伝えできると、「ビジョンがない」という話にはならないんじゃないかと思えます。

都市デザインでは、我々計画屋さんはずぐ丸と線でつなぎたがるのですが、「拠点」というものと「軸」というものがあります。軸には、ヒト、モノ、お金や情報などがありますが、具体的にはヒトとモノをどう動かしていくのかという動線の部分です。拠点というのは、人が集まる場所ですね。それぞれに集まる場所といったところで、「それをどう繋いでいくのか」が、都市づくりの上で最初に考えなきゃいけないところです。仙台は、都心部という漠然とした概念があります。そこに放射線状について公共交通軸を持ってきたという点はうまくいっているかと思えます。

問題は、仙台市は「市役所が建つ都心部のつくり込みの方法が少し下手なんじゃないか」というところです。実はこのメディアテークもそうですけれども、今は「トークネットホール仙台」となっている市民会館が西公園の川沿いのところにありますが、私が、

仙台に来た当初、何でこんな不便なところに市民会館があるんだろうと思いました。

いろいろ調べてみると、昔は市電が都心部の外縁をうまく循環していて、それぞれの場所に拠点となる公共施設がありました。私も仙台はまだ二十年なので、来たころにはもうなかったのですが、錦町公園あたりにレジャーセンターというのがあって、市役所があって、ぐるっと回って二日町のほうへ行行って、二日町のほうは何があったかという、と、大学病院、あとは東北大学の農学部も上杉のあたりにありました。ちょうど外縁部に人の集まる拠点があって、それをうまく循環させるように市電が走っていました。この市電の循環の内側というのがちょうど仙台の都心と言われる部分で、その部分は恐らく徒歩がメインで、面的に広がりを持っていたというのが当時の都市構造じゃなかったのかなと思っております。それから車社会が本格的に到来して、市電は邪魔だという感覚だったんだと思います。実際、他のまちでもそうですけれども、車中心になって市電が廃止されてしまいました。

それで「公共交通を軸にしたまちづくり」を進めなきゃいけないということで、かなり力を入れられています。「地下鉄を中心とした公共交通軸」をメインにやっつけていきたいと思います。南北線が、泉という大きな副都心、長町の副都心をつなぐ大きな軸として機能した。それで、最近、長年の夢だっ

Table B1

市民協働・新しい公共の在り方から「公共を担う仕組み」を考える

の会という団体を設立した。10年ぐらい活動した。当時は東北大学が青葉山に全部移転する前だったので、移転となる前に青葉山をきちんと考えようということで、年に2回程度、有識者を呼んでシンポジウムなどを行っていた。建築については、行政と専門家が集まって仙台宮城マンションネットワークという会があり、宮城県内のマンションの管理組合の方々のために支援できることがないか、年に2回開催した。つくづく感じるの、先程佐々木さんからも制度の紹介があったが、自身も本日を迎えるにあたり、協働について仙台市のホームページなどをのぞいてみた。そうすると協働に合致するような助成や事業が沢山あるが、それが市民にどれだけ公開されて認知されているのだろうか。過去の自分が開催した催しものも含めて、参加者はせいぜい100人。2回3

回実施してもメンバーは変わらないのが現状である。今回のラウンドテーブルもそうだが、どれだけ一般の人に参加してもらって議論を盛り上げていけるかが今後の課題だと感じる。

坂口：

協働することも大事だが協働をどうやって広げるのか、事業する前に協働の場を作ってどう展開するのかということが重要であるとする意見であった。

真壁：

宮城県サポートセンター支援事務所という機関が分からないと思うので、初めに組織を説明する。東日本大震災の後、津波被害が

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカイライターの構成を考える

して、今の本庁舎もそうですけれども、それよりもっと前の年代の歴史を含めて新庁舎の計画に何らかし反映することができればいいというふうに思っているところです。

大沼：

東北工大大沼でございます。よろしくお願ひします。第1回もこの前提となるような議論に加わらせていただいて、多分先ほどのモダニズム建築の価値を決めるのは市民じゃないかという発言に近いことは申し上げたような気がします。

今日のテーマを考えると、この後、私がいつもお世話になっているというか、一緒に活動させていただいている諸先輩方もご発言なさると思うので、ちょっと視点を申し上げて自己紹介にかえさせていただきたいと思ひます。

先ほど、市民が決めるのではないかと申上げたという前回の話がありましたが、その「市民」というのは誰なのかという、どういう人たちなのかということについて、実はたまたま仙台というまちは捉えどころがないことも含めて、東北各地から学生を集めて教育をやっている側としてよく議論になります。今、大学院生も似たようなテーマで考えている子が1人いまして、議論の中で出てきたのは、「ステイシティ」とか、いろんなキーワードが出ていたのですが、ざっくり言うと、私なんかは少し土着系

の精神状態になっている市民だと思いますし、すごく流動性が高いまちであると思ひます。もしかしたら私なんかから見ると、あまり興味ないものも流動的なたまたま滞在な市民の方が出会った風景が非常に意味を持っていたりすることもあると思うので、その辺は非常にいろんなレンジでいろんなレイヤーで重ねて考えなければいけないのだなということは、改めて考えているところです。もしかしたらいろんな小説家の方が出ているのもそういうことに起因するのかなと思ひたりもします。

とはいえ、その根っこは何なのかということがやはりあまりにも揺らいでいると、それは本当に茫漠とした、これが本当に100万都市なのか、これが400年、そして、500年、600年と続いていく都市なのか、ということになると思ひます。いつまでたっても顔が決まらないみたいなのは非常に危ういと思ひますので、そういった視点でトップにあるべき市庁舎がどう顔をするのかということは非常に気になっています。

そういう意味でも、この後もいろんな皆様と、ぜひ議論させていただきたいと思ひますが、質を落してしまうような不用意な面積の増床みたいなことは、私は個人的に余り得策でないと思ひます。やはり増築するかしないかという議論の中、今までの経過にもあるかと思ひますが、どうしても面積に対してコストはどんどん跳ね上がっていくわけですから、ましてや機能が分散するの



Table A1

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、
大きな都市ビジョンを官民連携で考える

大きかった13市町に被災者支援であるサポートセンターが設置された。気仙沼、南三陸、石巻辺りはそれぞれ1か所のセンターでは対応できず、県内に全部で60か所以上のセンターが設置され、そこに支援員や相談員と呼ばれる方が多い時で1,000人以上配置された。宮城の場合特徴的なのは被災当事者自身が支援員という立場になってプレファブ仮設やみなし仮設などを訪問し支援してきた。皆さん福祉の専門の仕事をしてきた方々ではなく、もともと水産加工業などに従事していた女性たちやこれまでペンなど持たない仕事をしてきた方が、被災者支援の仕事をするにあたり、特に研修などのバックアップが必要であった。宮城県が各地のサポートセンターをバックアップする機能を造ろうということで、2011年9月にサポートセンターを支援する事務所

かもしれない、ネットワーク化するかもしれない、区役所もある、ほかにもいろいろな公共施設がある中で、ここにどのくらいの床が絶対必要なのかという事は相当吟味すべきではないか、というのが個人的な見解です。

渡邊（浩）：

東北工業大学の渡邊浩文と申します。ラウンドテーブルへの参加は今回からなので、前回の議論は必ずしも踏まえてはいない発言になりますことをご容赦ください。

私は、建築の教育に関わっておりますが、その中でも、いわゆる環境設備系分野の教育に携わっておりまして、そういう意味で建築の設備に関わることで、あと研究そのものは建築外部空間のことをやっておりますのでその2つの視点からこれまでの議論というものもなるべく尊重したいと思っていますけれども、わからない立場でご発言することをお許しください。

まず、既存本庁舎の価値というようなことですが、設備の分野からいいますと、価値というよりは経年劣化していく仕組みですので何とも申し上げにくいところではあるのですが、僕のもう一つの立ち位置である建築外部空間というようなことで考えると、通りを挟んで向かいの市民広場とともにある空間ボリュームがあるというのはとても気持ちのいいところだなというふうに常々感じ

である宮城県サポートセンター支援事務所が設立された。この事務所を宮城県社会福祉士会が受託し運営している。私は沿岸の市町を訪問し、行政や市町の社会福祉士会の皆さんと打合せをし、2020年復興庁もなくなるので、そこに向けて平時の体制にスムーズに移行できるように市町の皆さんからの相談を受けたり、全国の先進事例を紹介したりしている。本日は、被災を受け生活に困難を抱えている人たちの支援を、テーマの中で弱者にとってのシティホールの関わりなども話してできると思う。協働という視点では、県と福祉士会との共同はもちろんだが生活再建という大きな目標に向け、あらゆる協働をしていくことが大きなテーマなのでそこに日々悩みながら仕事をしているので、そういう点についても話しができればと考えている。震災の当時、せんだい・み

ているところです。

ただ、これまでの仙台、それから、大沼先生から顔が見えないというようなお話でしたが、仙台の顔の一つは杜の都の緑というところにあると思うのですが、建築外部空間の構成、いわゆる外構計画というものをもっと今の段階から丁寧に議論しなければいけないのではないのかなというのが一つの視点です。

それから、それに関連してもう一つ申し上げたいのは、平置き駐車場を相当の台数、計画、もしくは検討していらっしゃるような雰囲気がありますが、あの都心部のいい場所に平置き駐車場が必要なかなというふうな、議論の経緯を弁えていないというところはご容赦いただきたいのですけれども素朴な疑問も持つところなんです。

設備の視点からの話もう一つ、したいことがあるのですがそれは後にいたします。

西大立目：

フリーランスでライターをやっております西大立目と申します。この中で唯一、建築について、全くわからず入れられてしまっている、全く見当違いのことを申し上げるかもしれませんがご容赦ください。

私は、1回目のラウンドテーブルは来られなかったので今日、こ

Table B1

市民協働・新しい公共の在り方から
「公共を担う仕組み」を考える

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や
建物配置・規模・スカライライの構成を考える

Table A1

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、大きな都市ビジョンを官民連携で考える

た東西線がようやく開通しました。

ただ、東西線ってどこでつながるかという、仙台駅なんです。仙台駅でつながるといことは、東西から来る方というのは、実は乗り換えなきゃ市役所へいけない。それで、昔やったように面的にその都心部をつくり込もうとすると、今、青で点々を書いていますけれども、そういった部分の交通軸が実は非常に脆弱になっています。今のこの都市構造だけを見ますと、大体拠点の部分から徒歩圏と言われるのが500mです。私の感覚的には、現代人の徒歩圏というのは250から300mが限界かと思います。もうそれ以上になると、みんな車で行こうとなっちゃうので、そう考えると本当に今の構造のままだと、仙台駅の周りはパルコができて、どんどん盛り上がっていくんでしょうけれども、実は市役所の周囲は廃れていくんじゃないかなというのがひとつの懸念です。

もう1つは、市電で囲まれていた都心部より、多分ここ50年、もう市電廃止から50年ぐらいたった中で、都心部ってどんどん広がっているんじゃないの、人口規模も大きくなっていますし、広がっているんじゃないのって思います。では、どこまでを都心部として、どういうふうに通人歩かす、どういうふうに移動させるといったところをもう少し考えていく必要があるんじゃないかなと考えております。

「都心部におけるビジョンの具体化」と書いてありますけれども、

先生からもご紹介がありましたように、公共交通を軸にしましよ、それでやりましようと思ったら多分、市民会館はどんどん取り残されて、利用率が低くなって、要らなくなっちゃう。実は、私の感覚だと、ここメディアテークもです。公共交通軸からいうと、地下鉄を中心として勾当台公園から僕が歩けるのは、晩翠通りまでです。県民会館まで、メディアテークまでだったら、もうちょっと頑張れるんですけども、市民会館と言われたときに、勾当台公園から歩くかと言われるとなかなかしんどいかなと思います。ただ、そうしていかないと、都心部というものはどんどん一点集中になってくる、面的な広がりがなくなってしまう。

それで、いろいろな良い施設、錦町公園のレジャーセンターはなくなりましたけれども、まだあるのか私も記憶は曖昧ですが、錦町に市民活動センターが確かあったと思うんですよ。そういう人の集まる拠点、今まで使われていたものを有効活用していくという概念からすると、それをどう繋ぐかというのを考えなきゃいけないと思っています。特に、市役所は東西軸から若干外れてしま、乗り換えなきゃいけないとなったときに、東西線の青葉通一番町から、あのまちなかにどう人を動かしていくのかということが、非常に重要ではないかと思っています。

なぜ、こんな話をするのかといいますと、どういうシティホールをつくっていくかといったときに、外観の話や構造の話は別にし

Table B1

市民協働・新しい公共の在り方から「公共を担う仕組み」を考える

やぎNPOセンターに所属し、遠藤智栄さんが先輩ということもあり、そちらの角度から協働についてお話をしたい。

坂口：
直接的な支援の在り方と同時に、中間支援というか協働そのものを支えるところについてもご意見をいただきたい。

氏家：
仙台本社、東京事務所を持つ2拠点で経営している。43期を迎え、設計部門とブランディング部門で、ハードとソフトを組み合わせた街づくりやエアづくりのできる会社を目指して経営している。東京では丸の内を中心とした企業、地域のブランディング

の仕事、仙台では、仙台市市民局協働まちづくり推進部市民プロジェクト推進担当から委託を受け、WEプロジェクトという、仙台市地下鉄東西線の開業に合わせたプロモーションプロジェクトとして街づくり人材を育てていくものを企画運営しており、現在5年目に入っている。今年度から定禅寺通り活性化検討会のコーディネーターもやっており、ステークホルダーの方々どのように定禅寺通りを魅力ある通りに変えていこうかということを進めている。また、エリアリノベーションを考えることでエリアの価値を上げるリノベーションまちづくりというプロジェクトも都市まちづくり課と関わらせていただいている。さらに、公共交通を交通政策からではなく市民のまちづくり目線でポジティブなアイデアを交わす公共交通ラボというプロジェクトもやっている。

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライライの構成を考える

ここに来て初めてこれを見ました。渡邊先生のご意見とも、かなり重なってくるのですが、市庁舎というのは、建物1棟で完成されていくものではなくて、市庁舎ということとをまず基本に置いておくべきではないか、と思います。仙台というまちが城下町として発展してきたことを考えると、中心は江戸時代はお城にあって、近代以降、東に拡大して、さらに戦後、非常に市域がスプロール化して大きくなっていく中で、一体この都市の中心、いわゆる顔と言ってもいいと思うのですが、そこがどこにあるかというのが非常に見えにくくなっているのではないかと、思います。

そういう視点で見ると、勾当台のこの台の上と台の下に当たる市庁舎の場所というのは非常に貴重で、そこを再構成していくという意識を相当センシティブに持たないと非常に誤ったことをやりかねないのではないかと、という気がしています。

また建物というのは訪れる人にとってはもちろんですけども、中で使う人の意識というものにも相当影響を与えるものだと思います。人は高い建物の塔みたいなものの上にいれば偉くなったような気持ちになりますし、身体性と離れたような巨大なものの中にいると、生き物としての感覚を失っていくものでもあります。市役所という組織にとってどういう建物がいいのか、職員一人一人にとって働きやすい建物ってどういうものなのかということも考えられるべきだと思います。私は、立て籠もるような高層の建

物は市役所の洞窟化というものに繋がるような気がしていて、そうじゃない、官僚組織を脱していけるような建物のあり方を考える視点というものもあっていいのかなという気がしています。

針生：
前回話したことと重複すると思いますが、まず、今回の建て替えというのは、多分老朽化というのが前提なのかどうか分かりませんが、その前に新しい器をつくらせるとすると、中身がどう変わっていくかという事についてはあまり説明がありません。本当に市民に開かれた、働きやすく利用しやすいものであれば、何か今までと違うあり方というのか、ソフトのほうで、その辺があまり伝わってこないし、それは十分に検討されたのでしょうか。建て替えをするというのが前提の話なのか、その辺がよくわからない。それが一つです。

それから、前も話したように、RCの建物が、実は弘前の市役所は前川さんが設計した建物ですが、あれはBCS賞をもらっていないと思うのですが、多分これより古い建物を30億ぐらいかけて改装しています。改修は、一昨年ぐらいに終わっていると思いますが、弘前はそういった前川さんの建物を含めて大変な金を払いながらモダニズムの建築、近代遺産をちゃんと整備しながら、活用しながらまちづくりをしていこうという大変立派な考え方、素

て、どういう機能を持たせていくかといったときに、もう少し巨視的な視点で、周辺のメディアテーク、市民会館とどう機能分担をしていくのか、機能連携をしていくのか、そして、具体的に市役所の中にどういう機能を持たせるのかといったところが重要になると思います。今足りないのが何なのかといったところも考えなきゃいけない。先ほど少し言いましたが、公共交通軸としてなかなか横のつながりが無いというのもあったので、市民会館とつながるのであれば、それに組み込む交通の結節点としての機能も市役所の中に持ち込まなきゃいけないんじゃないかとも思います。

もうひとつは、具体的に市役所のどっちを正面にするのかという点。今のままだったら多分、勾当台駅から直通で、用ある人は勾当台駅からピュッと来て、ピュッと帰っていく。まちなかを回遊しない。まちを本当につくろうとしているんですか？と思います。東北大学の農学部はなくなっちゃったし、学都というのであれば、「青葉山の方とどう連携させるんですか」とか、「連携って何を指すんですか」といったところをもう少し考えていかなきゃいけないと思います。そこを具体的に議論できれば、もう少し「市役所をどう使うか」ということが考えられるかなと。

前回の議論の中で、ビジョンがないという話があったのですが、確かにさっき言った環境とか、共生とか、学都とかいう言葉があって、我々も責任があるんですが、都市の目標像をどうしましょう？

民・民でやっている事業では、仙台駅東口でJRと協働で、EKITUZIという期間限定の広場を3月まで運営しており、4月からは国際センター駅の上部階、青葉の風テラスの民間での運営を3社のJVで受注した。いろいろなことに関わることで、青葉山から東口まで俯瞰で見ることができる仙台では珍しいタイプの会社、人間だと思っている。市民協働に対しての自分のテーマは、非常にイベントの多い仙台だが、イベントではない日常に定着したプロジェクトを市民と創り上げていくことが一つ、公民連携による経済効果、稼ぐ市民協働もテーマとしてやっていこうと考えている。

坂口：

晴らしい考え方を持っています。

我が仙台市役所は、BCS賞を受賞しています。BCS賞というのは建築学会作品賞よりも上だと言われているぐらいに世界的な賞に格付けされています。というのは、BCS賞は、要するに施主と設計者と建設会社、3社の表彰でありましてそれが全てきちんとなされていると。それで、運営1年後に赤字にならないとか、全てのことを含めて表彰されているもので、いわゆる建築の総合的な点からいえば、かなり質の高い作品賞じゃないかと私は思っております。私も一度、審査員をしましたが非常に厳しいです、審査も。ですから、学会賞なんか変な学会賞、いっぱいありましていろいろ問題なのですが、BCS賞は大変に素晴らしい賞だと。これを誇りには思わなくちゃいけないというふうにも思います。弘前の関係を見ると、やはり私はもうどんなにお金がかかっても残すべきだと思います。

もう一つは、RCの建物が、モダニズムの建築がこれから保存問題に関わってきます。RCの保存は非常に難しい、これからの課題なのですが、その最初の初段としても取り組むべきじゃないかと私は思っております。幾らでも改装できますので。

それともう一つ、文化というのは、建築の文化というのは、ぶっ壊して新しくつくるとするのはもう新しい文明なのでしょうけれども、文化的なことからいえば新旧のものが合わさっていたほう

といった時に「環境共生都市」ってすごく語呂はいいんですが、何も見えてこない。やはり、それを今後の総合計画、これからの市役所の基本計画の中で、もう少し「市民目線から見た行動の姿、活動の姿」というのをビジョンにしてもらえるとうわりやすくなるのかなと思います。変な話ですが、「まちにごみひとつないまちをつくる」という方が、皆さんがイメージしやすい。環境を大事にしていますとか、自分たちのまちに誇りを持ってアイデンティティーを持っていますとか、具現的な行動で、そういった行動の姿というのをビジョンにしていくと、皆さんに伝わりやすくなるのかなという気はしております。すみません、長くなりました。

渡辺：

ありがとうございます。お二人に軸めいた部分を出していただいたかと思えます。「都市ビジョンというものが無い」という表現を私は使いましたが、幾つかあったでしょうということでした。幾つかあるんでしょうね。ただ、それが落とし込まれていないとか。仙台は外から来られる方が非常に多いまちで、どんなまちかということをつかずに参加をされたり、参加もしないで住んでいるだけだったりの方が多い中だと、複数の「都市ビジョン的なキーワード」だけが浮かんでいて計画に落ちていなかったりとか。もしくは、市民側からするとそこに参加ができるような仕組みになっ

将来的な仙台の課題と同時に、今の課題をどうやって説くのかということがこれから課題になってくるのだと思う。

武：

旧宮城町を活動エリアに地域子ども会を束ねる子ども会連合会の会長をしている。今朝は雪のなか、地域子どもたちと一緒に資源回収に取り組んできた。本日は日曜日なので、ご父兄やおじいさんおばあさんなども参加し、集積場まで運んでいく様子を写真に収めてきた。そのような行事を1年間の活動の様子をまとめて、最後に思い出としてビデオなどを作って子どもたちに配布している。昨日は町内会の役員改選に伴う役員推薦会議を実施した。人事は結構たいへん。その背景から家庭の事情も見えてくる。自分

が、対比してあったほうが私は文化、時間経過、時間空間、建築でいえば時間経過の中でそれが出てきますので、日本文化の「侘、寂」と絡んできますので、ぜひ、既存のものを残して、ちゃんと残して改装してそれから新しいものをお願いします。例えばこっこの広場とか駐車場とか何か全部見越して、あれを残しながらやろうとしているからいけない。全体を含めて敷地として、市道も含めて、市道を越してもいいから、例えばこの間も、ちょっと提案しましたが、市道を越えて2階分ぐらい上に上げれば広場が繋がりますので、それから県庁に対してはゲートみたいになりますので、そういったことも視野に入れてまだまだ案があるのではないかと思います。BCS賞の件はそういうことであまり軽く見ないほうがいいと思います。

もう一つは、コスト分析というのが本当にされているのかどうですか。長期的な総合的なコスト分析です。例えば今が2万7,000ぐらいですか、今の庁舎。そうすると、2万7,000の分は補強と改装ですから半分で済むのではないかな、コスト。それから新しいのは2万7,000でつくればいいわけだから、そういうふうなことを含めてじゃどれぐらいの私たちの税金を使うのかとか、その辺のこと、それからランニングまで含めた、そういったところはどうかというのかなというのは非常に疑問です。

それともう一つは、さっき西大立目さんもおっしゃったように、

Table A1

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、大きな都市ビジョンを官民連携で考える

Table B1

市民協働・新しい公共の在り方から「公共を担う仕組み」を考える

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライライの構成を考える

Table A1

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、大きな都市ビジョンを官民連携で考える

ていないので、どうしても僕からすると、僕も仙台市民二十年ですけれども、自分がいた田舎よりも何かビジョンめいたものがないように見えてしまうと思っていました。すみません、やや強めに「ビジョンがないんじゃないか」と申しました。

この調子で回していくと一回しで終わっちゃうので。すみません、5分程度を意識しながら一回しをしましょう。安本さんと小貫さんの話は、この話の前提となる部分、僕が飛ばした部分をお話いただきましたので、大変助かりました。

では、マイクを大澤さんにお回しいただいていいですか。自己紹介と、今の議論に通じるところを。何かお話しになりたそうな顔をされていましたので。

大澤：

小松島というところに住んでいまして、北仙台に出て、市電に乗って長町まで行って、長町から秋保電車に乗って、太白山でよく昆虫採集をしていたことを思い出しました。市電をやめて地下鉄にしますというとき、広報課にいて、市政だよりの特集号をつくった身ではあったのですが、確かに市電はよくできたものでした。宮城野原で中体連とかがあると、みんな市電で行って、あそこへ降りるんですね。それから国体のときには、レジャーセンターで卓球、宮城野原で陸上とかをやっていたんですね。だから、非

常によくできたまちなかの移動機関ではなかったかと思うんです。話したかったことは、先ほど出ていますし、この間もロングスパンの話とかスパイクタイヤの話とかが出たので、担当していたときもあるのでちょっとご説明します。健康都市というのは、ここに昭和37年と書いてありますけれども、たしか昭和39年に議会で採択されています。目的は、憲法第25条で「健康で文化的な生活を」とあり、「健康都市宣言」ということで島野武市長のお名前が出ていますから、これは当然、行政が示した都市ビジョンでした。その後、長期間にわたって市役所と市民に共有されたという歴史があります。

当初の目的は、古い話になるのですが、仙台や塩竈が合併して新産業都市というのになって高度成長を遂げましょうということでした。そのときに、仙塩合併もだめになり、新産業都市もうやむやになって、残ったのが健康都市だけでした。要は、そういう高度経済成長に乗っかれば、当然、生活環境は悪くなるとわかっていた時代だと思います。その中で、そういったものとバランスをとるために、生活や環境の快適性を守ろうというのが、そもそもの健康都市宣言の趣旨でした。

それで、実際にはどうなっていたかということ、市民参加によるまちづくり、昔は「市民参加」という言葉だったのですが、「まちづくり」に成長します。梅田川と広瀬川の清掃運動です。あの川

Table B1

市民協働・新しい公共の在り方から「公共を担う仕組み」を考える

自身子ども時代は、子ども会や近所のグループと田んぼや川、近くの山で遊んで育った。小学校の時はボーイスカウトでキャンプファイヤーなど、地域に育てられた記憶が強い。学生で仙台に来て子ども会として子ども会を応援したてきた。仙台市で係長時代にこのメディアテークに関わり、営繕課長を務めながら、町内会長も引き受けた。町内会長職を3年で終え、その後、子どもをもてなかったので、「地域の子どものめんどうを見て」という依頼に心ときめき、地域の子どもたちといろいろな遊びができることを楽しいと思っている。自分の子ども時代の環境を思い出し、仕事でしかめ面をしていた自分以外の自分を発見することができた。地域で子どもたちを中心にするコミュニティはうまく回っていくことに気づいた。これは完全にボランティアで実施し、仕事

は週に3日ほど瑞鳳殿に勤務しており、このサイクルで元市役所職員としての経験も活かしながら地域に関わってきた。地域づくり、コミュニティづくりが仙台市の将来や人づくりを考えるうえで基礎になるのではないかと考えている。

坂口：

子どもが中心となることで、地域やコミュニティが活性化していくプロセスの重要性を指摘いただいた。

新井：

東北工業大学建築学科で教員をしている。建築学科に所属はしているが、ソフト寄りに取り組んでいる。復興支援に関わることを

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカイライナの構成を考える



を清掃しようと、みんなで清掃したわけですよ、市民が。それで、「ひと健康・まちも健康」という言葉が、ある種、健康都市の都市ビジョンなのかもしれませんが、その中で最大の課題になったのがスパイクタイヤだったんです。道路が磨耗するということ、健康に害があるのではないかという懸念が非常に大きくなりまして、しかも運転していれば加害者なんですよ、運転していないと被害者になっちゃうという、この不思議な仕組みだったんです。この本は、そのときの記録です。後ろの方で、市民だけじゃなくて弁護士とか企業とか、さまざまな人たちが参加した運動だったというのがわかるようになっていきます。最初の「はじめに」というところで、「健康都市・仙台のイメージを仙台砂漠にしよう」と書いてあります。つまり、それでみんな納得していったわけです。結局、普通の運転手はどうしたかという、最初のころはスパイクタイヤのピンを抜くというちょっと恐ろしい運動に始まりまして、最後はみんなスタッドレスタイヤを買ったんですよ、運動として。ということは、みんなが、タイヤ4本、かなりの経済的負担をしていったんですね。そういう形で、昭和63年に、公害等調整委員会というところで、製造販売を中止しようという話になっていったんです。それで、札幌、松本もやったんですけれども、身内びいきかもしれませんが、仙台市民の活動が最初だったのではないかと私は思います。

行ってきた。孤立が進む社会の中で、どの様につながりを作るかということに取り組んでいる。具体的には災害公営住宅の集会場をみんなの居場所にする取り組みをやっている。その中で気付いたことがある。外部から支援が来て集会場でお茶会やイベントを実施する。それぞれの主催者に聞くと中居さんの話の通り、参加者が固定化したという回答ももらった。3、4年やっても参加する人はずっと一緒。つながりが広がらない。暇だから通して参加している人もいるが、少しずつ参加者は違う。同じような催しでも参加者によって参加の判断が異なる。大きなコミュニティーを一機に作ろうとしても無理な話である。ブドウの房のように小さいつながりが大事だとすごく感じた。集会場を居場所としようとする時にどうしたらいいか考えると、開催する日時が多様であれば、

1本で何かをつくるというので済ますというのは、どこの役所もやっているのですね。さっき京都などとか、あれは特殊な例なのでしょうけど、ああいうものは見習わないで1本でやっていこうというのは面倒くさいからなのでしょうね。それで、どちらかというと、何か大手設計事務所、組織事務所向けの計画かなというふうに思っています。できましたら、これは条件をちゃんと整理して全体を全部使っていいから、広場もこれからもう一回作り直すとか何かしてもっと国際的なコンペティションにしたいのではないかと思います。ただし、条件は相当きちんとつくらないといけないと思います、予算から何から。プロポーザルはやめてください。コンペティションにしてください、ちゃんとした。それで、そういうことと、防災の関係からいえば、できましたら分散型というか、繋いでいく型といいますか、数棟になると思うのですが、そういったことのほうが水平方向が長くとれるので、防災上はそのほうがいいのではないかと思います。そんなことで、何かもうちょっと計画以前のソフト計画のあたりからもうちょっと練り直したほうがいいのではないですか、という感じがします。

内山：
ありがとうございます。今のソフト計画とか、全体の計画のお

そういう話の中で、先ほど先生からご紹介がありましたけれども、この基本構想にも「地域に根ざして支え合う健康都市の風土」という言葉が使われています。それから、時々「市民力」という言葉が出てくるんですけども、これはある商品のボイコットです。スパイクタイヤという商品をボイコットしましょう、もう「つくらせない、買わない」ことをしましょうという、かなり激しい部分が含まれているんです。このリーダーをした私の上司は、「車とはけんかはしません、でもタイヤとならけんかできる、脱・車社会まではちょっとできない」という極めて戦略的な部分をやったわけです。とても多くの関係者が参加したということですが、要は、行政だけでは全然できるものではなかったんです。ましてや、市民が経済負担までしてタイヤを交換していくということですから、そういったたくさんの人が健康都市だからと納得したというのも、これがこの話の一番の不思議さ、今になってみると不思議ですけども、健康都市だからタイヤを換えなきゃと、みんなでタイヤを換えちゃったということなんですね。ですから、こういう形ですが、一種の都市ビジョンだったんです。たくさんの計画が出ていたんですけども、新聞なんかにはよく、「こういうことが健康都市で許されるのか。」と投書になったりしちゃう、そういう一種の行政が提案したビジョンなんだけれども、共有するビジョンになっ

参加する人も多様になる。町内会や自治体を仕切っている人が高頻度で取り組んだところで、参加する人は固定客化するので新しい人は5%程度しかいない。他がやれば新しい5%が来るかもしれない。そうであれば20団体やれば100%となるかというとも違う。多様性を担保することがとても大事。市民協働というよりも新しい公共の仕組み。議会制民主主義は多数決で決まってしまう。小さな意見や多様性は担保されない。便宜的にやっているので限界はあるからしょうがない。そこに期待するよりも、1人1人の価値観が地域社会で花開くような仕組みを作ることが大事だと考えている。

坂口：

話については、私の理解では、今、行われている基本計画検討委員会の中でまさにそれを検討しているところだと思います。そして、これからの設計がどういうふうに発注するのかも含めて、その条件づけを基本計画検討委員会で作るのではないかとこの理解を私はしていますが、菅原さん、よろしいですか。

菅原：

今、たくさんの事をご発言いただいたので、全部が全部、なかなか答えにくいところもありますけれども、今回、建て替える一番の目的は老朽化ということと、あとは庁舎の分散化というところがあります。現在でも庁舎が11カ所ぐらいに分散していて、それが防災上、いいのか悪いのかという議論は当然、すべきだとは思っています。

BCS賞は、非常に厳しい審査を潜ってその賞の価値自体を軽く見ないほうが良いというのはおっしゃるとおりだと思います。また、内部の中身がどう変わっていくか、働きやすさとか、市役所の組織のあり方がどういうふうに変っていくのかというのは、我々のほうも当然変わるべきだと思っていて、新しい姿の行政とか、新しい姿の市役所というのを当然打ち出さなければ、今後、市役所としては続いていかないというふうを考えておりますので、それは今回の基本計画の中で同時並行ですけれども検討はさせて

Table A1

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、大きな都市ビジョンを官民連携で考える

Table B1

市民協働・新しい公共の在り方から「公共を担う仕組み」を考える

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカイライターの構成を考える

Table A1

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、大きな都市ビジョンを官民連携で考える

ていったということなんです。

仙台市が健康都市宣言をしたとき、「交通安全宣言都市」とか「衛生都市」とか、衛生環境をよくしましようとか、交通事故を減らしましようとか行政の目標を宣言するものもいっぱいありました。だけど、これはそういう形ではなく、スパイクタイヤまで行くということになります。高度成長という大きな時代の流れの中で、水・緑・人という仙台の資源を使って、新しい地域社会のあり方を構築し、都市の課題を克服する都市像でした。

先ほど話が出ましたけれども、ポイントは、制度論とか組織論ではなく、運動論だったということです。みんなでそのために行動を起こしたということが、この話のポイントではなかったかということです。確かに、今では「風土」なんていう言葉で表されているのは現実的ではないというようなこともありますけれども、昔はそういったことで、スパイクタイヤのことで、私は、政策大学にいる先生から、「市民運動が法律になるって、すごいことだ。」と言われて、ああ、そうかと思ったことがあるんです。けれども、そんな形が土俵にあった上で、多分こういう総合計画とか基本構想とかが、どこかで関与しながらつくられているのではないかということです。とりあえず、昔あった話を一言。

渡辺：

固定化した関係を解いていく仕組みと集会場のような共有化した仕組みの両方があると良いと言うことであろうか。

田澤：

仙台3.11メモリアル交流館に勤務している。地下鉄東西線の開業と同時にオープンした施設で3年を迎えた。設立趣旨は東日本大震災の記憶記録を後世に伝えることが2本柱の1つ。メモリアル交流館の特徴のもう1つが2本目の柱である、津波で大きな被害を受けた仙台東部沿岸地域の地域資源を掘り起こして、それを積極的に発信していく。津波被害で見えなくなった地域資源を見える化して未来につないでいくということも、この地域を語る上では非常に重要なことではないかと考えている。私はその2本目の

Table B1

市民協働・新しい公共の在り方から「公共を担う仕組み」を考える

いただいているというところです。ただ、どういう成果ができたのかとか、どういう経過でやるのかというところがまだ皆さんのところにお示しできていないので、それは早いうちに皆さんのところにスケジュールも含めお示しができるようにしたいと思います。

針生：

ソフト計画、その辺ができないでハードだけ先行するというのは良くないのでは。おかしいのでは。だから、前の100万都市を目指した建物もそうだったのでしょ。前の、今の建物も100万都市目指してやったわけでしょう。実際だめだったのでしょ。今度も同じことになってしまうのではないのでしょうか。そういった政令都市になって各区役所もあり、その中のやりとりだとかいろいろあるわけじゃないですか。それで、何も全て中央に集約する必要もないわけでしょう。市民が来ない部署なんてあそこにある必要ないわけだから、そういったことをもうちょっと考えないといけないのではないですか。そこをちゃんとしないで建物だけかいかいをつくらうというのは、おかしいのではないですか、話が。だから進まないのだと。

内山：

ありがとうございました。まさに、脱スパイクタイヤの市民運動が法律を生み出し、今では普通になったスタッドレスをみんなが履く。今日も、河北新報さんの紙面の広告かな、トーヨータイヤさんが「このまちで私たちはつくり続ける」という広告を出して。トーヨータイヤさんの現地でこういうことをやったと、そういうこともあったし。大澤さんがおっしゃっていましたが、行政が一回つくったビジョンというか掛け声だったけれども、そこに多くの市民が参加したということができていた時代があった。それが文言としてはずっと残っているけれども、数十年間、計画までには落ちていなかったとか、市民が参加するものって減っちゃったのかなというような感じを、僕はお話を聞きながら思いました。

じゃあ、そのままマイクを木村さんに。ちょっと今までの話とは脈絡は違うかもしれませんが、自己紹介と、この辺の話とちょっとつながるような感じがするので、木村さんがやっていることで。お願いします。

木村：

ありがとうございます。こんにちは、木村と申します。よろしくお願いします。2011年に、震災ボランティアが講じて仙台に住み着いたので、今年で8年目の仙台市民です。

担当をしている。市民協働の観点で言う見える化することがまさに市民協働である。住民の方の協力なくして実現できない。津波で更地になった集落だったり、人がまばらになった集落だったり、まったく知識のないまま放り込まれてしまうと目に見えるものがないので、ここにあった地域資源は何だったのだろうか、はぐくまれてきた地域文化は何だったのだろうかを探ろうとする時、住民の方々を頼らないと難しい。よって、市民協働せざるを得ない状況になっている。そこで長く暮らしてきた方々の生活の知恵は非常に豊かで、かつ、記録にも残っていないとなると、市民協働でこそ実現できるアーカイブ化、可視化の取り組みをさせていただいているという実感がある。中居さんが仙台市の制度についてお話ししたことに同感した。

そこなのですが、これまでいろいろ手順を踏んで仙台市の中で検討委員会が立ち上げられてやってきておまして、多分この会のミッションとしては、今進んでいる基本計画策定委員会の中に抜け落ちていく視点をどんどん投げ込んでいくということではないかなというふうに思っています。ですので、まず今日は、今、抜けているだろう視点を挙げていただく。そして、その視点の論理みたいなものをぶつけていただくということかなと思っております。途中で切ってしまいましたけれど、また続けて久保田さんのほうからお願いします。

久保田：

久保田です。私はすぐその竹中工務店で設計をしておまして、10年ほど前に仙台に戻ってきました。大学時代はこちらにおりましたので、10年たって全く新しいきれいな仙台になっているので、とてもびっくりしました。

今日はスライドを用意しましたので、毎日通っています日常の歩行者の視点というところからおさらい半分ですけれど、ちょっとお話ししたいと思います。(パワポ資料)

ページをめくっていただきますと、日常の歩行者と考えると、公園の一部という話と建物として利用するという話があって、勾当台のほうへの広々とした景観とか、よく見える時計とか、市民広

仕事としては、企業や団体の新規事業の開発のプロデューサーをしています。例えば、宮城県の伝統工芸品である玉虫塗のプロデューサーとか、楽器メーカーであるヤマハの音楽の街づくり事業などを行っています。

2011年に仕事として関わり始めたのが、ジャズフェスです。その後、2014年には実行委員となって、当時は任意団体だったのですが、今は公益社団法人になりました。その公益社団法人に変革する際のビジョンとミッションの整理、計画書の作成などを担当していました。その後、理事になって、テーマとかビジュアルの設定、毎年の広報とか、グッズとか、出店とか、そういうことを諸々やっています。

私の自己紹介はここまでなんですが、流れとしては、私も話しやすいタイミングで指名していただいたなと思っています。「行動の姿・活動の姿」なんていうことを安本さんがおっしゃっていたと思うんですけども、大澤さんも言われた「行動の姿・活動の姿」というものが、仙台のシティプライド」です。仙台というまち、市民が持っている共通の認識として、市民活動を行動で見せるということじゃないかなと思っています。

今回、「それぞれが思う都市ビジョンを共有し、大きな都市ビジョンを考える。」というテーマがこのテーブルの最初の論点になっていまして、実は我々のような登壇する人間には、事前に幾つか質

問が来ていました。その質問の一つに、「それぞれの立場から見て、今の仙台に必要な都市ビジョンとはどういうものか」というものがありました。

まず、私の立場ですけれども、工芸品や、まちを代表するお祭りの作り手です。ビジョンは、ある特定の時期においてあるべき姿、市という、そこに集まった共同体が大事にしているものという認識で私はお話しています。それで、基本的にはいつでも作り手なので、都市ビジョンという結果はもちろん気になるのですが、そのビジョンをつくっていくプロセス、あとは、そのプロセスの中で誰が関わってつくったかということも大変気になっています。そこからちょっと考えていくと、まず、私としては目指すところは、市民参加がやはりおもしろいと思っていて、もう少し砕いてみると、個人に所属コミュニティというものがあると思うのですが、「所属コミュニティや専門領域を越えて協力して行動していくこと」、これが、私は仙台の大変おもしろいポイントであり、外から来て、ここに来て学んだことです。それが多分、市民の一人一人の意識の中にはあると思うのですが、ビジョンとしてひとつ言葉や図案などで表現されているとおもしろいのではないかと思います。

さらにちょっと、噛み砕きます。個人人の所属コミュニティとか専門領域は、例えば、「多様なバックグラウンド」みたいにマルッ

普段市民協働だと思ってお付き合いしている地域住民の方たちがそのような制度に手を挙げられるか？難しいと思う。仙台市の市民協働って世の中の2周先を言っていると表現される。素人では手を出しにくい制度設計になっているのではないかと感じる。

紹介いただいた制度は、地域のお母さんがこんな制度あるから活用してみたいと思っても手を伸ばせないハードルが高い要件が求められている。若林区の街づくり活動助成金の評価委員もやっているが、上限が50万円の制度で、50万円使いきれない団体ってどれだけ存在するのだろうか。これでもハードルが高くて、毎回同じ団体さんが応募してくる。まさに固定化につながっていくのかとを感じる。普段関わっている地域住民が抱える課題が零れ落

場の背景というのは繰り返し言われていたことですが、建物として利用する際は、喧騒から間をとって低層で幅広い圧迫感がない、日除けにファサードとか、今、評価されたとおりに建物としての価値も非常に素晴らしいなど、見て暮らしております。

次ですけど、こういった形で地下鉄を出ますと、定禅寺通りを歩きますと、次のスライドで交差点から市役所が見えまして、見返すと一番町が見えます。市役所の周りを歩きますと、東二番町のカーブ、これは新しく都市整備でつくられたカーブですけど、このカーブにちょうどアイストップになるところにこの建物があります。実を申しますと、結構この時計は日常的に見ています。北庁舎にきちっとこの冬の時期でも日が当たるぐらい配慮された計画なんですけど、歩いて後ろに回りますと、駐車場棟がちょっと壁になってしまっていて、裏という感じが非常に強いです。西側もスロープがあって、こっちに向かって人が抜けようとする、実はここから向かいのバス停に行こうとすると、かなり、ぐるっと、回るような形になってしまいますので、「ちょっともったいないな」という感じはしております。

区役所から見ると、杜の都の景観と言いつつも、ビルしか見えない状態です。県庁まで上がると、青葉山のスカイラインが見えて、遠くに太白山の三角のシルエットとか見えてきます。本来はこのスカイラインだったのだらうと思います。ただ、今、それを求め

ちていいのかという決してそういう話ではない。市民協働で住民が抱えている課題とその地域に拠点を構えている行政と一緒に手を取りながら解決できる部分が沢山ある。

新井先生が言った小さくても多様性のある社会を作っていくためには、もう少し制度が柔軟にならないと難しい。行政寄りの立場で市民協働に携わっているながら感じていること。

これからの新庁舎についても市民協働となった時に、今を想像すると慣れている団体しか来ないのではないかとというネガティブな見方をしてしまう。本当の多様性とは何かと考えた時にいろんなレベルの市民協働があってもいいのではないかと。入口から制度を活用したものまで。いろんなレベルの市民協働が仙台で展開されるといいのではないかと。今の職場で市民の皆さんとやり取りして

ても意味がないです。既にこれだけ高いマンションが建っている中で高いの、低いのという議論は余り意味がないかなというのがひとつです。

緑で示しました線が一番町から回ってくる視点ということで、後でご説明しますが、やはりこれが非常に重要な軸線になってきます。黄色で示しました市民広場で行われていることが記憶に残るのかなと、思います。記憶に残るというのは次のページですけど、単純に言いますと、祭りやストリートジャズフェスティバルということです。ストリートジャズフェスティバルは、私が学生でいた頃はすごくこじんまりしたイベントで、こんな大イベントになるうとは30年前はとも思っていませんでした。歴史というのはそういうものかなと、思います。

景観についてちょっと堅苦しく考えますと、景観をハード、ソフト、コンテンツと考えてみて、右に向かって建築都市とスケールを大きくする軸を形づくと、ハードとしては、建築が形になって、それが都市の中で印になっているのかなと、思います。ソフトとしては、みんなが知っていて、どこに行けば何があるかわかっているというのが都市の上で共有されてコモンセンスになるのかなと、思います。コンテンツとしては、先ほどの出来事とかはいろんな人が知っているの、いろんな出来事がないとみんなの記憶に残せないということで、広くみんなが知っているという歴史

Table A1

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、大きな都市ビジョンを官民連携で考える

Table B1

市民協働・新しい公共の在り方から「公共を担う仕組み」を考える

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカイラインの構成を考える

Table A1

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、大きな都市ビジョンを官民連携で考える

とした言葉で表現されるんです。仕事では、業界とか企業とか団体に所属していたりしますし、プライベートでも、趣味のサークルとか、家族とか恋人とか、いろいろなコミュニティーに所属していると思います。それで、それぞれが専門的な知識とか、生きてきた中で培ってきた経験みたいなものとかを持っています。そういった人々が尊敬し合いながら、自分のできることをやってみることが大事だと思っています。

そのためには、ビジョンには「分野別のビジョン」が必要だと考えています。例えば、ビジネスとか、教育とか、福祉とか、文化とか、スポーツとか、防災とか、まあ、バツと出しちゃいましたけれども。どの対象領域に絞って話をしているかというのを明確にするのは、多様な人が関わって話し合いをするときにすごく大事です。例えば、私が文化の話を幾らしていても、「いや、それは経済的に成り立たないよ」とか、「そこでもし津波が起きたらどうするの」とか、今まさに骨子をつくらうとしているときに、「まだその話はしないでくれ」ということがありますよね。今日は文化の話、文化のビジョンをつくるための話し合いですということをして、その中で強度のある内容をつくった上で、防災にも対応する、ビジネスにも対応する、教育にも対応するし、福祉にも対応する。そういった我々が大事にする視点というものを前もって決めておいて、それで各視点の中で話し合いをしていく。そういったこと

いる中で思っていること。

Table B1

市民協働・新しい公共の在り方から「公共を担う仕組み」を考える

坂口：
制度設計自体で多様性を生むこともあれば固定化することもある。同時に制度の使いこなし方みたいなものを市民も身につけるかということと、制度設計する側が考慮する必要もあるということも感じた。

遠藤：
地域社会デザイン・ラボの遠藤智榮です。普段は地域の人材育成や組織強化、コミュニティーの団体や非営利組織などの支援をしている。協働をコーディネートする仕事も多い。プロジェクトを

時間軸というのが出てくると思います。

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライライの構成を考える

最後になりますけど、一番同じ場所で建て替えてきた歴史というのは、いろいろお話しされていますけれどすごい価値があります。東京では、有楽町から新宿に移ると言ったら、とんでもないことが起きているのに対して、明治からずっとここにいます。一番町と片平というのが軸線として始終点をつくってしまっていて、これがすごく重要です。式年遷宮的に建て替えを続けてきた知恵とか、やっぱりそこに積もった時間、同じまち、場所にあり続けるというのは世代を超えたランドマークに成り得ると思います。この辺は大事なことかなと思いますので、最後になりますけど、輪郭と形のお話というよりは、足元のフットプリントの景観ということで、道ということでの話をご提供したいなと思います。

安田：
日本建築家協会の安田と申します。皆さん、何か自己紹介の中でいろいろと既に議論が始まってしまっている感じがします。今日、レビューをするという話で、むしろレビューは後半なので前半は既存の建物の価値をというように形が少し副題でございました。前回の議論の内容を拝見してもその辺の話はかなり出ていて、それは既存の建物というよりも、例えば仙台らしさとか、モダニズムの建物の価値みたいなことからそういう話が出てきていると。も

が大事になるのではないかと考えています。

後半では、各立場の面々がそれに従った提案をするということ今回求められていたと思うので、私は文化についてのビジョンを提案したいと考えています。第1部ではここまでです。ありがとうございました。

渡辺：

ありがとうございます。ちゃんとまとめてきていただきまして、ありがとうございます。木村さんがジャズフェスの実行委員をやられていて、その市民参加のお祭りを外から見させていただいたときに、よりアップデートされているのを見たので、ぜひということで今日はお呼びしました。

では、そのまま隣の。多様なお立場を持っている市職員、多様なコミュニティーを持っていそうなので、よろしくお願いします。

洞口：

初めまして。僕も、顔がいろいろありまして。今回は、仙台市職員です。名札には仙台市の名前は一切書いていない状態ですが、ふだんは仙台市の市役所の都市整備局の営繕課で働いております。それ以外にも、「せんだいりノベーションまちづくり実行委員会」というところの、公務員タスクフォースの代表をしております。

実施する時のアドバイザーとして、もっと効果的な方法やステークホルダーを巻き込む方が、成果が上がるのではないかと、そういうアドバイスをする役回りが多い。市役所も様々な部局があり、縦割りで部局同士が連携しにくいので、民間の私などがそれをつないだりしている。行政が縦割りで制度を運用しているため、それを受ける地域も縦割りになってしまっている。そこをコーディネートして少しでも成果が出るように手伝い、つなぎなおすこともやっている。市役所の中にも協働コーディネーターが必要であり、民間にも役所や企業をつなぐコーディネーター両方必要であると思う。地域のステークホルダーを知っているかどうか。自発的な市民の力を活かす取り組みができるかボランティアマネジメントだと思う。田沢さんの話にもあったような多様な資金や人材

もちろん、BCSの話もそうだと思います。

そういう話を受けて、私も何か仙台らしさって一体何かかと考えていました。私は久保田さんと同じく大学のときにここに来て、諸々あって戻ってきたのは9年か8年前ぐらいです。同じような感じですけど、久保田さんが、現場をやられていた六本木のすぐ横の事務所にいたので、気持ち悪いぐらい近いんですけど、そういう意味では戻ってきて何かなというふうな外の人間から感じたことは、1つは道かなとすごく感じていました。

当時、仙台市は古い道の名前を戻そうみたいな話をされていてそれを私はすごく面白いと思っていました。その道の名前にはいろんな意味が残っています。仙台市は、先ほどなかなか顔が無いというお話も少しありましたけれども、日本の中では、やはり杜の都として知られています。その経緯はいろいろあるのはよく存じていますけれども、現状では恐らく定禅寺通りとか、青葉通りのイメージが非常に強いです。素晴らしい道を戦後につくれたと思っていますけれども、そういうような道の性格、当然、江戸時代からある国分町であるとか、大町というような重要性もあると思います。表小路の話も前回出ていたみたいですけども、あれも一つの道の性格です。今は、一番町が非常に重要な商店街として仙台にはあるわけです。そういったものの道というものを、やっぱり「らしさ」として、簡単には変えられないものの一つです。戦争で大

あとは、PPPとか公民連携事業といったものを進めようということで全国の仲間と「公民連携事業研究センター」というものを昨年度立ち上げまして、国交省とかと組みながら、いろいろなまちの公民連携事業を推進するコンサルティングというアドバイザー業務みたいなこともやっております。

公務員タスクフォースが何者かという話をしないと、僕の話もなかなか伝わってこないかと思います。公務員タスクフォースというのは、何をやっているかというところ…。

仙台のまちづくりをいろいろ進める上で、行政組織って、市長からピラミッド構造をしているわけで、そういうことで何が起きるかということ、横の連携が遅かったり、調整が困難だったりということがあったり、あとは1人が人事異動で欠けると全部止まってしまうという人事異動のリスクだったり。誰がやっても変わらないことが重要視され（いわゆる兵隊みたいな組織ですね）、人の替えがきく組織構造にしなきゃいけないというのも一方であります。でも一方で、これからAI導入が始まって仕事が変わっていくときに、果たして僕らはどういうふうに通じていくかみたいなところを考えながら、イノベーションが起こりにくい組織体系の中でどういうことをやっていこうか、ということを考えています。

その中で、僕はネットワークハブ型という組織形態を、公務員の若手職員の中ではあるんですが、一人一人がこのハブになるよ

うかに使うか。限られた資金源しか知らないと活動もそれに縛られてしまう。活動にあった資金源にマッチングさせないと活動に合わないことが起きる。小規模な団体だとどんな資金源が必要か、タイミングによっては補助金を使わない方がいいとか、丁寧に資金調達した方がチームビルディングになるのではないかなど、お金は特効薬にもなるが毒にもなる。自分たちが目指す成果はどこで、そのためにはどんな道具や方法、人材と取り組む方がいいのか、一緒に話をする。私が決めるのではなくその時に必要な情報などを取ったりすることが仕事。行政の側にも民間の側にも、議会の側にも協働コーディネーターが増える必要がある。

坂口：

大きく変わったということもありますし、明治のときにも定禅寺通りが伸びていったみたいなことは当然あると思いますけども、そういうものが一つの「らしさ」をつくっているのだらうと、思います。

もう一つは、道と関連しますけれども、広場というか、空地が実は仙台北らしさをつくっているのだらうなと思います。針生さんのお話の中で「市民広場と市役所の広場が非常にいい空間をつくっているけれども、今は、なかなかそこがうまく使われていない。だからこそ、全体をもう一回計画しなさい」と、おっしゃられていましたけれども、私は全くそのとおりだと思っています。それは既存の庁舎を残すとか残さないとかいうのと、私の視点は少し違いますけれども、あの空間はきちんと見直さなきゃいけないと思います。それは使い方を含めて見直すべきだと思います。今回、市民広場、これは当然、市役所が管理していると思いますけど、市民広場と市役所の計画、これは絶対に一体的にやるべきです。それは間の市道も含めてです。それを今回、菅原さんがやられている建て替えを市役所の中で担当している部署と市民広場をやるうとしている場所は恐らく違うでしょうから、何とせよ連携をしていただいで一緒に、例えばこういう場所で論じる、その上で空地あるいは道みたいなものをもっとそういうふうに通じるように仙台北らしさだと考えることができれば、そういう視点でこの庁舎を見つ

うな、専門性とクリエイティビティみたいなものを持ったネットワークを職員内にちゃんと持って、希少性の高い人材集積を目指していこうとしています。なぜ、希少性が高くなきゃいけないかというと、いわゆる希少性の高い公務員と希少性の高い民間プレーヤーが組めば、自動的に希少性の高い掛け合わせになるからです。仙台にしかない豊かな暮らし、遊び方、暮らし方みたいなものを実現できるのでないかということを考えています。メンバーのほうは、実は31名ぐらい入って、国交省にも注目してもらって、国交省からも4人ぐらい入ってもらって、幅広く、いろいろな局・区の人がいる状態、そして職種もさまざまというような状態です。それで、今回お話しする際に、何の話もネタとして持ってくるとういかなと思ひまして、先ほど総合計画の話があったのですが、もうちょっと都心や中心部の話について、先ほど安本さんにお話しいただいたのですが、そういう観点で話していきたいと思ひます。

仙台って、資料を見てわかるとおり、ピンク色のところがいわゆる中央資本がかなり占めているようなエリア、駅前とT字のアーケードが入っていて、一方でここに、人の流れがあり、歩行者がばつと歩いているみたいな状況です。

中央資本といっても、この黄色いエリア、裏通りは、実は結構おもしろいエリアです。若い人たち、何かちょっとセンスが高い人

関係を構築するだけではなく、固定化やこじれたりするので修復する。プロセスに応じた支援の在り方があるのではないかということだと思ひます。

この話を丁寧に深掘してもかまわないし、意見を出すと同時に課題を共有する場でもある。課題を挙げていただきたい。このうまいかかないは、仙台が持っているももとのポテンシャルかもしれない。個別の垣根があつて解けていない問題なのかもしれない。真壁さんように被災現場で持ってきた課題のようなものを、どうやってほかにつなげていくかとか。

自己紹介の拡大版と共有できそうな課題について意見を頂きたい。

田澤：

ということは非常に重要だと僕は思っています。

道というのは、先ほど大きなスカイラインの話が久保田さんからあつて、それは余り意味ないのではないのという話がありましたけど、私も余り大きいスカイラインは余り意味ないと思ひます。むしろ一番道を歩いている、そのときの感覚であるとか、定禅寺通りを歩いている、そのときの感覚、あるいはそこから飛び出した市民広場を歩く感覚、あるいは車で走る感覚でもいいかもしれませんが、そういう自分の手の届くというか、いわゆる視線の先の空間が「らしさ」をつくっていくのだと思ひますし、まちをつくっているのだと思ひます。多分Cの2という後半のテーブルで低層の部分をお話しされると思うのですが、そういう視点でちょっと今から投げかけるといふ意味でぜひ取り上げていただきたいと思ひます。

それと、先ほど渡邊先生から災害とか防災の話、佐藤先生から防災とか災害、それから設備の話が、少し出ていましたけれども、空地は災害においても非常に重要な役目を果たしているのだと思ひます。庁舎を免震にすればいいのだとか、例えば構造上、一番上のランクにして基準法よりも1.5倍の強さの建物が云々とかそういう話だけじゃなくて、もうちょっとソフト的に、災害といつても地震だけではないと思ひますから、「この庁舎が有事の際にどういう役割ができるのか」という事を周りを含めて議論をしたい

Table A1

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、大きな都市ビジョンを官民連携で考える

Table B1

市民協働・新しい公共の在り方から「公共を担う仕組み」を考える

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカイラインの構成を考える

Table A1

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、大きな都市ビジョンを官民連携で考える

たちが楽しいと思っている、例えばビンテージの家具とか古着が集まるようなエリアだったり、間口は狭いけれども好戦的な飲食店が集まっていたり、世界的なアパレルブランドみたいなところが仙台の人を集めて集積していたりとか。横丁とかそういうような場所もあれば、いろいろなところですね、いろいろな場所が実はあって、こういうところに市民やいろいろな人が魅力を感じているのかなと思います。

もちろん、このT字と東京資本が集まっているからこそ、高速バスで東北の若い子たちが集まってきているというのもあるので、こういうところも魅力として仙台にはあると思います。ただ、人の流れが、都心の中心よりこの東側で止まってしまっているという、駅周辺とT字のあたりで止まってしまっているのが実態です。本来は、この懐の深さが仙台にはあって、この西側とか、定禅寺通とか、こっちのほうにもエリアがあります。

ただ、ここになぜ、人が流れてこないかという、市職員である僕が言っているのかという話はあるんですが、エリアの価値創造に寄与していない市庁舎。今回のテーマは、まさにそうですね。低層部を開かなきゃいけないとか、そういう話がまさにテーマ設定としてあるというのは、果たして市庁舎が周りのエリアに価値を創造するだけの庁舎になっているかという議論があって、コンテンツの波及効果をちゃんと生んでいるのかということです。メ

ディアテークの話でも、建物としては結構すばらしいとしても、そのエリアに何か波及効果を生んでいるかかみたいなことですね。居場所がなく憩えない西公園というの、前は結構いろいろプログラムがあったんですね、今は何となく無くなってしまって、西公園の目的設定がされていない。だから、定禅寺通も、先ほど言った「人は晩翠通は越えて来ないだろう」という話が出てくる。

あとは、広瀬川の話ですけれども、目で見ただけ、目で愛でるだけの市民が近寄れない水辺って…、何なんだろうと思います。仙台の公共のこういうものって、結構見て愛でるものが多いのか、定禅寺通も見てインスタグラムに載っけて帰っていくという感じだと思います。そこで何かご飯を食べるとか、何か人が楽しめるような、滞在するもの、滞留するものがあるのかということ、広瀬川や定禅寺通もなかなかないというところが問題だと思います。まさに、この仙台のアイデンティティーと言われている広瀬川、歌とかもいろいろ歌われて、定禅寺通もあれだけ仙台の何かの情報誌にはでかく載る場所であっても、そのアイデンティティーが市民にとって触れられない場所になっていることが一番の大きい課題だと思います。これらは、ビジョンは資源ではあるが、直接利用されていないということがまさに課題であり、ビジョンのヒントなのかなと思います。

なので、都市のアイデンティティーだが、市民の拠り所になって

Table B1

市民協働・新しい公共の在り方から「公共を担う仕組み」を考える

今抱えている市民協働の課題。私は住民の方を頼る立場である。

坂口：
地域の資源を探すときに、そこにどういった価値があるか、それは他者にとって有益であるかは地域の人たちとの会話の中で価値が鮮明になったり、次の世代に対して継承すべきものであることがわかったりすると思うが、そのあたりはいかがか？

田澤：
見つけた地域資源が固有性を持っているか、未来につなぐためにどう形にしていくのかは、対話を通して構築していく。施設側の人間として胸襟を開いた状態で住民と接する。そのような姿勢を

行政がどれだけ対応できるのか？メモリアル交流館は施設を利用する方から料金を徴収していない。ただし設立趣旨は、東日本大震災のことを伝える活動団体、地域資源を発信しようとする団体にのみ貸し出している。駅に直結している施設なのでその他の意味で活用したいという団体に、その活動内容ではご利用いただけないという対話のプロセスが必要となる。費用が発生したほうが、やり取りが楽。合理的な運営をしようとした時にこのやり取りは省かれる部分であると感じている。「良い」、「悪い」を、お互いの立場をはっきりさせた上で対話していくという場面が減っている。メモリアル交流館では求められている部分なので、大切に扱っている。こういう企画をやりたい。ここではその内容を受け付けられない。そういうやり取りを互いに話し合える関係ってすごく大

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライライの構成を考える

いのではないかと、個人的には思います。

あともう一つ、仙台の顔って道だけじゃなくてもう一つは緑の量だと思っています。ここは批判をする場ではないので、批判をするつもりはございませんが、現状の市役所の緑化面積が18%だか19%だから今回は20%にしますというのは、全く思想のない話だと個人的には思います。やっぱりそこは仙台の、もしも仙台の市民の方がここのテーマであるとか、仙台商社というものが緑だというふうに思うのであれば、思い切った計画の根幹に据えていくとか、そういうのがあってもいいのではないのかなと個人的には思います。

後半のお話が多分いろいろ出てくるとは思いますので、前半は針生さんのお話の中でちょっと言いたいことも少しあるんですけど、また次の後半に回したいと思います。よろしくお願いたします。

伊藤：
東京から参りました株式会社久米設計の伊藤と申します。ややちょっと部外者感があるのですが、今回、この仙台市の基本計画策定に関わる支援業務と、設計者という支援業務という形で携わらせていただくことになりました。12月からです。まだ、そういう意味なので時間も浅いですし、余り深く中身について見識を高めたわけではないのですが、今日、こういったテーブル

に参加させていただく、またこのような先進的なかなり市民の議論の中に入れていただくということで、この空気と皆様の意見と熱気を感じ取って帰りたいなというふうに参加させていただきました。

初めに、既存庁舎の価値ということで振られてはいたのですが、なかなか具体的にそれについてお答えするような立場ではないので何とも言えないのですが、ただ、先ほど紹介いただいた川崎の市庁舎を、実際私どもで担当している関係もありまして、またほかにも同じような規模の中で世田谷の区庁舎というのがプロポーザルで、それも既存建物をどうするということがテーマになりました。世田谷の場合は、実際プロポーザルを主催した側はテーマにはしていなかったのですが、市民の意見が出てきた関係でテーマにならざるを得なかったプロポーザルでした。なかなか既存の庁舎をそのまま実現するというのは、やはり幾つか課題があるとされていて、世田谷の中で出てきた話で、当たり前のことですが、いわゆる法的にクリアしなければならないこと、これが意外に難関が多いのですが。それからもう一つは技術的にクリアしなければいけない、法的に満たすということもそうですし、コストも含めて、技術を含めて既存庁舎を使えるようにするための技術をどうやるかということもクリアしなければいけない、すごく当たり前のこと。もう一つ重要なことは、なかなか答えが

いなかったり、商売、ビジネスにとっての魅力的な場所になっていなかったり、そういうところがある一方で、黄色い部分のエリアは個性がプレーヤーによってつくられているというエリアなのかなと。特に、西公園というのは公共交通が全く通っていないので、回遊性も生まれてこないだろうという話も出てきます。なので、仙台のアイデンティティーを感じる都市の回遊性向上みたいなものが、ビジョンにとって一つの切り口になるのではないかということをお話させていただきました。

それで、目的設定としては、仙台のアイデンティティーである文化的公共資産、自然資源を生かしながら、懐の深い都市空間を醸成していこうということなのかなと。その戦略のためには、西側のエリアの開発をどうしていくかという、まあ、開発というとかさずごく嫌なイメージがついちゃっているんですけども、そのエリアを面白くしていくという意味での開発です。そういうビジョンの作成だったり、既存エリア、もう既に盛り上がっているエリアをどう価値を最大化していくかという議論だったり、街路をどうデザインしていくかみたいな話。あとは、交通政策という話が、先ほど市電の話もありましたけれども、回遊するようなバスがなかったりということもあるので、人々が回遊するような交通政策のあり方が、今後も語られていくといいのかなと思いました。

ちょっと、この後、この戦略①から④の話もいっぱいあるのですが、長くなってしまいますので、この辺で失礼します。

Table A1

渡辺：

ありがとうございます。今出していただいた部分というの、この後の話につながるかとは思いますが、まずはまた一回しをしてまいりたいと思います。

じゃあ、今度こっち側に参りまして、伊藤さん、よろしいですか。じゃあ、伊藤さんからお願いします。

伊藤：

バリアフリーツアースターの伊藤と申します。私は、基本構想と基本計画の委員として会議に参加しております。参加していてもなかなか分からないところがたくさんあり、発言も2時間ということで限られてしまいますので、こういう場で少し発言させていただくのは、とてもありがたいなと思っています。

そもそも、私がここにいるのは、前回のラウンドテーブルで会場に来て、障害がある人、私のような立場で話す人がいなかったからなんです。それで、やっぱりまちづくりという総体的なものの中で、各論的には子供、高齢者、子育てなど、いろいろありますけれども、何かやっぱり我々の立場というのは優先順位的にも

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、大きな都市ビジョンを官民連携で考える



Table B1

市民協働・新しい公共の在り方から「公共を担う仕組み」を考える

出ないんですけど、かなり愛情がなければ使えないと。それを絶対使うのだというほどの愛情というのですかね、そして、使い続けるのだという情熱みたいなものがなければ、なかなか既存建物というのは残す、純粋に歴史的建造物だから残すといっても、結果的には愛されることにならないという末路を辿ってしまうということもあろうと思います。その辺を踏まえて何か考えていかなくては、きっといけないだろうと世田谷のプロポーザルを通じて、感じたところです。結果的に世田谷の場合には現実的に残すということは真面目に考えるとかなり難しい計画でした。当選した案も前川建築の区役所という形を全く残さないような状態の案でした。言葉が悪いですが、首だけ残しました、というような、ちょっと余りいい計画ではないなと私自身は思いました。そういった形が、「本来市民の方たちが残したいと思った姿というのは、本当にあれだったのかな」と、疑問が残りました。

ここで仙台市の庁舎ということを議論する上では、あの建物が重要なのか、先ほどもちょっと出ましたけれども、外部環境みたいな、仙台らしさにとって先ほど軸の正面性みたいなものもありましたし、何が重要なのか、少しテーマを折角専門の方たちですからそこを絞り込んで議論をしたほうがいいのかというふうにも思いました。

渡邊（宏）：

渡辺宏と言います。日本建築家協会から来ました。実務のほうは仙台市内で建築の設計事務所をやっています。多分この本庁舎を含めたエリアあるいは仙台の都市構造については、多分ここに今までの皆さんのお話を伺っても大体共通のベースには載っているのかなと思っています。

その中で、今回のラウンドテーブルで我々がどういう役割を担うべきかとちょっと考えていて、それに伴って皆さん、発言されているのですが、今、基本計画をされていて、それから今度は設計者、施工者という段取りです。その中で私も実務をやっていて、非常に重要なのは、具体的な方法論とか、解決の仕方というよりは、「なぜその方法を選ぶのか、なぜその解決が必要なのか」という思想というか、考え方というか、大きな言葉でいえば文化性みたいなところに行くと思うのですが、そういうような話がこの何回かにわたるラウンドテーブルの中で共有されて、それが今の基本計画、これからの基本設計、実施設計というふうに繋がっていくの、がいいのかなと思っています。

先ほど安田さんも言われていたけど、今回の基本構想だけ見てしまうと、どうしてもそういうビジョンあるいは思想、文化というのが余り感じられなくて、どうしても古くなったから、建物が弱そうだからというような問題解決型の構想になっているので、

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカイライターの構成を考える

Table A1

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、大きな都市ビジョンを官民連携で考える

あまり高くないのか、「福祉のまちづくり」とつけないと我々自身が入れてもらえないのかということから、前回騒いだといいますか、手を挙げて参加しました。それで今回、手を挙げて言った手前、責任を持って発言しろということでした。ですから、このAテーブルに入ったのも、どちらかという私は自分の立場で何か言いたいということなので、ビジョンということまで、私自身も、会議で参加していますけれども、まだまだやっぱり大きな都市ビジョンとなると難しいかなと。今日は、その中でも私が経験した、私の先輩方、諸先輩方が仙台をどうつくってきたかということからビジョンを考えてみたいなと思っています。

バリアフリーツアースセンターというのは、主に外出などの情報発信をしているんですけども、今画面に映っています「とっておきの音楽祭」というものを開催させていただいておまして、おかげさまで今年で19回目になります。関係者の皆様にも大変お世話になってまして、ジャズフェスさんは10年先輩の団体で、今年も何かといろいろとステージとかをサポートさせていただいています。

私たちも、主会場が市民広場で、あとは勾当台公園を中心として、ちょっと時間がないので映像をごらんいただけないのですが、このような雰囲気で開催しております。ですから、まさしく市役所、市民広場、勾当台公園は、我々にとっても、とても大きな意味を

Table B1

市民協働・新しい公共の在り方から「公共を担う仕組み」を考える

事なことだと思う。新庁舎で市民協働を進める。場を構築するとなった時に公務員が市民の話を聞くという態度が取れるのか気になる。その対応に時間を割かれるので、忙しい市役所の人たちが時間をとれるのか。○か×の2択で合理的に処理したら、グレーゾーンがなくなってしまう。そうなった時に多様性がどれだけ担保されるのか。本当の対話、相手の話を聞き、自分の話もした上、どういう着地点を迎えることができるのか、わからない話をするときに対話する態度をどれだけとれるのかということが、これからの市民社会を構築する上で、非常に重要な姿勢なのではないか。私はメモリアル交流館で日々試されている感じがする。

坂口：

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライライの構成を考える

それを今やられている基本計画の中でもう一回、条件として整理をしていただければなというふうに思っています。

そういうことを言いながらも、やはりこういうラウンドテーブルの機会ができたということは、協働の場所ができたというのは非常に価値のあることだと思うので、それをぜひこういう場で生かしていければと思います。

さて、本論として基本庁舎の評価、どう見るかという話があって皆さん、発言されていましたが、やはりBCS賞の受賞という当時の高い評価、あるいは50年以上ですかね、54年ぐらいあの場所に仙台の顔として存在をした時間の重さ、先ほど菅原室長からスライドでいろいろ今までの経過を見せていただきましたが、あれを振り返るだけでも、やっぱりなるほど感動する部分、結構あります。やっぱりそういう時間の持つ物語性というのが非常にあの庁舎の価値だと思います。

ただ、残念ながら、今は新しく建て替えるという方向になっていて、それがなぜ来ているのかというと、やっぱりあの庁舎をうまく生かす、使うあるいは工夫するという思想が欠けていたのかなと思います。先ほど僕の前に伊藤さんが愛情という言葉を書いてまさにそういうことなのかなと思うのですが、やはりそういう使い方あるいは共有のあり方がどうしても私たち市民とちょっと距離があった。だから、何となく基本構想の中でもう壊すことが前提

持つものであるかなと思っています。

今、仙台市で、さまざまな障害理解の研修とかをしているときに、こういったものを使っていますね。数字がいろいろ出ていますので、最後だけ皆様にもちょっと想像していただきたいのですが、仙台市内には手帳保持者が約5万人いらっしゃいます。この数字は、あるカテゴリーの方々と同じぐらいなんです。どういう方々と同じぐらいでしょうかということなんですけれども。おととい、交通局の方々の研修で、その方々はさすが交通局なのか、一発で当てました。じゃあ、ちょっと聞いていただきましょう。お願いします。

小学生の数と同じなんです。小学生は、その辺にいて、いつでも関わりを持ったり見かけたりしますけれども。なかなか、障害がある方というのは、まだまだ身近なところではそんなに見かけないんじゃないかなと思います。いろいろな理由があって、全てはちょっとお話できないんですけども、ひとつはやはりここにもありますけれども精神障害のある方とか、可視化できない、外見からわからない方がやはり圧倒的にふえている。今、発達障害の方も多いですけれども、いろいろな理由があるということはさておき、つまりこれぐらいの方々が同じ私たちの仙台のまちで生活していらっしゃるということをまず皆様にわかっていただければ、ありがたいかなと思っています。

メモリアル交流館ができてから、館がこれまでの実績などから信頼感を得て、地域や利用者からいろいろな提案が出てきていると思う。開館当初と現在で対話の仕方に変化はあるか？

田澤：

交流館での企画の実績などが見えてきているので、これだったら受け入れてもらえるということで提案を頂くことがある。我々もトライ&エラーでやってみて、事例の積み重ねの上で、預かった提案に対してこういう事例があったのでできるかもしれない。または、できないかもしれない。という部分からスタートしている。そういう部分では当初と現在では態度が変わってきている部分もある。

みたいな方向に行ってしまったのかなと思っています。それは全体としてももう一回見直す必要があるのかなと思っています。ぜひ壊すことを前提ではなくて、今、針生さんもおっしゃっているような価値、方向性あるいは手法というのをちゃんと検討して、それで壊すことになったとしてもそれが多分そのプロセスが次に絶対繋がっていくと思います。

というのは、今回の本庁舎が50数年頑張ってきたと。多分最終的には60年ぐらいですよ。あと基本構想の中にもどこかに書いてあったと思いますけども、これから80年の新しい都市の財産のあり方というような言葉もあったと思うのですが、ぜひそういう時間の軸の中で今あるいはこれから計画設計をする時間で「何をすべきか」というところを、既存の庁舎あるいは周辺環境の価値を含めて検討することが次に繋がるのかなと思います。

先週の報道で、音楽ホール、新しい音楽ホールの位置をどこにつくろうかということがいろいろ検討されていて、もしかすると、西公園とか、あるいは勾当台、いや、錦町公園とかというような候補が上がっていて、そうなってくると、今回の本庁舎、あのエリアにすごく近いわけです。そういう近接性も含めて検討のベースに置いてほしいなと思いました。

私は建築の設計事務所を経営していますが、いろいろな経済団体の方々と交流もありまして、そういう視点からいうと、やっぱり

先ほど、大澤さんから健康都市宣言のお話がありまして、私自身もこの健康都市宣言のことをいろいろ調べました。私たち自身がこの健康都市宣言の恩恵を受けているということもあるのですが、鳥野市政の中での健康都市宣言の延長上で「生活圏拡張運動」というものがあります。これは、1960年代後半ですね、当時、西多賀病院にいた車椅子の方が、みんなと同じようにまちに出かけたいということを学院大とか福祉大とか仙台の学生さんたちに呼びかけて、じゃあ一緒にまちへちょっと出てみようと。そうすると、まだまだバリアフリーという言葉自体が存在しない時代ですから、まちは大変不便なんです。でも、自分たちでいろいろな人たちに声をかけていこうということで。例えば、鉄板のような簡易スロープをお店の前に敷設しました。そういった地道な活動を続けていったら、だんだんそれが注目を浴びてきました。一気に1973年に飛びますけれども、官民、行政を巻き込んで、1973年には全国の子車椅子ユーザーが仙台の状況を見に来ました。また、当時の厚生省が全国6カ所を指定していますが、仙台市は身体障害者福祉モデル都市の第1号に指定されているんです。

1971年に、これも運動の成果で、トイレ設置シンボルマークというのが、車椅子のマーク、あれも本当は車椅子のマークじゃないんですけれども、障害者のマーク、あれを貼付けたのも実は三越だという資料も残っております。そういった当事者の方々の運動

新井：

災害公営住宅の集会場をみんなの居場所にするためには、いろんな団体に取り組んでくれるといいと期待しているが、管理の都合で集会場を使えなくなってきた。管理人がいないと使えない。土日解放大変だからやらない。面倒なので行政に一任したいなど。理念がないのが問題だが。そもそも何のために集会場があり、運営する、管理するが発生する。行政や地域社会もボランティアでやるとあまり意識しないので、市役所に交流スペースを造ったところで、先程のメモリアル交流館のような問題が発生しかねない。仮設住宅で殺人未遂事件が発生した。成人の息子が年老いた母親を刺す事件である。そもそもそんなことした家族がそこに住んで

地域経営、都市経営あるいは事業、そういう視点が必要で、その中の一つがコストとかいう話になってくるのだと思いますが、ぜひそういう都市経営、都市戦略という視点もぜひ大切で、その視点から今の庁舎、周辺環境をどう評価してこれから新しい庁舎をどう組み立てていくかというふうにいければいいのかなと思います。ぜひ時間の軸と歴史、文化、思想といいますが、その辺の思想を感じられる方向性を持っていければと思いますし、ここにいらっしゃる皆さんもそういう視点で参加されていると思うので協力していきたいと思います。よろしくお願ひします。

崎山：

初めまして皆さん、東北学院大学の崎山と申します。私の専門は、近・現代建築の歴史の教育研究です。それから文化財の保存等々ということで、多分本日の既存本庁舎の価値についての議論ということで、前は参加できなかったのですが、今回、そういう立場からということでご指名をいただいて参加させていただいたという経緯がございます。

皆さん、今までそれぞれのお立場から歴史あるいは文化に関する軸でお話いただいておりますので、重複する部分はある程度、避けて、幾つか情報提供等々ということをまずさせていただきたいと思ひます。

が、行政を動かしてきたというような歴史が、やはり健康都市宣言の、我々としてのとても大きな出来事ではないかなと思ひています。

この赤で囲った2つが、とても大きなところかなと思ひます。これは官報にも載っています。やはり、こういったエビデンスも、官報にあるというのが大きいと思うので。

ちょっと文字が小さいんですけど、この囲ったところですね。仙台は、福祉のまちづくりの発祥の地だということが載っているところ。

これは、昭和48年、1973年。今は、廃刊になってしまいましたけれども、「グラフせんだい」という広報紙が仙台市で発行されていきました。当時の仙台市内のバリアフリーマップです。紙面の右下には、仙台駅があります。まだ新幹線は開通していませんので、前の駅舎です。上のほうに県庁と市役所が並んでいるのがわかると思ひます。車椅子のマーク、国際シンボルマークがプロットされているところは、もう当時からトイレがあったところで、三越や藤崎などのデパートにも、もう既にトイレがあったということがわかります。

私も学生に教える立場です。このマップを見せると、三越と藤崎のところに車が走って、私も子供心にかすかに覚えているんですが、ご存じの方も多と思うんですけど、アーケードのどこ

いたこと自体、住民は知らなかった。すごく孤立していた。

息子は逮捕され、母親は軽傷で済んだが、周辺住民に顔向けできないのでさらに母親の孤立が進んだ。集会場を活用した催しであるまり人気はなかった編み物教室に、その母親は皆勤賞だった。月2回ぐらいだったと思う。住民や行政との付き合いもほとんどないその母親にとって、その編み物教室が一本の命綱のような役割を果たした。行政が助成金を交付するときの実績とか何人参加したとか求められるが、実績も大事だがその活動があることでどのようなことが起こるのかという可能性、想像力を評価する力も必要となる。

坂口：

1つは、近・現代建築の価値評価、文化的な価値評価、建築学的な価値評価というのは、実は非常に難しく、現在、今、今後、特にRCの建物に関しては今後、これからどうやって評価をすべきだろうかと、その評価軸も含めて今、学会等でも議論を始めているところです。確立された評価軸が今の時点であるかと言われるれば、実はまだそういう議論を行っている段階、そういうことも含めて非常に難しいタイミングであることは確かです。

ただし、私は、専門分野の関係で日本建築学会が行っている近・現代建築の調査ですとか、そういったものにも関わっておりますけれども、建築学会が整理した近・現代建築、重要建築としてのリストが幾つかあります。一番スタートになったものは、1986年に出された「総覧日本の建築」という本がございます。北海道、東北は既に刊行されていて日本建築学会の100周年記念事業ということでスタートしたもののなんですけれども全国のものはまだ揃っておりません。関西のほうはまだ刊行できずにおいて、全国版、揃っていないのなんですけれども、北海道、東北に関しては1986年に出ています。

そこには、古い社寺建築から近代建築、現代建築も含めて各都道府県にある比較的重要だろうと考えられる建物をリストアップしています。宮城に関しては50件ぐらいのリストアップがあります。当然、社寺建築もありますのでそういったものが多いことは確か

Table A1

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、大きな都市ビジョンを官民連携で考える

Table B1

市民協働・新しい公共の在り方から「公共を担う仕組み」を考える

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライライの構成を考える

Table A1

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、大きな都市ビジョンを官民連携で考える

ろに車が往来していましたね。そうなんだよという話をすると、やっぱり想像がつかないという話になって。そういったことも含めて、仙台のまちが、45年前、40年以上前から、全国に先駆けていたということを示す資料なんじゃないかなと思っています。

これは、昭和48年4月1日の市政だよりに当時の島野市長が書かれたものだと思うんですけども、全部読むと時間がなくなるので、ちょっとだけ括弧で囲みました。

「先駆的な地方自治体の努力によって、福祉の向上に対する政府の目を開かせてきたのが現実の姿である」

つまり、地方公共団体の取り組みが、国を動かしたというところがあらわれているんじゃないかと思います。昭和48年というのはオイルショックの時代で、福祉元年と言われ始めたんですけども、この後ちょっと成長が止まってしまう節目の年でもあったのかなと思います。当時、市長が、仙台を福祉のまちにしたいと考えたということが、こういうのを見てもわかるんじゃないかなと思っています。

この生活圏拡張運動は、身体障害者福祉モデル都市として一応結実したのですが、その後、運動が高止まりしてしまったんですね。その理由もいろいろあって、私もいろいろと調べているんですが、運動が全くなくなったわけじゃなくて。

皆さんはこの場所、わかりますよね。東二番丁と青葉通の交差点

で、イオンのところにエレベーターがあります。交差点の四隅のエレベーター。今、私たちは当たり前のように四隅のエレベーターを使っていますけれども、本当は、4つは設置されない予定だったんですね。

私たちの先輩方の団体によって、「障害者用エレベーター4基設置決まる」と新聞記事になりました。青葉通と東二番丁通は、国道と県道の境目ということで、当時の建設省が、こういったところにエレベーターをつけた前例がないのでつけたくないと言っていることが載っています。このことは、ちゃんと記事に書いてあります。また、今回のことを前例にしたくないということまで書いてあります。でも、やはり当事者の人たちが、高齢化社会とか、仙台にはこのぐらいの機能が必要ということで、「運動実る」と書いてあります。けれども、こういうところで4基ついて。もしこれが4基つかなかったら後から多分、この時代ではさすがにつけられるようになると思うんですけども、もっとコスト的にもかかりますし、もしかしたらあのようなきれいな形にはならなかったんじゃないかなと思っています。

こういった私たちの諸先輩、先達の動きというのは、やっぱり私たち自身も継承していかなければならないんじゃないかなということで。仙台もさまざまなもので評価を得ていますが、2年前には地下鉄東西線が国土交通大臣賞を受賞したんですね。バリアフ

Table B1

市民協働・新しい公共の在り方から「公共を担う仕組み」を考える

一般的には見過ごされがちな小さな関わりを見つめる力が求められるということであろう。また、被災する前は集会場を利用する人は多くはなかったと思う。発災後集会所が集まる場になっていく中で、集会所に来ることが日常的な人とそうではない人がいると思うが、その点はどうかであろうか？

新井：

震災前は3世代で住んでいたが、震災後は親世代がプレファブ仮設、子世帯がみなし仮設と別々に住んだ事例がある。若い人がなくなったので、老人だけで集会所で集まる。だけどそれはそれで結構楽しいという話も聞いた。世帯分離することで嫁も親も気を使って過ごしてきていたから別れるきっかけになって良かった

という考えもあった。家族やコミュニティの在り方が実態に合ってきた。現在の全国の世帯人員は平均すると2.5人と3人を割っている。私たちは住宅や家族というサザエさんみたいな家族像を描いたりするが、意外と現実を見ていない。現実を見ないでこうあるべきだ。コミュニティ理論なんてまさにそうである。現状を見ないといけないと感じる。自治会長さんと話をすると現状の話ではなく、会長さんの理想の話をする。失敗の話はしてくれない。そういう部分が気になっていた。市民から意見を求めてそういう立場の人からだけ話を求めてほしい話が出るのかな。と思った。

武：

地域には子育て支援や老人の見守りを一生懸命にやっていただけ

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライライの構成を考える

なので、その中で近・現代の建築も幾つか取り上げられています。全部挙げると切りがないんですけども、学会のほうでは、それを定本として2015年にさらにそれを補強するような調査をしました。それが学会の研究協議会等の資料として刊行されているんですけども、そこには総覧に載った建物のほかに、例えば建築学会賞を受賞した建物、それから先ほど来、出ておりますBCS賞を受賞した建物、それから例えば地域ごとに学会ですと、東北建築賞とか、各地域の建築賞がございます。そういうのを受賞した建物に関しても全部加えてリストをふやすということをやっております。

その中で、実は、それ戦後の建築を中心にやっているんですけども、戦後の建築で今、宮城県でそういうところの上ってきている建物は、実は8件です。ただ、ここ10年ぐらいの間になくなってしまったものがあって、残っているものは実は7件だけです。宮城県に今現存する戦後の建築で、比較的歴史的価値があって重要だというふうに建築学会として考えているものです。全部名前だけ申し上げますと、実は仙台市役所が入っています、現在のです。それから、東北大学の附属図書館です。それから、この近くにありますPL教団の建物です。それから、宮城学院の建物、それから宮城県美術館と大崎市民会館、それから中新田のバッハホールです。この7個が載っています。

その中で現在の仙台市役所の建物が一番古いです。その次が大崎の市民会館で1年違いなので昭和40年、41年になりますが、この2件だけが築50年を超えています。50年を超えるというと、我々の立場でいうと、基本的には文化財に登録できる認識上の基準になりますので当然、文化財です。建っているだけで文化財という理解です。価値がある建物であるということです。その中では、仙台市役所の建物というのは、今、宮城県に残っているそういう時代の建物の中でまず一番古いということです。それが一つ学術的な価値ということになります。

今すぐということではありませんけれども、例えば今後、仙台市が近・現代建築を文化財にしていこうと考えると、一番最初に出てくるのが今のところ、現在の市庁舎であるという認識は、仙台市を初め、皆さん、持っていただいているのかなと思っています。私は根本的にこれを完全に残しなさいと主張するつもりは実は全くありません。ただ、少なくとも議論をする上でああいう建物の価値って非常にわかりにくいところがありますので、今普通に建っているオフィスビルじゃないかと思う方も多分たくさんいらっしゃると思いますので、そういう意味で一つ、ある学術的な価値基準に載せて見たときに、ちゃんと説明できるような価値がしっかりありますということは、まず壊すにしても、活用するにしても理解をすべきであろうというのが私の立場です。

リーとかユニバーサルデザインというのは当然なんですけれども、なぜこれが受賞できたかという中で、真ん中あたりにあるのですが、「計画段階から障害当事者も参加のもと、意見聴取を行い、設計に反映させた」と書いてあります。この地下鉄ができる三、四年前ぐらいに、富沢駅の車両基地に地下鉄車両の実物大のモックアップを交通局がつくりまして、そのモックアップの中に我々が入って、手すりがかうだとかあだとか、そういったことをやりとりして、実際今、地下鉄東西線に乗ると縦のちよつとつかまる手すりがついているんですけども、それはモックアップでやりとりした結果なんです。ですから、もうバリアフリーは当然ながら、どう当事者の人たちが参画したかということが今後もその評価の大きな基準となるんじゃないかということです。実はこれは東西線だけじゃなくて、今はコボスタですけども、楽天球場もそうなんです。あれも、宮城球場が球場を変えるときに、我々が意見交換をして、それで国土交通大臣賞を受賞しています。そういった歴史があります。

このメディアテークも、私も関わらせていただきました。ちょっと手前味噌で申しわけないんですけども、皆様のお手元に、初めてごらんになったという方もいらっしゃるかもしれませんが、メディアテークのトイレだけを紹介したマップがあります。何でこういうものがあるかといいますと、パブリックのトイレと

る方がいる。社会福祉協議会や消防団の方、清掃や草刈りを頑張る方。河川整備に情熱を傾ける人、民生委員など地域にはたくさんの人材がいて、いろいろな役割を担ってくれているが、素人です。先程遠藤さんが言っていた地域をコーディネートするということは誰もやってくれていません。しかし、私も現役時代は行政のプロとして活動し、家に帰ればこの地域に住んでいる行政のプロでした。地域の中にプロはたくさん住んでいると思うが力を発揮できない状況にあると思う。地域に住んでいる行政マンとか地域に住んでいる学校の先生だとか、たくさんいる。先程も役員人事で困った話をしたが、誰もいなければと県の職員が手を挙げてくれた。ありがたい。リタイアした後も地域に貢献したいという思いがある方も多い。地域に住んでいる現役プロの方がつながってい

それから、建築に関しては、当然、その時代の雰囲気や反映したデザイン等々がありますので、その善し悪しも含めて専門家の方々、たくさんいらっしゃいますので議論は今後のことになるかと思えますけれども、続いて、その似たような時代に建てられている庁舎の建物とか、今、幾つかどうなっているかという事例のご紹介をします。

まず、比較的古いものとしては、丹下健三さんのつくられた倉吉の市庁舎があります。地震で被害を受けてしまって登録文化財になっていたのですが、そういう建物が昭和32年の建物です。それから、同じ昭和30年代の建物では、佐藤武夫さんのつくった旭川の市役所があります。これも、現代建築としては名建築です。建築学会賞を受賞して docomomo JAPAN にも選ばれています。ただ、これも解体が決まっています。建て替えの計画が動いていて日本建築学会から学会長名で保存要望書を出したのですが、無理だということで解体されることが決定しています。こういう価値があるからといって残るわけではないというのは当然ですけども、そういう事例もご紹介します。

それから、現在の市庁舎と比較的年代に近いものとして、皆さん、ご存じだと思いますが、寒河江の市庁舎、昭和42年です。これは免震層を入れて保存するという考え方でやっております。それから、横浜市の市役所の建物が関内の駅前にあるのですが、

というのは、障害によっては使いやすさ、使いにくさというのが変わってくるからです。どうにかそういったことを少しでも解消できないかということで、1階から8階まで、さまざまなタイプのトイレをつくって、当事者の人たちにそれを選んで使っていただくという事になっています。ちょっと実験的なところがあるんですけども、そういった形でメディアテークをつくる3、4年前からやりとりをしながら、さまざまなタイプのトイレをつくったということです。

また、1階にはないんですけども、2階にはこのチューブに沿って点字ブロックが敷設されています。点字ブロックのイメージというと、直角、直線ということなんですけれども、それも視覚障害の団体の方とメディアテークで協議して、このチューブに沿ってブロックを敷設して歩いてもオーケーなんじゃないかというようにやりとりをしました。まさしくこのメディアテーク自体も、そういった当事者参画の賜物なんじゃないかなと思います。もちろん、情報発信としてのバリアフリーの機能ということもあるんですけども、そういったところは大きいかと思います。

大きなビジョン、都市ビジョンというところ、これというのはまだないというところも現実ですが、ただ一つだけ言えることは、私たちのこれまでのビジョンや、アイデンティティーとして、「当事者としての声を上げてきた先達の歴史」をどう継承していくかとい

く、コーディネートされることで、新しい地域像が見えてくる気がしている。地域を巻き込むのに一番声をかけやすいのが「子どものため」です。なので、子ども会に関わる人の中から地域をコーディネートする人やプロフェッショナルと地域の中で繋げられないか。そういう仕組みを広い範囲で市の仕事として市民協働のパターンとして見つけられればと感じている。

坂口：

子どもをきっかけとして、その経験を生かして他分野の地域コミュニティに関わったケースはあるか。

武：

あそこの建物は横浜市役所を別な場所に移転して建物を保存するという判断をしました。残した建物は大学等の連携研究機関として活用して街の中に一つの風景として根付いておりますのでそれを活用する。ただ、市役所としては使いにくいので別な場所に移転するというやり方をとっています。それから、最初に菅原室長のほうからご紹介ありましたが川崎市の事例とか、京都市の事例、こんなものもご紹介します。

うまくいく事例、保存活用を目指そうという事例、それから解体して新しくしようという事例がありますけれども、その判断は非常に難しいところではあるのですが、少なくとも議論の土台として、そういう既存の建物がどういう位置づけがあるのかということやまず皆さんに理解をしていただきたいというのが1つでございます。

それから、先ほど伊藤さんからお話がありました川崎の市庁舎です。これは私もホームページを見たのですが非常に経緯が面白くて、ホームページからの情報なので正確に理解できているかどうかかわからないのですが、川崎市のホームページを辿っていきますと、「既存の庁舎をどうすべきか」ということに対しての市民へのアンケート結果が公表されています。それを見ると、配慮したほうがいいと、少なくとも古い建物を残したり、あるいはそれに配慮したデザインが好ましいと考えた市民は、実は2

Table A1

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、大きな都市ビジョンを官民連携で考える

Table B1

市民協働・新しい公共の在り方から「公共を担う仕組み」を考える

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライライの構成を考える

Table A1

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、
大きな都市ビジョンを官民連携で考える



Table B1

市民協働・新しい公共の在り方から
「公共を担う仕組み」を考える

事例はたくさんある。老人クラブを設立し独居老人の見守りを展開しようとしている。社会福祉協議会も町内会も手一杯。「～しながら」でいいから見守ってほしいという要望から、グランドゴルフのサークルで「取り組めるかも」のような話しをいただいた。

坂口：
皆さんが気付いた課題を共有する場や機会はどこであろうか。

武：
私の地域では町内会である。より大きな地域範囲、子育て支援の人たちが集まるサークルの発案で定期的に「子育て支援の課題」を共有するなどの取り組みが始まっているという話もある。

坂口：
それでは氏家さんどうであろうか。

氏家：
WEプロジェクトなどをやっており、「稼ぐ市民協働」などと言ったりしているので、この市民協働では浮きがちになることが多いのですが（笑）、新井先生が言われたように多様性という言葉は大好きでして、いろんな形の市民協働があって、100人いれば100人の市民協働があると思う。自分が関わって意味があるのは、ビジネスとして稼いで社会に還元する、民間の力で公共を担う市民協働ということを軸でやるのが一番いいと思うし、自分と

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や
建物配置・規模・スカライラインの構成を考える

割しかないのです。8割は現代的な庁舎でいいと回答しているのです。けれども、川崎市はそれを再建するという判断をしました。これは全く多数決の理屈からいくと、おかしな話です。それはなぜかということに関して内実は私、わかりませんので余り想像で物は申し上げないようにしますが、あるビジョンはどうしても必要だろうと。先ほど来、いろんな先生方からお話しがありました。ただ古いから建て替えるではなくて、やっぱりそこはビジョンがまずありきで「どうすべきか」という判断に繋がっていくということは、どうしても今後の計画をしていく上で必要なというふうに感じております。

それから、最後にもう1点だけ。足元から見た景観ということで久保田さん、安田さんからお話しがありました。私もそのとおりだと思っていて、例えば今、市民広場のあたりに立つと、今の市庁舎の建物があるすぐ道路を挟んで県庁の建物がありますね。あれを見ると、ふと思ったのですけれども、市庁舎の建物と県庁の低層棟ってスカイラインが揃うのです。実は違うのですけれども、人間の目にはほぼ揃って見えるのです。ということは、実際にそれを配慮して設計したのか、県庁が配慮して設計したのかどうか、私は、わからないのですけれども、見ると、何となく揃ってきれいに見えるのです。今、ここにボリュームがありますけれども、このボリュームを考えると、この模型も実は県庁のボリューム

ムが中途半端にしか入っていないのです。周辺との関わりを考えると、確かに現在の土地を中心に据えて考えるのはいいのですけれども、もうちょっと周りを広く見て景観に関しては議論していかないと、ここにポコッと建ったときに、新しい高層棟がポコッと出てきて道路を挟んで県庁の低層棟が沈んで高層棟がドンと立ち上がるというようなリズム感のないような景観が、これだと確認できないのです。そのあたりは、やっぱり今後、景観ということも議論的になってくると思いますので、もうちょっと広い範囲で、人間の目からというのは私は、まさにそのとおりだと思います。上から見下ろす必要は全くなくて、そこに立ったときに人間の視線から見える景観をどこまで人間が見えているかと、それをしっかり理解した上で検討していくというのは大事なことかなというふうに感じております。

内山：
ありがとうございます。お一人、1回、ご意見を言っていただけで前半の時間が来てしまったのですけれども、一巡して出てきた情報は、検討委員会に投げかける検討項目または視点としては非常に有益なものだと思います。この一巡で出てきた情報だけでも価値はあると私は思います。その中で、出てきたものとして既存本庁舎の価値はもちろんですけれども、道空間とか外部

うことです。これは市役所本庁舎に限らず、「仙台のまちづくりを私たち当事者がどう継承していくか」というところが、私たちにとってのビジョンかなと思っています。これは平成28年に施行された仙台市の差別解消条例ですけれども、その前文にこのような形で書いております。

障害も本当に多様化してきています。私は車椅子で、耳もちょっと不自由で、今日は皆様にゆっくり話してくださいとお願いしながら、私が一番早くしゃべっているんですけども。本当に身体障害だけではなく、知的障害、精神障害、発達障害と多様化してきていますから、なかなか私だけでアドバイスできないところがあるので、今後はさまざまな方々を巻き込みながら、総論的なまちづくりの中で、国連の障害者権利条約のところでも言われましたけれども、「私たち抜きで私たちのことは決めないで」ということをスローガンにして、仙台のこれからを見ていきたいなと思っています。私のビジョンとしては、いかに歴史を継承して、それを市役所本庁舎にどう生かしていくかということが大きいです。以上です。

渡辺：

ありがとうございます。伊藤さんからは、都市ビジョンの部分まで一気にお話をいただいていたいました。では、田邊さん、よろ

してもモチベーションが上がります。

これから人口が減る、税収が下がっていく中で広がってしまったインフラを公共が担いきれない、そこを市民とか民間のアイデアで行政と共に運営を考え、お金も生み出していく。

こういったことが公共を担うことにつながると思っている。

その中で思うのは、仙台市は他の都市に比べても非常に優秀で、しかもちゃんとお金もあるが、そのためあって、市民が行政頼みになりがちで、まだ市民と行政との関係のバランスがあまりよくないような気がしている。

いい例が福岡市だと思っている。ここは行政と民間のバランスが非常によくて、民間のほうもきちんとお金を支払って行動する。そういう歴史・文化がある。まだ仙台は何かすると市が何かをや

空間とか、周辺の建物との関係性とか、そういった視点が出ました。それについては、後半の検討委員会の資料のレビューの中で話ができるだろうと思っています。

そして、今の既存庁舎の価値については、これはこの場で判断をするものではなくて、こういった見方があるだろうということを出していくものだというふうに思っているのですけれども、その中で出てきた意見としては、やはりBCS賞とか、あと学会が見る価値というのは確かにあるだろうということがまずあります。それに対して周りを歩いている人の目から見ると、東西の繋がりを断っていたりとか、北側については完全に裏になっているとか、そういった視点も出されました。

それから、最大の問題としては、やはり専門的に学会とかBCS賞とか、そういったものが考える価値と市民が持っている愛情というのが完全に乖離しているというのが一つの問題で、それについてどう橋渡しをするのかといったところが一つの課題だろうと思っていますが、まずは既存のもの価値について、客観的にこういった情報があるということが、今、一巡して提示されたことがまず一つのステップかなと思っています。

前半、もうほとんど時間は過ぎているのですけれども、今の既存庁舎への愛情の問題について、とりわけ市民が持つ愛情といった観点から何かコメントがあれば、前半最後にいただいて終わりたい

しいですか。

田邊：

私は、コピーライターの田邊いづみと申します。広告の企画制作を行っています、どちらかという商品のコンセプトをつくったり、企業のコンセプトブックをつくったり、割合を考えると、プランニングの仕事のほうが多いです。

私は、「仙台をどういうコンセプトで語れるか」をいつも試みようと思っているのですが、これができないのです。杜の都、学都、いろいろありますが、じゃあよその人に「ここが魅力だよ」と言えるかという、ばらばらと幾つかの言葉を重ねて「仙台です」みたいになりがちです。ここが仙台の非常に何か欠落した部分で、林真理子がちょっとしたエッセイで、「仙台ぐらい魅力のないまちはない。私は何回通っても、あんまり行きたいまちではない」と書かれているのも、私はちょっとむっと来るのですが、その通りだと思います。

都市ビジョンがあるかないかで言えば、昔からこういうふうな基本構想、基本計画というものを中長期で文書化するなりしてきているわけですが、これは優等生の回答なので、総パナ的なので、そこから何か仙台の魅力や活力が生まれるかというとなかなか難しいと思います。基本計画に落とすと、それを具体化するとい

てくれる、という感覚がある。そこが修正されればいいバランスが生まれるのではと思う。いろんなまちづくりのプロジェクトに関わっている中で、仙台には優秀な20代30代の将来を担う方々がたくさんいる。その人たちはあまり行政に頼らないことを考えているが、まだ全体の機運としてそういう人たちが集まり、それが一般市民に認められるのはもう少し時間がかかると思う。あと3～5年後には非常に面白い仙台のまちづくり、市民協働が進むと思っている。評論家が街づくりはできない、プレイヤーでないと街づくりはできない。そのプレイヤーは今育ててきている面白い時代だと思う。でもそれが花咲くのが3～5年後なのかなと思っている。

いと思いますが、いかがでしょうか。どなたかございますか。

大沼：

「あなたは仙台市役所の今の庁舎に愛情ありますか」と、問われて、はっきり言って私は微妙にないです。本当は批判するなという話ですけれども、基本的に私は西大立目さんたちと一緒に街の中の大事なものを守るためのことをいろいろできないなりにやってきたつもりで、そのときに何度も足を運んで闘った記憶もあるし、そういうことも含めて私の場合は愛情というか、愛情がないわけじゃなくて、別な感情が交じっちゃっているぐらいに、許してください、個人的にはです。

それで、先ほど私が一番最初に申し上げたのは、市民像が多様であることがいい意味でも悪い意味でも仙台らしさの一つになるだろうと思っているということです。先ほどちょっと言いませんでしたけれども、例えばペDESTリアンデッキみたいなものというのは、何となくその平均のところのレイヤーをうまく被せているような感じで、もしかしたら仙台っぽいかもしれないんですけど、つまりペDESTリアンデッキだけがバツと続いているだけの街で、下に行くところとどんどんセンサーが研ぎ澄まされていくべきだなというような、断面方向の計画が大事ではないかと思っている

Table A1

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、大きな都市ビジョンを官民連携で考える

Table B1

市民協働・新しい公共の在り方から「公共を担う仕組み」を考える

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライライの構成を考える

Table A1

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、大きな都市ビジョンを官民連携で考える

うことを市職員の方は一生懸命やっていると。ただ残念なのは、具体的にそれを享受する人たちがそのことによってどういう動きをするかとか、年齢によっても違いがあり、その何年後にどうなるかとか、「人の動きの中で物事を具体化していく」という視点がちょっと足りないと思います。優等生回答という感じなので、どんどんそのことが進められることによって、逆に仙台が没個性の二流三流の無国籍な感じになってしまうのかなと思います。大変強烈な言い方で恐縮なのですが、私はそう思っています。私は、実は、「西公園を遊ぼうプロジェクト」「広瀬川景観協議会」の市民活動に参加し、いろいろとその中で考えさせていただいています。私はその活動の中でいつも、仙台のアイデンティティーってどこに求めたらいいのかと、みんながもっと考えるべきだと思っています。そのことを私なりに考えたのは、仙台の魅力のルーツは「城下町」ということです。仙台というのは、伊達政宗がつくったまちですが、残念ながら戦災の空襲によって、比較的そのときの歴史遺産になっていた屋敷などがみんな焼けてしまったのです。それで、何となくみんなの中に、その喪失感があるのです。そうすると、仙台市民の誇りのシンボルみたいなものって何だろうと言われたときに、確かに杜の都とか、青葉山だとか、あの本丸みたいに言うのですけれども、そこで「うん？ そうかな？」みたいな、「わからないわけではないんだけど」という気持ち

ちょっとあるのが残念だと思っています。

かといって、私は目に見えるものがなくなったからといって、そういう歴史的遺産だったり、伝統だったり、そういうものというのがそこで消えるわけではなくて、その遺跡なりなんなりに立てば、人間にはすごくイメージ力があるので、想像ができます。例えば、西公園のことをいえば、歴史とかを調べたときにわかったのは、先ほど安本さんが「何でこんなところに市民会館があるんだ」と言いましたが、あれは西公園が文明開化の地だったからなんです。白亜の、要するに洋館とか何かがたくさん建った中で仙台市公会堂は、たまたま民間の「(元の文字に戻す⇒)館」という西洋料理のお店が買って、改修して、それがスライドして右側のほうの土地に建ったという感じ。そういうふうになり立ちというものがあるわけです。それで、ずっとそうやって調べていくと、仙台の場合は、もうことごとく歴史遺産みたいなものがどんどんなくなっていく。壊して新しいものを建てようというような感じになっているのですが、私は、こういう大きな震災があって、少し今までの歩みを立ち止まって考えたときに、本当にこれから仙台がこのまま進んでいいかどうか、考えてほしい時期ではないかと思っています。

それで、都市ビジョンがないという意見がどうして生まれるのかというと、都市の景観なりそういうものが、具体的に仙台らしい

Table B1

市民協働・新しい公共の在り方から「公共を担う仕組み」を考える

坂口：

ありがとうございます。

今の氏家さんの話で表現が適切かどうか分からないが、街がもっている対話のインフラみたいなものは結構大事なのかなと思う。そのことが、結果的に公共施設が安いということにつながるかどうかは分からないが、大きく言えば市民と行政とが話ができるのか、今の話は一歩進んでいて役割分担というか、街はその双方で造っていくような、この場合は行政が持ち、この場合は民が持つというような形が、例えば見ええない線引きというか、共通の理解などそういうことがあるということでしょうか？

氏家：

というぐらいでいいでしょうか。

それでいくと、市役所の本庁舎のどこをどう捉えるべきかというのは、一度、むしろみんなできちっとそういう目で見たほうがいいのかもしれないです。何か見る機会があってもいいのではないですか。なるべく何も議論が起きないように気がついたら壊れているという、そういう話が今まではあったような気がするのですが、この際、ちゃんと見るということが一つあってもいいのかなという感じがします。

久保田：

1点だけ簡単に30秒だけです。

北海道庁の事例だけちょっとお調べいただければと思います。日建連のほうにも資料がまとまっていますが、あそこは居場所、移る先がなくてそのまま、移れないまま、改修しています。

針生：

今、市役所改修、室内の改修はどれぐらいやっていないのですか。

菅原：

室内の改修に関しては、東日本大震災の後にかなりやられてしまっているところがあるので、内部の壁の補修、ひびとかが大分入っ

そうですね、すべての公共サービスを民間が行うことは100%ありえない話で、例えば定禅寺通りも最終的には民間の力で、行政は歩道の活用などで通りの活用を図っていくなどあるが、ただ櫛の落ち葉の清掃費は民間で出せると思うが、大きくなりすぎたケヤキを植え替えなどは行政のほうでやってもらうなど、このような線引きはあらゆる局面であるのかなと思う。

坂口：

ありがとうございます。それでは真壁さんお願いします。

真壁：

先ほど話したが、今の私の仕事の目標は、一人一人の生活再建、てしまったのでその辺の改修はやられています。

針生：

それは壊れたところを直した改修ですね。そうじゃなくて、私が言っているのは、いわゆる改修ですよ。見違えるように中にやり直したことはないのです。

菅原：

それはやっていないです。

針生：

何十年とやっていないのですか。正式にはいいけど、いわゆる空間としての。

菅原：

おっしゃっているのは、使い方としてのリニューアルというか……。

針生：

壁とか全部です、天井とか床とか、仕上げとかやっていないのでしょうか。

ものになっているまちづくりの仕方をなかなかしていないからだという気がするのです。だから、例えばここの市庁舎の場合も、ピンポイントでばつと物を建てたとしても、市庁舎界隈とか、そのエリアとか、また都心部の全体からそのポジションがどうなっているとか、そういう具体的な青写真や、もうちょっと広げた中での青写真というものが無いのが困ると思うのです。

例えば、公園センターの設計レビューに参加しました。公園センターの設計レビューは新しい試みで、いい施策だったけれども、結果的には疑問が残りました。なぜかという、公園センターというか、青葉山公園の捉え方があまり仙台らしさにふれないところから始まってしまっている、最初は東南アジアにありがちなモールの建物みたいなものがほとんど建ちそうだったんです。それで、平面図もできていましたし、それをかなりいろいろ議論したのですが、私たちは、やっぱりあそここのエリアは仙台のルーツの場所なので、武家屋敷風の、何かそういう味のあるインスタ映えするような建物を建ててもらいたいという意見を述べました。ある程度折れてくれたところもあって、少し和風のものが増えそうです。要するにポジショニングなどが欠落したままに、ものを建てようとしていることがちょっと気になります。

あともうひとつは、公園センターからこっち側を見る、広瀬川を見るということは、向こう側からこっちの都心部を見る景観を考

えているんですけども、実は向こう側から都心部の方を見ると、もうマンションとか何かが脈絡なく建っている、きれいなじゃないのですよ。私たちは、広瀬川景観協議会なものですから、広瀬川の景観というものを守りたいのですけれども、最近どんどんマンションが建ってきていて、その歯止めになるものがないのです。

話が長くなってしまって恐縮なのですが、それで、私が、何を言いたいかというと、つまり仙台の全体、仙台市全部というのはちょっと難しいかもしれないのですが、せめて都心部は、やっぱり私たちの心豊かな仙台生活を支えてもらえる、便利な、快適なエリアになってほしい反面、仙台を訪れた方がやっぱり何か魅力を感じたりするようになってほしいのです。海外の方からも、全然仙台に魅力を感じないとよく言われるのです。それで、私がひとつおもしろいと思ったのは、海外の方ってよく歩くのですよね。前に、例えば防災の国際会議の時には、いろいろな国の方がいらして、仙台駅からずっと国際センターまで歩く方がすごく多いのです。先ほど、公共交通を軸にしてネットワークを便利にしたいと仰ってましたが、私は、この仙台の都心部は、歩いたり自転車で回ったりするサイズが本当に魅力だと思っているんです。

そうなってくると、私は、せめて、仙台駅を起点にしたときに、

これが一番の大きな目標であるが、なかなか難しいことが実際には多い。

新井先生から災害公営住宅の話があったが、そのことを切り口に話したいと思う。

仙台市にも復興公営住宅が3,200戸ぐらい整備された。ほぼ100%完成して入居率も95%ぐらいだと思うが、震災後の8年でだいぶ進んだかのように見えて、一方で今年の11月にこんなことがあった。

石巻市の事例である。河北新報にも載ったが、自死をした方二人の事例だが、一人は2016年に災害公営住宅に転居されて2年ほど暮らしていた。最終的に一人暮らしになったが、新しい住宅の環境の良いところで生活を立て直していると周りを見ていた。

ところが2018年の夏に、自分が前住んでいたプレハブ仮設住宅の集会所で亡くなっていったということがありました。

もう一人はプレハブ仮設を出て自宅を再建中で引越すばかりになっていて、周りも希望で一杯だろうと思っていたが、引越す前にプレハブ仮設で自死された。

このことを考えた時に、災害公営住宅は恒久的なものであるが、結局のところいい住まいを与えただけでは心のケアにはならなかった事例であると思われる。日ごろから一人暮らしで寂しいと言っていたようだ。支援員だけでは自死を防げなかった。

私たちにとってはショックな事例で、このことをどのように考えるかということ。

こういうことが起こりえることは阪神淡路大震災の時から言われて

菅原：

やっていない部分のほうが多いです。

針生：

それはもう何十年たっているのだからやるべきだと思います。だから、それも前提で親しめるかどうかということもあるので、私も行くとき暗く感じます、何となく。ですから、ペンキを塗り直すなどいろんなことをやれば、見違えるようになると思います。どのような前提で壊したほうがいいのか、もう使えないということなのか、その辺がよくわからないのです。それで暗くて何かというあたりで壊したほうがいいのかということなのか、よくわからないのです。

菅原：

暗くて汚いから壊すとか、そういう論理では多分ないと思います。

針生：

でも、愛するというのは、そういう話ではないのか。愛情というのは。例えば僕の知り合いの建築家で、リファイン建築をやっている青木なんかそういうのを得意としています。青木ほどやらなくてもいいと思うのだけど、そういうものを前提で残すのです。

汚いま残すのではない、と私は思います。だから先ほど渡辺さんが言ったように、費用対価まで含めて検討すべきではないでしょうか。

工学院大学じゃないけど、超高層でつくって、新宿の西新宿にボンとつくって郊外に出なかった大学もあるけれども、ああいう高層を1本、ボンと建つ市庁舎ってどこでも結構流行っているわけです。だから、流行りに乗らないほうがいいのではないかなと思います。どこも同じではないですか。大体超高層はよほどデザインを変えないと違って見えないです。何とも言えないですけども。

西大立目：

やはり「仙台市民は愛情薄い」とは思います。だから、先ほどの「愛がなかったら残せない」というのは、本当にそのとおりだと思うんです。いつも愛着も何も振り返ることなしにぐずぐずというんなものが壊されてきました。一番仙台にとって大きな損失だったのは宮城県庁だと思います。そういう意味ではこの市庁舎をどうするか—ほぼ30年、市民が直接行くことがなかったというのがある意味で大きいかもしれませんけども—もう使えない、汚いよね、暗いよね、もう要らないよねってぐずぐず知らないうちになくなっちゃった。ちょっと悪かったかなという気がするけど、そのときは報道されるけどはい、お終いですという終わり方じゃ

Table A1

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、大きな都市ビジョンを官民連携で考える

Table B1

市民協働・新しい公共の在り方から「公共を担う仕組み」を考える

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライライの構成を考える

Table A1

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、大きな都市ビジョンを官民連携で考える

青葉通をずっと歩いてきて青葉山のほうに抜けられる魅力的なエリアがあったり、また仙台駅からここの市庁舎のほうに歩くのをサポートするエリアがあったりとか、そういう性格づけをして、歴史的な遺産みたいなものにも、ある程度標識とかで掲示したりすると、ソフト面でいろいろな説明ができたりするのです。そういうエリアの性格づけをした青写真、みんながある程度わかるようなものをつくってもらいたいと思っています。四ツ谷用水も今は青息吐息になっていて、遺跡がなくなっていつちゃうので。そういう残すものは残す、アピールするものはアピールする整理をして、要するに都市景観というものを見直す時期に入ってきていると思います。

長くなってごめんなさい。実際ですね、「杜の都の環境をつくる条例」とか、「広瀬川の清流を守る条例」とかはあるんですが、景観に対してはザルになってしまっているところが多いので、それはきちんともっと見直すべきところに来ていると思います。

あとは都市ビジョンとか基本構想、基本計画というのは、実際それを具体化するプロセスの中に市民協働が入ることが重要だと思っています。市民協働のやりやすい仕組みづくりと、その人たちが集まれるように市庁舎が、市民協働を支えるような機能を持つてほしいと考えています。

いて、なかなか孤立死に対し手立てが打てていない状況がある。

Table B1

市民協働・新しい公共の在り方から「公共を担う仕組み」を考える

このことは今回の公共を担う仕組みからずれるかもしれないが、ではこの一人の方を救うには何が必要だったのかを考えた時に、田澤さんのほうからも地域資源という言葉が出たが、この一人を救うための地域資源の全体像はどうなっているのかを、私たちは日頃からあまり見ないで過ごしている。

地域資源といっても多様で、公的な部分いわゆるフォーマルな資源、これは制度やサービス、もう一つはインフォーマルな資源これは制度とかサービスでなくて、住民同士の支え合いとか、本日登壇している民間の方々のいろいろな活動・取り組み、そしてもう一つは田澤さんが話した住民同士が根差した伝統とか文化を大

ない終わり方をこの際、きちんとやったほうがいいかなという気はします。

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライライの構成を考える

安田：

愛情って何となくふわっとした言葉ですけど、先ほど、崎山先生おっしゃられたような歴史的な価値というのも一つの価値ですけど、愛情って多分価値だと思っていて、仙台市民にとっての価値だと思います。それは人によってそれぞれ違って、例えば働く方にとっては、針生さんおっしゃったように、きれいな空間でそこに働きやすければ愛情は生まれると思いますけど、市民にとっては、あの市役所は何してくるのだという、多分そういう価値だと思っていて、それがやっぱり30年行かなければなくなってしまっているという、現実的にはそういうことじゃないかなというふうには個人的にはちょっと思っています。

崎山：

私は仙台に学生のときにいて、その後、戻ってきてからまだ3年です。仙台市民である期間というのは非常に短いのですが、出身は仙台ではありません。ここに来る前に秋田に12年半ほどいて幾つか仕事して、秋田も同じように近代に建てられた庁舎の建て替えの問題があって幾つか見たり関係したりしてきたのですが、

渡辺：

ご自身が考えている都市ビジョンのお話までいただきました。ありがとうございます。

残り1時間です。こうなるだろうというふうに思いながら、やっております。

紅邑さんも、自己紹介を含め、ビジョンみたいのところまでお話があれば、もう10分、15分しゃべってもらった方が。

紅邑：

紅邑と申します。今は、「SDGsとうほく」の代表をしております。仙台市の市民活動サポートセンターに関わる「せんだい・みやぎNPOセンター」の、(今は渡辺さんが代表をやっていますけれども)ちょっと前までは代表をさせていただいていました。それこそ市民活動サポートセンターが誕生する、まさに仙台市と市民との協働というところの協働元年というようなところから関わらせていただいております。

今日は、好きにしゃべってもいいんだなと思っています。そもそも、ビジョンって何かよくわからなくて。この間のお話にも参加していましたけれども、「都市ビジョンが見えないからどうの」というところについて、私は正直あんまり共感はいたしませんでした。多分その都市ビジョンみたいなことは、今、田邊さんもおっしゃっ

事にしたような、ナチュラルな資源というのがもう一方であるということを研修等で話している。

フォーマル、インフォーマル、ナチュラルと地域資源も非常に多様であると思っている。

この多様な地域資源が対話をして、場づくりして、一人一人の命をどのように守っていくかを、いろんな地域資源がいかに協力できるかが非常に大事なことである。

なんでこれができないのかな？地域資源はあるのに。

公営住宅ができました、相談に乗ってもらえる支援員(LSA)も居るし、地域づくりのNPOの方々、集会場の活用などのナチュラルなものもあるのに、なぜ先ほどの方の命は救えなかったのか。これを考えていかなければならないと思っている。

1つは、県南のほうに湯沢市というのがありまして、そこに白井晟一さんの設計した庁舎があったのですが、それを湯沢市は解体し新しい庁舎を1カ所に集約しました。市町村合併によって各支所として残っていた白井建築は解体し、そこはただの駐車場にして、全部を集約して1カ所に建て直しました。個人的な見解として、どちらがいいかというと、当然、白井建築を遺すほうが良かった。新しくして良くなったのは秋田杉を使った看板を掛けたぐらいです。秋田は秋田杉を使った看板を掛けると、皆さんがそれで納得してしまうようなところがあります。もう一つは秋田市役所です。それも建て替えました。建て替える前の建物は、昭和30年代の久米設計さんが設計された建物で、私はすごく好きでした。コルビュジエのような格好いい庇が出ていた近代建築でしたが、それを壊して建て替えました。こういうことは各地でたくさん行われています。

そうやって古い建物が減っていくのですが、私は専門家ですので市民感情としてではなく、一つの時代をつくった建築のデザインが消えることで、消えて始めて空虚感というのが出てきます。あると邪魔だな、古いなと見えてしまう。そんな悪いところばかりに目がいきますが、先ほど室長のお話にもありましたが、無くなって初めて気がついてもう遅いというところがたくさんあって、各地でそういうことは実際起こっていますので、場合によっては

ていましたけれども、いろいろ話し合っている中から、醸し出されていくんじゃないかと思うので、そういった意味では、こういう場のディスカッションというものが、そのビジョンにつながっていくという理解でいいかなと思っていました。

そういった中で、仙台って何だろうなと考えたときに、まずひとつは、東北における仙台の役割というのすごく大事なかなと思っていて。特に大河ドラマなどを見ていると、東北というよりは、西の方のいわゆる明治政府ができましたとかその前の話だとかというところでは、なかなか私たちのこの地域に光が当たるのが少ないと思っています。これからの社会のことを考えると、もしかすると縄文のところまで遡ったりすると、モデル的なところは東北から始まるんじゃないかというふうにもちょっと思っていて。そういった意味では、未来の起点となるところが東北だとしたら、その中で仙台の役割はどうなのかというときに、シティホールというのはやっぱりそのシンボルみたいなものになっていくべきだと思っています。あとは、やはり東日本大震災という経験をした地域ということであると、それぞれさまざまな形で復興に向けて動いたり、またそれと重なるように地方創生ということで新しい地域活性化にいろいろ取り組まれているので、そういった中で仙台って何だろうかということもすごく役割として考えていくことが必要かなと思っています。

遠藤さんが先ほど言われたコーディネーターである。いろんな資源はあるがそれ同士の対話を生じさせる仕組みがない。

個々が協力し合って助け合うようなファシリテーターやコーディネーターの存在が少ない。そういったコーディネーターを増やすことが課題だと思っている。

〇〇コーディネーターと言われる方はたくさんいるが、実際そのコーディネーターの方もその専門の仕事だけで手一杯だったりする。そのコーディネーター同士を繋げることができる方、例えば遠藤さんのような方が必要である。

縦割りのコーディネーターは沢山いらないので、フォーマル、インフォーマル、ナチュラルの担い手の方々をつなぎ合わせる方、意識や活動を実践してくれる方を増やしていくしかないと思って

仙台市さんの方もそうやって建て替えた結果、本当にいい庁舎ができたのかどうかということのほか、場所のレビューをしたりとか、そういうことも僕はやっていいのではと思いました。

内山：

ありがとうございました。今の議論の中で、既存庁舎の価値についていろんな意見が出て、第1ステップとして社会に投げ掛ける内容が揃ったと思います。これが出発点となって社会の中で議論や検討が進んでいくはずだと思いますので、既存庁舎についてはこれでひとまず置きます。既存庁舎を残すにしてもいろいろな方法があるということは今までの議論の中でありました。全く同じように作り直すこともできるし、一部を残して新しいものと共存させることもできる。そういった可能性も含めて具体的な方法について、後半では検討委員会の資料をもとにレビューをいたします。

後半が始まる前に5分ほど休憩をとって45分から議論を再開したいと思いますので5分後にまたお集まりください。よろしくお願

<休憩>

私がずっと関わってきた市民参加とか市民協働というところからいうと、やっぱり仙台という七夕というイメージでしたけれども、七夕というのはただ見て歩くという感じで、あんまり来た方がどうこうということってなかったように思うんですね。商店街の方たちも、一生懸命にあの七夕飾りをつくられていたけれども、じゃあ本当にそれが売りに上がっていきのかというところは充分議論もされているように思います。一方で、先ほどのジャズフェスとか、とっておきの音楽祭とか、市民参加でまちづくりのお祭りというのがとても盛んなまちだというイメージもあります。そういったことを考えていくと、さっきどなたかもおっしゃっていたんですけど、やっぱり仙台というところについてのシティセールスの仕方がすごくもったいない感じで、そのいいところが埋もれてしまっている感じがちょっとしています。例えば、福岡とかに行くと、博多どんたくとかそういったお祭りの場所、ステージとかそういったものが展示されていたり、青森もねぶたのそういったものがちゃんと展示されていたりするんですけども、そういったものも仙台はなかったりします。何かもうちょっと仙台らしいいろいろな要素があるはずなだけけれども、そんなものがあそこに行けばあるなというようなことが、そこからまたビジョンが見えてくるというような役割として、シティホールがあるといいなと思います。

いる。

例えば先ほど武さんがお話ししたような民生委員の方々やナチュラルな資源であって、フォーマルやインフォーマルな資源であったりする。そういう方たちが横つなぎを意識してもらえるといいと思うし、養成研修などで増やすことは別に、私たちが垣根や枠組みを超えて協力し合うという意識を持つことを、進めていくことが大事だと思う。

坂口：

ありがとうございます。

インフォーマルな資源やナチュラルな資源というのは、そもそもどういうものがあるかを、可視化するのはなかなか難しいと思う

内山：

時間になりましたので後半を始めたいと思います。

後半については、仙台市の菅原さんから基本計画検討委員会において、どういった内容で議論されているかについて資料でご説明いただけます。それに基づいて皆様にご意見を出していただければと思います。

菅原：

皆さんのお手元に検討委員会の第1回と第2回の資料が配られているかと思いますが。第1回の資料については、あまり皆さんにご覧いただく必要がないかなと思いますので、第1回資料は資料8と資料9をご説明させていただければと思います。

資料8は、整備検討の際の重要なポイントということで、左側のほうにコンセプトを書いています。皆さんにこれまでもご意見をいただいているとおり、仙台らしさが見えないのではないかとされています。共通理念、真ん中、左下の絵をご覧ください、共通理念のところには市民中心の市役所である、機能を強化する、過去の伝統・経験を未来に繋ぐという共通理念はありますが、それぞれまちづくりや利便性、持続可能性、災害対応と書いてあるのが、どこの庁舎でも同じではないかというご意見があります。

Table A1

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、大きな都市ビジョンを官民連携で考える

Table B1

市民協働・新しい公共の在り方から「公共を担う仕組み」を考える

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライライの構成を考える

Table A1

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、大きな都市ビジョンを官民連携で考える

あとは、皆さん、大澤さんも話されていましたが、これまでとってきた仙台市の施策のプロセスというの、私はほかの都市に知っていただきたいことだと思うんです。私はボイ捨てごみのまちづくりの条例というのにちょっと関わらせてもらったことがあります。これはあまり知られていないんですけど、まさに市民参加でつくられた条例だと私は思っているんです。その条例の案をつくるのにも、いろいろな地域、地区ごと、区ごとにワークショップをやっ、そこでお話が出たものを取りまとめで、またその参加した方に戻して条例ができました。次にそのアクションプランということについても、市民の方たちにも「こういう案です」ということをお示して、ご意見をいただいて実現していくという、まさに条例を市民と一緒につくって実践していったという事例なんです。あんまりそういったことが知られていなかったり、何かそういう「結構イケてるんじゃない？このまち」というものがあまり外に見えない形になっていたり、もったいない感じがしています。そういった政策のよさとか、文化・歴史みたいなことについての仙台のよさというものが何かもっと上手につながっていくことができると、その先にそのシンボリックなシティホールというものが見えてくるんじゃないかなと思うので、別に伊達政宗にこだわる必要はないと思います。

小貫さんはよくご存じだと思うんですが、日本以外の都市に行く

と、やっぱりシティホールってそのまちのシンボルということで、観光だけではなくて、何かそこを見に行きたいなという思いがあるんですね。私もそんなに経験はないですけど、よその国に行ったときに市役所というところを見ると、「ああ、ここがこのまちのシティホールなんだ」と思うんですけど、私たちは何となく「役所は役場」みたいな感じのイメージが強いので、そこからどう脱するかというのが今回の話だと思っています。そういう意味では、「市民と行政職員の結節点となる部分が今度の新しい市役所である」というイメージで考えると、そのビジョン云々を語っていると、何かいつまでもそういったところの形が曖昧になるんじゃないかと思うので、ちょっとそこは偏ってもいいんじゃないかと思うところもあります。そういう意味では、ちょっと奇抜なデザインでもいいかもしれないです。伊藤さんがおっしゃっていたような、誰にとっても行ってみたいかなとか、あそこに足を運びたいかなというの。今どうしても仙台駅に偏りがちなだけども、そこから別に遠くまでといても大して遠くじゃないですよ、徒歩圏内なので。そういった意味では、市役所という新しいポイントに、もっとシンボリックな、役場ではない、シティホールというものができるということを私は期待したいなと思っています。以上です。

Table B1

市民協働・新しい公共の在り方から「公共を担う仕組み」を考える

が、それに関わろうとする人たちで、その地域に関わる人と、外から関わろうとする人では意識が変わるような気がする。その辺りはどうであろうか。

真壁：
例えばナチュラルな資源は向こう三軒両隣の関係であったり、お祭りのための集まりであったりがあると思う。
インフォーマルな資源は多様でNPO、町内会活動及びいろんな企業の活動・取り組み・社会貢献活動のようなものも含まれるかもしれない。
可視化がポイントかどうかは、全員が全体像を把握するのは難しいが、コーディネーター的な役割を担う方が、その全体像をどの

ように見るかが重要だと思っている。
つなぎ手の方やそのプロのような方が、公的な機関とのつながりも含めてその行動が大事だと思う。

坂口：
コーディネーターに求められる役割が、状況に応じて対応する力がより求められてきているとうことか。その局面に応じたコーディネーターがなかなか入らないとうまく機能しないという解釈でよいか。

真壁：
その通りである。

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライライの構成を考える

おっしゃるとおりとは思いますが、内容については今後さらに検討を続けていく必要があると思っています。

ポイントの右側の方ですが、新本庁舎の工事期間中に解体が困難な部分をピンク色で書かせていただきました。ここの部分がなぜ解体困難かということですが、皆さんもご存じかとは思いますが、仙台市内で新しいビルの建て替えや建設が進んでしまい、今、民間ビルのオフィスの空室率が非常に低く3%ぐらいという状態になっています。そのため、市役所の中に入っている職員がどこにも外に出られない、仮移転もすることができないという状況になっています。いろいろ言われていますが、コンクリートの中性化試験をすると老朽化が進んでいるという前提もご承知おきいただきたいと思っています。

続きまして資料9です。資料9は整備の検討パターン①の案ということで、基本構想で検討したパターン③の案3つと、久米設計さんからいただいたプロポーザル案の4つを示しています。あくまでもこれらと比較したというものであり、それぞれの1棟整備パターンから2棟整備パターンまでの4つの案、それぞれが少し模型を変えてしまいましたが、真ん中のところを見ていただくと、それぞれ白いボリュームスタディで置かせていただいたのでボリュームの関係がおわかりいただけるのではないかと思います。後で、皆さんで動かしていただいたりご意見をいただければと思います。

次に第2回の資料をご覧ください。第2回資料の資料②になります。今まで皆さんからご意見をいただいているところですが、集約するという話になったときに、今、この地図に示しているように、市の分庁舎、仮庁舎は全部で11カ所あります。その中でもこの赤で書いた市有庁舎というところは仙台市が持っている庁舎で、それでも手狭で入り切らないというのでオレンジ色の借用庁舎というところに入っています。借用庁舎というのは民間ビルを借りているので、打ち合わせをする際に、分散している庁舎からみんなが集まってきて打ち合わせをするというような状況になっています。実はこの借りている庁舎の面積がかなりあり、費用も相当かかっています。毎年2億5,000万円ぐらい家賃などを払っている状況です。そのままずっとこれでいくのかどうかという話も出てきます。

右側の方ですが、何を示しているかという市役所の職員数です。着席人数として今の市役所の各庁舎にどのくらいのボリュームの人数がいて、どのくらいの人働いているのかということを示しています。分散しているのでそれぞれ細切れになっていますが、それらをもし仮に全部集約するとすれば、右下の表に書いてある3,200人ぐらいだろうと。将来、人口も減ってきますし、皆さんからいろいろ言われている仕事のあり方もどんどん変わっていくし、区役所との関係もどんどん変わっていくということで、では具体

渡辺：

ありがとうございます。今の発言は、本当に言葉として私たちが思い込んでいる「役場」としての本庁舎だったら、役場だからそんなに華美じゃなくていいじゃないかと。でも、都市経営的な視点とかシティセールスの視点で見るときに、せっかくコストを掛けてつくって、まちの回遊性をつくるんだったら、こういうものがあってもいいんじゃないかみたいな幾つかの論点も出ていたかと思えます。

すみません、何か期せずして最後になってしまいましたが、馬渡先生からもお願いします。

馬渡：

本日は、青森県の八戸から参りました、馬渡と申します。よろしくをお願いします。

私一人だけ、仙台にふだん住んでいない人間が、なぜこんなところに座っているのかとずっと疑問に思いながら座っていたんですけども。実は、今朝、青森から来まして、青森はマイナス7度ぐらいだったんですけども、ここに来て暖かいなと思ってずっと座っていたんです。皆さんのお話はかなり熱いんですが、私は今寒いんですね。部屋が寒い。青森は建物の中が暖かいので、ちょっとこの後、話し終わったらコートを着させてもらいます。

坂口：

それでは中居さんお願いします。

中居：

協働の結果は、やはり公益、公の益がついてくるだろうと思う。それには相応の多様性があることも理解しながら、私のいる建築士事務所協会は建築の専門家集団であるから、その仕事は社会に建築物が出現することとなる。

それは私有地に私有建築物が立つ、ある意味勝手な行動であるが、それでも街並みを考えればそれは公共であるはず。ところが当協会の会員がいろいろボランティアをしているが、昨年大阪でブロッ

それで、こういった田舎からやってきた人間にとって、「仙台というのはどういうまちなのか」ということをちょっと考えてみたんです。私は、普段、高専で教員をやっているんですが、毎年卒業生が就職とか編入学とかで大学の方に、仙台の方にやって来ることがあります。また、来週期末テストがあるんですけども、その後、必ず担任をしているクラスの学生がやってきて、「学割のハンコを押してください」と、行く先が仙台で、遊びに来る場所です。という具合に、仙台というのは、東北、青森に住んでいる人たちにとってどういう場所なのかというと、やはり東北の首都、キャピタルだなと。ある意味、仙台がそういう側面を持つ、東北の首都としての役割を持つということもぜひ視野に入れてもらいたいなということです。

八戸ですが、最近、皆さんもご存じかもしれませんが、「ポータルミュージアムはっち」があり、新美術館もできますし、「八戸ブックセンター」という市が運営する本屋とか、「マチニワ」とかという不思議な角の立った建物などが、たくさん建っています。ああいうことができるのも、実はこのせんだいメディアテークができたことが非常に大事な役割を持っていて、「地方でも角のものがたることができるんだよ」ということをある意味教えてくれた事例だと思っています。ですので、これから仙台がやっていくさまざまな取り組み、これはできれば新しいことをしていただくと、そ

ク塀が倒れて騒ぎになった。宮城では倒壊するブロック塀はほとんど無いはずだと思っていたが、ある南の町から事務所協会にブロック塀の調査の依頼がきた。一つの小学校の通学路では100～200のブロック塀がまだに存在することが分かった。その中に危険なブロック塀もある。それは私有地の中でも他人に被害を与える可能性があるもので、それはやはり公共のものでもあると考えなければならない。

また阪神淡路大以降、戸建て住宅やマンションの耐震診断をしようとなったが、なかなか進まない。なぜか。

原因は、その個々が個人の問題と捉えているからである。もし自宅が原因で他の施設に被害が及ぶことは十分あり得るわけで、自分たち専門家集団としては、個々の施設は公共性を含んで



Table A1

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、大きな都市ビジョンを官民連携で考える

Table B1

市民協働・新しい公共の在り方から「公共を担う仕組み」を考える

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライライの構成を考える

Table A1

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、大きな都市ビジョンを官民連携で考える

れに追随する東北のさまざまな自治体の活動につながっていくと思っています。

そういう意味では、今回大きな都市ビジョンということがテーマになっていますけれども、そのときにどここのまちでも当てはまるようなお題目を並べるのではなくて、やはり仙台ならではの大きな都市ビジョンを立てて、それをただ目標として掲げるのではなくて、先ほどから安本さんやいろいろな方々が言っていますけれども、やはり行動計画、アクションプランに結びつくような都市ビジョンであるべきではないのかなと思っています。

具体的には、日本のいろいろな政策とか施策というのを、お題目のような形でただ立てるんじゃなくて、しっかりと行動に結びつけるという事が重要だと思います。例えば、「何年までにフードロス50%削減します」みたいなことが立てられたときに、「じゃあ来年は何しなきゃいけない」とか、「その次は何をしなきゃいけない」という具体的な行動計画が立てられて、それが例えば5年後に実現されたかどうかということが、新しいシティホールの広場みたいところで確認されたりとか、議論されたりとか発表されていくというような、そういう意味での市庁舎がこれから大きな都市ビジョンを立ててアクションプランをしっかりと責任を持って計画していく中で、じゃあそれが5年後にどうなったのかということを検証する、そういう役割を持つ場としてシティホールと

Table B1

市民協働・新しい公共の在り方から「公共を担う仕組み」を考える

いるとどうやって一般の方に理解してもらえるかが大切であると思っています。

先ほどあった情報提供の難しさは、仙台市の様々な制度はあるが、それが実際に市民と一緒に機能しているか疑問である。解決する答えは自分も今はわからないけれど、そのことを最大のテーマとするべきだと思う。市役所建替は、一つのきっかけに過ぎず、今後このような問題が起きた時に市民と一緒に議論や考えることのシステムをつくらなければならないと思う。それをなくしていい街と言えるでしょうか？3.11を経験した仙台市は世界一安全で美しい街でありたいと思っている。どちらか片方ではだめで、そのための協働作業とはどのようなものを、みんなで知恵を出しあって進むことが大事だと思っている。

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライライの構成を考える

的にどのくらいまで市役所の本庁舎の中に人が入るべきか、たいへん流動的などころはありますが、今、我々で考えているところは、オレンジの枠囲みしている2,600人から3,000人ぐらいが将来残るだろうというふうに考えています。

次が資料3です。新本庁舎の敷地内の土地利用についてですが、こちらの資料をご覧くださいと、左上のほうに写真がありまして、これはジャズフェスをやっているときの市役所の高層部から写真を撮った内容です。奥のほうを見ていただくと、市民広場にはかなりたくさんの方がいてテントもあって賑わっていますが、一方で市役所の噴水のあたりを見ると閑散としていて、この辺りに救急車とかが停まってバックヤード的な形だったり、出演者の駐車場になったりということで、一体的な使われ方をして賑わいを生んでいるかというところではないのかという現状があります。目指すところとしては3つあります。市民が日常利用できる広場、あとはイベントが開催できる場所、あとは防災広場としての機能、こういったところを目指していきたいと考えています。あくまでも下には例示ですが、紫波町のオガールとか、アオーレの長岡とか、あとは東京国際フォーラムとか、北海道庁前とか、そういったところをイメージして我々は検討していきたいと考えています。

それから、駐車場の話も出ましたが、現状から市民の方々がどん

いうものがあれば、多分私たちもその次に続いていくことができるのではないのかなと思っています。このくらいでとりあえずは終わりにしたいと思います。

渡辺：

ありがとうございます。紅邑さんからのお話がありましたけれども、東北の中での仙台の位置づけとか、仙台がすることによって東北にどう波及させていくとか、そういうようなお話だったかと思っています。

一回しをしたら残り40分ぐらいになりまして、まだビジョンそのものをお話しになっていない、ご自身の立場から見て、仙台ってこういうビジョンがあったほうがいいんじゃないかとか、もしくはこういうような計画があったほうがいいんじゃないかみたいなことがあれば、お話をいただきたいというふうに思っております。いいですか、はい。

手島：

皆さんに都市ビジョンをこれから言ってもらう前に一つ、僕が、前回のラウンドテーブルからこの話題を投げかけていただいて思っていることを。

いろいろ調べてみると、福岡の都市ビジョンには、キーワードと

坂口：

ありがとうございます。ブロック塀については宮城県沖地震以降やめようとしてはいたが、現在それが形骸化しているように思う。その経験がなかなか継承されないということと、そのことは公共性の高いことであるということが中々共有しにくいということであろうか？

中居：

その通りである。付け加えるとあの時は大丈夫だったから、今後も大丈夫だと思う意識の人が多く存在しており、そうではないことを意識としてみんなで共有することや専門家として行政と共に

どん車を使わなくなるというのはなかなか考えにくくて、地下鉄は利用するけど、やっぱり車で市役所に来るというのも大きく変わらないのではないかと考えています。駐車場の区画台数というのはここに書いている365台、このくらいは確保すべきではないかと考えています。そして、自転車で来る方もかなり多いので、自転車の台数は、今、区画としては840台ぐらいありますが、これよりもさらにもっと必要ではないかと思込んでいるところです。駐車場については、有料化を検討させていただくと、あとは地下駐車場を設けるということを考えています。

地上の駐車場がなぜ必要なのかというご意見もありますが、大きく分けて2つあります。仙台市立病院はあすと長町に移転しましたが、ここは地上の部分に駐車場があります。何を目的としているかという、将来の病院を建てる時の建替用地として考えているところがあります。

もう一つ大きいのが災害対応のための場所の確保ということです。東日本大震災のときには各応援の市町村から消防や自衛隊などの車が朝一番に市役所に集まって来ました。集まってきてそこからさらに分かれて展開していくことをしていたので、どうしても地下の駐車場じゃなく地上の広場、地上の駐車場というのが必要になってきます。

それから、先ほど安田さんのほうからご意見がありました、こ

言いますか、スローガンがあります。それが、「アジアのリーダー都市ふくおか」なんです。これがすごいなと思うのは、範囲も日本の国じゃなくてアジアまで広げて、方向性としても「アジア」って、成長する元気なイメージですよ。アジアのその先も見据えて、そして自分たちを中心にして、キャッチフレーズとしてすごく良くできていると思うんです。

それで、今まで幾つか話題に出た昔の仙台のキャッチフレーズはすごくいいのですが、何が足りないかって考えると多分それだと思えるんですよ。仙台のキャッチフレーズは今の状態を表しているだけで、範囲の拡張や遠い方向性を示す力が無いんだと思います。そして、みんなを巻き込んでいく力とか、ここから先に踏み込んでいく力とか…、多分そういうものがやっぱり必要なかなと思いました。

渡辺：

福岡って、そういうふうなところを、多くの方を巻き込んでいるというのは、市長そのものが自分の本でもちゃんと書いているぐらいですから、かなり戦略的にそういうことをされているんだなと思います。まさに「都市を経営している」という状態です。仙台は都市経営をどうしているんだろうなとふと思っていて、福岡の二番煎じを一生懸命やったら、それは負けるに決まっちゃ

P R活動が必要であると思っている。

坂口：

わかりました。それでは川島さんお願いします。

川嶋：

私の仕事は公共性があまりない仕事と思っていたが、去年の夏に西公園のイベントを仙台市都市街づくりの方から声をかけてもらい、一緒に協働して開催にこぎつけた。しかし、そこに至る手続きの困難さは今まで経験したことがないほど面倒だと思った。まず、仙台市から後援を取り付けないと、企画できないことがわかった。そのために何日も集まって大義名分的なことを話し合う。

この敷地内の緑化の必要性ということで、ただ単純に緑化率の目標、ここに20%と書いてありますが、それじゃだめだよなという指摘はうちの内部でも意見が上がっているところなので、どういうコンセプトで何を指してどんな緑が欲しいかというところは考えていく必要があると考えています。

続いて、資料6をご覧ください。規模の話については資料2の裏面のところに書いてありますが、現状の市役所の庁舎の使われ方というのが、大体この行政、議会、災害対策、市民利用の4つの機能に分類されていて、それぞれがどのくらいの面積を占めているのかという事がここに書かれています。これはあくまでも現状で、ここからさらにどのくらいの職員の数が入ってくるかとか、現在の庁舎の規模をちょっと増やすぐらいだろうかと考えていたときに、想定される延べ面積として、ここに書いてありますが、地下駐車場が機械式の場合と自走式の場合でまた変わってきますが、6万6,000平米から7万1,000平米ぐらい。仮に国土交通省で出している職員の数に応じて作られるべき庁舎の面積規模というのが7万2,000から7万5,000平米ぐらいという数字が出されています。これですと単純に庁舎作って市役所の公務員のオフィス作って終わりになってしまうので、そうではなくてというところがその下に書いてあります。まちづくりに資する庁舎を実現するために機能を追加していきたいというふうに考えています。その面積

ろうがって話なんですけれども。

まあ、それはいいや、すみません。じゃあ、安本さんのところの Table A1 マイクを木村さんにお渡しいただいてもよろしいですか。

木村：

ありがとうございます。そうですね、きょうの各個人、自分の視点から見て、各自の都市ビジョンを提案するというお題もありましたので、私の方で、自分から見ての都市ビジョンを考えてきました。

それで、ビジョン、ここでビジョンというのは、時間的な問題というのが必ず関わってくるものでして、シティホールができるのが、2028年でしたっけ、2026年でしたっけ。平成の終わった10年ぐらい後で、シティホールを使って活用されると考えると、恐らく、2030年から2040年の間のどこかですよ。2035年ぐらいを、僕のイメージだと、20年後ぐらいをイメージで設定しているんですが、そういう時期にどうありたいかということです。また、ビジョンが決定的に仕事をする瞬間というのは、恐らくこの数年後に開かれるであろう市役所のプロポーザルコンペのオリエンテーション(募集要項)の中に、ここで話をされたような考え方が入るかどうかということだと見えています。

我々は市民なので、建築ができるわけでもないですし、すてきな

仙台市から後援はもらったが資金は拠出されていません。後援とはどういう意味なのだろうと思った。

また、公園課からの許可手続きも面倒であったが、アドバイスのことはなく認可だけの機関だと感じた。また、保健所からも許可を取らなければならず、基準に囚われ過ぎだと感じた。認可するための規則や基準が、古くから変わらないのだろうか?と、疑問に思った。民間目線を取り入れ改善していくべきだと思うし、他からの苦情が出ないことに重点を置き過ぎていると思う。もう少し市民をバックアップしてくれる機関であってくれたらありがたいと思う。

坂口：

については大体3,000平米ぐらいを限度に考えており、その面積を積み上げたトータルのボリュームとしては6万6,000平米から7万8,000平米ぐらいでまずは検討していきたい。ただ、このものすごい1万2,000平米ぐらい幅がある中でどういうふうに検討していくかという、先ほど針生さんからお話しいただいた市役所の職員の働き方とか、区役所の効率の関係性とか、あとはこれからのAIとかRPAとか新しい技術の導入も含めて、どんどん面積が減っていこうと想定されますので、今後、精査をしていきたいと考えています。

それらを踏まえてケーススタディをしたのが資料の6番になります。こちらに5つの案を示していますが、左側の3つが1棟整備のパターン、そして右側の2つが2棟整備のパターンになっています。

1棟整備のパターンは、東側、西側、中央。そして2棟整備のパターンは、1つが高層で1つが低層、もう一つは中高層で同じぐらいの高さのものを2棟建てた場合ということで、それぞれの案はあくまでもボリュームベースの検討なのでこの形で決定というわけではありません。ボリュームを考える、そして配置を考えるというときにこんなことが考えられるのではないかと、あくまでも検討するための基本形を示しています。

それぞれのパターンについては、お手元の資料の7番からずっと

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、大きな都市ビジョンを官民連携で考える

Table B1

市民協働・新しい公共の在り方から「公共を担う仕組み」を考える

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカイライズの構成を考える

Table A1

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、大きな都市ビジョンを官民連携で考える

建築が建ったらうれしいですけども、それについてのアイデアも、僕らが考えても、大概本当にゴミみたいなものなんです。だけど、こういう活動をしたとか、こういう状態でやりたいとか、こういう仲間たちとこういうことをしたいとか、ふだんはこういう人たちとやっていなかったけれども、こういう場所があったらこういうことができそうだみたいな話はもっともってできる筈なんです。今日も全然存じ上げなかった方の貴重な意見をたくさん伺えましたし、こういうような話はガンガンすべきです。じゃあ、そういった「こういうことをやりたい」というイメージやビジョンが、どういうふうにして、建築設計をするに当たっての条件に組み込まれていくかを考えています。

それで、先ほど申し上げたとおり、ビジョンというのは一つで決まるものではないと考えていて、例えば防災であったりとか、福祉であったり、経済であったり、いろいろな問題があると思います。文化の方でいくと、「日替わりでヒーローが生まれるまち」というものを私としては提案したいと考えています。

何で「日替わりでヒーローが生まれるまち」なのかというと、私はジャズフェスに関わっているのですが、「ジャズフェスみたいなものをやりたい」という市町村の方や、いろいろな方々が各地域からいらっしゃいます。例えば、ジャズフェスでは、5,000人がまちなかで演奏するんですが、それをやったらジャズフェスみたい

なことが各地で起きるかという、起きません。なので、来てもらって見てもらうのはうれしいですけども、仕組みだけをまねしても無理ですよと言います。じゃあ、何が起きているかという、拍手が温かいんですよ。視線が温かいし、演奏を最後まで見ていく、こんな人たちはなかなか他の地域にはいないんです。市民の民度の高さですよ。「文化芸術に対するスタート地点の低さ」とあえて表現しますが、「初心者に対しても寛容であること」というマインドが非常に強くあるのではないかなと。あくまでジャズフェスをやっているときに感じることで、ほかの文化の人たちがどう感じるかはちょっと私にはわかりませんが、演奏そのものはそうなんですけれども、「人が楽しそうにしている様子を称賛する文化」というのがあっていいのではないかと。それでそこから「日替わりでヒーローが生まれる」というものをつくる土壌があるのではないかと考えています。

今回、これはシティホールということなので、市役所の中にどう機能があればいいのかということは多分これから話をしていくべきポイントだと思うんですけども、単に「広場をつくれればいい」というようなことは、是非やめたいと思っています。もしそう思うんだったら、まずは宮城県庁のあの広大なデッドスペースで何か楽しい出来事をつくってからやっていきたいなと思います。

Table B1

市民協働・新しい公共の在り方から「公共を担う仕組み」を考える



Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライライの構成を考える

書かせていただいております。まず1つ目、資料7の1棟整備の東側配置のパターンです。この場合ですと、左側のほうに配置計画がございますが、このピンク色で濃く書いてあるところが高層部分、そして、北側のほうに少しオレンジ色で書いてあるところが低層部の部分になっています。南側のほうに赤で囲んでいるところが屋外広場で、北側のほうは駐車場の配置となっております。1期工事、2期工事というふうに、ここの真ん中で線が引かれています。これは最低限解体をしなければいけない低層部や議会棟の部分のところまでは解体ができるというふうに考えて1期工事、2期工事と線を引いて、1期工事の部分でどのくらいのボリュームをつくる事が可能で、その後、本庁舎を完全に解体した場合に2期工事は、ここにこのくらいのボリュームでつくる事が可能ではないかといったアイデアを出しているというものになっています。これが同じように資料7、これですと市民広場との関係性で屋外広場が非常に小さくなってしまいますので、これは少し望ましくないのではないかとということで、次の資料8のような西側に寄せたパターンを示しています。この場合ですと、市民広場と屋外広場が南北方向にありますので屋外広場と市民広場、そして、間の表小路線をどのように、例えば土日に通行止めとする案ですとか、一時的に通行止めとする案ですとか、あるいは完全に道路をなくしてしまう案ですとか、いろいろなパターンは考えられま

すが、ここを一体的に使えるような空間で整備をしていきたいというふうに考えております。

資料9では、建物が真ん中に来まして、これについては何を重要視したかといいますと、一番町商店街からの軸となります真ん中のところに赤い線が引いてありますが、一番町商店街からの軸線を見ましたときに、中心に建物の中央がきて正面性を持たせるという形の案になっています。この場合ですと、南側に屋外広場をつくる事が可能で、屋外広場と市民広場、大体屋外広場が2,300平米ぐらい、市民広場が3,200平米ぐらいありますので、この道路部分も入れますと、大体6,000平米ぐらいの広い空間で、例えば今まで行っていました屋外のイベント等がさらに大きく開催できまして、また中身としても別の機能等が付加される事で新しい方向性が描けるのではないかと考えております。

続きまして、2棟整備です。2棟整備の場合ですと、市役所の職員がどこにも仮移転しなくても済むという単純に考えた案です。噴水があったところにA棟として地上19階の高層ビルを建てまして、その後、北側の庁舎を解体してからB棟をつくります。このB棟に誰が入るのかといいますと、例えば北庁舎や、国分町分庁舎や、周りの分庁舎の人たちになり、集約するというのがA棟、B棟の2つの考え方になっています。

最後に、こちらが2棟整備の中・高層配置です。これはもう高層

私たちがあの市役所本庁舎を使うのは、あそこは窓口業務がないので、私たちでいえば、プレスルームだけですね。ジャズフェスのプレスルームとして活用させていただいて、やはり後ろにポスターとかを貼って、メディアの方々がネットも使えれば電源も使えてそこから、常時いることができてみたいな場所があるのはありがたいですけれども。そういう細かい話は置いておいて、「日替わりでヒーローが生まれる」という文化を醸成するというのができればと思っています。ありがとうございました。

渡辺：

ありがとうございます。何か非常に参加がしやすいような雰囲気がある。

じゃあ、すみません、木村さんのマイクを大澤さんのほうに回してもらってよろしいですか。

大澤：

今、木村さんがおっしゃったように、そういった温かさが多分、私たちの被災地に音楽を送るという活動が「ばかなことをやっている」と言われなかった理由ではないかと思います。あのとき、もう文化芸術は自粛時代でしたから、そのときに初めて、なぜ仙台では悪口言われないうのかなというのを不思議に思っておりまし

イベントの実現までにご苦労されたようだが、それでもまたやってみようとは思っているか。

川嶋：

街全体が活性化してほしいとは思っているのですが、そのためであれば継続してやっていきたいとは思っている。また先ほど言い忘れたが、開催後に市から、今度はこの方が良いなどのアドバイスがあれば、ありがたいと思う。

坂口：

ありがとうございます。多様性を担保する等いくつかキーワードが出ていたので、そういったことに対してこういうやり方がある

ビルにするのは、やめましょうというアイデアで出ているものです。これですと、南側にA棟13階建て、そして、その北側にB棟、同じく13階建てをつくるという案で、低層部の真ん中の部分のところで建物を繋ぐという形になっています。この場合ですと、建物が完全に2棟あるのですが、北側のほうに建つ2棟目のほうが、南側にすぐ建物が建ってしまいますので、日陰になってしまうというところで、オフィス空間としては北向き、あるいは東向きか西向きのオフィスのレイアウトになるだろうということで検討しています。この場合のデメリットとしては、屋外広場がこちらに設定しておりますが、駐車場を北側につくる事ができないこととなりますので、南側にも駐車場が出てきてしまい、本来ここ全体を屋外広場として使いたところですが、今の駐車場台数を確保するというのを考えた時に、半分ぐらいが駐車場として失われてしまうというような形になっています。

皆さんのお手元の資料7から資料11の資料につきましては裏面がございます。裏面のほうをご覧くださいますと、実際にどの位置からどのくらいのボリューム感で建物が見えてくるかという事を示したものです。

内山：

今、ご説明がありました5つのパターンをもとに前半の議論を受

たが、多分そういうのがぐるぐる回って、とても豊かな文化的な何かがある、私たちの被災地に音楽を届けるという活動の土台ではな

かったかなと思う時があります。私たちが使っている「楽都」という言葉があります。これは、ホールをつくってほしいというのを「楽都仙台」に2,000席ホールがどうのこうのと言っているんですけども。例によって、最初は藤井市長が、コンクールの2回目だったかの報告書に「楽都」という言葉を使ったんですね。それは、当時のコンクールが余りにもユニークなもので、ちょっと日本のコンクールとは異質だったので、多分苦しさも含めての説明かと思っています。それで、私たちがそのころからずっと使っていて、今もこうやってチラシへ使ったりしていますし、ジャズフェスや「とっておきの音楽祭」の話もそういう中で時々紹介させていただいていますけれども、実態としては仙台市のユニークな、今言ったような音楽行政、仙台フィルに多額の支援をすとか、ジュニアオケを持っているとか、国際コンクールをやるとか、せんくらをやるとか、支倉オペラをつくるとかそういったものと、ジャズフェス、とっておき、ゴスペルのような話と、それからずっと昔に遡りますけれども、児童文化運動とか、それから戦前戦後の「合唱王国宮城」というような言葉があったのですが、そういったところまで遡るんです。

それで、先ほどの話にあったように、ジャズフェスが今度で29回

のではとか、欲を言えば市役所の建替えを考えることにつながる意見や、次の第3回のラウンドテーブルにつながる意見などでもいいので。また市民の方々がこういった議論の場に参加するハードルの設定などのご意見でもいいので。

遠藤：

皆さんのコメントを聞いて感じることを紹介させていただきたいと思う。

真壁さんが言われた一人一人の命をどうやって地域の中で尊重し合っていけるか、育んでいけるか、看取っていけるかなどは、公共や自治に関わることだと思う。

公共とか協働という言葉が暮らしの中で出てこないで、これか

けまして、例えば道空間ですとか、外部空間、人の目線からの視点等、そのようなところからどんどん意見を言っていたかのようにしたいです。あと30分しかありませんので、時間の中でお気づきの点をどんどん発言していただく方向で進めたいと思います。どなたかご意見はありませんでしょうか。

渡邊（宏）：

時間がないので手短かに申します。まず、これはご存じかもしれませんが、今、この模型の県庁の前にあります合同庁舎、これが四、五年前にできたと思いますが、多分これもこの位置に計画するときに景観計画をしたはずで、プロポーザルで設計者が決まったこともありまして、多分そのときに考えたこのエリアの景観についてのスタディがあると思うのですが、その辺を参考にされたらいかがでしょうかというお話です。

あともう一つは、少し話が逸れますが、この整備をする時に、多分工事期間中、五、六年かかるとおられます。完成後の姿も重要ですけど、完成に至る時間の中で周辺との関係をどう調整していくかという視点もぜひ入れてほしいと思います。

あと、計画の中身を見ますと、高層にするか、中層にするかという話はあるのですが、多分、10年後、20年後、30年後、今もそうですが、タワーマンションが沢山建設され、オフィスビルが建て替

Table A1

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、大きな都市ビジョンを官民連携で考える

Table B1

市民協働・新しい公共の在り方から「公共を担う仕組み」を考える

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライライの構成を考える

Table A1

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、大きな都市ビジョンを官民連携で考える

ですね。それから、とっておきが18回、せんくらが13回、コンクールは6回で。仙台フィルはもうすぐ創立50周年、継続して、しかも大震災でも休まなかった動きです。それで、平成11年に市民文化事業団が連続シンポジウムというのを開いたんです。タイトルが「文化芸術は成熟社会の再生力」です。成熟社会という言葉は、たしか基本構想なんかには入っていると思うんですけども、何とですね、まだご存命だった井上ひさし先生、それから今ツイッターで有名になった和合さん（福島の人）、越後妻有の北川フラムさん、それから平田オリザさん、豪華なメンバーをお呼びしてのシンポジウムでして、これはその中の一部を再録している紙です。それで、このタイトル「文化芸術は成熟社会の再生力」というのをちょっとだけ組み換えますと、「現代の成熟社会は、災害を受けたとき、そこからの再生に文化芸術を活用する」とも読めないわけではないと思います。そういった意味では、私どもも、多分将来的に社会包摂みたいなものになっていくんでしょけれども、そういったものもこの中にもあらわれているのかなと思っています。法隆寺の金堂の壁画が焼損して昭和25年に文化財保護法、それから阪神・淡路の後にNPO、そして現在はかなり多くの芸術家が東日本大震災で支援に入っていて、文化芸術による被災者支援元年みたいな形になっております。被災地は未来を先取りしているという側面がありますので、今後は、そういった流れ

になっていくのではないかと考えております。

それから、うちの方が行って全部何かをしてコンサートをしているわけではなくて、被災者のお世話をしている人、それが個人であつたり社会福祉協議会であつたりするわけですけれども、そういう人たちと、100人ぐらいの音楽家とネットワークを組んで、全体が大きなネットワークですので、言ってしまえば市民協働そのものみたいな部分があります。

それから、もう一つ確認しておきたいのは、芸術文化というのは、行政の専管事項ではないということです。担うのは一般の市民でありますので、そういった意味では、これからのまちづくりというのを考える上では、そういった方向もあるんじゃないかと思えます。

要は、あまり楽都と言うとまずいのかもしよせんので、先ほど言ったように文化によるまちのイメージということになりますと、大震災後という大きな流れの中で培ってきた、人と資源を使って被災者の心の復興という新たな社会的役割を果たすということを読むと、先ほどの健康都市と何か似たような文章ができてくるんですね。これも単なる例示ですが、そういった意味で、楽都にはこだわりませんが、これからの都市の何かを語るときに、ぜひその文化的なものというか、イメージというものの中に入れていただければと思います。以上です。

Table B1

市民協働・新しい公共の在り方から「公共を担う仕組み」を考える

らは皆さんの活動の中でタイミングを見て、表現してほしいと思った。

概念の言葉なので、みんなの共通にならないとピンとこない言葉となってしまう。概念が共通化するには、いろんな方の工夫と発言と発信が必要かなと思った。自分がやっていることを聞くことで公共が始まると言われる。例えば素敵な絵を持っていて、それを個人だけで楽しむのではなく、他の方々にも見てもらうことで公益になっていく。料理とか釣りとか自分が好きなことを、公表することで公共につながるということである。ということが田沢さんや川島さんのお話につながると思う。氏家さんのプロジェクトでプレイヤーがたくさん育っているなど、実はそこがムーブメントであり、中居さんが言われたようなことを紹介する時に、公

共や協働という言葉をつけ加えると言葉自体が広がるのかなあとと思うし、プレイヤーの方々も自分たちも公共になっているのだと、気づくことができる。

他の方に言われることで、自分がやっていることの言語化がさらに進むことができる。

あとは武さんのお話だが。私は公共と協働にとって子どもは非常に大事で、子どもが大人をつなぐということであろう。子どもが思っているのは大人たちが考えたことを子どもに押し付けやせようとする。

そうではなくて、子どもたちで考えたことを生かして大人とコラボする活動が大事だがまだ少ない。子供たちとの協働はまだまだ課題があると思っている。

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライラインの構成を考える

えられ、あるいは新たな商業施設ができていくことでスカライラインのあり方が多分変わってくると考えられます。そのときに、本庁舎がどのような役割を持つのかという、時間軸を持った考え方をぜひ取り入れていただきたいと思いました。

もう一つは、計画の中で要点になっています駐車場、車の動線の話がありますが、必要な車を必要な動線で計画をすることも当然必要と考えますが、多分何かが起こったときに、駐車場というものは別の機能が沢山あると考えます。必要台数がこの程度だからと単純に設定するのではなく、やはり都市機能や災害時の対応、もしかすると、何か大きな事件が起こったときに、都心にそのような場所があるべきだと思います。そのような発想も、これは当然、お金がかかるとは思いますが、そのような必要性についてリーダーシップを持って説明できるようでしたら、市民として、私でしたら応援を致します。そのような発想をしてほしいと思います。

あと、具体的な話としましては、表小路の繋ぎ方をどのようにするかという事です。今の本庁舎の位置と南側の市民広場を分断されるという課題がありそうですので、その関係性をいかに持たせるかというところが一つのポイントになると思っています。最後に、私は具体的な話をするよりは、一市民としての希望を申しますと、やはりこのエリアは楽しいことがあるときに人が集ま

れる場所にしてほしいと考えます。もう一つは、先程駐車場のことで少し言及しましたが、苦しいとき、困ったときにも人が集まれる場所にしていきたい。そのためにどうあるべきか、多分それも形態やデザインに繋がっていくと思いますので今後に生かしていただけたら幸いです。

内山：

ほかにご意見はございましたら、どうぞ。

安田：

何となく時間がなくなりそうですので、時間がなくなる前に、言いたいことだけ少し申し上げます。1つは、先ほど申し上げたとおり、少し渡辺さんのお話にもありましたが、いわゆる空地や道というようなことを基本に、ぜひ計画を行っていただきたいと思っています。今、菅原さんに見せていただいているそのパターンにも空地が検討されていますが、それは建物の配置から見た空地というイメージで、やはりその周辺との関係、それはもちろん、市民広場もそうですが、県庁だけでなく東二番町通りの雑然としたバス停でありますとか、そのようなところがどのように整理されるのかというところも非常に重要ではないかと思えます。

それから、将来地を確保するために平置き駐車場ではないとい

渡辺：

ありがとうございます。まさに、文化とか、文化から積み重ねてきた景色とかがあるから、わざわざこういった場所に住む。別に、経済的合理性でいったら東京とかに住んじやえよそのほうがよかったですのを、わざわざここに住むって、今まで何人かの方が語ってきたような文化とか歴史とかというものがあるからです。ただ、それを活かし切れていない私たちとか、それを簡単に「それじゃ食えないからだめじゃん」ってパンと切ってしまうようなこととか、表面的にはなっていないけれども、どうやら何か仙台って分断されているようなにおいがするなって思いました。今までのお話を聞いて、多分、文科系の人と経済系の人でさき分けられちゃったりとか、あとはさっきのバリアフリーという障害者の話なんか、何かそれを活かすとかそれをどうするみたいな掛け算じゃなくて、切って切って別な計画にしていって、みんなよくわからない、あっちではこう言っていて、こっちではこう言っているみたいなことがありそうなおいがありました。

ちょっとマイクが中途半端な場所なんですけど、洞口さんに回してもらってもいいですか。さっき、あんまり都市ビジョンの話そのものはされていませんものね。

洞口：

そうですね。先ほどは、結構小さい、中心部のどうあるべきかみたいな話だったんですが、都市ビジョンの話になると恐らく「総合計画」という話になってくると思うんです。行政的には総合計画というのがあるのですが、それを市民みんなが知っているか、読んでいるかという恐らく99%の人が読んでいなくて、読んでいるのは大体、市と発注関係ある業者さんとかその程度だろうみたいな話になって。それは、教科書的ではあるけれども、みんなにとってそれが心地いいものかと言われると案外そうでもないみたいな話が一番問題で。そうすると、先ほど言った、木村さんが話したような、どういうふうにして市民の活動にまで落とし込んでいくかというプロセスの方が重要になってくるという、そのプロセスの話が抜け落ちているのかなと。そこは行政としても痛いところだし、一方で、組んで一緒にやっていく民間事業者がなかなか不明確で、公平性の議論も入ってきてしまっていて、公民連携も含めて、なかなかうまくやれていないところがあるのが今の実情のかなと思います。

福岡の話が先ほど出ていましたが、やっぱり福岡は自分の地政学的なポジションにおいてどういうふうに進んでいくかということがかなり明確になって、それに対して民間主導で、西鉄が何

Table A1

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、大きな都市ビジョンを官民連携で考える

遠藤さんの話を受けて、真壁さんから何かあるか。

川島さんのお話で、手続きの件だが、いろんな面白いことをやっている自治体を見ると、制度を使いこなすことや改編やアレンジ及び読み替えなど、お金を使わないで制度を運用させることを工夫している自治体が多い。

協働推進のためには、プロである行政の方が知恵を絞って制度をいろんな活動のために使ってもらうことが必要である。お金を使うことだけではない。そういうこともいろいろと広がってほしいと思っている。

坂口：

けないというロジックは、私には理解出来かねます。その駐車場を鉄骨でつくっておきまして、将来、庁舎を建てるときにその駐車場を壊しても構わないと思いますし、平置きにしておいても80年後に庁舎を建てるときには、駐車場ではなくなってしまうわけですから、別な方法は幾らでもあるような気がします。

それと、今回80年を見越した建物だということはよく理解しているのですが、一方で、この資料を見てもどういった機能を入れなければならないかという中に、時代や現状から考慮すべき課題というようなカテゴリーがありまして、その中に6つぐらい今、話題になっているような話が出てくると思われれます。例えば人口減少への対応ですとか、男女共同参画、あるいは少子高齢化、人口流出への対応や定住化ですとか、そのようなこと、これはひょっとしたら30年後には全く内容が変わっている可能性が十分にあり、あるいは課題がさらに増えている可能性もあります。そのときに、このようなものを大きな建物の中に80年間キープするプログラムとして考えるよりは、例えば長くもたせる建物ですとか、いわば簡易的に20年もつ、30年もつような建物の組み合わせということも十分可能ではないかと考えます。そこが非常にフレキシブルに使う事ができれば、あるいはそれはもう極端に言いますと10年ごとに建て替えるというような住宅展示場みたいなものでもいいのかもしれない。そういうほうが困ったときに何かできる場所と

真壁：

公共を担う仕組みだが、対話の場の作り方だが、これをどのようにやっていけるのかと、自分がサポートセンターの仕事をする上で、そこが悩ましい。

私の仕事も遠藤さんと同じで、協働をコーディネートする仕事と言え。

行政のほうが、社会福祉協議会などに委託して、一人の被災者の生活再建を目指す時に、行政の例えば生活再建支援課さんが使う言葉と、社会福祉協議会さんが使う言葉や、今までやってきたことなどが違うし、考え方・経験も違うわけで。

Table B1

市民協働・新しい公共の在り方から「公共を担う仕組み」を考える

しては非常に有用なのかもしれないですし、そのような場所に空地を検討するという事は、十分あり得るのではないかと考えています。

それと最後に1つだけ申し上げたい事は、ソフトを考えないで計画するのは滑稽ではないかと針生さんが、先ほどもおっしゃられていましたけれど、まさしくそのとおりだと思いますが、役所の内部のことについては当然、菅原さんたちは考えられていると思います。それはまだ公にできない部分もある事だという話もよくわかるのですが、一方で、ここの中で全然話題になっていませんでしたが、市役所の内部で議会はこうあるべきだというふうにして市役所の担当者ができるかといえば、立場的になかなかできないと思います。ですから、我々市民が、議会が今後どうあるべきかという議論は、こういった場所できちんと考えて、それが建物の中に位置づけられる事が理想だと思います。議会のボリュームは大きいので、一般的には一緒に建物にしていこうというところから一般的に始まるわけですから、そういうものを我々がどう位置づけて、例えば最上階にする案や、1階にする案、あるいは地下にする案ですとか、そのような話をきちんと全体計画の中で早目に行うべきだと思います。

もう少しありますが、このくらいにしておきます。ありがとうございます。

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカイライズの構成を考える

Table A1

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、大きな都市ビジョンを官民連携で考える

をすとか、どここの経済界が何々をするというところの役割がかなり明確であろうと思います。仙台においてそれが何かというと、地政学的な東北の首都みたいなポジションの中でどういふに飯を食っていくか、その都市を経営していくかという観点で、(総合計画にも気持ちいい言葉は書いてあるけれども) 抜けていることが一番の問題なのかなと思います。

地政学的なポジション、都市経営的な感覚もないということ、さらにそれを実現していくプレーヤーというところを考えると、仙台市の一番の都市経営課題というのは、産業構造的に卸業と小売業という極めて利率の低い経済が占めていることだと思います。今後、もう卸業というのはなかなか立ち行かなくなって、さらに、皆さん多分楽天とかアマゾンを使っていると思いますが、そういうところでダイレクトに買える時代に、小売業がなかなか立ち行かないところになってゆくと思われま。まさに今後求められるものは、製造小売や新しいサービス業をどうつくっていくかみたいな、食っていくための産業政策みたいな話と、仙台にそういう本社がなかなかない、支店経済都市と言われてしまっているところが一番の大きい都市経営課題ではないかという話があります。福岡の話ネタにしてちょっと話してみたいんですが、そこら辺の食っていくための産業構造と都市経営の感覚が総合計画だったりそういうところに欠けているということが一番の問題

なので、そこら辺の問題は僕も市の職員なのでガンガン挙げていかなきゃいけないと思うんですが、市民レベルからでもそういう話がどんどん出てこない、なかなか(福岡になろうというわけじゃなくて)福岡のように都市を経営していくことがなかなか出来にくいのではないかなと思いました。だから、その部分を話していくと、もしかしたら、ちょっとした未来的な切り口になるのではないかなと思いました。

渡辺：

ありがとうございます。多分それは、次のA2テーブルのところの話にもなるかと思いますが。まさに経営的観点で見た場合とか、もしくは前半戦で安本さんの方からご提示があった、都市の回遊性を上げていく、都市全体を商業施設として見た場合に、滞留時間が長ければお金を落としてくれるわけじゃないですか。今はあんまり滞留しないから、「それは金も落ちまへんわ」という話なんだと思うんですけども、どうなんですか。

洞口：

そうですね、まさに回遊性を生み出すこと自体が、歩けばそのたびに人はお金を落とすでしょうし、健康になって健康政策で医療介護費も落ちるでしょうし、そういうことが多分大きくあるのか

Table B1

市民協働・新しい公共の在り方から「公共を担う仕組み」を考える

その間の意見が食い違ったまま、平行線でなかなか纏まらないことが多くあった。

コーディネーターの役割は、お互いの役割を見える化して、具体的にどの部分を協働していけるかの対策としてファシリテーションの必要がある。

対話の場や会議や打ち合わせの場の持ち方がすごく重要だと思ってきた。

ほとんどの方が、この対話の場が大事だという意識が薄い気がしている。

例えば復興会議などでいろんな人が集まるのですが、進行の仕方にもよるが、お互いに何をしているかにとどまってしまう。本当に会議で大事なものは目標を何にして、そのために何をすればいい

のか、共通の目標のためにどんな取り組みをそれぞれが行えるのかを話すべきなのと思う。

対話の場をどう持つのかを、共通のテーマとしてどのように解決していくかを、皆さんの意見をお聞きしたい。

坂口：

整理すると、先ほど田澤さんがお話した、まずお互いを認め合うことの部分と、合意形成や物事を決めるための進め方や目標を決めこるとの部分、両方あると思う。

難しいのは、これは合意形成の場、これはコンテキストの違いを認める場などと、最初から分かれていなくて、対話の場は流動的で常に変化する。コーディネーターの役割はそこだと思う。人々

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライライの構成を考える

針生：

コンクリートの劣化の話をしてはいますが、今は劣化を止めることもできますし、いろいろな事ができると考えられますが、その辺の検討は費用も含めてなされているのでしょうか。

それは前提として、私は残すという案を考えたのですが、きちんと書いてきていないのでそこに書いてよろしいでしょうか。

既存のところは、ここに立体駐車場を全部建てていってください。立体駐車場は、大体8メートル角ぐらいでできますので、ここに全部です。大体40台ぐらいずつ入りますので、入るところまででよろしいと思います。既存は、ほとんど残すのですが、今、渡辺さんが少し軸線の話がされたと思います。私は今、この辺、どこまで建てられるかわからないですが、駐車場を少し壊して、ここにこう建てれば良いと考えます。ここは3階分がありますので、続きで広場が設けられます。それから、こちらを繋ぎます。階数は15、6階建てでしょうか、大体これでまとまると思いますが、このように下に広場は残ります。これは3階上ですからこの辺から昇ります。この道路の上は、最近、道路の上に建物を建てるのが流行っていますので、この道路の上をまたぎます。これは市道ですからできると思います。これはこちらに対してのゲートにもなります。渡辺さんがお話された事は、これとこの軸が並んで

きますので、この視界は通ります。あとはそのまま、今のままやっていくというかたちです。

ただし、この駐車場の問題は、こちらを先につくらなくてはならないかもしれません。ここで、この間描いたものを貼っていただけないでしょうか。跨ぐので少し汚くてごめんなさい。少しこれは変です、ここの部分はもう少し離れます。ここの道路は潜れるようにして、ここは全部空くようにします。こちらに広場がこう来ます。15階なので2階から5、6階分のテラスは全部木を植えます。上は少しガラスではみ出すぐらいの、こんなふうにとまれば良いかなと思います。そうすると、余った広場は少し屋根がかかった広場になるかもしれません。

それで、避難の問題については、できましたら全館床暖房にしてほしいのです。八戸にある「はっち」という施設の床が冷暖房システムとなっていて、震災のときにすごく役に立ったと聞いています。あとは、できましたら大きな自家発電機を入れてほしいです。何かのときに、そのオフィスは全部使えますので。多分、3階の部分はずっとこちらに通っていくような形でプランを考えれば良いと思っております。これだと既存の建物の耐震改修と、このままですから今のままでスタッフの方は、ここのところは少し難しいですけどもうまくいくと思います。

ただ、こういうところに手をつけずして進める事から視点を

などと思います。

また、一番の問題は、歩いていても、お金を落としているのが東京資本のお店ということであって、百貨店事業は100億事業と言われていますが、地元で落ちるのは10%と言われてるんですよ。そうすると、10億ぐらいが地元で落ちるんですけども、じゃあ年商3億ぐらい稼ぐような仙台のオリジナルの民間事業者が、僕の友人にもいますが、まず彼らが稼ぐことによって、製造小売とかサービス業をやっているらば利率が恐らく8割ぐらいが地元で落ちてくるという話になると、その8割と考えると、3億の8割というと2億4,000万円ぐらいですか。2億4,000万とすると、10億となるとその人が3人いれば百貨店事業にそういう小売業が勝ってしまうみたいな議論があって、そこら辺の実際の数みたいなところに、数字ですよ、そういうところをちゃんと追って都市を運営していくとか、産業政策をしていかなきゃいけないんじゃないかなと都市整備局ながら思います。

田邊：

今、都市経営のことをおっしゃっていたのでちょっとだけ。何か仙台って、このぐらいの規模のまちなのに、他地域は必ず観光物産館ってあるのですが、仙台はひとつも建てようという意思もない。考えてみると、仙台って観光政策は確かにやっているだけ

を集めることも大事だが、ここは合意形成の局面であるとか、ここは意見の違いを認める場であるとかを示すことがすごく重要だと思う。復興の局面で、合意形成が必要な場所と、多様性を認めていい場所などあると思うが。コーディネーターがそのことを理解していないとうまく進まない部分があると思うが。

新井：

集会所の話をする、多様な使われ方を望んではいないが、住民の方々が管理しているので、外からどんな方でも使用できるようにはいかず、管理上も面倒なことがある。話だけでは解決できず、理念を共有するって難しい。立場によっても見え方も違うわけで。

変えて、全体で考えればいいと思います。もしこのビルを買い取る事ができて無くせるなら、もう少しこちらに来てもいいのですが、これでこの軸の空間は残りますし、出来ると思います。こちらからは少しゲートのようになりますし、このような緑を植えるのはどうでしょうか、杜の都として、少し直接的なので何とも言えませんが、例えばこのようなものがあると思います。

内山：

ありがとうございます。針生さんから前回もこの提案をいただいておりますが、ほとんど意見を聞くことはできませんでした。この提案も含めてどんどん意見を出していただければと思います。

久保田：

今ご説明いただいた中で足元の話をするときの件がありましたので少し話を戻します。そこから始めて事例的なところでいきますと、その話の前段に、十字の線がありますという事で、一番町の縦の線と横に今の建て替えの線が出ます、ここに十字があったとして真ん中に交差点ができるのですが、単純に言いますと、高層棟の位置を決めるときにフットプリントに拘る必要性は全くないと思います。それは既に技術提案書のほうの中でも同様のことが言われていますので、あえてここで説明しませんが、十字の線が

れども、目に見えてどういうことをやっているのかもなかなか。とにかく「一ぶる仙台」が走っているなぐらいで、こんなに日本全国みんなが観光でお金を落としてもらいたいと取り組みをしている割には、どうしてこんなに貧弱なのかなというのがちょっと気になっております。

それで、先程の話をつなぎ合わせると、青葉通からずっと歩いて、例えば西公園から向こう側、青葉山界隈を歴史エリアとして、回遊する楽しみ、エンターテインメント性を上げるようないろいろな仕掛けをつくったらどうかと思っています。今、青葉通を、西公園、青葉山公園のほうに歩いていくと、急に途中で物見櫓風ものがぼんとあって、そこを過ぎるとすぐに地下鉄の西公園駅、ものすごくモダンな駅舎があって、駅舎の隣のちょっと見えるところに、和風の交番があったり、何かばらばらな景観になっています。私が、ベルリンってしたたかだなと思うのは、ベルリンは再開発の地区と、歴史を残す地区とエリアを分けていて、再開発の方は有名建築家、レンゾ・ピアノとか、磯崎新などに依頼して、マンション、音楽堂から図書館などぼんぼんと格好いい建物が立ちあがっています。それで、こちらの歴史保存区域というのは、要するに今までの銃弾の痕があるビルなどをみんな残してうまく保存補修をしまして、それを文化施設とか公共施設に使ったりしているのです。もっと仙台も、よそから訪れる方々をを楽しませながらお

Table A1

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、大きな都市ビジョンを官民連携で考える

NPOも取り組んでいるが、実践したほうが早い。なかなか話だけをしても情報共有にもならない。あと、たくさん集まればいいわけではなく、少人数でもいい意見が出る場合もある。そこから具体的なアクションが始まることもある。そういうのもコーディネーターの資質だと思う。しかし、話し合いも大事だが、見せるほうがいい場合がある。そのプロセスが大事だと思う、いいプロセスになるように常に意識している。対話を重視していないわけではないが、それは前提ではないと思っている。やって見せた方がいい場合があると思っている。

坂口：

例えば、子どもたちと次どこにハイキング行こうかなどの具体的

Table B1

市民協働・新しい公共の在り方から「公共を担う仕組み」を考える

あったときに、例えばこれ左側の、いわゆるミラノのガレリアですけれど、こちらのほうは大体似たようなスケールなのです。次に来て、もう一つがニューヨークにハイラインという高架を緑道にした計画がありまして、その上に建物が塞ぐように建っているのですが、現地に行くと、ずっと抜けられるように設計できていますのでこのような感じで、基本的には低層のフットプリントに高層棟が縛られるということは今の案の前提になっていますが、それは少し違うと思います。それだけです、ここをこうしてこうするとこうなります。このような感じで技術提案書もされていますが、それで十分行けると思います。長くなりますので割愛させていただきます。

内山：

ありがとうございます。ほかにこの具体的な案についていかがでしょうか。

大沼：

今、久保田さんがおっしゃられたように、必要なボリュームとコストや様々なもので形成されてくる上のボリュームというものは、かなり自由度があると考えたときに、なおさらフットプリントでは何を残すかという話を少し皆さんで見えてくればいいのかと

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライズの構成を考える

Table A1

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、大きな都市ビジョンを官民連携で考える

金を落としてももらうことを考えるビジョンや仕掛けが市庁舎建設の中にあってもいいかなと思います。

だから、紅邑さんがおっしゃっていたように、シティホールがいきなり奇抜なものになっても、本当にメディアテークにぞろぞろ人が見に来たようになるのだったら、それもアリの手法方法かなと思います。

渡辺：

ありがとうございます。前半戦で都市ビジョンのことについて言及をされなかった方がまだ何人かいらっしゃると思うので、その方にマイクをお渡ししたいです。だから、小貫さんに回してもらってもよろしいですか。

小貫さんの立場って、何の立場かわからないですけども、小貫さん個人でも結構ですが、こういう都市ビジョンだったらいのにか、ここがやっぱり足りないんじゃないかなとかあればいただければと思います。

小貫：

うまくまとまっていないですけども、どこから話そうかな。皆さんのお話をいろいろ聞いていて、仙台の持っているアイデンティティーというのが別にあると。そこに今見えている課題とい

うものが乗っかっているというのが、現状だと思うんですね。

前回の意見では、今の総合計画は課題解決型でしかなく、課題解決型のビジョンって、やっぱりその先、夢がない、というようなお話があったと思うんです。やっぱり都市ビジョンって、そこが欲しいと思うんですよ。先ほど大澤さんからお話があったように、スパイクタイヤの問題だとかいろいろなものがあるって、それを解決しようというところから更にもう一歩進んでいますよね。課題を解決するだけじゃなくて、その先が見える話というものをやっぱり何かつくらなきゃいけないだろうかなと思います。

それで、その先って何だろうと。何かうまい言葉があるといいなと思うんですけども、そこは田邊さんあたりにうまいコピーをつくっていただくのがいいなと思います。例えば、ニュースとかは、先ほどの福岡の話にもありましたけれども、スマートシティで世界のトップテンになるといって、いろいろな取り組みをしているんですね。それは文化的にもそうだし、暮らしの改善とか、交通だとか、そういったトップテンのスマートシティに入るんだという目標のもとにいろいろなことをやっています。何か仙台にもそういう大きな目標というか、仙台だからできる何か素敵な目標みたいなものがつくるといいんじゃないかなと思います。

最近の、キャンパスをどう変えるかという話でいくと、「リビングラボラトリー」というキーワードが出てきているんですね。それ

Table B1

市民協働・新しい公共の在り方から「公共を担う仕組み」を考える

な話と、将来的にこの地域の子どもたちにとってどうやったらいいかななどの話と両方あると思うので、どのように使い分けたり、同じ人たちだけでは話が固定化していくので、今いる人たちと新しく来た人たちで迎え入れたりする時に何か考えていることはあるか？

武：

ちょっと質問が難しいが、少し質問からずれるかもしれないが、先ほどの対話の場の作り方というところに戻りたい。私も逆の立場の時があり今こうしていると反省の感もあるが、地域の人たちと市役所と一緒に何かをやる時に何かポヤッとした壁のようなものを感じる時がある。それは縦割り行政みたいな壁、それ

から時間の壁などである。

地域の人たちは市の人を、「箱の中の人たち」と言ったりしている。何かって言うと例えば児童館とか市民センターとかが企画する地域懇談会を開く案内が来ると、開催日時が仕事をしている時間帯であり、今はお母さんも仕事をしている方が多く、この時間帯に来られるのかなと疑問に思う。来られる方は退職した方とか、一部の人たちに限られてしまう。そもそも懇談しようとするスタンスが違うのではないかなと思ってしまう。

市のほうで地域にぐっと突っ込んで一緒にやっという気概が感じられない。市の方は一所懸命やっているとは思いますが、地域の感覚が身につけていないように思う。仕事は仕事と割り切り過ぎているのではないか、市の担当者も家に帰ればその地域の人

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカイライナーの構成を考える

思います。

先ほどから、皆さんのお話を聞きながら、あの辺を歩いたときのいろんな体感を思い出し、皆さんもそれを想像なさりながら聞いていたと思いますけれども、よくある、例えば木が1本、古いのがあってそれを残すみたいな話があると思うのですが、恐らくそういうどんな痕跡を残すかというこの議論を一旦必要な計画の中の一プロセスにはきちっと入れるべきだとまず思っています。

震災も経験した私たちは、様々な人たちが様々な心理状況でいろんな交流をするということについては多分進化している、少しだけ進化しているのかもしれませんが、福島の方はもっとそれはあるのかもしれませんが、その気配とか配慮のきいた、つまり建築部分とか形のある部分ではなくて、形のない部分の距離感を取ることが、もしかしたら大事なかもしれません。だから、何をどう包むかという話を見せるときに、古くて意固地なおじいちゃんがいるのですが、どうにもやっぱり大事だという話、その何か動かない何か、不動、お不動さんのような、そういう痕跡をきちっと見つけるべきだと思います。私は今、これだとか、端っこにある石だとか、そこはまだちょっと言えませんが、それをぜひやっていただきたいし、それが平面的に並んで星座をつくりますよという話だけではなくて、断面的に検討されるべきだし、それが多分恐らく先ほどの西大立目さんが言われたような段丘の街

の中で微妙な地形の差異が意味を持つ、それがランドスケープデザインの手がかりになるという話だと思います。できればその星座を組むときには、ですからこの庁舎だけではなくて区役所まで広げると大きくなるのかもしれませんが、でも、やはり現実に行政に当たられている職員の方々は、様々なネットワークの中で仕事をされていて、たまたま今は本庁舎にいて仕事をされていますが、それをぐるぐるぐるぐる星座をたくさんつくって、やっぱりここに結節点あるよねというのを見つけ出すという話はあるのではないかなと思いました。

そういうことですので、私は上のほうのボリュームに関しては直接これがいい、悪いという話には、まだその意見はありません。

渡邊（浩）：

今日はこれだけは言いたいと思ってきました。一つだけ指摘させていただきます。

それは、先ほどの、コンセプトイメージにあった、災害対応・危機管理という項目と、持続可能性だとか利便性というのは、建築の配慮で相当程度、担保できると思いますが、僕の分野からもう一言言わなきゃいけないのは、それをさらに機械設備で支えているわけで、機械設備について、今日の議論で資料もあるのですが、スカッと吹っ飛ばされてしまっていて、資料5に相当網羅的にい



Table A1

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、
大きな都市ビジョンを官民連携で考える

私たちのだからもっと地域を理解してほしいと、私は考えている。仕事と地域生活での行動では違うが、それを超えていける新しい市民協働が、どこかに出てきそうな気がするが、どうであろうか。

坂口：

例えば氏家さんは稼げる協働について、何か重点を置いているところがあればお話をしたい。

氏家：

私は、新井先生の意見に賛成で、ビジネスに近い人ほど対話だけで終わることを嫌う、WEプロジェクトでも学ぶだけの人を育てる気はなく、アクションを起こす人を育てたいと、思っていて、実

ろいろなことを書いてくださっていますが、ただ単にリストアップしたという状態でして、より重要なのは、この問題を考えるのは平常時と非常時をどう関連づけて設備設計計画していくかというところになるわけです。その根拠になるのは、BCPで、例えば市役所の庁舎を建て替える際に、市民が開かれた低層棟ということにした途端、恐らく非常時には市民がそこに殺到するわけ、相当な混乱が予想されます。そこまで織り込んで考えないといけない話になるわけです。

さらに言うと、非常時の中枢機能をこの庁舎が引き受けていくとすれば、それに応じた自立レベル、いわゆる容量のところまで話を、設備の容量のところまで話を起こしていかなければいけないわけですけれども、その話というのは、多分僕が先ほど指摘した駐車場の話にも直結なところで、そういう上物の話を検討する際の与条件の議論が少なくとも関連する資料からは全く見えてきていないのが残念です。非常時といっても、地震に限っては、仙台では30年、40年に、繰り返し襲われますから、この庁舎はもしかすると2回経験するわけです。今、僕が心配しているのは気象災害として、集中的な豪雨とか、町なかの暑熱化も残念ながら今の段階では考えられておりませんので、もう少し足元の何をこれからの数十年の間に考えなければいけないのか、というところをもう少し丁寧な議論をすべきではないのかなということを、今日は申し

際に動いてみて失敗したなら失敗として次につなげればよい。そして再起動する。

建物はそうはいかないが、パブリックアクションはいくら失敗しても大損害になることも少ない。そんなことで私は対話よりも行動といつも考えている。

新井：

越境して関わる。あえて自分の地域の事には関わらず、他の地域のことに関わるようにしている。今の若い人にも多いようだ。それはいろんな運営にも言えると思っていて、外からの意見を適度に取り入れることも大事。コーディネートでも言えることで、例えば今度空き家を使ってシェアハウスをつくったが、入居者募集

上げたくて参った次第です。

内山：

ありがとうございました。佐藤先生、このような観点からいかがでしょうか。

佐藤：

今のBCPのお話ですとか、針生さんからの前回のリスク分散のお話ですとか、だから分棟にすべきだというお話がありました。仙台市庁舎、どのくらい集約してあとまだ残る庁舎もありますので、それらを群として全体で、どういうふう、リスクマネジメントしながらBCPをきちんと担保していくのかな、というところは、やはり、技術的にも詰めていくべきだと思います。それから、もう1点、駐車場の関連ですと、第2回の委員会でも申し上げましたが、3.11のときは有りませんでした。宮城野原に県の広域防災拠点整備される予定ですので、そちらで賄える機能とか空間とかもあり、無駄に重複することはせずに、こちらの敷地には、軽減された面積を、むしろ、別の目的に計画すべきであるというお話もしました。

内山：

Table B1

市民協働・新しい公共の在り方から
「公共を担う仕組み」を考える

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や
建物配置・規模・スカライライの構成を考える

Table A1

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、大きな都市ビジョンを官民連携で考える

は何かというと、キャンパスをいろいろなものの実験の場にしてしまう。それで、東北大でも自動運転だったりとか、そういったものの実験をやったりとか、本当に実証実験的なことをいろいろやっているんです。仙台は、100万人ぐらいで、実験都市になるというのもいいかなと。本当にいろいろな企業の提案を受け入れて、まちの中でいろいろ試してしまう、そんなことがよりよい次の暮らしにつながっていくみたいな話で新しい仙台というのができていくといいかなと。

じゃあ、そのときに、そういうことを可能にする市役所というか、行政の組織というものはどういうものなのかということ、そこがきちんと議論されないまま箱の話だけに入ってしまうとやっぱり限界があると思うんですね。今の基本構想でも既にうたわれている「市民力」を使うだとか、「都市個性を生かす」だとか、そういったことを可能にする行政のあり方というものがあるべきなのか。さっきちらっと見せましたけれども、高層がいいのか、低層がいいのかということも、やっぱりそれはフロアの中で、どういう組織で、どういう連携が図れるのか、それは市役所の組織の中もそうですし、そこに来る市民と市役所の関係もそうですし、そういったものがどういうふうにありたいのか、あればそういった都市ビジョンに向かって仙台というものが進んでいけるのかということ、見えてくると思うんですね。だから、

そのあたりもきちんと議論していく必要があるだろうなと思います。

渡辺：

ありがとうございます。前回の議論の中で、今の建築の計画でも、対応しなくちゃいけないマイナスを全部クリアしようとする計画でしかないから、建ち上がってもおもしろくないね、みたいな話はあったんです。まあ、それはそうだねと。じゃあ、その先って何だっけというところで、この議論ということがありました。安本さんもさっきは、議論の整理までしていただきました。ご自身が考える仙台の都市ビジョンは？

安本：

今いろいろなお話を聞きながら、もう一つ一つがそのとおりだねと思うんですね。僕がさっき言いましたけれども、20年前、関西のほうから仙台に赴任になって、まず最初に着いた仙台のまち、1カ月、2カ月、3カ月過ぎました、まあ、適度な規模なので飽きる。3カ月たったら帰りたくなった。それで、「うーん、何でこんなところに来たんだろう」とずっと思っていたんですけども、今住んで20年たって、このまちって住まないとおもしろくない。住んでいるとすごくおもしろい。

Table B1

市民協働・新しい公共の在り方から「公共を担う仕組み」を考える

をしていて、仙台市民からは反応が薄い、東京からの反応が多く、仙台に移住し働きたい人もいます。しかもこのような街づくりの企画などにも関わりたいと言っている。

外から新鮮な人や意見などもある。それにはその街が魅力を発信しなければいけないと思うし、運営能力も高めないといけない。自治という言い方が嫌で古いと思う。その中の地域の人たちだけでなく、外から入れることは大事なことだと思う。コーディネートだったり運営だったりもその辺が大事だと思っている。

坂口：

田澤さんいかがか。

田澤：

氏家さん新井先生から対話だけでなく実践も重要だという話だが、私もそう思うが、なかなかその行動の仕方が解らない人が多いのではないと思う。実践を前にいろんな準備をして、浸透させてから地域に放つと、オリジナリティや効果が得られると思う。そういうことをふまえたコーディネーターが形成や地域づくりに重要ではないかと思う。

交流館の事例だが、場を俯瞰してみてくれるスタッフがいるとそれぞれ個別の対話を実現してくれる。

コーディネーターの役割も重要だが、場のコンシェルジュ的な人、例えばこの人とこの人をマッチングするといった効果が生まれるとかを、していけないといけないと思う。

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカイライターの構成を考える

残りの時間で、このテーブルでは、観客席の皆様からの、ご意見を伺えればと思っておりますがいかがでしょうか。この検討資料や、今、針生さんのご提案などについて何かご意見あると思いますのでいかがですか。ありがとうございます。会場から特にないようですので、残り5分ぐらいありますので言い足りないこととかございましたら、伺います。

崎山：

先ほど安田さんからお話がありました、80年、という今後の見通しに関してですが、私も全く同感で、今まで80年を見越して建物を建てて80年、そのとおりに使った建物は多分存在していません。だから、80年というのは、そもそも、根拠も何もなくて、恐らく誰も担保することができない空論になりかねますので、もう少し、短い期間でという視点もありました。やっぱりそういうことも含めて議論していただいて、それを市としてどうかみ砕いて解釈したのかということをもう一度オープンにするという、フィードバックをやっていたらとありがたいというのが1つです。

それから、コンセプトの中で共通理念の中に、例えば持続可能性という話があり、一方で環境配慮の中に杜の都に相応しいというのがありますが、例えば仙台の歴史・文化に配慮するとかという

文言が一切ありません、今は。例えばこういうところに、そういうところに対する配慮も踏まえてというような文言を入れていただいて、それを例えば、設計者選定の中で問い掛けていただいたときに、設計者ごとに、例えば建物を残すことにその可能性を見出すとか、あるいは軸線を強調することにその可能性を見出すとか、そういう何らかの部分で継承でき得るような枠組みを少し明文化していただく余地があると、少しまた議論が進歩するのではないかと感じました。以上です。

内山：

ほかにいかがでしょうか。会場のほうから今、手が挙がりましてのでお願いします。

会場から意見（青葉区住人・男性59歳）：

仙台市青葉区に住んでいる住民です。先ほどからいろんな技術的な専門的なお話、大変参考になりました。私は59歳で、ほとんど仙台市民として住んでいました。仙台市役所の内部空間の印象は、やはり何となく全体が暗い雰囲気というのがやっぱり否めないと思います。それを比較する上で宮城県庁舎は1階に県民ロビーというのがあって2階に大きな講堂があって結構開放的な明るさがあります。今度、もし建て替えるとすれば、仙台市庁舎、杜の

それで、さっきから市民活動、いろいろとありましたけれども、多分、人と人の距離が意外に近いので見えるんですよ。私、神戸の方に住んでいましたけれども、障害者の問題といっても、なかなか自分が障害者と接する機会って実はないんです。でも、仙台にいますと、今日も伊藤さんのお話を聞けるように、いろいろなお話が聞けるし、いろいろな立場の方のお話が聞ける。

それで、先ほどちょっと東北の首都という話が出たんですけども、私もそう思うんですが、ただ、大都市の首都であってはいけない、やっぱり東北ならではの首都が良いのではないかと思います。すごく適度な規模感というんですかね。百万都市というイメージが前に立ってしまっているんで、何か大阪とか横浜とかそういうところと同じようなイメージにならなきゃいいなと思っています。「いや、ここ田舎だよ」というところをもう少し強調して、言い方が悪いですが、他の大都市とは違う都市のあり方があるんじゃないかなと。これだけいろいろな立場の皆さんがこんな話をしていて、他の都市ではなかなか無いんじゃないかなと私は思うんですね。

そう考えたときに、この都市って何なのかといたら、いい意味で混沌としているところですよ。じゃあ、それをどういうふうにもビジョンとして置き換えるのかって非常に難しいんですけども、僕の中では、さっきからちょっと都心部の話ばかりしていますけども、

例えば今現在の市役所の中では市民ギャラリーホールがあるが、機能していないと思っている。ただ貸し出しだけで誰もいないので。ものだけが有り無言の状態だ。しかも月～金の9時から17時までとなっている。そこで何か対話をしたりができない。例えばそこに一人誰かいるだけで、違うのではないかなと思う。今回の計画も市民ホール的なものを用意しただけでは期待している機能は発揮できないと思う。場を設けるだけでは不足、それにふさわしいコーディネーターが必要であると思っている。

坂口：

ありがとうございました。

これだけは言いたい、とか何かあるか。

都の名前に相応しいような緑とか木の空間を感じるような雰囲気がある緑、樹木で覆うような、ああいうイメージというのも非常に素晴らしいと思いますし、いい参考例としては泉ヶ岳の少年自然の家、あそこは全面木造で、仙台市の木を、宮城県の木でしたか、全面的に使っているということで、木造だと構造的な強度とか火災の心配もされるかもしれませんが、今の技術ですと防火機能あるいは構造的な強度も確保できるはずですよ。木造の高層ビルについても、新しい建築資材、例えばCLTとかで10階建て以上のマンションなんかも建てる計画が仙台市にもありますので、ぜひ仙台市の新しい庁舎には都の名前に相応しく、市民がいつでも気軽に入って憩える場所、あるいは災害のときに県庁舎の県民ロビーにはかなり臨時に避難された方が集まりましたが、仙台市の庁舎にもやはり、そのような空間があって、そこが中に入っているだけで、森林浴の気分を味わえるような憩いの場であればいいかなと思ったりします。以上です。

針生：

さっき崎山さんが80年のお話をされましたが、ストックホルム市庁舎というのが、エストバリーが設計したんですけど30年かけて設計しています。今でも200年ぐらいもつと言われてます。

れども、「まち自体が自分の生活空間、まるでリビングのようなまち」が良いのではないかと思います。ジャズフェスもそうですけれども、家で音楽聞くんだったら、まちに出て行って音楽聞こうよとか、もう生活のエリアとしてまちを活用できるような、そういう都市になればいいのかなというのがすごくあります。まさにここなんて、居間でお父さんとかと議論しているような、わーって話し合ってる。だから、僕は理想的にはやっぱり、仙台の人って「極力家に居るな、籠もるな」と思うんですよ。いろいろなことができるフィールドがあるので、まちに出てくるとお話もできるし、音楽も聞けるし、そういうようなまちがいいかなと。

あと、都市経営の観点からいうと、私は東北はあまり外部経済に対して過敏になる必要はなくて、内部でどういふふうにも経済を回すかを考えるべきだと思います。だから、中央資本なんて弾いてはじめていったらいいんですよ、あんなの、出ていっちゃうところなんて。中でどうやって経済を回していくかをもっともっと考えるべきだし、そういう規模の都市なんじゃないかなと思います。ちょっと取りとめないですけども。

渡辺：

でも、まさに経営的視点では、キメの問題かもしれませんが、東北の中での循環を加速する都市で、付加価値をつけてお戻しを

Table A1

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、大きな都市ビジョンを官民連携で考える

中居：

協働という本などを読んでいますが、さっき遠藤さんが言った、例えば井戸を掘ってそれをみんなで使えば協働になる。逆に権力者がみんなにつくらせてその方だけが使ったらそれは協働でも公共物でもなくなる。

今回の市役所の計画でもそうだが、この企画の最初にこれを市役所と呼ばず、シティホールと呼ぼうとなったのだが、市役所という市の行政のための事務所、シティホールは市民と議会、行政と議会、行政と市民それぞれが交わる場であるべきである。そうであると行政の方も議会の方も市民ですから、その器はできれば24時間営業であってほしい。

Table B1

市民協働・新しい公共の在り方から「公共を担う仕組み」を考える

ですから、条件をある程度、きちっと揃えたら国際コンペにしてそれでコンペの期間も1年ぐらい取るとかして、それから設計期間は二、三年取るとか、そういうことをしていったら絶対長持ちする、1,000年でもつ市役所が出来ると私は思います。今すぐでは早過ぎると思います。以上です。

内山：

ありがとうございました。時間が来てしまいましたので、この辺になるかと思います。

後半の議論の中ではいろいろ意見が出まして、合同庁舎も含めてこの周辺を群として考えていくべきだろうというご意見がありました。

それから、時間の中で考えていく、周辺の景観が時間の中で変わっていくということとともに、市役所の中身も変わるのでそれに対応するような構造体のあり方というのもご提案がありました。

それから、空地と上部の構造は余り関係ない。下を通り抜けにしても上は自由にできると、そういうご意見もあった一方で、空地にもそれなりの意味はあって、そこに残っている痕跡とか、そういった意味づけをしていって、そういう意味づけを持った場所の星座みたいなものをつくり上げてその中で空地を検討していくべきだという視点も出されております。

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライライの構成を考える

Table A1

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、
大きな都市ビジョンを官民連携で考える

するとか、一定の外貨は稼ぐかもしれないけれども、ここが逆にハブになって東北の富を東京に貢ぐ入り口になっちゃっていると止めるみたいなことというのは、都市経営としてもいいし。あと、今お話を聞いてすごくおもしろいなと思ったのが、「なるだけ家に居ないようにする都市・仙台」というところですね。まあ、ちょっと言い方は換えた方がいいと思いますけれども。せっかくまちがあるからと。

じゃあ、ちょっとマイクを紅邑さんにも。

紅邑：

今のお話を聞いていて、混沌となればいいんだなと思いました。その混沌となる場がやっぱり欲しいと思うんですね。だから、本当にいろいろな立場の人が割と気軽に集える場所って重要だと思います。例えば、ここのメディアテークも、実はこの1階っていつもがらんとしていてすごくもったいないとずっと前から思っています。本当にここもそういう場所になればいいんじゃないかなと思うし、ほかにも仙台市のいろいろな施設では、例えば私が関わっていた仙台市の市民活動サポートセンターだとか、それからエルパーク、エルソーラ、そういったところも割と普通にいろいろな人たちが毎日そこに出かけてきて、さまざまなテーブルごとにいろいろな話をしている場所があるので、やっぱりすごい

いところだなんて、よそから来た人には言われます。

でも、さっきも言っていたように、みんなに知られているかというあんまり発信されていないなと思います。そういう意味ではシティホールの新しい形として、その混沌とできる場所というのでいうと、「まちづくりを混沌とできるシティホール」とかそういう感じで。あとさっき、どなたかピンクラボの話もされていましたが、そこで実験的なことがいろいろ試せるんだというような場所であっていいし。そこで試したことが施策になるということも十分あり得ると思うので、何かそういう実験場、もしくはそういった混沌とした人々の結節点みたいな、そういったことがひとつのビジョンにもなり、場となりということができると、またこれは、さっきキャピタルというような話もありましたが、何かそういった新しい、東北らしいキャピタルというか、そういうところにもつながっていくような気がするんです。

だから、それはその歴史・文化みたいなことも含めて、(さっきちょっと私も話しましたが)「東日本大震災を経験して」というようなことでの情報発信は、多分この辺の緯度にある世界の都市と比較しても、何かそういった特徴づけができるんじゃないかなとちょっと思いました。

渡辺：

われている。

それは公設民営で富山市がお金を出して作って、運営は民間のまちづくり会社が行っているというのもそのひとつの理由かな？と思う。年間250本もイベントを行うことはかなり大変で、たくさんの方のアクションを起こしたい人の参画が必要になる。もちろん先ほど田澤さんがお話ししたキュレーターは絶対必要で、みんなが自主的に勝手にイベントを行える仕組みづくりが大事。人と人がみんなで行動を起こす時には背中を押し、アドバイスする人が必要のかなと思う。

坂口：

そのほかはいかがか。

Table B1

市民協働・新しい公共の在り方から
「公共を担う仕組み」を考える

それから市民の税金で造るのだから、それを使う行政はある意味、家賃を払ってでも使うべきであるとも言える。その観点からもシティホールの管理は民間に任せて有効に常に使用できるようにしないと、先ほど田澤さんが話したような問題点が残ることになる。せっかく作る、これからのシティホールは、みんなの意見が反映できるようなものを目指して造ってほしいと思っている。

氏家：

今の意見に賛成で、市民に開いた施設という部分に大賛成で、他都市の施設の良い例としてよく挙げられる、富山のグランドプラザはその点において非常に優れていて、屋根付きの全天候型の広場や年間250本のイベントを実施しているというほどすごく使

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や
建物配置・規模・スカイライターの構成を考える

そして、周辺を一体的に考えていくといったところで針生さんのほうからはこちらの提案が出されておまして、表小路を繋げていくような建築という提案がありました。

そして、最後に木の空間がやっぱり仙台らしいだろうということで、そういった森林浴のできるような空間というご意見がありました。

大体かい摘むとこんな感じかと思いますが、よろしいでしょうか。どうもありがとうございました。

<各テーブル討議報告>

全体司会(櫻井)：

全てのテーブルで議論が終了いたしましたので、ここから簡単にまとめ、それぞれのテーブルでどういった議論がなされたのかを発表していただきたいと思います。

まず、Aテーブルからよろしいでしょうか。Aテーブルファシリテーターの渡辺様、議論のまとめを簡単をお願いします。

渡辺(A)：

皆様、お疲れさまでございました。こちらAは、仙台の大きな都市ビジョンを考えるという前半戦でした。都市ビジョンが無いの

ではないかというところから話は始まりました。実際は、いろんな都市ビジョンというものはもともとあって、ただ、それを私たちが生かし切れていなかったのではないかと、構想はあったけれども計画とか行動に落とし込んでいくところまで行ってなくて、中途半端な状態のまま、放置されているのではないのか、という議論が出ました。

その後、それでは、どういうところを今度、仙台の都市ビジョンとして改めて取り上げたらいいのかというディスカッションになったときに、もともとの仙台の都市ビジョン、語られてきた健康都市とか、健康都市を実現してきた市民力だとか、そして、最近、ジャズフェスのように市民の力でできてきたイベントというのがここまで根付いているということから考えると、市民力を生かしたまちというもの、もしくは多様性とか、多様性というきれいですけど、ここのテーブルでは混沌とした都市、住んでみないとわからない仙台の良さ、いろんな人が近くにいるお話ができて考えて行動ができてみたいということがあったので、そこら辺、大切にしたいかもねというところで、意外といっぱい話が出てまとまらないと思ったら、意外と、その地点に、まとまってきたというところまで、行きました。

Aテーブルは以上です。

ありがとうございます。じゃあ、小貫さん。

小貫：

今、紅邑さんからラボの話のいろいろ言っていましたけれども、やっぱり、課題解決というのももちろん大事な話です。課題解決も実験的にやって、その課題解決の方法の一つの仙台の産業にして売っていくというのもあると思うんです。それは多分いろいろな話であると思うんですよ。医療もそうだし、文化もそうだし、福祉もそうだし、交通の話もそうだし。先ほど産業構造の話がありましたけれども、今、流通だと小売だとか、そういったところに強みというか、そこにウエートが大きい仙台の産業構造の一つ何か変えていく、放射光とか大きな実験施設もできますし、そういった何か新しい産業につながっていくようなまちづくりというものがあってもいいのかなと思います。

渡辺：

ありがとうございます。ちょっと、伊藤さんに。

伊藤：

すみません、さっき一気にしゃべり過ぎてしまいました。今、安本さんの混沌というお話を伺って、私、先ほど「歴史の継承」と

言いましたけれども、その中にはいろいろな立場の方がいらしてといった話もしました。私たちは、とっておきの音楽祭を「みんなちがってみんないい」というスローガンで19年やっているんですよ。まさしく混沌というか、カオスなのかなということすごく感じていて、やっぱりひとつの目標があって、そこに向けて皆でやろうというような集約的な目標でもいいですけども、逆にそういった、「みんなちがってみんないい」とか混沌というのは、何かそういうようなあり方もひとついいんじゃないかなとすごく感じているんですよ。

それで、歴史をもっと遡ると、仙台ってそういうのがもっとあって、勾当台公園の名前の由来になっています花村勾当の屋敷、政宗が寵愛したと言われる花村勾当も盲目の狂歌師ということでも有名だったり、あとは皆さんご存じの仙台四郎だったり、そういった混沌とした人たちがずっと歴史をつくってきて、それを将来的にも活かして、先人たちからの歴史の受け継ぎというのがやっぱり私たちに課せられた一つの課題なのかなということもありました。高度成長期とか経済成長の後にはもう集約型でわーっとやればいいんですけども、もう少しそういった混沌、誰もがいろいろなことを楽しめたり、いろいろな考え方を持っていて当たり前なビジョンというの、ひとついいのかなということで思い浮かべました。以上です。

Table A1

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、大きな都市ビジョンを官民連携で考える

武：

子ども会をしている立場で、最近いじめとか、自殺、それから親が子供を虐待するなど、子どもの受難時代であるとニュースや新聞で言われていて、そう感じている。基本的に学校だけの問題ではなく、市役所だけで解決できる問題でもない。例えばいじめの問題だが、学校の中だけの人間構成だけしか作られず、逃げ出せない。昔自分の子ども時代は学校でいじめられても、うちに帰れば近所の仲間と楽しく遊べたし、逃げる場所もたくさんあった。いわゆるいろんな人間関係が地域の中であったわけである。それが今は学校というクラスの中での人間関係しか築けないので、閉じこもってしまう、あるいは、家庭の中だけの親子関係になって

しまう。そのことを行政の力だけで解決することはまず無理で、やっぱり地域の力が必要だろうと思うが、ただ地域の人たちが今何をしたらいいかは見えないでいる。地域の中でもそのことは何とかしなくてはと思っていて、いろんな事件があるが、それは学校の中ではなく地域の中で解決していかなければならないと思っている。これらを救うのは地域だけでもできないので、市民協働というなかで解決の道筋を見つけていけばいいなとつくづく思う。

新井：

庁舎の計画の話だが、今回の計画は今の建物の床面積が2倍の面積になるそうだが、人口も減っているし、働く人の人数も減って

Table B1

市民協働・新しい公共の在り方から「公共を担う仕組み」を考える

全体司会（櫻井）：

どうもありがとうございました。

続いて、Bテーブル、坂口先生、よろしいでしょうか。

坂口（B）：

Bテーブルのほうは、これからの市民協働と新しい公共の在り方を、公共を担う仕組みを考えるとところからスタートしました。まず、今日、ご登壇いただいた方々の様々な市民協働あるいは公民連携、あるいは市民と市民との関係のような協働の実践のプロジェクトを紹介していただきまして、具体的には、例えば地域資源を扱った被災地のいろんな過去の利益を復活するプロジェクトであったりとか、あるいは地下鉄東西線の公民連携プロジェクトであったりとか、あるいは実際に被災地の直接的な災害公営住宅とかの復興支援であるとか、様々な連携の実践が報告されました。

その上で、1つは、これらの協働を考えていく上でポイントとしては多様性をいかに担保するか、単なる固定化した関係だけじゃなくて、常に流動化したいろいろな関係をつくるためにはどうすればいいのかということに議論が進みました。

それらを考えていく中では、課題を共有する場が重要ではないかという意見が出ました。具体的には地域資源に何があるかとか、そういった関係を固定化しないためにはどうすればいいのかとい

うことの課題を共有する場のつくり方が1つでした。

もう1つは、その活動自体あるいは関係自体が持続するためにはどうすればいいかというご意見がありました。例えば一つの意見としては、協働のためのいろんな関係だとか、場の構築などのことが、結果的に持続することにつながるのではないかという話がありました。

それらを深めて最後のほうでは、そもそも対話の場のつくり方というものがどうあるべきなのかということが、最後の議論になりました。1つは、コーディネートの重要性ということが改めて認知されるということです。さらに、コーディネーターというのもの、いわゆる状況をうまくつくるだけじゃなくて、そもそも地域資源、どういったものがあるか、どういったシティホールがあるか、様々などういった課題があるかということちゃんと俯瞰的に捉える人が局面において、いろんなやり方があるのではないか、ということが言われました。

それから、そういうことをやっていく上で話も大事だけど、とりえず実践してみることが必要で、そういった話と実践と合意形成と、そういったことを進めていくことが今後の新しい公共の在り方とか公共を担う仕組みについては重要ではないかという話になりました。

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライライの構成を考える

Table A1

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、大きな都市ビジョンを官民連携で考える

渡辺：

じゃあ、馬渡さんに。

馬渡：

まとめの時間になってしまったのであれですけども。これからの仙台という都市の経営を考えていったときに、すごくいいキーワードが出てきたと思います。「市民力を徹底的に活かした実験的な取り組みを行っていく」ということがひとつあるのかなと思います。

ちょっと来る前に調べたんですけども、仙台の年間の予算が市民の全体の消費に占める割合を見ていったときに、計算間違ったらごめんささい、大体10分の1ぐらいなんです、年間予算って。その10倍ぐらいが市民が使っているお金となっているので、その10分の1のお金を使ったときに市民の消費に最もインパクトのある事業をやっていくということに、もっと税金を使ってもいいのかなと思っています。

そのときに、都市ビジョンというのはあくまでもある程度ざっくりしたものでもいいので、市民からそのアイデアをどんどん募って、それを具体的に市民にやってもらって、その結果、都市がどう変わっていったのかということを実験的にやっていく取り組み

を市の予算のうちの何分の一でもいいので使ってもらって。仙台が、22世紀に向けて変わったぞとか、何か本気でやり始めているなどというふうなことを青森の人間にも見せてほしいなと思っています。

渡辺：

ありがとうございます。まとめるつもりが全くなかったのに、何かまとまろうとしているのが不思議な感じでございます。ただ、幾つかの視点は共有されたかと思えます。やっぱり、現状の計画めいたものが課題対応型の計画だったので面白くなさそうじゃないかと。もっと先のものというときに、当初このテーブルをつくる時にはその旗みたいなのを立てたらいいのかなと思ったら、旗かもしれないけれども、混沌としているとか、市民力とか、むしろ仙台の今までの強みであった「合意形成と行動のプロセス」というものがこの都市の力なのであって、それはアジアの何かユニークな都市になりましょとかとはちょっと違うと。でも、それってなかなかキーワードになりにくくて、「混沌とした都市」と言ったらマッドシティかという話になっちゃう、何かもう世紀末だなどという感じがして、多分そっちじゃないですね、きっと。でも、市民がみんな目標を設定することと、それに対してプロセス、皆さんが関わって行って行動が起きていくこと、それがこ

Table B1

市民協働・新しい公共の在り方から「公共を担う仕組み」を考える

いくわけだから、もっと小さくすればいいのではと思っている。オフィスもこれから空いてくるのでそのまま借りていくのもあっていいと思うので疑問に思っていた。今もあまり使われていない市民スペースも新たにしたらうまく使われるかも疑問である。市民感覚からすると、かなり計画がずれていると感じた。

市民と協働するという上から目線ではなく、また民間にやらせようとかでもなく、行政が市民・民間に協働してもらい意識が大事だと思う。

坂口：

新井先生の意見は、現在ほかの施設にいる約半分の市役所職員が集まったの新庁舎の大きさであることは、把握した上でもう少し

小さくできるのではとの意見だと思う。

一つ加えると実践した記録みたいなものを残していかないと、こういうことをやったことを次の人に関わっていけないので、そういった部分が加わっていくと、今日話題に出たコーディネーターの役割と、対話の場の作り方と、そこにおける実践のやり方の記録と、それらが共有していければ仙台の対話のインフラみたいなものが少し変わっていくのかなと思う。今日はどうもありがとうございました。

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライライの構成を考える

全体司会（櫻井）：

どうもありがとうございました。

それでは、最後にCテーブル、内山さん、お願いします。

内山（C）：

Cテーブルでは、前半に都市景観として引き継いでいくべきものはどういったものがあるかということで議論しました。まず、中心的話題としては、前回提案があった既存の庁舎の価値をどう考えるかという議論をしました。

その中で今の既存の庁舎については、専門的な観点からはBCS賞を受賞していることとか、あと日本建築学会の総覧に保存すべき価値があるものとして載っているとか、そういった専門的視点から評価されているという情報がありました。

それから、その周りで歩いている人の観点からは、低層の水平に広がる空間とか、あと広場と一体となった感じとか、評価するところもあるけれども、北側の部分が裏になっているとか、東西の通り抜けができないとか、そういった欠点も指摘がありました。

それから、一番の問題としては、他都市の事例なども引き合いに出されたのですが、やはり専門的な評価と市民一般の人がもつ愛着が大分乖離している、それが一つの大きな問題じゃないかというのがありました。

ただ、今回いろいろな視点で現庁舎の価値について情報が挙げられたのでこれを第1ステップとして世の中に問うて行って、その中で市民がどう考えるかというのがこれからの議論になろうかと思えます。

それから、都市空間については、やはり通り抜けとか、道の文化というのが仙台にはあり、そういった地上を歩く人の視点からのボリューム検討が必要だろうということが出されております。

後半としては、現在、基本設計検討委員会の中で出されている配置案、5つについて具体的に、前半で議論した視点から意見を出していただきました。その中で幾つか出たテーマとしては、周辺の建物、県庁や合同庁舎も含めて周辺を群の建築として捉えて、その中で新庁舎がどうあるべきかという検討が必要だろうという点がありました。

それから、時間軸の中で考えていくという視点もありました。それは周辺の街並みが変わっていくこととか、それから市役所自体の機能も変わっていくことに対応できるように建物の構造を長寿命の部分と短寿命の部分に分けるとか、そういった時間も含めた検討が必要じゃないかというご意見がありました。

それから、フットプリントと上部のボリュームについては、必ずしも一体的に考える必要はないと。つまり高層棟の足元を通り抜けられるようにしたり、広場にしたりすることでその2つを両立

の都市の魅力とかをつかっていったんだけど、この10年、20年ぐらい、あんまり目標設定を一緒にできなくなっちゃったりとか、行動がちぐはぐになっていったりとか、もしくは比較的規模が大きくなったのでね、50万都市が100万都市になったので、何かそういう一体的なものもなくなっちゃって、あの大町西公園駅に代表されるような、「私は何を見たらいいんだ、これ」みたいなちぐはぐなものが増えてしまうみたいなことも起きちゃっているのかもな、なんていうのも今日お話を聞いていて思いました。

まとめてないですよ。まだ2部がありますからね。

でも、今日改めてこういった場に、ほとんど何の下打ち合わせもなく、そしてメール上では炎上だけしそうな感じだったのが、ある意味ではそれも含めてここのディスカッションができたということが、コーディネーターの片割れとしては良かったなというところでした。

無理にあと2分埋めようとせず、一旦ここで終わりたいと思います。ありがとうございました。

させることもできるというご意見もありました。

といっても、空地になる部分については、やはり意味があって、それは例えば空地の中にどういった歴史の痕跡があるかという視点から周辺も含めて重要な場所をピックアップして行って、そういった重要な場所が作り出す星座に対応して空地を配置していくべきではないかというご意見がありました。

それから、BCPについては、実際にここに人がどのくらい集まってくるか、そういった容量を含めて設備とか、空間量とか、そういったものを検討していくべきだというご意見がありました。

これに関連して県が検討している宮城野原の防災拠点との機能連携も考えたほうがいい、機能分担といいますか、それを考える必要もあるだろうというご意見がありました。

会場からは、木の空間というご意見がありまして、仙台らしさを感じられる空間を木を使ってつくってほしいというコメントがありました。

周辺の土地利用を一体的に考えることについて、針生さんのほうから前回に引き続き提案があり南側の市民広場の部分も敷地として一体的につくっていくという提案がありました。表小路を跨いで建築をつくり、その下を通り抜けられるようにするといった案です。

最後に設計者の選定の問題がありまして、それはこれから条件を

整理していくことになると思いますが、やはり国際的なコンペを行って時間をかけて設計をする。そうしたことによって人々に愛され長持ちする建築を実現させていくことが必要じゃないかと、そういったご意見がありました。

全体司会（櫻井）：

どうもありがとうございました。

ここで登壇者の皆様にお知らせをいたします。皆様方の発言時の顔写真を撮らせていただいております、こちら広報が作成いたします報告書のほうに掲載する可能性がございますので、あらかじめご了承くださいと思います。

それでは、ご登壇いただきました皆様にもう一度大きな拍手をお願いいたします。（拍手）

以上をもちまして、ラウンドテーブルの第1段、前半のほうを終了させていただきます。

文責：宮城県建築士会小林淑子

Table A1

それぞれが思う都市ビジョンを共有し、大きな都市ビジョンを官民連携で考える

Table B1

市民協働・新しい公共の在り方から「公共を担う仕組み」を考える

Table C1

既存本庁舎の価値を議論し、建替え手順や建物配置・規模・スカライライの構成を考える

第2回仙台ラウンドテーブル
市民と専門家による仙台市役所本庁舎建替シンポジウム

「みんなの市役所（シティホール）を模索する」

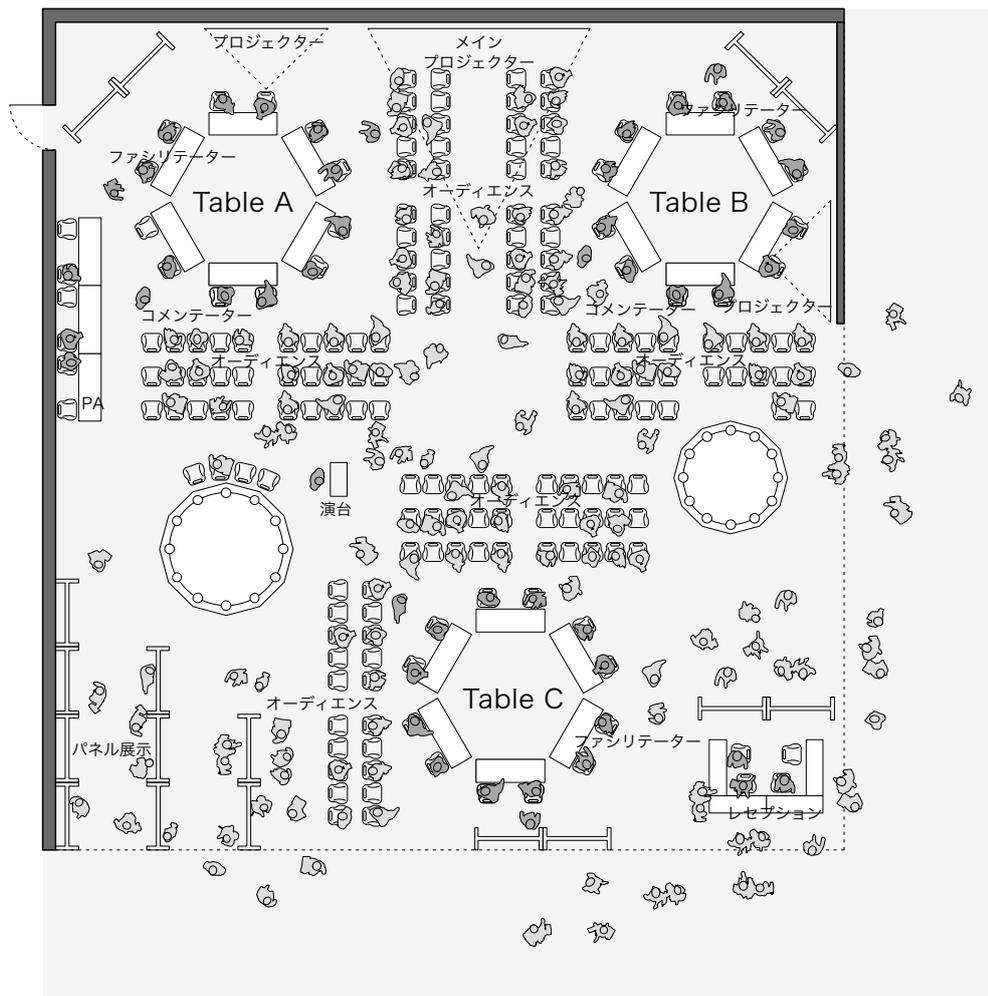
市民のための本庁舎建替えプロジェクトをみんなで模索する

せんだいメディアテーク 1F オープンスクエア

2019年1月27日 [月]

13:00	挨拶・趣旨説明
13:10	前半 ラウンドテーブル
15:40	休憩
16:00	後半 ラウンドテーブル
18:30	閉会挨拶
18:45	閉会





せんだいメディアテーク1F / オープンスクエア

Table A2

みんなで共有した都市ビジョンをどう位置づけるかを、みんなで考える

文責： JIA 宮城地域会
手島浩之、阿部元希

第1回仙台ラウンドテーブルにおいて、仙台市役所本庁舎建替え計画に「大きな都市ビジョン」の欠如を指摘する声が多く寄せられました。仙台市役所本庁舎建替え計画や現在の仙台に必要な都市ビジョンとはどのようなものでしょうか。また、仙台に「大きな都市ビジョン」が無いのであれば、みんなでつくってみたいと思います。

テーブル A の前半 (A1) では、いま必要な都市ビジョンとはどのようなものかをみんなで共有し、その後、様々な立場の方々から、様々な視点による都市ビジョンを提案してもらいます。その先にぼんやりと未来の仙台の街の姿が見えてくればと考えます。

では、そうしてみんなで勝手につくった都市ビジョンはどのようにすれば、正式な都市ビジョンとして位置付けられるのでしょうか。「上位計画が先行するべきだ」との意見が尤もだと思いますし、「市民や建築まちづくり分野が自主的に (勝手に) 構想した都市ビジョンでは、行政手続き上の正当性・公平性が無い」との指摘を受けるでしょう。しかし大きな都市ビジョンが無いままに市役所の建替えを進めることにも大きな欠落があります。テーブル A の後半 (A2) では、みんなでつくった「都市ビジョン」にどうすれば正当な位置付けを与えられるのかを考えます。

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から「公共を担う仕組み」を考える

文責： 宮城県建築士事務所協会
石原修治

第1回仙台ラウンドテーブルにおいては、様々な観点から、これからの公共を担う仕組みの見直しの重要性が指摘されてきました。スパイクタイヤ問題など市民活動が盛んな歴史があり、光のページェントやジャズフェスなど、市民主体のイベントも多く、「仙台らしさ」もそういった取組みからしか生まれないと指摘もありました。また、今後の社会ビジョンとしては、行政だけで公共を担うことの不可能性への言及も多くありました。

前回ラウンドテーブルでは、「行政と市民と専門家が負担と責任を負って何かを選択する仕組みは可能か？」という象徴的な問いがありました。テーブル B の前半 (B1) では、市民協働・新しい公共の在り方から「市役所」を考えたいと思います。

また、前回の「シティホールとは何か？」という問い掛けに対して、「欧米でシティホールとは、民主主義の象徴であり、議会と市民の関係こそがシティホールであり、仙台らしいシティホールとは、議会だけでなく市民活動・NPO 等多様な主体が公共を担う新しい民主主義を体現した空間ではないか」との指摘もありました。テーブル B の後半 (B2) では、「市民と議会と行政」を中心にこれからの「公共を担う仕組み」を考えます。

Table C2

低層部を中心にレビューし、低層部の必要機能を考える

文責： 宮城県建築士会
小林淑子

仙台ラウンドテーブルは、「仙台市役所本庁舎建替え基本計画検討委員会」と併走し、「基本計画検討委員会」での検討に必要な議論の厚みを提供し、「緩やかな合意形成を図ること (議論の範囲と中心の模索)」を大きな主旨としています。テーブル C では、「基本計画検討委員会での資料」を元に、様々な市民目線から、抜け落ちている視点を中心に検証します。

テーブル C の前半 (C1) では、建替え手順やスカイラインの構成を中心に「基本計画検討委員会での資料」の各案に様々な市民の視点を加え、議論します。

また、新本庁舎の低層部は、市民に開かれた部分として本庁舎の性格を決定付け、また定禅寺通や市民広場、県庁周辺との関係性を引き受け、周囲のまちづくりへの波及効果が大きい部分となります。テーブル C の後半 (C2) では、低層部を中心に「基本計画検討委員会での資料」をレビューし、低層部の必要機能について考えます。

キーワード

- みんなで決める、みんなで決断するというプロセス
- たかが市役所、されど市役所として自分ごとにする
- 建築のプロセスから社会の在り方を象徴的にみることが出来る
- 敷地に価値無し、エリアに価値有り
- 中心たるために交通を改めて担保し直さねばならない
- 仙台という都市の市民力が改めて問われる
- 行政と市民が一緒になり成熟した社会をつくっていく
- 震災復興を経た共同体の中で何かの結論を導くノウハウ
- 今はない都市ビジョンの一部をつくれるチャンス
- 市職員の縦割りを越えたマインドの必要性
- 単に建物の建て替えではない、まちをどうするかの議論である

Table A2

みんなで共有した都市ビジョンを
どう位置づけるかを、みんなで考える

キーワード

- 市民・議会・行政、情報があると距離感が近づく
- 専門性を高めるためではあるが、縦割り組織が問題
- 議会での議論や進捗状況が、市民に広く知らせる仕組み
- 市民・議会・行政、連携し視座を上げ市民社会を創る
- 若い世代も議会・行政の役割を理解し地域社会を考える
- 対等で問題に取り組む等、協働のあり方を市民も考える
- 議会と繋がる窓口（行政と繋がる窓口はある）
- 市民・議員・行政が日常的に隔てなく対話ができる空間
- マルチステークホルダーで話し合える、議場のアレンジ

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から
「公共を担う仕組み」を考える

キーワード

- 西公園、定禅寺通を含むエリアの価値を高める全体計画
- 屋外の市民広場に対する、市庁舎低層部の屋内広場的機能（アトリウム・市民広場でのイベント支援）
- 市民が訪れたい機能の検討（市民協働の情報、賑わいを生むマーケット、シティプロモーション）
- 建物正面性の検討（周辺の緑地、県庁、議会棟、合同庁舎含めて）
- 建物配置の検討（市民広場と一体、バス停、交通や人の動線も含めて）

Table C2

低層部を中心にレビューし、
低層部の必要機能を考える

Table A2

みんなで共有した都市ビジョンを
どう位置づけるかを、みんなで考える

Table A2

みんなで共有した都市ビジョンを
どう位置づけるかを、みんなで考える

企画

手島浩之
JIA 宮城地域会

テーブル補佐
佐伯裕武
JIA 宮城地域会

テーブル補佐
阿部元希
JIA 宮城地域会

テーブル補佐
江田紳輔
JIA 宮城地域会

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から
「公共を担う仕組み」を考える

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から
「公共を担う仕組み」を考える

企画・テーブル補佐

石原修治
宮城県建築士事務所協会

企画

大宮利一郎
宮城県建築士事務所協会

テーブル補佐
川口裕子
宮城県建築士事務所協会

Table C2

低層部を中心にレゾビジュアル、
低層部の必要機能を考える

Table C2

既存本庁舎の価値を議論し、
建替え手順や建物配置・規模・スカイラインの
構成を考える

企画

小林淑子
宮城県建築士会

テーブル補佐
星ひとみ
宮城県建築士会

テーブル補佐
高橋直子
宮城県建築士会

ファシリテータ
手島浩之
JIA 宮城地域会

ファシリテータ
渡辺一馬
NPO 法人せんだい・みやぎ NPO センター代表理事

登壇
増田聡
東北大学大学院経済学研究科 教授

登壇
遠州尋美
元大阪経済大学 教授

登壇
平野勝也
東北大学災害科学国際研究所情報管理・社会連携部門

登壇
小島博仁
(株)UR リンケージ

登壇
青木ユカリ
NPO 法人せんだい・みやぎ NPO センター事務局長

登壇
笠間建
株式会社コミュニティ取締役マーケティングディレクター

登壇
大泉大介
河北新報社 防災・教育室 部次長

登壇
末祐介
中央復建コンサルタンツ (株)

Table A2

みんなで共有した都市ビジョンを
どう位置づけるかを、みんなで考える

ファシリテータ
遠藤智栄
地域社会デザイン・ラボ 代表

ファシリテータ
坂口大洋
仙台高等専門学校建築デザイン学科 教授

説明
菅原大助
仙台市財政局理財部本庁舎建替準備室

登壇
河村和徳
東北大学大学院情報科学研究科 准教授

登壇
横山英子
あとりえ横山代表 / 仙台青年会議所 OB

登壇
鈴木平
ユースソーシャルワーカー副代表幹事

登壇
谷津尚美
認定特定非営利活動法人アフタースクールばるけ代表

登壇
緑上浩子
みやぎ生活共同組合理事

登壇
今野均
片平地区連合町内会会長・花壇大手町町内会会長

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から
「公共を担う仕組み」を考える

ファシリテータ
佐藤芳治
特定非営利活動法人都市デザインワークス

ファシリテータ
内山隆弘
東北大学キャンパスデザイン室

説明
高橋香奈
仙台市財政局理財部本庁舎建替準備室

登壇
杉山丞
東北大学キャンパスデザイン室 特任教授

登壇
山田文雄
(株)都市デザイン 顧問 (仙台担当)

登壇
村山光彦
公益財団法人仙台観光国際協会 理事長

登壇
伊藤彰
久米設計 設計本部建築設計部 統括部長

登壇
高野大地
高野大地建築企画

登壇
洞口苗子
L・P・D architect office 代表

登壇
錦織真也
宮城県建築士会

Table C2

低層部を中心にレビューし、
低層部の必要機能を考える

Table A2

みんなでも共有した都市ビジョンを
どう位置づけるかを、みんなでも考える

手島：

このテーブルのファシリテーターをさせていただきます、手島と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

この企画の意図としましては、前回の仙台ラウンドテーブルで、大きな都市ビジョンがないという指摘が幾つかありました。それが本当にあるのかないのかという議論はこの企画段階でもありました。例えば「総合計画があるじゃないか」と、いうことですね。しかし、「総合計画が本当にそういうビジョンとしての役割を果たしているのか」という意見もありました。その中では、やはりビジョンというからには、何かある程度到達可能な未来をきちんと指し示していて、当事者や、直接の当事者ではないいろいろな人を巻き込み、みんながそこに向かうという何かの効果が必要ではないかという話にもなりました。まずは今、この市役所建替えのプロジェクトに必要な都市ビジョンというのはどういうものかということを考えてと思います。

前半にもその議論をさせていただきましたが、人が違うと言うことが全く違うということが前半でわかりましたので、まず1巡目としては自己紹介を兼ねて、都市ビジョンが無いことにより、この市役所の建替えプロジェクトは何かどううまくいかないのか、

あるいはいくのか、都市ビジョンがあると、どう有効に作用して、仙台はどういうふうにいよいよまちになっていくのか、あるいはそれぞれの立場から見て、今の仙台に必要な都市ビジョンというのはどういうものがあればいいかというような話をさせていただきたいと思います。

前半にならってまた、あまり順番に回さないほうがよいという話がありましたので、ばらばらに回したいと思います。では初対面の笠間さんからお願いできますでしょうか。

笠間：

株式会社コミュニーナの笠間と申します。普段はマーケティングの、もともとはリサーチアがりですけれども、リサーチであるとか、あるいはそれこそ企業のいろいろなビジョンであるとか、あるいは商品のコンセプトであるとか、そういったものの開発をして企業さんをサポートするような、いわゆるコンサルティング業のようなことをやっている、そういう人間でございます。

都市ビジョンというところで最初いただいたとき、私はまちづくりなどの専門家でもないの、あくまでもいわゆる商業関係の専門家という視点になるのかなというのと同時に、一応私は、実は

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から
「公共を担う仕組み」を考える

遠藤：

皆さん、こんにちは。今日はお忙しい中ありがとうございます。このテーブルの担当をさせていただきます遠藤智栄と申します。よろしくお願いいたします。

そして、コメントもいただきながら一緒に進めていただく坂口先生です。よろしくお願いいたします。

そして、皆さんのご発言を附箋に記録させていただき石原さんと川口さんです。よろしくお願いいたします。

では、このグループのテーマは「市民と議会と行政」の関係から都市を担う仕組みを考えるということで、皆さんご自分のお立場から率直にお感じになっていることを、ざっくばらんにお話しただけならなと思っておりますので、よろしくお願いいたします。このテーマについて、皆さんのお手元にもこちらのA3の長いものがありますが、そこにあるように、前回、シティーホールとは何かという問いかけに対して、欧米では民主主義の象徴であり、議会と市民の関係こそがシティーホールであり、というようなことですね。ただ、ここは欧米ではなく仙台ですので、仙台らしいシティーホール、仙台らしい市庁舎ということを皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。

これを考えていくときに、私も改めてこの機会に議会というものを見つめ直すと、私も本当に議会のこと不勉強だなというのを改めて自己認識をしたというようなところ。ただ、自分も市民の1人として、投票して議員さんを選んでいるというか選ばれているわけですし、投票して市長が選ばれているわけです。私はいろんな協働事業などは市役所と一緒にやることが多いです。今年度、仙台市議会ではないのですけれども、県南の自治体の2つの議会の皆さんが高校生から地域課題解決の提案をもらうという場づくり・ファシリテーションのお手伝いをしました。議会がこうやってチームとして地域の方と対面しながら情報交換をしたり、意見を収集したり、課題を収集したりということもあるのだなということを支援させていただいて、そこでまた議会に対する身近さというのもすこし変わってきました。今日お越しの皆さんも、それぞれ行政と、そして議会とどんな関わりがあるのかなんていうことも、この後伺いながら進めていきたいと思っています。

今度できる新庁舎は、もちろん行政の皆さんが仕事をする場と、そしてまさに議会ですよ、議会ゾーンがあるわけです。そして今予定されているのは住民の皆さんも市民も使えるようなエリアということで考えられていますので、このテーマをどういうふう

Table C2

低層部を中心にレビュースし、
低層部の必要機能を考える

佐藤：

お手元の資料を確認させていただきます。第2回と書いてある資料と、杉山先生のほうからお配りいただいたA4の紙1枚です。こちらで進めてまいります。

それでは、今回ラウンドテーブル2回目ということで、1回目もこれに近い低層部についての議論というのがございました。それについてどういったキーワードが出ていたのかということ、少し最初に振り返っていききたいと思います。よろしくお願いいたします。

小林：

企画担当をさせていただきました宮城県建築士会的小林です。今日はよろしくお願いいたします。

前回のCテーブルのキーワードですが、事前にメールで送らせていただきました資料の中からお手元にはないかもしれませんが、抜粋して報告いたします。市役所をつくるに当たって、以前のお話ということで、民産官学の連携でつくりましたとか、グリーン

モール化のことが出ましたとか、彫刻のあるまちづくりであるとか、積極的に関わって美しいまちにしていこうということで、光のページェントや、ジャズフェスのイベントになりました、ということがありました。

それから、非日常のイベントから日常の風景になるような仕掛け、庁舎も会場に。また定禅寺通りと市役所の関わりというところで、仙台人としてのアイデンティティを表出する場になるべきところであるとか、定禅寺通の中央の緑地帯の部分は今、プロムナードから市民活動の場へと移り変わっています、というお話が出ておりました。

それから、市役所自体としては、時計が商店街でのイベントに当たって、必要不可欠（時間を知るために）なものです、というお話であるとか、市役所の機能を外にしみ出していくということのお話もありました。

それから、先ほどもありましたが、民産官学というところでどうしても官と市民との協働ということが、やり方とかということ

ももとの大学院の専攻が経営管理学ということもあったので、そういう視点から何か皆さんにいろいろと情報を出して、貢献できればいいかなと思っております。

都市ビジョンと最初に聞いたときに、どうしても経営学とかいわゆるコンサルタントが考えるのが、普通はビジョンだけが存在することというのは余りなくて、企業さんとかは特にそうなのですが、最初にミッションを決め、そのミッションで実現したいのがこういう世界です、というビジョンがあります。そのビジョンを実現するためにではどうしていきましょうかということではバリューがあります。最後にそれをもっと具体的にではどういう順番でやるかという戦略ということでストラテジーがあります。ゲームなどでも調べていただくと、ピラミッド状の図版がありますが、一番上にまずミッションがあり、ビジョンがあり、バリューがあって、最後にストラテジーというように、4つ同時にきちんと決めましょうというのが、経営の世界のひとつのセオリーというか手順のようなものだと思います。

それで、なかなかビジョンが共有されていないのではないかとか、そういったところというの、私も確かに余りよく知らないところもいっぱいありましたが、このミッション的なものであるとか、

に皆さんお考えになっていらっしゃるによっては、かなり影響力があるのじゃないかなと思っておりますので、ぜひ率直なご意見聞かせていただけたらと思います。

では、まず今日初めてお目にかかる方もたくさんいらっしゃいますので、普段どんな活動をされているかというようなことを、今野さんから自己紹介3～4分ぐらいお願いできたらと思います。

今野：

紹介いただきました片平連合町内会の今野です。今町内会関係の仕事をしてきたわけですが、実際には片平地区をどういう形にしたいかということで、片平地区まちづくり改革ということで取り組んでいまして、ちょうど10年ぐらい経ちます。それが、いろんなことをやってきた上で計画つくったよというのが5年前です。この5年前につくった計画に沿ってやってきて、今5年経って、やっぱり随分課題が変わってきたなということで、それを見直ししています。来年、第2期片平計画をつくらうということで、行政さんともいろんな話をしています、そういう取り組みをしております。よろしくお祈りします。

もあるのですが、必要ですという話がありました。

また、閉庁後の使い方であるとか、グランドレベル空間の使い方であるとか、バスとかの待合との関係であるとか、ATMの関係であるとか、具体的なお話も出ておりました。

それから、空間としての使い方であるとか、ゆっくりとか、ちょっと感覚的なところですけれども、そういった価値観というお話も出ておりました。

佐藤：

ありがとうございます。やはり官民連携で何かやっていきましょう、開いていったほうがいいのではないかと、ただ、開くといっても本当に具体的に時間でどこまで開けるか、セキュリティ上との問題であるとか、そういったようなこともあるのではないかとのお話などが、いろいろと出てきておりました。お手元の資料は、1月17日に第2回の検討委員会が行われておましてそこでの資料です。

ではそこで生み出される価値とは何なのかというバリューだとか、それとそういうフレームワークでもう一回再整理すると何か違うものが見えてくるのではないかなと思いましたが、逆に、この考え方は、いわゆる欧米で考えられた理論なのですが、彼らには一神教の神様がいて、最初にミッションなのですね。日本人の感覚だと一番上にビジョンがあって、それに向けていって何かをしていくというような認識なのですから、そうではなくてまずミッションがあると。このまちをどういうふうにしていく、どういうまちになりたいのかとかそういったところから、最終的にどういうような形のまちになったのかという形なので、まずミッションが先にあるということが一つ大きな違いだとは思いますが、順番は上でも下でもいいのですが、何かもうちょっと細かくフレームワークをきちんとみんなで共有したほうがいいのではないかなと思います。

今は、あくまでも経営学の世界ではミッションがあって、ビジョンがあって、バリューあって、ストラテジーという、4つにとりあえず整理していってみんなで考えようという話ですが、都市ビジョンといったときに、多分いろいろな各専門家の方によって、そのビジョンという言葉自体に実はちょっとずれがあるのかなと。

遠藤：

ありがとうございます。今5年前にまちづくりの活動計画をつくって、課題が変わっているというお話がありました。では、谷津さんお願いいたします。

谷津：

NPO法人アフタースクール「ばるけ」の代表をしております谷津と申します。当団体は、平成14年から障害のあるお子さんを対象にした放課後の支援から活動を始めました。今現在は、学齢期の障害のあるお子さんが通う放課後等デイサービスの事業を3カ所と、障害児者のヘルプサービスの事業所1カ所と、障害児者の相談支援事業所1カ所の5カ所で、公的なサービスを行い、約180人のお子さんから成人の方まで支援をしております。

当団体の特徴としては、公的なサービスから見てきた課題を市民の力で解決していこうというNPOのミッションを掲げて、今はきょうだい支援や卒業後の障害のある方たちが仲間と過ごせる成人の余暇支援、震災後は障害のある家族、ご本人の理解者が増えるといいなという思いで「ちょこっと・ねっと」という障害理解の啓発活動なども行っております。

まず、この資料3のほうをご覧くださいませでしょうか。右上に資料3と書いてあるものです。これについて仙台市の高橋さんのほうから説明いただきたいと思います。

高橋：

仙台市本庁舎建替準備室の高橋と申します。基本計画の委員会内でどういった議論をしているか、ということをご存知の方もいるかと思いますが、はじめての方もいると思いますので説明させていただきます。

まず、基本計画、設計の与条件を決める段階の委員会が1/17に開催されました。そこで市役所の土地をどういった風に使っていくかと、今回の低層部の使い方について抜粋して説明させて頂ければと思います。

敷地内の土地利用ですが、現状、市役所の噴水広場と市民広場について抱えている課題として去年のジャズフェス開催時の写真では、テントとか、ステージでひとがにぎわっていますが、市役所

Table A2

みんなで共有した都市ビジョンを
どう位置づけるかを、みんなで考える

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から
「公共を担う仕組み」を考える

Table C2

低層部を中心にレジャーし、
低層部の必要機能を考える

Table A2

みんなで共有した都市ビジョンを
どう位置づけるかを、みんなで作る

何か以前のいろいろな話を聞いた際に、それってミッションの話だよなというふうに、私から見るとそういうようなこともあったので、まず「どういうフレームワークがあるのか」を共有するといいいのかな、と思ったところでした。以上、何か参考になれば幸いです。

手島：

ありがとうございます。では続いて、遠州先生、まず自己紹介と、ビジョンの意味と意義のところをお願いします。

遠州：

どうも、遠州と申します。今現在は、大学を退職しまして、市民の立場で、特に最近では震災の復興の問題を最後までやり切るということで、市民の立場で何ができるかということを考えているという立場にあるということです。

前回の議論は、ビジョンという話で始まっていないですね。都市らしさとか、個性とか、どちらかという都市のアイデンティティーというのはい体何なのかと、それがどういう形で築き上げられていくのかと、そういう議論としていっていたのだと思いま

す。それが、どこでそのビジョンという議論になったのかって、ちょっとその辺のところを私は承知していないのでなかなか難しいですけれども、やはり私はあのときの議論は、都市のアイデンティティーという個性というものを決めていく要素はそれぞれの都市ごとにさまざまな要素があって、何かそれが一つの方程式のようなもので構成されるものとは違いますという事だったと思います。都市のアイデンティティーを決める要素は、それぞれの都市の成り立ちだとか、歴史だとか、そういうものによって決まってくるけれども、様々です。と。だけど、大事なものは、それを住んでいる人たちがきちんとそれ自覚をして、将来のまちづくりや、今直接目の前にある課題でもいいのですが、そういうものに貫くということをしちんとやれているかどうかということがポイントですよ、という議論を私はしたと思います。

そのときに引き合いに出したのがフライブルクで、フライブルクは都市交通システムが非常に有名ですけれども、そういうものが息づいてくることになったきっかけは、震災で破壊されたまちをどう復興するかという議論があった時です。まちの80%が破壊されるという状況になったのですが、中世のまちの骨格を再建していくのか、それともそうではなくて近代的な、例えば同じドイツ

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から
「公共を担う仕組み」を考える

障がいのある子どもたちは、障害分野だけではなくて、児童館や学校も含めいろんなところを利用しながら生活していますので、障がい分野の担当局である健康福祉局だけではなく、子供未来局、教育局など部局を越えて連携をしていくということも大事に取り組んでいます。

遠藤：

谷津さん、どうもありがとうございました。では、緑上さんお願いいたします。

緑上：

皆さん、こんにちは。みやぎ生協地域代表理事の緑上と申します。地域代表理事というのは、組合員さんの中から選ばれている組合員理事で非常勤の理事になっております。

私どもみやぎ生協は、皆さんお店のほうご利用いただいているかと思いますが、いつもありがとうございます。スローガンとして、「1人は万人の為に、万人は1人の為に、平和とよりよき生活の為に、そして皆で作る豊かな地域」というものを掲げまして、店舗事業、共同購入事業だけでなく、暮らしの中でのメンバー活動と

言われている部分で地域貢献のほうもいろいろ摸索しながらやらせていただいております。

そんな中で、今日ここに登壇させていただいているわけですが、何をしゃべればいいのかとなってちょっと探り探りこれから皆さんと一緒に時間を過ごしたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いたします。

遠藤：

緑上さん、よろしく申し上げます。では、鈴木さんお願いします。

鈴木：

こんにちは。今日はユースソーシャルワークみやぎの肩書でお話をさせていただき鈴木平と申します。よろしくお願いたします。私は、主に石巻と仙台でNPOをいくつかやっているのと、あとは今宮城大学の院のほうにも通っておりまして、大学院のほうではボランティアのほうを研究しております。

NPOのほうは、石巻では生活困難状態にあるお子さんたちの学習支援やフリースクールなどを行っているのと、あとは総合相談という形で、ゼロ歳から39歳までの若者の相談支援を行っており

Table C2

低層部を中心にレジャーし、
低層部の必要機能を考える

の噴水広場の方には、賑わいが連続していないところが現状の課題と考えていて、今後の検討として市民広場との連続性を配慮した土地利用計画を立てていこうと、考えています。あわせて、この間にある(図示)市道表小路線、前半でも歴史的な場所だとお話がありましたが、交通量の関係で廃道とかは難しそうと、検討はされていて土日だけでも歩行者天国にするなど連続性が確保していけないか、と考えています

続いて(3)今後どういう風にその広場を使うのか、といったイメージの話になります。

まず、市民が日常利用できる広場を設ける事、かつそこでイベントが開催できる広場とする事、かつ防災広場としての機能を持たせる事、前半でも空地の使い方について話がありましたが、どういう機能も持たせるかというところで現在、この3点をポイントとして考えています。その中でイメージとして芝生の広場を設けている、岩手県の紫波町、新潟県の長岡市で半屋外のナカドマという空間を設けてイベント広場として利用している空間、庁舎で

はないが、建物と建物の間をオープンスペースとして広場的な使い方している東京国際フォーラム、道路を廃道にして広場化した札幌市のアカブラという場所がありますが、こういう使い方をそれぞれ現状の例として考えています

つづいて、広場ではないそのほかの部分ですが、何度も先ほどから駐車場の話が出ていますが、まず現状の台数はいくら必要か、と今回の資料では踏まえています。現状、集約する庁舎等含めて合計365台、市役所としては必要と考えています。ただ、シェアカーをするだとか、そういった議論も出ていて基本的にはこの台数を整備したいと考えていますが、皆さんからご意見いただけたらと思います。ただ、これは、現状の台数であって新しいものを作る時にこの勾当台のエリアとして必要な台数の議論はできていない状態です。駐輪場に関しても同様です。

続いて、資料3の裏面にいきます。前半でも緑化の話がありましたが、現状で18.7%の緑化があるので今後20%程度、敷地内を緑化していくという方向を土地の利用の話として、考えています。



Table A2

みんなで共有した都市ビジョンを
どう位置づけるかを、みんなでも考える

ます。仙台では、主に大学生などの若者たちと一緒に、町内会さんと一緒にまちづくりの活動ですとか、学生たちのマイプロジェクトみたいなものを支援するような活動をやっており、今日の肩書のこのユースソーシャルワークみやぎというのは、そういった現場団体をやっている中で、この宮城の中で次世代の子供支援であったりとか、市民社会というのを担っていく人材というのが全然育っていないというような認識を持っておりまして、それをいくつかのNPOさんと協働で任意団体を立ち上げてまして、人材育成の事業を行っております。なので、今日はそういった市民運動、市民活動という視点ですとか、あとは若者といったような切り口から、少しでもこの議論に参加できればと思っておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

遠藤：

鈴木さん、ありがとうございます。では、横山さんお願いいたします。

横山：

皆さん、こんにちは。私はここから歩いて15分ぐらいに生まれ育っ

これについてもご意見いただければと思います。

あと、皆さんにご意見いただきたいところで重要なと考えるのは、外部の導線計画について、配置パターンに大きくかわる部分、前半でフットプリントをどういう風に考えていくか、というところもかかわってくるのですが、地下鉄との地下階の連結の必要性とか、一番町から歩いてくる歩行者空間の連続性をどう確保していくか、これが北側に抜けていく導線として必要なかどうか、屋外広場をどういう形でどういう使い方で設けていくのか、現在、まさに検討中なのでご意見いただけたらという風に考えています

続いて資料4ですけれども、具体的に市役所の1階部分、2階部分といわれる低層部にこういった使い方を持たせるか、という話に移ります。現状ですけれども、低層部分に市民利用、情報発信の機能をその部分がまちの賑わいに資する部分にしましょう、と仙台市では考えています。併せてそこが、災害時の災害転用の用途になるようにも考えています。その中で前半でも話をしていた

た仙台生まれ、仙台っ子56歳でございます。私はこの仙台というまちで、親子2代で青年会議所という活動をずっとやっておりまして、うちの父は高度経済成長時代に、祭りのないまちに祭りをつくるとか、例えば七夕も商店街の人だけ苦勞して、何かまちの人はもうのほほんとしているだけで、儲からないことはやめなきゃいけないという時代に商店街の人がやめたいと言ったのを、いやいや待て待てと、まちの人も一緒になって商店街の人を助けるからということで、一緒にじゃあ花火を見るのは商店街の人、明日からはみんな頑張ってみたいな、それで七夕花火祭りができたのですけど、今年で50年でございます。家業が設計事務所をやっており、設計事務所はお金をもらってそのクライアントのために尽くすという、主に公共工事ではあったのですが、そんなところでフラストレーションがあるのを、多分父はまちづくりをいろんな何か利益ではない、いわゆる公益のためにやっていたという、それを引き継いで私も同じように青年会議所という組織で28から40歳までやっておりました。

今日の市民と議会と行政のテーマですけれども、青年会議所時代はいろんな公的なことをやろうと思っていたので、当然行政と議会の先生方と一緒にということが多くて非常に身近でしたが、逆に

いていましたが、行政機能としてどうしても求められる窓口機能だとかロビー機能だとかがあり、そういったもののほかにまちの賑わいに資する、庁舎の視点から求められる市民利用、情報発信機能として何が必要なのか、というところを今日お話しできたらと、個人的には考えていました。例えば、先ほどお伝えしたイベントスペース、市民情報の発信スペース、そういったものが何なのか、あと前半でも80年を想定するところで、今の時代、現状から考慮する課題とは、かわっていくのではないかと、というお話もありましたけれども、たとえば、人口減少への対応性だとか、それによる、職員の減少だとか、男女共同参画支援とか、そういったところの考え方もお話しできればという、現状です。以上です。何か、補足とか、現状どういう風に考えているかわからないところがあれば質問していただければと思います。

佐藤：

ありがとうございます。このあいだ傍聴してきましたが、メモリ

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から
「公共を担う仕組み」を考える

Table C2

低層部を中心にレジャーし、
低層部の必要機能を考える

Table A2

みんなで共有した都市ビジョンを
どう位置づけるかを、みんなでも考える

であればフランクフルトのような近代的な都市として再生していくのかについての市民的な大激論をやって、その結果として、「中世の骨格を守りながら維持していく」という決断をしました。それと、今後（今後というのは未来永劫ですね）、そういう都市の骨格を背負って生きていくということを決めてしまった以上は、それとモータリゼーションがコンフリクト（対立）を起こせば、じゃあそれをどうするのかということが常に問われるという状況になるわけで、そういう中で必ずとまちの在り方なり、具体的なまちづくりの課題なり、そういうものが決まってきたということですよ。

仮に、それを文章化し、定式化すれば、総合計画であったり、長期構想であったり、そういうものになるのかもしれないのですが、基本的なベースにあるものは、何かそういう計画書として存在していたものというよりは、現に今私たちが、目の前にあって「どう解決しなければいけないか」が突きつけられた課題に対して、真剣に全体で議論して決定するというプロセスを踏んだかどうか問題です、という議論をしたと思います。

前もって渡してあるスライドに書いたことと基本的には一緒になってきますが、結局、誰かが報告書だとか計画書の中に書き上

げたものがビジョンだということではなくて、それが本当に血となり肉となるのであるならば、「具体的な選択をみんなでしたかどうか」ということが基本なのだ、その選択をすれば必ずとそこから決まってくるというのが私の基本的な考え方です。だから、今これがビジョンだということを何か言えと言われて、「私はいいいな」と思うことはあるかもしれないけれども、大事なものはそうではなくて、現実突きつけられているものをどうみんなで議論して決めるかということだったと思っています。

手島：

すばらしいご意見ありがとうございます。プロセスがやはり一番重要だというのは、本当にそのとおりかもしれないですね。みんなでも決める、みんながちゃんと決断するというようなご指摘でした。

では、続いて青木さんお願い致します。

青木：

せんだい・みやぎNPOセンターの青木と申します。せんだい・みやぎNPOセンターは、仙台で20年目を越す市民活動、NPO

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から
「公共を担う仕組み」を考える

組織を離れますとそうじゃなくなりました。逆に自分がやれることは自分でやっ飛ばしてしまうということで、今はまちづくり会社のような会社を亘理町におこし、村田町では「まちづくり村田」という会社を行政や民間の方とともに設立し活動しています。

それから、子ども支援のお話が出ておりますけれども、「セーブザチルドレンジャパン」というNGOがあるのですが、震災の前の十数年前から理事をやっていたのですが、震災があって初めてその国際NGOが日本の子供たちに目を向けてということで、私も仙台ですから、受け入れ側としてずっとその被災地の方々のところに海外から、それと国内から専門家の方が来ていろいろ支援するお手伝いをずっと今もやらせていただいています、そういうことで年をとるとともに幅が広がって活動させていただいております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

遠藤：

横山さん、よろしくお願いたします。では、河村先生お願いたします。

河村：

アル関係の議論、また委員会が立ち上がり、別の議論が始まると思いますが、その辺についてのご指摘とか、保育所・託児所に加えてレスパイトサービスという話も出ていましたが、障害を持たれた方々へのサービスも必要ではないかという話や、東日本大震災後の庁舎ということから、耐震装置が付くことになると思われますが、積極的に展示して防災意識を喚起していけばいいのではないかと、というご指摘もありました。私も聞いていてこの表なども見ながらですと、市としての今までのパブリックコメントや市民の方から出てきたアイデアなどがこの表に全部詰め込まれている、という印象があります。どういった観点で大事なものをここからピックアップしていくか、視点についても議論していただければ、いいのかなと思っています。今、こういったことで議論が進んでいる低層部の機能ですが、今日お集りのみなさまから、感じておられることをまず、自己紹介もかねてお願いします。

高野：

皆さん、こんにちは。東北大学で政治学を専門に授業をしています河村です。先ほど出たように、専門は何かといたら、そのまま政治学で、特に今選挙を中心に研究していますので、ちょうど統一地方選挙の時期でもありまして、宮城は地震のせいで遅れましたけれども、ほかのところは4月に順当に選挙があるものですから、今全国のほうの統一選の取材とか受けたりもしています。

実は、議会改革も関係がありまして、今石川県の加賀市の議会事務局とか、いくつか県内でも富谷市に頼まれたりしていますが、議会改革なんかもお手伝いをさせてもらっています。そのお手伝いさせてもらっている石川県の加賀市は、2016年度、17年度は例の早稲田大学のマニフェスト研究所の議会改革度ランキングで全国4位になっています、でも実はそれほどすごいことをやっているわけではなくて、身近なところからこつこつ議会改革をしていますし、議会だけではなくて執行部との関係とかも見直しながら、そういうことをやっているわけです。議会改革をしろしろと言うのですけれども、どちらの方向性に持っていきたいかというのは、なかなか議論がなかったわけですし、今日はそういうところの側面も若干あると思いますので、そのあたりお話できたらなと思っています、あと今ちょうど議員のなり手不足とか、政

Table C2

低層部を中心にレビューし、
低層部の必要機能を考える

高野と申します。よろしくお願いたします。今、個人で事務所を主宰していますが、もともと設計畑にいて、空港や、スタジアムといった大きな規模のものをやらせてもらった後に、CMといわれる、建築の専門の方はご存知と思いますが、プロジェクトの裏方に回って、どうやってプロジェクトを回していくか、ということ建築の専門家としてやっている中で、4年前から女川町のまちづくりの裏方をしています。その中で昨年10月にできた複合庁舎の基本計画書も設計者とは違う立場で発注者側を支援する立場で関わりました。今回も市役所ということで少しでもお役に立てればというところなんです。地方創生といったこともして大きくまちづくり全般のことをやらせてもらっています。今回の計画についてですが、低層部について気になっているのは、資料6でパターンの比較をされていますが、範囲が狭いのではないかと考えています。市役所機能を考えたときに定禅寺通り全体、西公園くらいまで見てもらって、メディアテーク、建替えを控えた県民会館をどうするか、音楽ホールの計画もあるし、今後、市役所周辺建物

の応援団の一つであります。私も20年前、設立のときにスタッフで関わったことから現在ご縁があって、今の役割でまたここで仕事をさせていただいております。前回のラウンドテーブルでもお声をかけていただいたことと、あとはこの建替えプロジェクトの検討委員会の委員もさせていただいているご縁もありまして、今日またこちらにお邪魔しております。

都市ビジョンの話ですけれども、市から市政の歩みの資料のご提供がありましたが、何かしらその時世に応じた言葉としての仙台のあるべき姿を示す言葉は常々出ているものとして思っていたのですが、そのビジョン、描くものの姿が誰とどう共有できているかというところは、こういう場があり、何か話題に出たところで確認をし合えるけれども、個人として常にそのことを意識しながら暮らしているのかというと、なかなかそこには少し距離があるかなと感じました。

ただ、その時世に応じながら、仙台のまちの中でこういったことを大事にしながらまちをつくり、その施策、計画をつくっていくといったところのよりどころになっているものなのだろうと認識をしております、前半からもキーワードで出ていましたけれども、そこにどれだけ市民の意見や参加が組み込まれながらつくら

れていったのかというところで、市民自身も何か自分の生活の延長上にその施策やビジョンでうたわれていることを実感するということがあるのだろうかと感じます。

特に、私が今所属している市民活動、NPOの活動などでは、「当事者の方々が声を上げながら変えていくような運動」で、それが法律を変えたり、法律をつくるというようなところに関わっていくということも、こういった仕事を通じて実感をしたところがあります。前半で伊藤さんがおっしゃっていたような障害者の方の権利条約のように、「私たちのことを私たち抜きで決めないほしい」という、まさにそういった「当事者であることの権利」の尊重が、仙台のまちのいろいろな局面で起こっていくことは必要なのだと思います。また、私たちのような機関も、もっとそういった場とか一緒に考えていくという機会をつくっていくことの重要性も改めて感じたところです。なので、先ほど話に出た、プロセスのつくり方というのでしょうか、そのあたりがポイントでもあるのかなと思います。

手島：

ありがとうございます。末さん、お願いします。

務活動費の問題とか、いろいろ議会を取り巻く問題があるのですけれども、やっぱりそのところで必要になってくるのは信頼という話があるので、そういう行政と議会と市民の間の信頼をどう構築していくか、そういうところも少しコメントしていければなというふうに思います。今日はよろしくをお願いします。

遠藤：

河村先生、よろしくお願いたします。

今日はファシリテーター、運営側がちょっと3人おりますので、あと1人は市役所の菅原さんです。じゃあ自己紹介してください。

菅原：

本庁者建替準備室室長をさせていただいている菅原です。一番最初にもお話をさせていただきましたが、有識者の検討委員会というのは当然組織させていただいて、本庁舎のあり方をどうしたらいいかという検討はさせていただいています、より広く検討の幅を広げるといふのと、より深く皆さんの意見を吸い上げて、よりよい庁舎にしたいというふうに取り組んでいます。今日は皆さんから本当に自由にご意見をいただいて、行政が今後どうあったら

いいとか、議会がどうあったらいいとか、あと市民との関係はどうあったらいいかというところをぜひご意見いただければありがたいと思います。よろしくをお願いします。

遠藤：

菅原さん、よろしくお願いたします。菅原さんには、後ほど他の自治体の庁舎建設で最近の事例で、どんなことを大事にしてどんな庁舎が設計されているのかという情報提供もいただく予定です。では、坂口先生お願いします。

坂口：

仙台高等専門学校の坂口と申します。専門は建築で、主に公共施設の計画とか調査、特に公共の文化施設のことに関わっています。具体的には、今は被災地のいろんな施設が復興しているのですが、その計画の立案とか、あと仙台市は、この市役所の建て替えの後に控えています音楽ホールというのがあるんですけれども、その今専門部会で少し関わらせてもらっています。それ以外は、復興支援ということで、1つは名取市の閑上というところの計画というか支援をずっと行っているのと、あとは福島

の建替えもあるなかで、まち全体をどうやってローリングさせていくか、ということ視野に入れていかないといけない、その先駆けになるはずなので、そのくらいの規模感でやっていただきたい、と思っています。

低層部については、どちらかという室内の市民広場、屋内としての大空間が東北という地域性で、先ほど長岡の事例とかありましたが、八戸とかもそういうのがあると思いますが、雨天時、雪とかがあるので、他地域の庁舎の先例となるような、解となるような、外で使う市民広場に対して、中で使う低層機能を、ぜひ作ってほしいと思っています。あとは、総合計画も作られていると思いますが、比較表を見るとソフトでの比較が足りないと思います。ハードによって印象があるので、もう少しソフト面を考えて、総合計画にあったものを提示することでほかの公共施設の建て替えに普及できるのではないかと思います。

佐藤：

ありがとうございます。総合計画を比較パターンに活かしていくのは、難しいような気がしますが、どのような感じになりますか。

高野：

総合計画の中でもソフトでどうやっていくのか、たとえば、女川だと子育てとか、健康、スポーツ（女川は、スポーツ観光とか、合宿誘致とかしていたので）そういったところが、テーマとしてあがってきます。そうすると町の色が見えてくるので関連性を持っていけるところがあります。あちらは複合庁舎でもあるので。今回、議会を19階にもっていくことには、必要性を感じてなくて、一番いい場所に議会なの？というところがあります。

佐藤：

重点政策に対応するような場所が前に出てくるというか、いい場所に出てくればということですね。ありがとうございます。

Table A2 末：

みんなで共有した都市ビジョンを
どう位置づけるかを、みんなで作る

中央復建コンサルタンツという会社で建設コンサルタントをやっております末です。現在は、宮城県的女川町というところの復興まちづくりを2011年からずっとお手伝いをしていて、民間の人たちの声や行政の考えとかというのを混ぜ合わせていくというようなことを基本のお仕事としてやっております。

今回のこの時間帯でやることに関しては、市庁舎の建設というか、建替えに必要なビジョンがどんなものなのかということですが、そもそもミッションとかビジョンとかということに関しては、確かに「総合計画としてつくってほしい」とされていることではあります。そもそもの語句の定義からすると、「これから行動しようとする人が、行動する際に目指す姿というのを表現したもの」であるべきだとは思っていますが、これが今まで既存でつくられている計画にはそこまで具体的には示されていないことが問題提起の中の問題意識として出てきているのかなと思います。

それで、いろいろなアプローチはあるとは思いますが、その「在りたい姿」に到達するためのいろいろなアプローチはあって、そ

れぞれの人たちが自分のやりやすさとか得意としているものを使ってそこにアプローチしていけばいいとは思いますが、「中間的あるいは最終的にどう在りたいか」を示すものをつくっておきましょうというのが、ビジョンなり、先ほどの用語の定義でいうとバリューなりという形で示されるものなのかなと思います。これが共有されていれば、いろいろなアプローチでも最終的にはそっこのほうに近づいていけるというようなことにはなるとは思いますけれども、これが共有されていないと、やはりその一つ一つの打つ手が場当たり的になりがちというようなことなのかなと思います。

もう一つ加えて言うと、複合的に課題を解決できる筈だった打つ手が、一つの小さな課題しか解決できなくなる状況になりがちというようなこともよく起こっていることなのかなと思います。そういう意味では、まずひとつ目の問いとしてあった「ビジョンがこの市庁舎の建替えに関して必要なか」ということに関しては、当然要るだろうと思っていて、それが今ホームページなどで公開されているビジョンや計画の中には、どうもそこら辺までの力強さが足りないんじゃないかというところがちょっと問題意識として出てきているかなと思います。そこら辺はもう少し、今日の午前中にお

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から
「公共を担う仕組み」を考える

県の集落、これは川俣というところで、福島原発から50キロちょっと外れているんですが、その集落の支援なんかもやっています。今日は、いろんな議会だけじゃなくて、ここにある公共を担う仕組みということで、多分幅広い観点から議論をいただけてと思って期待しておりますし、この前半のほうで、いろんな市民協働とか、あるいは公民連携とか、そういった新しい公共を担う仕組みの関係のあり方という形についてもいろんな意見がありましたので、そういった観点からも遠藤さんのお手伝いをさせていただきたいと思います。よろしく願いいたします。

遠藤：

坂口先生、よろしく願いいたします。

では、簡単に私もちょっと自己紹介をさせていただきますと、地域社会デザイン・ラボの遠藤智栄です。普段はまちづくり、地域づくりの支援ですとか人材育成の支援をしまして、そのほかにもNPOや自治組織の組織強化ですとか政策提言、行政の施策への住民参加ですとか、公共施設をつくるときに、やっぱり住民意見をしっかり聞いていこうといったときのファシリテーターなどもさせていただいています。ですので、震災でいろんな施設が

壊れたり、再建したりということで、いろんな施設の住民参加支援の機会をいただきながら、そのたびに行政と市民のみなさんと向き合っています。でも議会というのはあんまり考えてなかったもので、今日しっかり皆さんと一緒に考えていきたいと思っています。

皆さんはここからのご登壇ということになりますので、先ほど菅原さんからもお話があったように、こちらのテーブルの前提を確認しておきたいと思っています。

まず、1つは誰にでも開かれた場であるということですね。ですから、どなたが聞きにきてくださっても構わないということと、あとは2つ目、さまざまな意見を受け入れ取り入れるということですね。皆さんのご意見をこの後お話しさせていただきますけれども、いろんな方のご意見次第では、ご自分の意見をええたり発展させたりということをどんどんしていただいて、ご発言いただけたらなと思います。そして、3つ目が地域の専門家が中心となって責任ある議論ということで、やはり皆さんそれぞれの現場の活動やお仕事があると思いますので、まさにそこに立った上で、そこからこのテーマを見ていただいて、率直なご意見ですね、批判多めというよりは提言多めみたいなイメージで進めていけたらなと思います。

Table C2

低層部を中心にレジャーし、
低層部の必要機能を考える

村山：

昨年3月まで市役所にいました。

主に都市計画、交通計画に30年ほど携わっていました。最後は、区役所から市民局にいまして、今は仙台観光国際協会でインバウンドとか、外国人市民の話とか、コンベンションといった仕事をしています。

私は低層部の機能について具体的に少しアイデアをご提案したいと思っています。一つは、昨年3月まで市民協働の旗振りをしていましたので、協働の関係で何かないかなという話です。実は、協働関係の施設は、中心部に分散配置されています。男女協働は、二か所ありますし、NPO活動ではサポセンがありますし、消費者センターもあります。戦災復興もあります。そうした現状を、私は基本的には評価して分散配置で色々市民の方が使われているという現状は、いいのではないかなと思っています。そういう意味でそういった施設をあえて市民協働ということで新庁舎に集約する必要はないと思いついて、それを前提として市民が新庁舎に

どのように集まってくるかという、より自由に使えるようなミーティングとか、打合せとか、待ち合わせとか、そのような空間だろうと思っています。個室もいいですし、半オープンみたいな空間でもいいと思っています。ただ、問題は、そういう場だけあってもだめで、資料4にあります、市政情報センター、市政情報の機能があります。現状でもありますが、今は書籍を置いて勝手に書籍を見るだけになっています。これは、あまり使われておりませんので、先ほど申し上げた男女共働、NPO、様々な市民活動に関わるものの情報を双方向でやり取りできるような、ワンストップで市民が情報を入手できるような、そうした機能に拡充してオープンスペースにくっつけていくことは非常に大切だと思っています。実は、皆さんあまりご存知ないかもしれませんが、本庁舎の1階には、広聴相談コーナーというのがあります。市民の相談を受け付ける部屋もあります。それも今後やはり、外国人市民も含めて少し市政情報の機能を拡充してもう少し広範囲に広げてオープンスペースにくっつけていくやり方をぜひ考えて頂き

送りした資料の中で具体的にどういうことなのかというのを後ほどご説明する時間があればご説明したいと思いますが、僕の問題意識としては以上です。

手島：

ありがとうございます。では、今の投げかけに関しては、多分、小島さんが一番答えやすいのかなと思うので、よろしくお祈いします。

小島：

URリネージュの小島と申します。3年前に市役所を退職しまして、民間の方々と一緒に公共不動産、遊休不動産、民間も含めてですね、行政だとどうしても耐震化とか老朽化に伴う建替えが行政課題として出てきてそれに突き進むということになっていますけれども、古くてもいいじゃないかと、そこで市民の欲求を達成するためにどうすればいいかと、いわゆるリノベーションですけれども、そういう市民の起業をしたい方に対して手を差し伸べて、安い賃料でそういうものを貸せるような動きがないかということで、今民間の方々と活動をしています。それで、公共空間も、例

今日は、この後河村先生に、まずじゃあ市民と行政と議会って、今はそもそもどういうふうな役割の分担になっているのという基礎的な押さえておくこととお話をいただいて、その後、皆さんに今どういうふうに議会や行政と関わっていますかということが1巡目ですね。2巡目は、じゃあ市民と議会、行政、未来志向的にはどうなったらいいのだろうか、望ましい議会像や庁舎としての議会ゾーンはどうあったらいいのかということをお話しいただいたらと思います。ただ、これは予定なので、皆さんのご発言によってはちょっと変わるかもしれませんので、そのあたりはご容赦ください。

では、河村先生から、こちらのお手元の資料届いていますし、あとはこちらのプロジェクターで投影もしております。では、河村先生お願いいたします。

河村：

何もエビデンスを持ってこないで発言すると、学者じゃないと言われるので、というのが1つと、もう1つはこういう会議をやると、特に議員の先生方と一緒に仕事していますから、そうすると我々が民意の負託を受けているということからスタートしていくわ

たいと思っています

もう一つ、関係する話として観光コンベンションやっていますが、やはり、市役所周辺のらしさ、特性というのは、祭りだと思っています、イベントだと思っています。いろんな国内の方、あるいはインバウンドの方も含めて、あの近辺での祭りやイベントへの関心が高くなっています。そういう意味では、祭り、イベントは、あの地域を特徴づけるものと思っています。私も青葉まつりの主催者ではありますが、イベントをやる立場から言うと非常に不十分。市民広場は、面積、設備もそうですし、雨天時の問題もあります。新庁舎の計画で屋外広場を計画されていますけれども、屋外広場の問題と、庁舎の屋内の滲みだしは、一緒に一体となって考えて頂きたい。規模感はありますけれども。

あと、いずれご検討なされるでしょうけれども市民広場、イベント広場そのものの再構成、これを一体として是非検討いただきたいなと思っています。大規模イベント時は、市役所庁舎の1階部分は、待ち合わせにも使いますし、いろんな会議室を着替えに、

例えば定禅寺通とか西公園とかなかなか、イベント等はありませんけれども、まだ非日常性みたいところがあって、日常的にぎわいを醸し出す、生ますために、やはり民間の力が非常に大事だと、市民の力ですね、そういったものにどう取り組んでいこうかというところで今行っています。

これは自己紹介になりますけれども、もう一つの自己紹介と反省も込めてですけれども、3年前まで私は都市整備局に在りまして、都市計画をやっていました。例えば、ビジョンがない、ビジョンがないと言いますが、今は自治法改正になって総合計画、基本計画というもののはつくらなくていいとなっていますが、都市ビジョンというものは、いわゆる昔の自治法でいう総合計画と同じとすれば、ビジョンは仙台市をはじめ、各自治体は持っているわけですね。ただ、なかなか見えないということが今回のテーマの一つになっていると思っています。

それで、ビジョンそのもの、総合計画と置き換えてもいいのですが、大きく言うと、仙台はどうあるべきかという「市民生活の都市像」を4つほど挙げましたけれども、その都市像を実現するために基本計画というのがあり、プランをつくってそれを実践していくために、(戦術ですね)実施計画というのがあります。本来、その

けですね。そうすると、選挙の洗礼を受けている人と受けていない方で差があるはずだというのが、代議員制民主主義はそこがベースになっている。ただ、地方自治は直接的に参加する「こともできる」という、要するに「アンド」なんですね。ですから、国政と違って地方では住民が直接参加することができますよというところも認められているので、そのまず両者が、両方選択肢があるのだということは前提として置いてお話を聞いてもらえればと思います。

よく言われているのですが、スライドいきますが、二元代表制としての地方議会というのはよく出てくるわけです。市長さんと市議会ないしは知事と県議会は両輪ですよと言っているのですけれども、実際見てみると、議員の先生方よりも市長さんや知事さんのほうが強く見えるわけですね。宮城県なんか見てみると、露骨に見えるわけですが、じゃあなんでだろうということ、実は権限が市長さんや知事さんのほうが強いものですから、法律でそうなっているものですから、どうしても市長さんや知事さんにテレビとかマスコミが集中しちゃうところがあるというのが最初の前提で理解をしていただきたいわけです。我々って、そういう情報が流れてくるほうが知っている、情報が流れてこない知

などいろんな使い方をしています。そういった使い方ができるようにオープンな空間もあり、個室空間もあり、イベント・祭りを支援できるように是非していただきたいなと思っています。

佐藤：

ありがとうございます。今の庁舎でも、支援する機能に一時的になっているという事ですか。

村山：

一時的に使っています。

佐藤：

わかりました。ありがとうございました。

洞口：

岩沼で設計事務所をしています。大学の非常勤で教えたりもして

Table A2

みんなで共有した都市ビジョンを
どう位置づけるかを、みんなでも考える

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から
「公共を担う仕組み」を考える

Table C2

低層部を中心にレジャーし、
低層部の必要機能を考える

Table A2

みんなで共有した都市ビジョンを
どう位置づけるかを、みんなで作る



Table B2

「市民と議会と行政」の関係から
「公共を担う仕組み」を考える

らないとなりがちなので、その情報が流れてくる量に差がありますよということです。

余談ですけども、実は地方議会は全国一律に思うようですが、東北と九州は全然違います。議員さんと知事さんの力も全然違います。そういうのを見ていくと、地域によって微妙な差はあるのですが、基本的には首長さんが強く議員さんが弱い。その最たる例は、その権限もあるのですが、もう1つ、知事さんや市長さんはシンクタンク抱えているわけですよ。公務員って、市職員というシンクタンクを抱えている。でも、議員さんってシンクタンクって抱えてないわけです。抱えていたらしゃると、今度は金がかかるわけですね、人を雇わなきゃいけないわけですから。そうすると、どうしても細かい話になってくると、市長さんや知事さんは、自分の部下に資料を出せと言えば、つくっているわけですよ。ですから、そちらのほうがどうしても発言権が強くなって、議員さんはちょっと、っていう話は出やすいということがあるわけです。

そうした中で、実は市民の考えと、議員さんの考えと、首長さん、市長さん、知事さんの考えと3つ民意があるのです、地方自治には。この3つの地方自治って、ずれちゃうことってよくあるわけ

います。

私が庁舎周辺エリアで関わっている件について、前半はグリーンループ仙台というイベントで市役所に実際申請を通す際の配置計画を作成したり、あとは、当日いらっしゃった方に配布するフライヤーマップの作成をしたり、また当日出店者として出店したりという部分で結構、外にいながら身近に関わらせていただいたところからお話しさせて頂きたいというのと、後半ちょっとだけですが、定禅寺通りの不動産オーナーの動きとして紹介させて頂きたいと思います。

まず、前半ですけど、これが当日配布したマップの裏側を作成しました。この時は、コンセプトとしてグリーンループということで仙台じゅうにある公園をつないで回遊できるようなイベントをするということで、グリーンループのロゴがついているイベントが色々あるんですけども、そういうワインだったり、パンだったり、コーヒーだったり、雑貨だったりというイベントが、定禅寺通りであったり、それ以外にもアースディだったり、植木市だっ

です。市長さんとか知事さんは、住んでいる住民よりももうちょっと広いエリア、例えば宮城県の話を考えても、復興なんかといったらもうちょっと広いエリアを考えますし、仙台市だったらやっぱり東北の中での仙台市というのをやるわけですよ、考えるわけです。そうすると、仙台市に住んで仙台市で育ててという、さっきの仙台っ子のところで、市外とかあんまり関係ないよという人もいれば、そうだよという人もいますので、ここでずれてきちゃうということはあるわけですね。そうすると、このずれをどうやって住民と議会とそして執行部というか市長さんのところですり合わせるか、その中で住民が直接参加する手法というのうまく使えていけばいいというふうには思うわけです。

先ほど出たエビデンスですけども、仙台市民に2015年の3月に世論調査しました。2,000人ぐらいの規模でやったので、比較的データとしては正確ですけども、市長さん、市の職員さん、市議会の先生方、信頼しますかという、とてもストレートな質問をした結果がこういう形です。市長さんは信頼しますよ、市の職員は信頼しますよというんですけど、ちょっと市議会は信頼しませんよという人は少ないわけです。それでも半分近くの人たちが、どちらかといえば信頼できるという形なので、比較的話は信頼度は低

たり、当日別のイベントだったりを同時に掲載して、最近回数を重ねてきて周辺の店舗、イベント以外の店舗にも波及してお金が落ちるような意味の波及効果も含めたイベントを目指してグリーンループというものが2017年に始まりました。こんな感じで、定禅寺通りってケヤキ並木の美しい写真ばかりが出てきますけど、基本は誰も歩いていないというところで、実際何もなければ歩いていない、日常に全く馴染んでいない、ちょっと使われていない公共施設と同じような状況になっているようなところで、ここを民間の手で活用するという事で、本当に真の人が求めているようなコンテンツが集まったイベントになっています。こんな感じで普段、人がいないところが、こんなに賑わっていてなにより『かっこいい』というところが一番大事なのでですけども、それをやっているのが、民間主導行政参加という形なのがこのイベントの特徴ですけども民間でPPPエージェントの本郷紘一さん、最近だと勾当台のライブラリーパークや、あと仙台晩翠通りのコーヒースタンドとか、小さくですが地道にどんどん大きくなっていると

行政計画の中で数値目標（そういった目標設定というもの）をしていくべきだという議論がありました。なかなかそこまでいかないところがあって、そこに「見えない」理由があると思います。

もう一つ「見えない」のは、恐らく多方面の分野、市民生活だったり、福祉だったり、文化芸術とか、あるいはまちづくり、都市計画ですね、いろいろな分野があって、分野別にいろいろな計画はつくりましても、それがうまく融合してなくてなかなか見えないという問題があります。あと今日は市役所の建替えが一つのキーワードになっていますので、市役所周辺のエリアに対してどういうビジョンを描いているのかというのが総合計画の中には入っていません。入っていないと、建替えという切り口がなかったと、そういう意味じゃなくて、そもそも分野別のそういうビジョンですか、計画をつくりましても、そのエリアごとの区別構想はありますけれども、都心はどうだとかそういったエリアごとのビジョンをはっきりと打ち出していないというのがあるのかなと思っています。

例えば、エリアごとになってくると、同時期というか、平成24年の3月に都市計画マスタープランをつくりまして、その後、都心

くはないのです。だから、議会がだめだという声は聞こえてくるのですけれども、実はデータから見るとそうではなくて、ある一定の数の、トランプもそうですけど、コアな方々とか古くからいらっしゃる方の中には、議員さんでもいい人も悪い人もいて、議会全体という仕組み自体は信頼しているという方が大勢いるという。

ただ、困った問題がありまして、同じ調査で仙台市議の先生方の専門性は低いですかと聞いたら、「はい」と答える人がたくさんいたところがちょっと、「そう思う」が35%で、「どちらかといえばそう思う」が46.5%ということは、専門的な仕事をもってほしいという市民が多いということ。だから、専門的な仕事というのは、要するに市民で参加してできるようなことではなくて、もっと議員の先生たち、より高いレベルでやってくださいという方々のほうが多いということですね。その一方で、議員さんのその議会の定数は多いですかという「多い」と答えている。ですから、このあたりと考えると、その仙台市の議員の先生方のポイントとしてみると、やっぱり専門性が高いところは市議の仕事だろうけれども、でもたくさんいるのだったらもっとそこをやってほしいと。そのあいたところに、市民の声とかをどうやっ

いう、本当に仙台にいてよかったと思える人材と思っています。このイベントのすごいところは、今までは、普通のイベントは、補助金出して回しているのですが、このイベントに補助金は一切はついていません。むしろ民間が、公園使用料を払ってやっているところがすごいところで、さらには、ローカルコンテンツ、ナショナルチェーンではなく、地元のコンテンツというものをコツコツと発掘して行ってそれを集積させて行ってマーケットを作っていくって、稼いで公園使用料を払う。普通のやり方ではなくて、本当に不動産オーナーに賃貸で払っているような感じで場所を借りて、普通に事業をやっている、という民間の不動産と同じような回し方をしています。

そんな感じで豊かな風景ができていくところ、私も本当に悔しい事ですけど、今まで建築とかまちづくりとか勉強してきたことで実際に本当にうまく使われるかどうかというのが、本当に賑わいを生むマーケットが必要だと、身をもって体感して、例えばどんなにいい建物を作ったとしてもそれを使う人がいない

とか長町と泉中央について、地域別構想という都市計画マスタープランのもう少し具体的なものとして、平成26年3月に策定しております。そこで、26年3月のときには私も局のトップとして、市民に問題提起をしようじゃないかということから、例えば定禅寺通を含むエリアとは、どういうエリアだろうというものを市民に投げ掛けて、市民と議論をしながら、あるいは一旦マスタープラン的なものをつくりましても、それは到達点じゃなくて出発点として位置づけて、そこから議論して修正できるものは修正しようということで進みました。しかし、なかなか行政計画というのは、既存の行政計画で位置づけると、なかなかそういう切り口できっかけをつくるということが受け入れられなくてしくじりました。しくじったというか挫折ですね、挫折しましたけれども、結局そこで、都心の地域別構想で、そのとき都市計画課の都市計画審議会の会長をやっていましたが、まあいいとお許しを受けましたけれども、結局市民が、いわゆる言葉を換えればエッジの利いたというか、そういったものになってきていないと、都市計画の専門用語として「都市機能の更新」とかそういったもので総花的になってしまいました。まあ、総合計画も総花的になっているので、なかなか見えないところがあります。

て入れていくかといったところが出てくるのかなということになります。

ただ、ちょっと注意してほしいのは、次のスライドに行きますけれども、鶏と卵ということで、これはいろんな研究で政治の研究でわかっていることですが、実は議員さんと市の職員さんとかの信頼感というのは、情報が多いか少ないか。さっき言ったように情報が多ければ、何やってるか知ってるから信頼できるし、あと自分が直接コミットできるかどうかで信頼度って差がつくわけですね。どういうことかということ、国会議員が、例えば今も統計の不正の問題出ていますけど、あれも聞くと、ああ国会議員みんなだめだと思っちゃう場合が多い。それはどうしてかということ、知り合いがもしあれば、俺の知っている人はちゃんとやってくれるけど、あの不正をやった人は特殊だよって見方するのですが、そういう接触がないと、まあこういってはいけないですけど、全部公務員はだめなのみたいな形の極端に振れるということがわかっています。ということは、その議員さんの数を減らせばいいって、実はこれ解決じゃない難しい問題をはらんでいるということがわかるんです。議員の数が減れば、仙台市議会の人と接触する確率は下がるわけですね。ですから、そういうふうと考えてい

とか、それを本当に活かす人がいない、ということが、今までのいろんな施設の失敗ではある、と思うので、それは建築家とかコンサルの役割はもちろんあると思いますが、そこだけでやってしまうと、実際ずれた提案になってしまったり、森ビルとかは全部、一社でやっているわけでプロジェクトマネジメントをする人が設計に対して面積が広すぎるから減らさないと予算に合わない、事業的にも無理だよ、収支が合わないよというチェックが入ったりということがおこるんですけど、そういうことがない、過剰な施設ができてしまったりとか、ということがおこるのでこういうイベントは、結構小さいながらも参考になるかなと思っています。あとは、定禅寺通りの沿道経営体という考え方ですけど、定禅寺通り自体を一つの不動産ごとの土地で見るのではなくて、通り全体で管理しようという動きがありまして、定禅寺通りの不動産オーナーさんが共同でイメージを作ろう、みたいな感じで私も共同で作ったのですが、こういう感じの長い定禅寺通りのイメージですけど、主に例えば、自転車レーンなんか

Table A2

みんなで共有した都市ビジョンを
どう位置づけるかを、みんなで考える

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から
「公共を担う仕組み」を考える

Table C2

低層部を中心にレビューし、
低層部の必要機能を考える

Table A2

みんなで共有した都市ビジョンを
どう位置づけるかを、みんな
で考える

そういう意味では、今回の都市ビジョンを考えようじゃないかというときに、市役所周辺、定禅寺通も含めて、なかなか、(市民の合意形成という問題も当然ありますけれども)市民に見えないところなのだろうと思っております。今振り返って当時の都市マスタープランを読み返してみましたけれども、なかなかそこから色が出てこないというか、そういうのはあると思います。

それで、ひとつ、遠州先生が「プロセスが重要である」ということで、そのとおりだと思っています。やっぱり問題提起をしながら、どうプロセスを構築していくか。その中で市民の合意というのが出て、これでやろうじゃないかという方向性が出てくると思います。ですから、そこがまだできていないと。そういう意味では、今日のラウンドテーブルの議論の結果も、これをどういうふうに次に結びつけていくかということは問われていると思いますし、そこが必要であろうと認識しています。自己紹介を兼ねて、また反省を込めて報告させていただきました。

手島：

率直な反省、ありがとうございます。どうでしょう、大泉さんか平野先生か迷っていますけれども、では大泉さんお願いま

す。

大泉：

皆さん、お疲れさまでございます。河北新報の記者をしております大泉と申します。生まれは宮城県の大崎市古川です。この会社に入って23年で、仙台市民歴も同じです。記者として、ずっとこのまちのいろいろな方々取材するというので、多分どちらかという今回は建築系とかまちづくり系の人たちが多くいて、ちょっと毛色が変わった人が入ってくれということでのことだと思えますけれども、今回の市役所の建替えというのを一市民として聞いた時に、まあ肅々と建替えるのだろうなと思っていました。それで、こういった場で「もっといいものを、よりちゃんとしたものを目指そう」という指向というか、そこを追求していこうという姿勢は健全だし立派だと思います。

とはいえ、一方でちょっと斜に構えた言い方ですけども、「たかが役所だよ」という、たかが役所だという気もするのです。何かそこまで仙台市役所なるものを過大に考えるというものの一方の裏返しとして、我々はちょっと行政を過大評価しているのではないかなとか、何かそういうのもちょっと考えてしまうところは

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から
「公共を担う仕組み」を考える

くと、よく「信頼を上げろ、専門性を高めろ、議員を増やせ」といったから信頼が上がるのかって、実はそうとは限らない。だから、かなりいろんなその議会だけではなくて、私たちの参加も含めて、例えばそういう住民参加の中に議員の先生方が入ってくことで、議員の先生と知り合いになると。あの議員の先生頑張っているなというところで、そういう先生もいるのだということで、その職員とないしは市長さんと議会と市民の関係というのが成り立ってくるかなと。ですから、今のところそういうような形の中であるわけです。

距離感と人物担保と書いてありますけれども、さっき言ったように情報があると距離感が近付きます。接触すると人物担保がされます。ですから、市民と議会と行政の関係、もちろん行政と市民の関係も同じです。接触すればするほど信頼が上がります、ないしはいろんな意見が入ってきます。議会も接触すればするほど入ってくるし、接触するから情報が入ってくる。さっき横山さんが言った話です。要するに、付き合っているときはすごい信頼が高い。だから、やっぱりその関係をどう構築するかというのがあるわけですね。

ただ、もう少しで話止めますけれども、実は日本の議会のあり方

というのは大混乱しています。どうしてかという、実は歴史的な経緯から考えると、日本の地方議会というのは三層構造になっています、地層みたいになっている。どういうことかという、地方はもともと、例えば仙台藩のころというのは名主さんや庄屋さんがいたわけですね。そうすると、地域のために地縁、血縁で一生懸命頑張ってくれる人がそういう代表になるものだというのがまず源流で江戸時代にできているわけです。そうすると、あの人の家はいい家だから、やっぱり町内会長やってくれとか、そういう話が出てきちゃうのは実は江戸時代の発想だと、要するに地縁ベースの考え。

明治維新になると、ドイツの大地主の人が議員になるという、ある種ドイツの仕組みが入ってきます。大地主の人たちはお金を持っていますから、ノブレス・オブリージュって聞いたことあると思いますけど、金持ちは地域のためにというあれですね。そうすると、給料をもらわないで地域のために議員やってくださいという町内会長みたいな人たちの議員像というのが、実は明治時代に入ってきます。ですから、世襲制の名主さん、庄屋さんからと、その上にちょうどまく地主制のその話が重なってきて、名主さんや庄屋さんの家とか網元とか山林王の人たちは、お給料持っている

Table C2

低層部を中心にレジェーし、
低層部の必要機能を考える

を通して公共交通にしているべく歩道は安全に歩ける、自転車は通らないようなものにするとか、ストリートファニチャーとかを入れて、歩道に豊かさがにじむようなはなしとか、というものが、不動産オーナーさんもやはり危機感を感じていて、駅にいろいろ大きいものができたりとかして、こっちの方まで価値が下がってきてしまうというので一番被害を被るのが不動産オーナーさんなので、そういう不動産オーナーさんの自らの危機感というものから、こういうやはり通り全体で何とかやっけていかないとだめだよ、という組織もちょっと始まろうとしているところの参考でした。やはり通り全体を、人が歩くわけなので、そこは沿道のオーナーさんが共同で作っていかうという動きがあるところなんです。庁舎建て替えについてもその動きとともに一緒にエリア活用を高めていくような事はできるかなと思います。

今回の庁舎建て替えにむけて低層部の役割ってどうなのかということで、本当に事務職員のためのスペースを1階に入れてしまうという事ではなくて、それは誰もわかっていると思いますけど、

庁舎のたたずまいとかあり方というものが、庁舎だけではなくてその周辺エリアにも影響するということがすごく大切なことだと思います。さらには低層部は仙台だからそのコンテンツにあふれることが大事なのかなと、私は思っていて例えば今、駅前だったり、アーケードも家賃が高くて若い人がはいてこられない、みたいな状況の時に、アーケードの突き当りの位置にある市庁舎というものがもう少し、本当の仙台の産業だったりというものを見せて、観光客が喜ぶし、仙台市民の日常に触れられるような、そういうエリアになっていったらすごくいいのではないかと思います。そういう場所をつくっていくためには、マーケット、市場を作れるという人材、これをPPPエージェントと呼んでいたりするのでですけども、そういう人が主導して進めるということがとても重要になってきます。そういう人がローカルカフェであったり、ローカルレストランとかをかつこよくやってほしい、というのが私の希望ではあります。例えば、オガール紫波町のようにPPPエージェント、今は建築の設計の人もたくさんいるし、コン

あります。ですので、市役所に求められるいろいろな機能をより市民が、「いや、うちのまちの市役所こうだよ、それがあるからこういうまちで、俺たち住んでいるまち、いいよ」って、シビックプライドとかと言われるものにつながっていくというのは、あるべき姿としてはそのとおりですけれども、一方で、それを決めるのは役所の建物だけなのかという気もするし、さらにはそれを今後議論していくときに、いろいろなこういう議論を進めていくわけでしょうけれども、すごく嫌な言い方すると、それは多分、行政職員の頭の枠を越えられないのではないかなという気も僕はしています。

いろいろな審議会をするとき、行政の人たちがその委員を決めたり、委員を決めるのもやはり役所の人、またはその議論のたたき台つくって、いや、これでいいということにしてくださいと、それでまあまあとって、いろいろな意見は出るにせよ、結果それは職員の人たちのマインドだったり指向だったりというものの枠から出ないと考えると、僕はやはりこの議論や、いい市役所をつくるためにはいい職員、いいマインドを持った職員、そういう人たちとの熱さとか何か、先ほどエッジの利いた判断とかそういうものは、やはりエッジの利いた職員がいなくてこないのか

から、議員は安くいいと。さらに、議員はご用聞きだと。わたしの代表でお上に話を伝えてくれる人というのが、実は戦前に形成されてしまうわけです。

ただ、今の仕組みは、実は戦後に入ってきた仕組みなのです。アメリカの議員さんってすごいんですね、年収2,000万円とか平気です。だけれども、10万人の都市で5~6人だという、要は本当に専門的で秘書がついて、地域のご用聞きではなくて全体のポリシーメーカー、政策つくる人、ないしはルールメーカー、法律つくる人ってようなのが議員だよと、それが戦後に入ってくる。

今困っているのは、仙台市がちょうどこれ宙ぶらりんにいるわけですね。昔の議員さんがいいなと思っている人たちは、例えば愛子とか周辺にまだいらっしゃるし、議員さんは多いからお金を使わなくていい。でも、それは戦前の発想。その一方で、議員は専門的であってほしいという、これは戦後の発想。実は、その議員さんのあり方というのが不安定の中で、いろんな改革案が出されて、実は整合性が取れていないのが今の地方議会なのです。実際に、その議会がどうあるべきかというのは、そういう議員さんに何を求めるかといったところなので、少なくともわかっていることは、

サルの方もたくさんいるという、そういう部分では十分な体制だと思うんですけどそこにPPPエージェントのような役割を担える方がどう入ってくるか、そこでどういう賃料を払ってどのくらいの面積を借りたい、とかいった具体的な話だったりとかいうところで事業を組んでいけるような事が大切だなと思います。

最近のライブラリーパークはじめ、かっこいい、稼げる、行きたい、エリア価値が上がる、というような本当に公平性とかそういうものの抜きに市民が行きたいと思える場所ってものがすごく大事だと思います。

私が危惧するのは、稼げないコンサルタント、建設費を上げたい、設計事務所、自分も含めてですけれども、のみで作られた庁舎というのは本当に、危険で持続不可能なものになってしまうのでPPPエージェント、マーケット主導による、事業性を確保されたプロジェクトマネジメントできたものをベースにして計画を進めるべきだなということを一番思います。そういう上にとっとうと本当に行きたい場所が出来てくるのではないかなと思っています。

なという気もします。何かそういう点でいうと、議論も大事だし、あとは共有という言葉が出ていますよね、「総合計画を共有する」とか、ちょっと共有は幻想があるかなと思っています。多くの市民は、「いや、いいからそれなりにつくってくれ」と思っていて、わざわざ声を出したいのはごくごく一部で、そういう人がいるのはいいですし、そういう声を取り上げるのはいいのですが、何か共有幻想もあるかなという気がします。市役所の広報に総合計画を載せて、見せましたよ、共有しましたよというのはよくありがちなことですが、本当に見たのかとか、わかったのかとか、そこに物申すのかとなると、やはりお任せ民主主義は根強いかなという気もしますね。

だからといって、こういう場に意味がないと言っているわけではなくて、一方でそういう冷めた視点でしたたかにやっていくみたいなのも必要なかなと、あえて斜に構えて言ってみました。

手島：

貴重なご意見ありがとうございます。では、まず建築関係者として、こういった会の弁護をさせてもらいたいと思います。

例えば、多分ヨーロッパとかだと教会だと思いますが、日本だと

やっぱり大都市は地域のご用聞きではなくて、やっぱりルールメーカー、ポリシーメーカーとしてやってほしい。だから先ほど出たようなデータで、その専門性を高めてほしいという。でも、それもジェネレーションで違いますけど、まだ戦前生まれの方々もいらっしゃいますから、戦前生まれの方々も議員さんってどちらかというやはりご用聞きだと。今ちょうどその端境期にある中で、このテーブルがあるということをご理解いただけるとちょうどいいのかなというふうに思います。

それが一応不要になるご用聞きという話のところにつながるんですけど、私の話は一応ここで1回切らせてもらいます。ありがとうございます。

遠藤：

ありがとうございます。歴史をさかのぼって、そういった流れが日本の議会の仕組みの中にもあるということがわかりました。不安定だけれども、何かまたすぐ新しい仕組みになりそうにもないというような感じもありますよね。

では、今河村先生から少し前提というか、少しお話いただきましたので、まず1つ目ですね、まずちょっとざっくばらんに、皆さま

佐藤：

ありがとうございます。かっこいい庁舎を作らないと、ということですね。しかも、やはり低層部は稼げる、ということで、マーケットあるいはコンテンツを計画段階からしっかりやれる人と一緒にやっていかないといけないということですね。とても重要なことだと思います。ありがとうございました。

錦織：

建築士会の錦織と申します。よろしくお願ひします。私は普段は夫と二人で小さな設計事務所を営んでおまして、大学の非常勤講師などもやっているのですが、今回ここに関わらせて頂いたきっかけは、公募枠の市民委員をさせて頂いたことです。先ほど第2回の委員会の状況も高橋さん、佐藤さんからご説明頂いたのですが、やはり、委員会でもいくつか提案していただいている建物の

Table A2

みんなで共有した都市ビジョンをどう位置づけるかを、みんな考えて

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から「公共を担う仕組み」を考える

Table C2

低層部を中心にレジャー、低層部の必要機能を考える

Table A2

みんなで共有した都市ビジョンを
どう位置づけるかを、みんなで作る

小学校は、明治維新以降、村の有志たちがお金を出し合って、地域が中心になってつくってきたという歴史があって、小学校建替えというのは、その地域の一大事でした。それで、建築関係者だから改めて思うところもありますけれども、建築をつくるときは、例えばその地域や集団の意思決定や、そのプロセスでが全部形になって見えるのです。ふだんは、例えば行政の仕組みは見えないじゃないですか。どうやって何を決めているのか、町長と、その命令に関係した人、決定に関係した人しか見えないのですけれども、建設するときはそれが見えるんですよ。誰がどう音頭をとって、誰の意見が通って、どういう形になったのかというのが全部見える。そういう意味で、ある意味で社会のあり方が象徴的に見える断面として、建設のプロセスがあるというふうに僕は思っています。

ですので、震災復興で合意形成がなぜ大切だったかということが見えています。その村の仕組みや、集落の仕組みが見える。それで、そのときに本気で参加して自分たちの意見が通ったと思っている人は、この集落を支えるということにすごく熱心になるというのが震災復興の経験としてもあります。我々としては、こう言った経験は、震災を経験した専門家としてすごく大切なことだと本当

に信じています。ですので、こういうラウンドテーブルも一生懸命、やりませんかと市にお願いをして、みんなでやりましょうということになりました。

では、震災復興にすごく詳しい平野先生、そういう紹介の仕方はいかがですか。すみません、よろしくお願いします。まず、都市ビジョンの意味と意義について、自己紹介を兼ねてまず確認をしたいというところです。

平野：

私は、土木屋でございます。ただ、土木の中で景観という分野をやっております、少しでも気持ちのいい空間をつくるだとか、そういうことをなぜか土木で、建築の人はそういうことをやっている人が多いのですが、土木でやっている人間です。

震災復興で振られましたけれども、2011年から石巻市の復興計画に、東北大学の工学研究科のチームで、建築は小野田先生に入っていていただいて、都市計画は姥浦先生で、土木は平野という、3人のコラボレーションチームで石巻市の支援を続けています。それから、女川は2012年ぐらいからでしょうか、正式には2013年、ちょっと助走期間もありましたが、それぐらいから末さんに操られて

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から
「公共を担う仕組み」を考える



Table C2

低層部を中心にレビジーし、
低層部の必要機能を考える

配置について、高野さんからもありましたけれども、資料6にある、配置計画で、どの配置にしたらいかという決め手が見つかっていない状況でして、さらに検討を進めるということで第2回は終わりました。やはりそこで考える上では、広場の存在というのは、かなり重要なものかなという風に認識し始めています。今回このラウンドテーブルに参加させて頂いたのですが、この試みというのは、非常に良い試みだと思ひまして、他の自治体でもなかなかないと思います。市役所を建替えるにあたって非常にいい流れができています。新しく高い志で市庁舎が作られた後のことを考えますと、いろいろ貴重な意見を出してもらってそれを反映させていい庁舎ができたとして、それがずっと使われ続けて自分の子供が大きくなった時にも仙台市の中心的存在として使われるためにはどうあるべきか、ということを考えています。建てる前から、こういう風に市役所について語り合う場が折角あるので建ててからも市庁舎をどう使うかということを皆さんと話し合いながら、使い方を更新していけるような場があ

ればいなと思っています。それは、やはり低層部にあった方がいいなと思ひまして、先ほど色々お話しいただいた中にもあったんですけど、私もやはり市役所の機能というのは敷地内で完結しない方がいいと思っています。いろいろな市役所の機能が、まちにどんどん出て行った方がいいんじゃないかなという風に思っています。広場と市役所の敷地内だけで完結しないような市役所の作り方というのを考えていければなと思います。その時には、敷地4面あるんですけども、東西南北、その中で建物の配置によって表裏ができるっていいことはない方がいいんじゃないかなと思います。むしろ建物が、前半の話でもありましたが、まちをつないでいくような存在であってほしいなと思います。本当に困っている人たちというのは、なかなか市役所とか、区役所の窓口に出ていくことができないと思うんですね。まちの方にサービスを分散化させていってほしいし、そういったサービスをつくりだす部分というのでも作ってほしいなと思います。サービスを市民と話し合っ作っていけるような、生まれっていくような場所を低層部

女川の復興計画・復興事業に携わっています。それ以前も、まちづくりという意味では、平泉町のまちづくりなどをずっとお手伝いしていますけれども、そういう土木屋でございます。

それで、何かから言いますか、今のお題でいうと2つだけ申し上げておきますと、ひとつ目は、「ひらがなまちづくり」の時代に、行政にできることは実はほとんどありません。ですので、行政が何か建てましたみたいな話に依存して動くのは、実はあまりクレーパーではないと思っています。まちづくりの分野は特にそうで、医療・福祉等々は行政がすごく責任を負うべきところがいっぱいあると思っています。(今は)まちづくりの世界の話です。まちづくりの世界で行政にできることは何もないと思ってまして、端的に申し上げますと、小島さんがいらっしゃって言いにくいですが、都市計画法という法律がありまして、その法律に基づいてまちづくりに行政ができることは2つしかありません。一つは、規制することです。例えば、住宅の隣に工場を建ててはだめとか、そういうことを規制することです。もう一つは、都市計画事業といいますけれども、道をつくったり公園をつくったり、要は都市計画施設と言われているものをつくる仕事です。皆さんご存じのとおり、人口減少の時代ですので、そんなにたく

ん普段議会と関わることありますか。そして、反対に行政とのかかわり、どうですかねみたいなこと、実際にどのぐらい何で関わっているのか。あと、普段そういえば自分は何を期待しているのか、してないのか。そのあたりもちょっと聞かせていただけたらと思います。

では、今野さんから行きますかね、順番で。では、3〜4分ぐらいでお願いします。

今野：

話させていただきましたけど、あの段階では実は全然議員さんも行政も関係なかったんですね。私のまちをとにかく住みよいまちにしたい、それで来ました。だから、行政も議員さんもあんまり関係なくやってきました。現実にはそうなのだけど、5年間経ってきて、やっぱり問題が突き当たってきたなというのがあります。見てみると、2〜3年前からかな、青葉山公園で、何と言ったらいいのかな、あれは。いろんな市民の声を聞きたいなことをやってくれましたよね。ああいうところに随分参加して、いろんなことを言ってきました。きたけれども、聞いてはくれるけれども、そのとおり実行はしてくれない、やっぱり自分たちが考えた

に作ればなと思います。であれば、議会は高層部にあるのではなくて、むしろ低層部にあった方がいいじゃないかなと思っています。

佐藤：

ありがとうございます。できた後も低層部の使い方をみんなで考えていながらアップデートしていくという、まさに市民協働で低層部をつくっていくということが続けていくということなのかなと思います。ありがとうございます。

山田：

都市デザインの山田と申します。もともと市の職員でいまして定年退職してもう5年がたちました。かつて市の職員でいた頃というのは、どちらかというと、都市計画、まちづくりをずっとやっております最後は復興関係で定年ということになったのですが、そういう意味でいうと、市の庁舎の中にいた人間ということで、

さん、家を建てたい人、工場を建てたい人はいないわけです。ですので、もちろん規制があるのは大事が、規制そのものが、有効には機能しません。建てようと思っている人が少ないのに規制されていてもあまり結果が出ないというのはわかりますよね。それで、当然ながら事業のほうも、人口減るのにこれ以上インフラを増やしてどうする、公園増やしてどうするという話になりますので、行政ができる手、一番まちづくりに対して持っているはずの手の都市計画法というものは、ほとんど使い物にならないというのがこれからの時代です。ですので、全く別のことを考えていかなきゃならない時代に入っているというのが私の認識です。

それに関連して言いますと、前半戦で洞口さんが頑張っていましたけれども、彼と一緒に頑張って頑張っているような民間主導のまちづくりというのがこれからは極めて重要です。その中で、清水さんという方がよくおっしゃっていますけれども、「敷地に価値なし、エリアに価値あり」ですか。まちづくりというのは、要は例えば1つのお店だとか施設がすごく人気になったとしても相乗効果が生まれません。相乗効果が生まれると、隣の施設に来た人が自分のところにも寄ってくるというような相乗効果が生まれて、要は自分だけで決め切れないことがたくさんある、そう

ことを、やっぱりそのまま通してしまっているなというのは実感としてあるのですね。今、実はいろんなことでプレーキかけたりしていることもやってはいるのですが、実感として町内会というのは、その議員さんどこまで付き合ったらいいかというのはちょっと非常に難しいです。現実に住んでいる人たちがいろんな考えを持ってますから、あんまり偏っては、例えば自民党だけに行こうとか、そういう話もなかなか難しいなというのはあって、ですけれども、実際に何かやろうとしたときに、金出してくれるのはやっぱり市でありとかという話になってくると、どこまでやんなきゃいけないかなというのほうと考えるながらやんなきゃならないかなというふうに思っています。

そんな中で、とにかく何らかの格好でいろいろ話し合いしながら吸収して行ってやりたいなどは思っていますけれども、現実問題として、先ほど県と市の違いとあっていっぱいありましたけど、私実は広瀬川の治水問題で今いっぱいぶつかっているのですけどね、これいろんなこと話していくと、行政の縦割り組織がやっぱり非常に問題だなというふうに思っています。とにかく専門性を高めるためにそうやっているのだというのはよくわかるんだけど、例えば青葉山公園のことどうするのだとか、広瀬川の治水のこと

市庁舎はどういう状況になっているかみたいな何かそういうことが少しお話しできればと思っています。

もともと最初のテーマが、論点が前回の議論を少し踏まえてみたということがあるのですが、実はそもそもシティホールと言われている市役所というのが、仙台の場合、本当に成り立っているかということもありまして、結果的に政令指定都市になって市役所本庁舎と区役所という業務に分かれたわけです。2つ一緒になって一般市のようにまちの、あるいは市としての中心的な機能を担うような、市民の方が日常的に訪れるような庁舎は、そういうのは実際にはあり得ないだろうと思っています。ですから、本庁舎の建て替えといいながらも、そこで議論で期待されているような本当に庁舎は、開かれて市民とともにというようなことが実現できるかということ、実は言葉は悪いのですが、今の庁舎は訪れる必要がない庁舎だろうと。そういう機能しか実はないのです。訪れる人はどういう人かということ、業界だったりいろんな団体であったりというような方々が日常的に顔を出す、あるいは役所の

Table A2

みんなで共有した都市ビジョンをどう位置づけるかを、みんな考えて

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から「公共を担う仕組み」を考える

Table C2

低層部を中心にレビューし、低層部の必要機能を考える

Table A2

みんなで共有した都市ビジョンを
どう位置づけるかを、みんなでも考える

いう不思議な世界です。普通の物をつくって売るとい世界だと、ほかの人がどう売っている、ライバルとして存在するかもしれないけれども、助け合っとうまくいくみたいなことはあまりない。それが、まちづくりはそちらのほうが多分多い世界なので、そういう意味においてビジョンを共有するというのは、プレーヤーたち、まちをつくっていく、施設ひとつひとつをオペレーションしていく一人一人の皆さんが同じ認識を持っていくとエリアに価値が生まれていくわけですよね。ここのエリアは、こういう性格づけをして特徴をつけていこうと、それで人を集めようというのかはビジョンがないとできない。さっきの笠間さんの話でいうと、ビジョンというよりはバリューですかね。この地域にどういうバリューを生むのか、そのためにひとつひとつみんなでも手を打とうと、そういう共通認識は確実に必要です。

例を挙げると、あれだけ全部流されたからできたのでしょうかと言われるかもしれませんが、(末さんが話をしたほうが詳しいと思いますが) 女川はもともと中心市街地が2つあるまちでした。マリナルというのがあった鷲神浜と、役場がありました女川浜という2つの浜がありました。それで、これだけ流されて、これから人口減少の時代、コンパクトシティの時代だということで、全員

議論をして、みんなで(いわばプレーヤー、実際に店を建てる人たち)議論をして、1カ所に集中するというを実現しています。これもやはり、まあ、(地元の)皆さんは石巻線に乗らないのですが、駅というシンボリックなものを中心にしながらまちづくりをしよう。要は、ばらばらにやっては共倒れになると、集中してやっていこうという、これはバリューというよりは戦略、場合によってはビジョンなのかもしれませんが、ちょっとしたレベルかわかりませんが、一緒になってやっていこうということをきちんと共有してそれぞれ、これは行政計画としては申出換地というマニアックな用語で、区画整理事業というのがやられているのですが、一人一人の地権者が「僕はあっちへ行きたい」というふうに宣言してもらわないとそれはできないのです。基本、公平性を担保するために、区画整理事業をやるときはなるべく元あった土地と同じ場所に新しい土地を用意しますよというやり方をしないといけないところを、みんなで一致団結してこっちにこうまとまって動きましようという感じで、今のところ、女川の復興まちづくりは末さんの活躍もあってそれなりに評価をいただいておりますが、そのベースにあるのは2つの市街地をひとつにしようという明快な戦略をみんなで共有できていたとい

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から
「公共を担う仕組み」を考える

を考えながらやってくれという話で、今ストップかけているような状況ですけど、さっき言ったように、県で話をすると、先ほど県知事はすごいなというふうにごうんと感じるの、ちゃんと1対1で話してくれるし、そのときに県の河川課長さんたちを置いておいて、話した後ですぐ指示するんですね。そこで展開してくれるというのがあるんですけど、まだそれは現実問題としてはなっていませんけれども、ただ我々としては現実としてどうやっていったらいいかというのが非常に悩んでいるところです。それにしても、何らかの形で格好とれるようにしていきたいなというふうには思っています。今のところはそんなところかな。

遠藤：

ありがとうございます。そうすると、計画つくるときは自分たちの意思でつくったけれども、やっぱりその後活動してくると、いろんな関係が出てきて、市も議会も普段やりとりがあるということですよね、今のお話だとね。

今野：

今見直しているという中で、やっぱり一番大きなのは、防災のこ

とでやってきたのですけれども、防災のことで、地震のことでいろんなことを対応取ってきたんですね。最近、その温暖化とか何とかで豪雨対策、そのことで広瀬川の治水の問題のことでいろいろやっているのだけど、それは県の問題と市の問題がなかなか一致なくて、今のところ進んでいないというのが1つ大きな問題としてあります。

あと、もう1つは、我々その10年前に考えたときには、私片平にいて、実は子供たちのことが、給食費払えない家族っていなかったです。でも、最近そうじゃなくなってきたんですね。人口がかなり増えてきていることも事実なのですが、卒業式とか入学式に行くと感じさせられるのです。そうすると、学校に行っている調査すると、何となく感じてくる場所があるんですね。そういう人たちのそのいわゆる先ほど子育ての話とか何とかというのはあるわけですけど、そういうことで、この第1期のところには福祉の問題は何も取り上げていなかったというのは今反省しまして、今少しずつその福祉の問題とか治水の問題とか、新たな課題として何をどういうふうにしていったらいいかなというふうに考えています。そのときに、行政とどう対応していくかというのが、かなり今悩んでいるところだという状況です。

Table C2

低層部を中心にレビジーし、
低層部の必要機能を考える

事務の事務用品の調達だとか、それから附帯的に入っている銀行とか水道局の窓口一般の方が来るというぐらいう話で、そもそも庁舎としてどういう力を持っているか、まちに対して力を持っているかという、実はないのではないかと。

そこに少し余り幻想を抱かないというのが一番かなという、何か非常にアンチテーゼみたいな話で申し訳ないんですけど、学生の頃、もう40年も前の話ですが、私の友人が一番町の土地の所有権あるいは土地利用といったらいいかもしれないのですが、どのように変遷を辿ったかというのを研究した人間がいて、明治18年に一番最初の庁舎が実は建てられたわけですね。明治20年は仙台駅、鉄道駅ができた年です。結構一番町というのは、もともと侍屋敷で今みたいな商業利用に変わったというのは有名な話ですけども、市の新しい庁舎ができたときに土地利用が動いたかという、実は全く動きませんでした。明治20年の仙台駅、鉄道駅ができたときに、パタパタと侍屋敷から商店のまちに変わっていく。必ずしもそういった要因だけで土地利用が変わったとは思っていません

けれども、少なくとも役所という機能が本当に周辺の土地を動かすぐらいうパワーがあったかという、実はない、と思っています。そういう意味で、前回の議論の中でよく出てくるのが、市民広場と定禅寺通り、市民広場と市役所の庁舎の関係であり、市庁舎そのものが定禅寺通りと一体となり、というような議論ではなくて、やはり定禅寺通りと市民広場が繋がる、その連携に市庁舎も関係を作ると、全体として新しい人の流れなり、というイメージが多分言われていると思います。

そうすると、市役所の庁舎でなくてもいいのですけれども、折角新しい庁舎が建て替わると空間が新しいものが提供できるといったときに2つぐらいうアイデアみたいな話があるのですけれども、低層階の機能として、1つは市民広場の延長になれということです。先ほど高橋さんとか村山さんも少しそういうような機能を言われたのですけれども、前回のラウンドテーブルでもお話ししたのですが、今の市民広場が非常に本来的な広場機能としては不十分なところもありますので、何が一番難しいかという、

うことがものすごく大きいのです。ですから、この仙台の中心街をどうしたいかという明快なストラテジーをやっぴり共有していかないと駄目だと思います。この市役所はものすごく重要な施設ですが、何が重要かという発生集中交通量という意味において重要なのです。これもマニアックな用語ですが、市役所は職員がたくさん働いていますので、その人が通勤する先として人が集まる場所になっている、それだけでもすごいインパクトです。その上、一応手続に来るといって市民がいっぱい来る、人を集めるものすごく重要な施設ですよ。それをどこにつくるかから本当は考えるべきで、現位置建替えの前に本当はそういう議論をちゃんとすべきだったのではないかと正直思っています。

手島：

ありがとうございます。本当に的確にいろいろ教えていただきました。

では、増田先生、お願いします。

増田：

すみません、幾つかエクスキューズをさせていただきます。先ほど小

遠藤：

ありがとうございます。とてもいろんな観点が今出てきましたですね。議会とも、議員さんともあまり党派、偏ってはお付き合いが難しいと。お金出してくれるのは市じゃないか、でもその場所によっては市が担当のものあれば県の担当もある。じゃあそこをつなぐのは議員さんなのか行政なのか民間なのかみたいな問題も出てくるということですかね。ありがとうございます。

では、谷津さんお願いします。

谷津：

仙台市では、平成11年に障害児のお母さん方の「障害のある子供にも放課後を支援する場所が必要だ」という声を受けて、議員さんも協力して下さって、障がい児の放課後ケア支援等事業の補助金の制度ができたということがあります。「ばるけ」は平成14年に立ち上げたので、仙台市内では4番目に障害児の放課後の支援を始めた団体です。そのころから、障害児の放課後支援をしている団体と、放課後ケアネットワーク仙台というのを組織し、ばるけは立ち上げからずっと今まで関わってきています。障害児の

実はイベントをやる運営主体の話ではなくて、場としての、広場としての運営主体をできるだけ明確にしたいというのが実はありまして、そういうことを踏まえたときに、青空の市民広場と連担する屋内型屋根付きの広場、そこは庁舎の低層階、グランドレベルにあって誰でも気軽に公園的に使える空間がある。つまり折角の市民広場機能をできるだけパワーアップする、というようなことという、市庁舎とは直接関係ない人たちも勝手に低層階で憩いの場としての空間を活用できると、というのが一つかなと思います。

もう一つは、折角開かれた市役所機能ということで、色々今の市庁舎の機能を考えたのですけれども、政策をこれから形成していく、立案をするという、そういう本庁機能というのが多分これからはメインになってきますし、政策を形成するために市民とどうやって関わりを持つかという、これも非常に重要になってくると思います。多分建替準備室内でも調べているかもしれませんが、市役所の中の機能でどういう人たちが来庁しているのですか、ど

鳥さんからありました、都市計画審議会の都市マスタープラン（都市マス）の話です。その後、都市マスに書いたことにより都心部で何ができるのかということを見ると、「景観計画をさわれるのではない」「地区計画があるではない」「再開発地区計画があるではないか」、都心部なら「都市の特区指定があるではないか」というぐらいの幾つかのメニューはあって、一部分では景観計画等は動いてはいるのですが、やはり大きく都心を引っ張るようなパワーは持ち得ていないということがひとつ。

もう一つ、それを立ち上げるときの発議のシステムみたいなものは、なかなかやはり行政発でない動かないようなところもあって、駅東のエリマネみたいなものもやりたいなと思って議論はしているけれども、やっぱり余り組織化がうまく進まず、なかなかうまくいかないというところがあるのが一点です。

その中で、先ほど、発生集中交通量で、ものすごく重要ですよというのがありました。もうひとつ重要なのは、仙台市は、仙台の最大の大家であり、最大の地主であるので、それなりのことをやろうと思えば幾つかのインパクトとしてはあり得るし、そういう決定権を直接持っているという直接のプレイヤーでもあるということの典型が市役所ということになります。

放課後支援の担当局の健康福祉局とは、制度をつくる時からとってもいい協働の関係をつくって、だからこそこれだけ発展してきているのだというふうに思っています。

ただ、知的遅れを伴わない発達障害のお子さんの課題が出てきて、地域の児童館にもそういうお子さんたちが増えてきているということで、障害の枠だけでは放課後を支えきれなくなってきたということで、子供未来局管轄の児童館や教育局管轄の放課後子ども教室とも、同じ子供放課後支援をしているのですが、それぞれで支援をしていたという現状がありました。そこで、子どもの放課後支援をすすめる会というのを立ち上げ、横のつながりがないところを私たちが制度や事業を超えて行政や事業所をつないで一緒に課題を考えていただいたり、勉強会に参加していただいたりしています。私は、この子供どもの放課後支援をすすめる会の立ち上げから関わっていますが、行政との協働は少しずつですがよくやれてきているなという思いがあります。

ただ、一方で障害児の放課後ケアの部分は国の制度になったことによって、仙台市ができることとできないことがはっきりと明確に出てきたため、今まで仙台市に言えば、一緒に考えて頂き改善することができていたことが、国が相手になってしまったため、

この階にどういう人が来ているのですかとか、分析し機能を探ることも重要ですよ

もう一つは、市役所の外部、附属機関と言われる組織がありますね。法律、条例等で決まっている第三者の検討機関ですね。それから協議会等と言われているのですが、庁舎の建替基本計画検討委員会みたいな外部の人間に意見を聞く法律上、その設置は義務づけられていませんけど、そういういろんな政策を立てるための審議会なり、検討委員会があります。ところで幾つぐらいあると思います？という話ですが、実は法律上とか条例で定められている審議会等が三十幾つあります。そのほかに庁舎建替検討委員会のような何とか委員会とかも結構な数があります。そういう会議が実際に行なわれる会議室、簡単に言えばですね、それと傍聴者用の席、それから今後を考えたときに、それを中継できるような、一般市民が見られるようなことができるのか、ということも含めて、今後の仙台市の政策、様々な面があるのですが、そういったところでどう議論されてそれを市民がどう目にする事ができ

Table A2

みんなで共有した都市ビジョンをどう位置づけるかを、みんな考えて

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から「公共を担う仕組み」を考える

Table C2

低層部を中心にレジャー、低層部の必要機能を考える

Table A2

みんなで共有した都市ビジョンを
どう位置づけるかを、みんなでも考える

もう一つ、「(平野先生から) 現地建替えの前にしておくべき議論」という話もありましたが、私も建替委員会の委員長でそこにもおられますけれども、逆に言うと、明治維新以降この地域で、県庁があり、市役所があり、国の出先がありというのを100年とか50年とか積み重ねていったところを捨て去る以上の理屈がどこにあるのかというのが一番大きくて、例えばもう少し前だと長町副都心の開発で、あそこを頑張って副都心にするという議論があったときに、市民病院はそちらに行くことになりましたが、究極の議論としては、都庁を新宿に動かしたように長町副都心に動かすという判断も、あの当時だったらあったのかもしれないです。でも、そういう決定は今恐らく選択肢には入ってこないということもあって、現地建替えという案が一応そこに落ちついているという、そういうことでした。

あと、先ほど経営学の話もありましたが、都市計画、建築計画、まちづくりとMBA型の経営計画、どっちの歴史が古いのかというと都市計画じゃないのと僕は個人的には思っていますけれども、残念ながらプランニングは、都市計画法という議論がある中で、ぎゅっとテリトリーをつぼめてきてしまったのをもう一回、まちづくりということで広げられないかというところで苦労している

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から
「公共を担う仕組み」を考える

仙台市に言ったとしても難しい状況になってきています。特に昨年の4月の報酬改定で、放課後等デイサービスはかなりの減収を受けて、日本全体で非常に混乱しました。そこで初めて、仙台市議会議員さんたちにお声がけをして、こういう状態にありますと、つきましては一緒に考えてほしいという勉強会を行うことでつながりを新たにつくったという経緯があります。ただ、この議員さんにつながるのも、やはりすごく悩みまして、何をどうお願いすればいいのか、おっしゃったとおり1つの会派ではなく、やっぱり超党派でやらなければいけないだろうけれども、国の制度なのでやっぱり与党が強いなどの話を聞いたりすると、仙台市の市議会議員さんたちに、国の制度に対して何を私たちはお願いすればいいのかなどかなり悩みながら今もやっているところです。なので、法治国家というところもあるので、やはりこちらとしては、問題なくやっている分には特に必要性はなかったのですが、いざというときにわかっていただくためにも、やはり日頃から、先ほど先生が言ったみたいに議員さんと関係性をつくっておくことはとても必要なかなと感じています。今回議員さんとの勉強会を行って出席率を見ても、非常に感じたところでした。以上です。

Table C2

低層部を中心にレジャーし、
低層部の必要機能を考える

るか、そういう場を1階につくるというの、これも一つありかなと実は思っていました。

ということで、本当は村山さんが言ったようなあいう機能というの実は今の市庁舎と全然関係ない機能で、仙台市役所として今後、こういう政策を世の中に聞きたい、あるいはそのセンター機能をどこかに、本当は庁舎でなくてもいいですが、どこかにつくりたいといったようなことが本当であれば、それを折角なので庁舎を建て替えるのときに入れるぐらいの考えで、それは役所として本当に今後の仙台市の中でどういう政策を重点的に市民に向けて展開していくかという、そういう思想があれば、それを中心に展開すれば事足りるのかなという気もしていました。何か、これだぞ、というのはないのですが、少し方向だけ意見を言わせていただきました。

佐藤：

ありがとうございます。かなり実務的にご提案頂いたかなと、思

ということじゃないかなと思います。

ただ、今回でいうと、私は1990年過ぎぐらいから仙台にいたのでバブルの後の話ですけれども、今の仙台ということでは、「震災復興はどうだったのか」ということをあまり振り返ることなく今まで来てしまって、もう聞き取りできる第一世代の人がいなくなっちゃったな、失敗したな、というのが一番大きな感じでもありますし、その後、新産業都市というのがこの前の議論でもありましたが、都市を東に移すという計画をずっと持ちつつ、なかなか仙台はできずに、でも今になってみると仙台港付近の重化学工業化のプラントが、あってよかったのか、なくてよかったのか、そういうことも考えると、その当時のビックビジョンが実現していたら、していなかったら、多分両方価値はあるのではないかなというふうに思っていて、その中で今何をやるべきなのかということでは、恐らく今回の建替えのこのエリアでいうと、もう県庁は建ってしまいました、国の合同庁舎も建ってしまいました、ここ周辺のエリア、いずれ全体として何を指すのかというのは多分重要になってくるので、その中でここに土地を持っている仙台市としては、こういうことをやるので、周りはついてこいとは言いませんが、一緒に何かやることを議論し始めませんか

遠藤：

谷津さん、ありがとうございます。行政との関係は良好な協働関係で、放課後の障がい児のサポートというのをされてきて、その後国の制度が変わって、今度は減収になって、そういったところで、じゃあそこで初めて市議会ということになったのですかね。やっぱり、制度上困ったから市議会と。でも、どういうふうに普段からお付き合いして理解していただいて、制度維持ですとか制度の発展に貢献してもらえかという関わり方というのが、なかなかちょっと難しいなというところですね。ありがとうございます。では、続いて緑上さんお願いします。ちょうど皆さんのお手元に資料お配りいただいていますので、こちら見ながら行政との関係、議会との関係お知らせください。

緑上：

はい。みやぎ生協では、毎年市町村の首長さん、あるいは議員さんとの懇談会というものを、みやぎ生協の組合員さんの皆さんと一緒にやらせていただいております。これ2017年度の報告で、すいません、仙台市だと市議会のところだけ抜粋してコピーしたの

うのですが、まさに純粋に市役所に期待しすぎない、経済効果というような意味での期待をあまりしすぎない方がいいのではないかとこの視点がまず一つ、市役所の機能として。ただそうはいつでも、場所としての価値というか、ポテンシャルは相当あるのではないかと、そういったときに定禅寺通と市民広場と、それを介した庁舎の中の広場といいますか、その関係をつないでいくのが一つあるのではないかと、という話と今の2階の委員会室のようなものももっとたくさんバリエーションがあって、そこで色んな審議会、市の政策に関わるような計画を市民と一緒に議論していく場所があったらいいのかな、というご提案だったかなと思います。ありがとうございました。

杉山：

東北大学の杉山と申します。基本的には大学のキャンパス計画に携わっています。仙台市との関りは色々ありますが、主なものは、杜の都の環境をつくる審議会の副会長を10年くらいさせて頂

というのが、これをきっかけにここのエリアを動かすということじゃないかなと思っています。

例の第一生命ビルのところの新聞報道が出ていたりしましたが、いろいろ考えると、実は第一生命さんからすると、「あのようことは言ってほしくなかった」とい気持ちもあるような気もして、水面下でやるべきだったという気も若干はしています。しかしいざ議論するのでぜひ、第3回では無理かもしれませんが、第4回ぐらいのラウンドテーブルには出てきていただいて、我が社の経営戦略上、どういう位置づけなのかみたいな話もむしろ提示していただいて、一緒に何ができるのかということを考えていくようなこともできればと個人的には思っています。後々調べると、浜松のアクティビティの再開発は第一生命さんが引っ張っているいろいろな再開発プランを動かしていたりもするので、ぜひそういう観点で、もう一度仙台にも目を向けていただいて、きっかけを捕まえて、こういうこともしていきたいなという、そんな気もしています。

手島：

ありがとうございます。これで一巡しまして、できれば、この都

ですが、他にもこのようにたくさんの方と一緒にご意見を伺っていただいております。生協の活動でいうと、これが多分一番議会と密接に関わっている活動ではないかなとは思いますが、この中で皆さん何を話しているのかということ、基本的にご用聞きの部分が多くなるかなという、陳情でもないですけども、あそこの通学路が危険だからぜひあそこをガードレールをつけてほしいとか、あそこは車の交通量が多いからぜひ信号をとかね、そんなお話が結構たくさん出てくるんですね。どうしてかということ、どこに言ってもいいかわからないというのが、多分皆さんのところにありまして、役所の窓口はどこだろう、信号の話は警察に行けばいいのか、建築課に行けばいいのかどこだろう、でも役所っていろいろぐるぐる回っている間にわからなくなるよね、みたいなのもあって、こういう機会に皆さん議員の方に直接訴えるということをやっている姿がよく見受けられます。

私ども、全部の市議会議員の方々にご案内状を出して、各区でやっている、宮城野区は何月何日どこで何時から開催いたしますので、ぜひご参加くださいというふうにご案内差し上げた結果が、昨年度はこの人数の参加になっております。なかなかいろんな与野党入り交じって来られるので、特に参加率がいいのは野党の方

いた間に、緑の基本計画を作る部会長を仰せつかったことでしょうか。その時の経験としては、(言葉は悪いですが)、本当に魅力的な計画がなかなか作れませんでした。というのも議会対策がメインとなるためか、10年後を目指す将来計画でありながら、10年後に達成できる可能性の高いもの、つまり、現時点で十分に熟度のある計画しか盛り込まれないのです。そうでないと、10年後にできなかったことの責任を問われるということで、庁内の調整の終わったものだけをまとめ直したものが仙台市の将来計画として世に出て行き、10年後に「達成しましたね」という評価を得て、また次の10年の計画が作られていく、というのが実態で、あまり魅力的な将来計画ではないのです。そして、それで済んでいる大きな原因というのが、市の将来計画などがほとんど市民の目にふれることなく、市民の関心事になっていないということにあるのではないのでしょうか。一方で仙台市は、これまでも脱スパイクタイヤ運動や、広瀬川や梅田川の浄化活動を様々な展開してきた輝かしい歴史があります。杜の都の環境を作る条例も、多く

市ビジョンの意味と意義というのがなかなかやっかいですが、いろいろ皆さんからこれからはこういうビジョンがあるのではないかとかということをお話いただきながら、またこの都市ビジョンの意味と意義に帰っていくというようなことで徐々に議論を広げていければなというふうに思っています。

パワポをつくっていただいた遠州先生から、まずお願いいたします。

遠州：

先ほど、手島さんのほうから、「プロセスが大事だよという話ですね」と引き取っていただきましたけれども、もう一つ重要なことがあります、そのプロセスと同時に、大事なのは現実に突きつけられている問題を正面から取り上げて議論することです。だから、その現実に突きつけられている問題ということを隠さず、表も裏も含めて全部表に出して議論するというプロセスを踏む必要があるということです。

仙台市の場合に、それがなかなかうまくできてこなかったというのは、先ほど震災復興の話がありましたけれども、それからそういうチャンスがあったことが何回かあります。例えば、1960年代

のほうが比較的参加率はいいのですけれども、議員の方の活動報告会だと、自分の意見だけ、自分の活動だけのアピールなので、他がそれをどう見ているかとか、他の議員さんがどういう活動しているかというのはなかなか目に入らないのですが、こういうふうにはいろいろな会派の方が一堂に会した場でそれぞれの活動報告を受けると、やっぱりちょっと、いろんなことをやっているんだなというのはちょっとわかってはくるので、いい活動ではないかと我ながら思っています、これ年に1回程度なので、これが終わってしまった後、皆さん議会のこと気にしていると言われると、してないんですね。結構質問も、もうそれはこの間の何かで決まったものですが、また説明したほうがいいですかみたいなのも、結構質疑応答の中であつたりとかもするので、やっぱり私どもも一生懸命こういう活動はしていますが、議会が今どんなことを議論して、どの程度まで進捗しているのかというのは、なかなか伝わってこないというのが実際の私の体感としてはあります。ぜひ、議員の皆さんはせっかく頑張っていってほしいから、その頑張りを市民の皆さんに広く知らせるような仕組みというのはつくれないのかなというのが思うところです。まとまらないですけれども、こんな形で。よろしく願いいたします。

の市民と行政が大変な努力をして先進的な条例を作り、日本の最先端を走ってきたわけですが、そうした市民協働の歴史を後世に伝える場もなく、仙台市役所に行っても、どこにもそうした市政や市民協働の歴史を学べる場所はありません。そこでお渡ししたペーパーをご覧ください。まずは、「市民中心の市役所」という言葉が、今回の建替事業のメインテーマとして掲げてあります。それは何かというと、「市民中心の市政が行われる場」ではないかと思えます。「市民の無関心、あきらめが民主主義を崩壊させる」と言われますが、先程お話しした市役所の現状というのは、まさにそれに近い状態ではないかと、つまり、市役所というのは市民が行くところではなく、ブラックボックスでいんだと考えられ、玄関廻りに市民ロビーと情報提供スペースがあればそれで良い、という発想で作られています。多分、(区役所ではなく)本庁舎で行われる重要な業務にはあまり市民は近付かないほうがよい、かかわらないほうがよい、と思っているのではないのでしょうか。その発想が端的に表れているのが、検討委員会での配布資料4で、「市

Table A2

みんなで共有した都市ビジョンを
どう位置づけるかを、みんなで作る

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から
「公共を担う仕組み」を考える

Table C2

低層部を中心にレジャーし、
低層部の必要機能を考える

Table A2

みんなで共有した都市ビジョンを
どう位置づけるかを、みんなでも考える

の終わりだと市電を廃止するということが起きたわけですね。ですから、発生集中交通量の話じゃないけれども、とにかくまちの中の人々の動きだとかそういうものを根本的に変える非常に大きな出来事だったのですが、結局はちゃんとした議論ができなかった。

それから、小島さんがおられるのでちょっと申し訳ないのですが、例えば震災の復興のときにも、私はその当時から、あのような大規模な防集などは絶対やってはいけないと思っていたし、それからそもそもそのときの決め方についても、けしからんと思っていました。なぜかという、「議論できない仕掛け」があったように思います。何かという、津波シミュレーションですね。L1とL2、つまり最大クラスの地震・津波と、それから100年なり150年なり周期でやってくる地震・津波と、それぞれに対してどう対応するかと。それで、100年なり150年周期で来るようなものについては水際で防災的に阻止しますと。それが防潮堤をつくる根拠になっているわけです。ですから、あれだけの金をつけて防潮堤をつくった以上は、L1については必ず阻止されるはずなのです。論理的には、絶対浸水しない。そうすると、あそこは数百年浸水しない場所で安全なのです。ところが、防集（防災集団移転促進

事業）をし、災害危険区域に指定して、膨大な区域について居住施設は建てさせないということになるわけです。結果として、人が住まないところを守る防潮堤をつくったわけですね。一方、その宅地を防集にかけるためのシミュレーションはL2でやるわけです。最大クラスの地震が来たときに2メートル以上浸水するところというわけですね。そこは移転の対象にしますという話になっているわけです。あの震災を受けた直後であれば、それを見せられたらみんなは怖いからそうやってしまいますよねということですから、本来は、防潮堤を本気でつくるのであれば、数百年にわたって浸水しない場所ですよと、それでも移転しますかと。移転したい人はしたらいいし、そのための施策もきちんととるけれども、要するにそこで暮らしたい人は暮らせて、L2のときにはちゃんと命は守れるという選択肢は当然あったわけで、そういうことについての議論が実はあのプロセスの中では封殺された、結果としてそういう議論はされなかったということになっているわけです。

ですので、そういうようなことをきちんと議論するかどうかが大変ということです。では、今もその突きつけられている問題がないのかというと、県知事さんが頑張っているので突きつけられて

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から
「公共を担う仕組み」を考える

遠藤：
緑上さん、その行政と生協さんの関わりというのはどうですか。

緑上：
いろんな場面で、いろんな協定を結ばせていただいて、今仙台市も昨年ですかね、包括連携協定のほうを締結させていただいて、いろんな分野において高齢者支援であったり、お子様の支援であったり、あと防災であったり、いろんな部分で一緒に活動しましょうというふうなのはいろいろやらせていただいているので、うまくいっているほうだと思いますし、市の審議会であったりとか、いろんな委員会のほうにも、みやぎ生協のほうから私どものような理事であったりとか職員であったりが委員として参加させていただいたりとかはして、いろんな場面で協働はするようには心がけてはいるところです。

遠藤：
ありがとうございます。行政ともその各種の協定と、あと各種委員会に参加してご発言されているということですね。ありがと

うございました。
では、続いて鈴木さんお願いします。

鈴木：
今回、ちょっとお声がけいただいたんですけど、多分青臭い意見を期待されていたのじゃないのかなって思ったので、ちょっとそれに乗りながらお話させていただきます。議員さんでいくと、接触が少ないというところはまず1つなのですけれども、正直面倒くさい相手としか思っていないです。先ほどの河村先生のご説明の中にあった、その専門性みたいところがまさしくそうでして、我々のところでいくと、例えば子供の貧困とか、そういった生活困窮に関わる部分の活動をしていて、予算取りにいたりですとか政策提言をしていく中で、ちょっと勉強していないのじゃないのと思うことがやっぱり多々、正直ベースでいくと感じるところであります。それは、きちんとお話ししていないから理解が深められていないということも感じつつ、議員の方が背負っていらっしゃる方というのが、その若い人を背負っているのか、高齢の方を背負っているのかという部分もちょっとあるのじゃないかなというふうには思っていて、どうしても若者や子供に対する

Table C2

低層部を中心にシミュレーションし、
低層部の必要機能を考える

民協働スペース」が「行政機能として求められる機能」ではなく、「まちの賑わいに資する庁舎の視点から…」の中の「文化交流拠点機能」に入っているところです。市民協働がいかに行政機能として重要であるのかを理解し、位置づけ、見せる、それにより、市民協働で日本の最先端を走ろうとする姿を見せることもできます。つまり、新しい仙台市役所には、この、「市民と市政をつなぐ場」が最も前面にあることが重要だろうと思います。それは、低層にするか西向きにするかといった配置や建物構成に関わらず、最も重要な「核」になると考えます。ペーパーに戻って、中央に3つの四角があります。一つ目は、「市政と市民活動の歴史から現在」です。脱スパイクタイヤ運動とか、広瀬川の清流を守る運動、梅田川の浄化、杜の都の環境を作る条例、最近では歴史的建造物保存活動ですとか、NPO、市民協働の成果がございます。そして二つ目の「都市ビジョン・将来計画の提示」は、総合計画、都市計画、緑の基本計画、震災後の海岸周辺の復興計画ですとか、公共交通へのシフトをどう考えているのかとか、省エネ、ごみ減量、環

境首都、あるいは、市役所の改築とか音楽堂をどう考えているか、といった市の計画やビジョンをきちんと示していくことです。そして最も重要なのが三つ目の「対話の場・協同/共創の場」です。(NPOによるサポートも検討頂きたいですが)、例えば月ごとにテーマを変えて、そのテーマに沿った展示やディスカッションを行い、課題を共有していく場を作る。そして月に1回くらいは市長が出てきて市民と直接対話するのも良いと思います(横浜でもかつてそのような場があったようです)。さらには、地域課題や社会課題に対する解決を探り出して議会とか議員に届ける場にもなるような。こうしたものを総括し、「せんだいシティフォーラム」といった場が仙台市役所のメインの核になるのではと。こういった「市民中心の市役所」の象徴とも言える場が市役所のフロントにパーンとあるということが必要なのではないかと、場合によっては「せんだいシティフォーラム」の一角にガラス貼りの議会があり、常時は会議室で使われても良いように思います。今の固定したひな壇形式ではなく、フラットな床にすると工夫してもらい、多用

いる問題はあるのです。女川原発の再稼働をどうするのかという話があります。それから、上下水道の民営化をしますというふうに言っているわけで、その選択が迫られています。この2つについては、選択してしまったならば、それが市民生活なり県民生活なりに与える影響というのは絶大です。同時に、そのことがもとに戻せるかという話になったときに、簡単には戻せないということなのです。しかし、そここのところを本当にみんなで議論して、一定の結論を出せば、その結論に基づいてやる、要するに暮らしのイメージ、地域のイメージ、都市のイメージというものはおのずと決まってきます。ですから、そういうことをちゃんと議論をするということによって初めて皆さんが共有できる。そのときに、例えばもうとにかく知事さんがそう決めて、それを実現するために議会で多数を頼んでやってしまいますよという話だと議論にも何もならなくて、結局その後の結果というのは、ああ、予想されたとおりになってしまったねという話になるわけで、そここのところを実際にその後大きく影響を受ける人たちが本気で議論できるような場を設定して議論するかどうかです。

市役所の話でいうと、要するに日常的な窓口業務で、市民の方がおいでくださってというような場で、市長部局の人たちがあそこ

ところとなったときに、積極的にお話を聞いてくださる議員さんもちろんいらっしゃると思うのですが、ちょっと考え方が古いと申しますか、というのも正直感じてしまう部分もあるのかなというふうには思っています。

一方、行政に関してですけれども、行政に関してはちょっと私お仕事させていただいているのが仙台市以外の自治体さんにはなるのですが、まず一面では、最初私が仕事をさせていただく中では、委託事業の出し元ぐらいにしか正直考えていない。助成金団体とはほぼ同じような部分というふうに思っていた部分がありました。それは、もちろんまず私の勉強不足というところがあるのですが、ちょっと活動を続けていたりですとか、ちょっと勉強していく中で、これは多分受ける側の問題だけではなくて、行政の中の職員の中には、こういう公共という部分を考えずに、ただ単に仕事出している方も正直いるのじゃないかなというのは感じる部分はあります。なので、宮城県さんですとか、非常にいい協働をさせていただいて、先ほどの石巻圏域子ども・若者総合相談センターというのは今年度からつくった仕組みになるので、そちらのほうは宮城県初の取り組みということで、県の方と先進事例を一緒に視察に行くところから、制度を

でいろいろ毎日仕事をしているという、そういう場なのか、それとも、今言ったような議論ができるような雰囲気をつくり出すようなものなのかどうかです。市民がそこに集って、そこでそういう議論がやれるような、そして情報も提供されるような場ですか。メディアテークはメディアテークで、ひとつのそういう役割は担うことになっていると思いますが、では新しくつくられる市役所というのはそういう位置づけを持てるかどうかという意味で、私は大事な意味を持っていると思っています。

手島：

ありがとうございます。最後のところは、実際こういった議論がどうやって、実際の政策決定などに位置づけられるか、それが実現可能なのか、という話です。それは本当に重要な話で、多分、僕らは何回でもチャレンジをするつもりではありますけれども、何回も失敗しているとやはりなかなか市民の人にも信用してもらえなくなるというところがあり、我々としてはとにかく成功させたい、成功した例をつくりたいと思っています。

多分、震災復興でもそうですね。大多数が合意形成に失敗して、何となく誰も納得しないものを膨大につくってしまったという話

つくるところから全て一緒にやらせていただいて、建てさせてもらったところではあるのですが、そうじゃない方もやっぱりいらっしゃるって、そういう部分では一緒に多分やっていかなきゃいけない、そういう我々が教えてもらう部分もちろんありますし、もちろん現場の中で我々が見ている部分で、NPOになりますと、そういった現場の声をアドボカシー、代弁していくということが非常に大事な役割だと思っているので、そういった声を代弁しながら、その行政の方と一緒に視座を上げていかなきゃいけないというのは感じながら活動しているところではございます。

遠藤：

ありがとうございます。行政の皆さんとは一緒に制度をつくったり協働していきたい。どっちかという、議員さんはちょっと勉強してないじゃないかな、というのがありましたけれども、その今ちょうど最後に、一緒に視座を上げていかなきゃいけないというご発言ありましたよね。それは行政とだけなのか、議員さんとも一緒に視座を上げていかなきゃいけないというのはあるのでしょうか。



Table A2

みんなで共有した都市ビジョンを
どう位置づけるかを、みんなで考える

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から
「公共を担う仕組み」を考える

Table C2

低層部を中心にレビューし、
低層部の必要機能を考える

Table A2

みんなで共有した都市ビジョンを
どう位置づけるかを、みんなでも考える

ではありますけれども、数は少なくとも成功例はあります。僕ら実務家の仕事としては、そういった成功例をどうつくるかだと思います。全体として眺める作業は有識者の先生たちにお任せするとして、その成功例を1個でも2個でもどうやってつくるかというのが僕らの仕事ですので、これ(ラウンドテーブル)も必ず、(そういう意味では失敗するかもしれないですが)でも絶対に成功させたい、そのためにはもうとにかくどんな労力を払ってやりたいと思っています。

どうでしょう、小島さんが平野先生が迷っていますけれども、平野先生にお願いできますか。

平野：

防潮堤の話は言いたいことがいっぱいありますけれども、やめておきます。ただ、一言だけ申し上げると、そういう合意形成の場がなかったからではなくて、被災者の方がすべからく、L2でも大丈夫な復興まちづくりをしたいとおっしゃったことが一番の原因であって、行政側が押しつけたものではないということをご理解をいただければと思います。ですから、タイミングが悪かったと言えば、タイミングが悪かったかもしれません。

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から
「公共を担う仕組み」を考える

鈴木：

そうですね。基本的に、NPOは役割というのはサービス提供というところよりは、その市民の方々と公共であったり市民社会という部分をつなげていくところに一番大きな役割があると思っていますので、それは一般市民の方もそうですし、議会の方や行政の方も含めて、一緒につなげながら地域全体としてそういう市民社会をつくっていく上での視座を上げていくというのは、全体で取り組まなきゃいけない部分だと思っています。

遠藤：

議会も行政もNPOも市民社会の皆さんも一緒に視座を上げていくということを感じているということですね。ありがとうございます。では、横山さんお願いします。

横山：

河村先生の最初のお話を聞いて、なるほどと思ったのですけれども、何で私の生活、企業活動、社会活動の中で議員さんがいないのかと思いましたが、ご用聞きは私がやっているの、議員さん

Table C2

低層部を中心にレビジーし、
低層部の必要機能を考える

途に使えらるとともに、市民が傍聴にも入りたくなるようなオープンな構成が望ましいですね。シンガポールに「シティギャラリー」という有名な施設があります。ここはシンガポールの都市開発の歴史をビジュアルに学べる場所で面積が2,400㎡ほどで無料です。年間来場者が約20万人、私も行きましたが、大変面白く、1970年代には汚れた川を浄化しつつ再開発が行われたことや、1980年代に保存や保全をはかりながら生活環境を整えてきた、といった展示物だけでなく、都市計画を実際に体験できるゲームなどがあり、ある意味でシンガポールの一つの観光資源になっています。こうした魅力的な観光資源に育つ可能性を持つ「せんだいシティフォーラム」が、仙台市の中心部、(駅前でJRが開発を進めている中で)一番町の北端に加わることができれば、ちょっと情報を見に行こう、あるいは議会を傍聴してみよう、などという気になり、一番町の人出も増えるかもしれません。ただし、本気で取り組むのであれば、運営は市ではなく、NPOなどに委託しながら「市民と市政をつなぐ場」を魅力的に運営して欲しいと思っています。

申し上げたいのは、遠州先生の話で「今そこにある危機」というのがすごく大事なキーワードだなと思って聞いていて、仙台の中心街というのは歴史的に、前半戦で安本さんが少し路面電車の話を紹介していただきましたけれども、路面電車があったから公共施設がこんなに分散して立地しているわけです。それが、たがが外れてしまって、路面電車をなくしてしまい、すかすかな市街地をつくっておきながら、今度は地下鉄ですね、2本以上ある都市で2本とも代表駅につながっている都市は仙台以外一つありません。要は、普通1本目は郊外と中心街、代表駅と郊外を結びます。2本目は、基本的には代表駅には行かないで、中心街を結んで1本目と直行する形でつくられます。名古屋もそうですし、京都もそうですし、札幌もそうです。ですので、都市内交通の中心はあくまでも中心街であり続けているのが普通の都市なのですが、仙台の東西線はなぜか代表駅を通ります。ということは、基本的に交通がまちを支配しますので、長期的に見ると、路面電車がなかったから公共施設が分散してしまったと同じように、これからの時代は確実に仙台駅中心になります。

そのときに、なぜここにしたのか、要は現位置にしたのかということから実は問題だと僕は思っていて、もしそうであるのであれば

をお願いする必要のないだと確認できました。

それから、専門性という、私自身が若いとき、青年会議所の活動のときに、例えばスポーツのこと、環境のこと、教育のこと、福祉のことを毎年テーマ別に勉強して政策提言書書いていました。そのときに、会社の名刺では入れないのですが、その青年会議所の名刺を持って行くと、市役所のどこの部署にも入れたのです。それで、部長さんでも課長さんでも係長さんでも、いろんなことを教えてくださっていて、そういう意味では一市民でもありながら、組織の人間のように動いていたので、それこそシンクタンクのように教えていただいて、逆に一緒に考えていただいてという機会がありました。ですから、私自身、それから私の周りの活動している方からすると、議員さん通さなくてもできることがあって、今その延長上で、その個人的なネットワークとして、地域で活動している中に、たまたま行政の方、たまたま議員の人は中にいますけれども、議員としてとか何かをお願いすることなく、活動をやっている1人なので、私の周りにはいる議員さんは、新年会のとときか、それから選挙の年に突然いろんな会合にいらして名刺を配って、要するに自分が普段どんなことを考えてどんな活動をしているということではなくて、顔を売る、知ってもらおうこと

佐藤：

ありがとうございます。今までお話いただいた何人かの方のアイデアを知っていたかのようにまとめていただいているところで、大変ありがとうございます。

伊藤：

東京からやってまいりました、久米設計の伊藤です。よろしくお願ひします。

この度、基本計画の策定支援業務という形で選任されまして、そしてこのテーブルにも呼ばれるという状況となっています。本日の第1回目も参加させて頂いてまして、2回目の参加という形になります。

低層部という切り口で何を言おうかと思ったのですが、経験上で申し上げると、他都市も含めて同じような議論が行われています。その一つ目のポイントは、先ほどの山田さんの方からおっしゃっ

ば、この中心市街地を守りたいという思いで現位置を選んだのであれば、交通を改めて担保し直さないと絶対に中心街たり得ません。交通網は人を集めることを自動的に決めてしまいます。人が集まっているところに商売だとかみんなを相手にする施設が成立するのは極めて当たり前のことですので、これからの時代、交通をどう集中させるか、今までは渋滞を起こして邪魔になるという話ばかりでしたけれども、これからの時代はどう集中させるか、その集中した場所を中心にちゃんとまちができていくという仕掛けをどうつくるのかが、我々が唯一、公共側にできることで、その計画が仙台駅中心になってしまった今、ではこのもともとの歴史ある中心街をどう持続可能なものにするのかというすごく重大な課題があって、少なくとも僕はこの市役所を建て替えるのであれば、それに資する交通政策とセットになって歩行者動線が回遊する拠点になるような仕組みもちゃんとつくって、要は外構のデザインです。建物の中よりも、市役所に来た人たちがどういうふうにかこのまちを、旧市街地をちゃんと回ってもらえるか、そこがものすごく大事だと思っています。

手島：

に一生懸命な方が多いので、議員の皆さんの活動を知りたくても知ることが難しいと思います。だから、そこがちょっと問題のかなと思います。

昔の私の祖父母の時代は、町内会の中から議員さんを選んでいくというのが当たり前であって、これは多分江戸時代のような庄屋さんの、あの人だったら間違いなくからとか、あの人だったら私たちの生活を知っているから、きちんとやってくれるだろうという信頼関係があって、議員さんとすごく近かったようですが、今のように普段お家の中にいる人がいない家庭が多い中で、その町内会の中からどなたか議員といっても、その人となりを知り得る場所もないし、それからマンションに中にいらっしゃる方は、特に町内会活動ができてないわけですね。あと、私は仙台銀座の町内会長なのですが、住んでいる方がほとんどいなくて、要は夕方から夜までの飲食店の経営されている方ばかりなので、町内会としての活動もできていないので、人となりを知ることが難しいのです。日常生活で政治に関ると、色がついてしまい生活に支障があるという思い込みがあるのですね。仕事をやっている、本当はそんなことないと思いますが、あの方はこっち系だから、野党になったときにどうなるのだろうか、思い込みで、やっぱ

ていただいたのですが、今回は本庁舎機能ということで、普通の区役所と市役所の概念をどうもごっちゃにされて、そのスケール感を抜きにして、形の話ばかりになってしまっているのを、一旦ちょっと整理した方がいいかなと思っていました。山田さん曰くの、「市民がほぼ来る必要のない庁舎」なるものの低層部の議論が、なぜ起きているか、というところを掘り下げるべきで、県庁とかのように、「あのような建ち方されるのはかなわないぞ」というのが、本当の皆さんの声なのではないのかなと思っています。そう意味で具体的な建ち方などのハードな話はさておき、あくまでも建つのは市役所で、低層部は行政が行うなんかしらの施設だと考えるべきだと思います。先ず低層部の3点セットというのがあります。一つ目は行政サービス機能です。今回の場合はいわゆる行政サービス機能は区役所に移管しているので、今回は関係ありません。もう一つは、市民協働交流機能です。そして、最近必ずあるのはシティブロモーション機能です。これらの機能が低層部を構成するというのが一般的かと思います。今回の場合には、行政

ありがとうございます。今のお話を聞かれるのは多分、小島さんしかないと思いますけれども、よろしいですか。

小島：

地下鉄の東西線ができた経緯とか、それは分からないので省きますけれども、実は先ほど平野先生が、このラウンドテーブルの前半の議論で、市役所の洞口君がしゃべった内容についてです。一緒に議論しながら彼がつくってくれましたが、例えば都心を見た場合に、都心ってどこまでが都心かというのは別として、仙台駅の西口で、中央通、アーケード街、一番町がございましたけれども、人の流れを見たときに、実は晩翠通から西側には行かないのです。実際に行っていない。メディアテークが一生懸命頑張っていますが、なかなかメディアテークだけでは人は流れない。

昔、西公園には、市民図書館とか、プールとか、天文台があって、いわゆる市民を惹きつけるようなコンテンツがあって流れていたということ、そこにやはり路面電車もあったということがあるのだと思います。今それが無いというのがあって、例えば私も都市計画マスタープランをつくったときの反省ですが、都市機能の集積とか、どちらかというと中央資本の開発能力、資本力を期待

りどちらにもつかないほうがいいと判断してしまうので、ご一緒することが難しいと思いますそこで、議会の窓口として、こういう問題を解決したいので議員の先生と一緒にやりたいという相談をして、きちんと与党・野党関係なく的確な議員さんをマッチングさせていただいて、その方と活動するなんてことができれば、選挙と関係なく議会とともに、議員とともに活動してできるのかなど、思います。ですから、やっぱり公の窓口をきちんと持たない限りは、政治とか選挙とか利権とか、そういうところに結びつきそうに見えるところにはみんな近付かないのですよ、近付いていきたくないですね。だから、そこを何か変えていくと、非常にいい関係ができるのかなと思います。

それから、行政の方は、やっぱり2年か3年を機にご担当が変わるということで、ご相談の方が実際に4年後にこんなことになりましたって報告に行っても、その方たちがいなかったり、プロセスは知っていても結果がわからないことが多いと思います。とか、その逆もあるわけです。その点トータルでごらんになっているのは、議員の皆さんだと思います。そういう意味では、議員さんはすごく大事な存在だと思います。

サービス機能がないですから、あくまでも先ほどのPPPとかを含めた商業的な目線もありえるかと思いますが、どうしても「稼がなきゃいけない」というものがないとすれば、基本的には行政に軸足を置いた市民協働交流機能もしくは、シティブロモーションという何かしらの機能をつくっていくことになるのだと思います。先ほど山田さんがおっしゃっていた市役所内部の委員会活動のための会議室の話とリンクするのですが、他市の事例でも同じようなことがあって、市役所のいわゆる窓口機能を全部、2階以上に持って行ってしまって、すべて1階部分は市民活動交流機能だけにしてしまうという案を提案したんです。結果的には猛反発を食らって一部でも窓口を下ろさざるを得ないという状況になって設計変更をしたという事例があります。そうってしまったその事例は別として、その時に話していたのは、市の各課がいろんな委員会や市民団体が、外の場所を借りて、協働活動の報告や市のキャンペーンであったり、その他の説明会、講習会などを結構、行われています。それを年間でかき集めるとものすごい数になる。それ

Table A2

みんなで共有した都市ビジョンをどう位置づけるかを、みんなまで考える

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から「公共を担う仕組み」を考える

Table C2

低層部を中心にレジャーし、低層部の必要機能を考える

Table A2

みんなですべて共有した都市ビジョンを
みんなですべて共有した都市ビジョンを
どう位置づけるかを、みんなですべて共有した都市ビジョンを

するような表現になってしまいましたが、実は違いますよね。例えば立町や大町で、市街地再開発事業をしようとしてもそれは無理です。

結局、市民力というのが仙台にはあるということ、脱スパイクタイヤなどがありますけれども、どうもその市民力というものに対して、認識が足りていないように思います。コミュニティ、少子高齢化という視点でみると、郊外住宅地では人口が、若い人がどんどん外に行ってしまい、私も郊外住宅の居住者ですが、高齢者等が残っており、コミュニティの活性化が難しく活力がない。しかし仙台というのは、脱スパイクタイヤに代表されるような市民力はあったんじゃないかと、地域力もあったんじゃないかと、そういったものを活かしてコミュニティの活性化をしようじゃないかと、もうそういうふうに都市ビジョン、いわゆる都市総合計画とかはなっています。しかし、(市民力を活かすべきなのは)そこだけではないと思います。もともと市民の欲求というのは、前半の議論でも木村さんが言いましたが、ジャスフェスとかあるいは光のページェントというのは、実は行政側がやってくれと言ったことは一切ない。いわゆる定禅寺通の旦那衆が、何かおもしろいことをやろうねということがあってやり始めたという

のがきっかけです。

そういった意味では、まちなかでの市民力というものも大いに期待していただろうと思っていて、そういった「市民力を活かしたまちづくり」を抜きに語れないだろうと。例えば、人の流れというものも西側に持つていくためにはとか、あるいは市役所というものも建替えをするに当たって何をと、従来型のいわゆる行政の区役所もありますから、市役所というものが単に市のヘッドクォーターとしての中核業務の拠点であるというふうになってしまうと、市民との接点は一切ないわけです。市役所前の市民広場というのは、これはまさしく市民活動の拠点みたいなものですよね。しょっちゅう何かをやっているわけです。これはやはり仙台のひとつの特徴であると思いますよね。市民広場や市民活動との結びつきという機能は、当然市役所にはあるべきだし、そういう視点でやはりその都市ビジョンというか、いわゆる市役所周辺、市役所をひとつの切り口とした都市ビジョンがどうあるべきかということも議論することによって、(今度は遠州先生にも関わってくるのかもしれませんが) どうそれをビジョンとして位置づけるかということだと思います。

ですから、ワイワイガヤガヤ、ああだこうだと言うだけでは、ちよ

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から
「公共を担う仕組み」を考える

遠藤：

ありがとうございます。横山さん自身が議員さんの活動だというのをはっと思いました。確かにおっしゃったように、議員さんとつながり方が、あっち系じゃないか、こっち系じゃないかって見られることの、また難しさというのがあるからこそ関わりづらいという。総合窓口があったらなんていうのは、ちょうど2番目の、未来志向的にどうあればいいかなというところともつながると思うので、そのあたりもこの後のお話にもつなげていきたいなと思います。

坂口先生はどうですか。普段行政と議会との関わりは。

坂口：

議会に関して言うと、僕自身は建築とか公共施設の計画とかに関わると、比較的接点がありそうなのですが、それほどなかったのですけれども、被災地の復興とかに関わり出すと、すごく向こうから電話があったりとかして、これまでは遠い存在だったものが向こうから近付いてくるということがあって、お会いすることもあったり、普通に話をするんですけど、そのときに、さっき河村先生のお話を聞いてちょっとそう思うのは、仙台市はそうじゃ

ないんですけども、東北地方でも相当平成の大合併で自治体の数が少なくなって、要するに自治体の中にも結構都市部のところと、もう限界集落は両方あって、議員さんの中でも、それは市議会の議員さんでも町村でもそうですけど、過疎の問題もやりながら中心市街地の活性化もしなきゃいけないくて、場合によってはその県とか国との調整もしなきゃいけないという形の、要するのこれまでとちょっと違って、あるステーキホルダーのある集落の代表ではないようなことが求められると。特に、その町村合併のときに、ある町とある町とある町が合併をして市になると、その中で多分いろんな境界みたいなやつもあるので、そういった意味では多分その議員に対する専門性を求めると同時に、その専門性がひよっとすると発揮しにくい局面というか、要するにやっぱり専門性でなくあるカテゴリー感、あるこの範囲の中で頑張ってくださいるときに発揮できる専門性はあると思うんですけど、両方の、例えばその過疎における子育てと都市部の子育て両方をやるということは、結構相当タスクとしては難しくなるので、そういった意味ではさっきお話があったように、それはシンクタンクをちゃんと持たせるべきなのか、あるいはそういったことにノウハウを持っているところがあるので、そういう関係をどうつくるかとい

Table C2

低層部を中心にレジャーし、
低層部の必要機能を考える

で、それを外の場所では無く市役所の1階でただやるだけで実は、ほとんど埋まってしまうという状況になると思うのです。市役所の活動を市役所の外でやるってことの意味合いもあるのかもしれないですけども、こういうイベントも含めて、すべて市役所の低層部で行っていくと考えるだけでも、結構なボリュームになる。それをガラス張りですらなくて、ある種、皆さんが求められているような、市民活動や協働みたいなものの、見える化が出来る。まさに市民と行政が交流している場がそこに現れてくるという意味では、なかなか、新しい市役所の低層部の在り方という風に見えないかなというのが、いろんな市でもよくやろうとする一つの流れかと思っています。今回の場合そこまでの議論が至ってないですけども、ポイントとしては、杉山先生がおっしゃっている、「市民と市政をつなぐ場」ということになっていて、あくまでも行政ということにある程度、軸足に置いたような低層部がきつと展開される。かつ、それが県庁のような、ああいった閉ざされたものではなくて、常に賑わいというか、活気が見えてくるような

作り方といったものが、皆さんがおそらく求めているところではないかなと感じております。

佐藤：

ありがとうございます。ちなみに大反対を食らった理由というか、なぜ1階に市民協働スペースを集めてしまうのがダメだという意見が出たのでしょうか。

伊藤：

「なんで窓口の手続きに、わざわざ2階に上がらなきゃいけないのだ？」っていう人たちです。市役所に一番必要なのは窓口サービスだということで、市民活動は別の場所でやればいいということでした。

佐藤：

わかりました。ありがとうございます。

とそれは面白くなくて、面白くないというか消化し切れないわけですから、何とか行政計画として、不本意ながらも行政計画のプロセスに対してはいろいろな意見はあるにしても、それを何とか位置づけて市役所の建替えに、「命」というべきものをどう吹き込むかということなのだと思います。そういう意味では、その切り口として見た場合に周辺のエリアをどう見るか、そのときに、いわゆる都市デザインというだけではなくて、いわゆる分野的に都市デザインというのはどうしてもハード系になるのですけれども、それだけでは足りないのだと思います。例示として、反省を込めて言えば、青葉通を再整備しましたが、藤崎から西側は人が歩かない。やはり市民力も、市民との融合というか、市民活動か、市民の欲求をどう実現させるかという融合がなかったと、私も反省しています。そういうことをしていくという意味で、都市デザインだけではなくて別な分野というのか、切り口といたらいいのでしょうか、それを入れ込んでいくということが必要なのだろうなと思います。その一つのキーワードとしては、要はデザインというよりも、市民力、市民活動というものが非常に大事じゃないかなと思っています。

そのとき、ではそれをどう整理していくかというときに、笠間さ

うことがいいのか、そもそも問題解決自体に、この前半の議論もあったのですけれども、そういう対話の場をどうやってつくるのかとか、いろんな方法があると思うのですが、少なくとも何となくその議員の専門性を求めるということは、ちょっと議員の人にも難しくなってくるところも、さっきの河村先生のお話を聞いてそう思いました。

あとは、僕自身は比較的その文化施設なんかをやると、文化の議員の人はほぼいなくて、例えば劇場活性化法とかそういった法とかに関しても、基本的には超党派の議員立法は若干あるのですが、そもそもそういった、言い方たとえば族議員みたいな人がいないカテゴリーも、これからは社会が変化してくると出てくるので、そういうときにそもそも超党派のものが存在しないような問題設定があるところを、どういうふうにするのかとか議員の人とやっていくのかということ、僕自身もちょっと考えるところかなと思っています。

あとは、これは多分その行政と仕事をする方は誰もそう思うのですけれども、いろんなことが議会のスケジュールで決まってしまう。これがちょっと相当非合理だなと思うときもやっぱりありまして、もちろん議会在が最高意思決定機関なのでそれは大事ですけ

一回りしたところで、この議論についてもう少し、他の方のご意見を聞いて付け足したいなということですか、思いついたということがありましたら、どなたでも結構です。

高野：
今の伊藤さんの話にも絡みますが、逆に言うと行政機能が区役所にいくというのであれば、割り切れると思うのです。今おっしゃった大反発食らったというのは行政機能の部分の話だと思うので、そうであれば青葉区役所というのが向かいにもある状況なので、行政機能は全部、そっちにあげて、もうここは、シティプロモーションなり、そういう、先ほど洞口さんの方からPPPエージェントの話も出しましたが、なかなか市役所で商業的なものをするという概念が今の全国的にまだないなかでどうしていくかという問題もあると思うのです。稼がないといけないというような、稼いでお金を生み出さないと、ということもある一方で、市民に開かれている、よく公共施設ではあるのですが、結局、利用料

人が言っているような、ミッション、ビジョン、バリュー、ストラテジーという流れというもの、我々リノベをやっているときも、言葉は違いますが、やはり目的があり、目的を実現するためにはどうするかという戦略があって、その戦略をするために数値目標みたいなものをどうすると（売り上げとかですね）、それを実現するために、では実践、戦術をしてどうするかと、それがないとリノベにならないよということを言われていますけれども、そういったいわゆる段階というのでしょうか、それをしていく必要があるかなと思っています。

実は、行政が弱いのは、目標設定というのが弱いのです。前から言われているのですが、なかなかそれができない。評価軸がうまくつけれないというところがあって、そこが市民に見えないというところがあるのだと思います。

手島：
的確なコメントありがとうございます。そうですね、前回のラウンドテーブルでもそうですけども、やはり仙台の特徴は何かというと、市民力という話は必ず出てきます。多分、ほかのまちでこれぐらい、行政と市民が一緒に何かをつくっている事例はな

れども、じゃあ、かといってその議会のスケジュールというもの、その社会のこういった変化にもうちょっとフレキシブルに変えていくことができれば、もうちょっと結構合理的に物事が進むのではないかなということが僕自身はちょっとあるので、その辺は少しあります。以上です。

遠藤：
ありがとうございます。やはり、今社会の課題が仙台市内や地域の枠から広域連携をしたり、テーマも多彩に深くなっている中で、そこに議員さんが本当に追いついていけるか、発揮しにくいのではないかというご意見とか、文化は得意な議員さんがいないと、そうなる鈴木さんのおっしゃったように、全体で視座を上げるようなことということ、市民の側から何か働きかける必要があるのかとか、いろいろ考えさせられるご発言がありました。

では、続いて2番目です。皆さん考えている悩みとか難しさ、そういうことを踏まえて、じゃあこういうふうな像だったらちょっといいのじゃないか、こういうような関係だったらいいのじゃないかということをご発言ください。先ほどのお話の続きからで、横山さん、議会に総合窓口的なものがあつたらいいのでは

をどこまでとれるのか、というような、市民のためのものでしょ、利用料下げなさいよ、とあるけど、下げたしまうと結局、お金稼げないよね、ということもあると思うので、その辺は専門家、要は、稼ぎ手というか、使い手という、そういう人たちの意見ももっと検討委員会、何なりにはいってもらえるといいと思うのですが。それくらい割り切ってくれてもいいのかなと思っています。議会の話でも低層にあるべきだと思っていますし、むしろ、僕の勝手なイメージですけど、議会とかだと寝てしまう方とか、あまり議論がなかなか見えないから、ということとで正直いると思うのです。それを逆手に取って見えるところで、昔県知事さんとか、市長さんがオープンな部屋を作られた方とかもいらっしやいましたけど、その議会バージョンがあつてもいいと思っていて、一方で市役所の職員の人はやはりブラックボックスって、さっき出ましたけど、実際自分たちが働く環境を考えて頂いたときに、開かれているところで集中できるか、っていう話があると思います。やはり、やるべきことはやってもらいたいから、お金を払っている以上、

Table A2

みんなで共有した都市ビジョンを
どう位置づけるかを、みんな考えて

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から
「公共を担う仕組み」を考える

Table C2

低層部を中心にレビューし、
低層部の必要機能を考える

Table A2

みんなで共有した都市ビジョンを
どう位置づけるかを、みんなでも考える

いのではないかというようなことは言われますよね。
前半でも例を出しましたが、福岡のまちビジョンの「アジアのリーダー都市ふくおか」ですが、要は、あれは多分、みんなてんてんばらばらにそこに向かっていけるような標語だと思います。仙台はそうじゃないということが何かうっすら、前回のラウンドテーブルでも、今日の話聞いても、見えてくるような気がします。何となく、青木さんたちがやっているようなことが中心になって何かをつくっていくような、行政と住民と一緒に成り立ち成熟した社会をつくっていくような、何かそういう、福岡のようなやんちゃなやり方じゃないやり方なのかという感じがしますが、何か青木さんからお願いできますか。

青木：

前半のお話のところで、洞口さんが懐の深さがあるというようなことをおっしゃっていましたが、何か歴史的な軸であったり、市民の発意とか、何か困っているといったところに包容力を持って受け止める人だったり、場だったり、そういったものがあちらこちらにあるのかなという感じが前半の議論から少し減りました。今でいうと多様性とか、社会包摂といったあたりの視点とい

うことをいろいろな分野や活動の中で享受しながら、一緒につくっていきよ、あるいはそういう関わり合いを持っていきよという姿勢がにじみ出ていることかなと思いました。ですので、少し元気のいいリーダー像があってそこに惹かれるというよりは、何となくじわっと「じゃあこれにしようか」というような、何かそういう重なり合うところを確認しながらやってみて、それに「じゃあ一緒にやろうよ」といったところで、群れるわけではないですけれども、そういったものが多様に行われているようになっているのかなという感じがします。

私たちのようなセンターの看板があると、ついで何かリーダーシップや「先に」というようなことを求められることもあり、場合によっては牽引する役割というのはあるとは思いますが、それよりもそれぞれがそれぞれらしく、できることが果たせるというような、それを応援していく土壌というのでしょうか、そういったものが仙台のまちの歴史の中で生まれてきているのかなという感じもします。

ただ、それが都市のビジョンとしてどういう、言葉として表現につながるのかというと、すぐにキーワードは見つからないのですが、そのようなことを感じました。

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から
「公共を担う仕組み」を考える

ないか、プラスもつこういうふうな議会との関わりがあると、もうちょっと議会と連携しやすいとか、何かあったらぜひ教えてください。

横山：

そもそも、議員を職業としていいのかということが問題だと思えます。議員さんは議員だけをやるという決まりがあるのですか？そうではないですよね？私は議員さんに専門性を期待しています。福祉の仕事をしている議員さん、建設業をやっている議員さん、商店街にいる議員さん、教育の現場にいる議員さんというような、その自分のなりわいであるとか、ずっとその経験したこと専門性がすごく大事だと思っていて、票を集める専門性ではなくて、ご自分のその知識、経験、それからご自分とつながっている市民の意見をやっぱりきちんと取り込んで、組み立てて議会に提案して遂行していくという、その専門性が大切だと思います。先ほど河村先生から、議会や議員の仕組みが輸入されてきたときから、いろいろ変わってきているという話をお聞きしましたが、この政令都市仙台として、それから経済だけではなく文化も教育もさまざまなことになっているこの仙台としての議

員像を、つくっていかなくてはいけないと思いました。それが、さっき私が申し上げたような、政治ではない議員としての役割として、市民に対してもっと開かれるべきだと思います。もちろん政治は大事なことで、いろいろ政党があるのも大事なことで、それはまた別なところでそういうお仕事をされればいいと思うのですが、まずはそのまちを市民とともにつくるとということに関しては、一市民としてのお顔でやっていただかないと、多分みんな怖くて近付いていけないのだと思います。

ふと思ったのですが、最近、学校を通り越して教育委員会に直接モノを言う方々とか、地域の中でもいろいろと苦情を言う方々いわゆるクレイマーが多いと聞いていますが、以前あんまり世の中で騒がれていなかったのは、そのクレイマーとかモンスターペアレンツになる前に、きちんと議員さんなどが間に入られて、上手に調整されていたのじゃないかと思うのです。今、その機能がなくなり、いろんな情報ツールのおかげで、今までは絶対に直接つながらないであろう人が直接つながることの危険性も出てきていると思うのです。それがいけないということではないのですが、やっぱり声の大きい人の声だけを取り上げてしまうとよくないというのがあって、前回のラウンドテーブルでもお話

Table C2

低層部を中心にレジャーし、
低層部の必要機能を考える

仕事には集中して頂きたいのでそこは、市民の方の理解も得られるのではないかなと思うのです。集中するものと集中しないもの、あと防災機能的な話もすれば、何か災害が起こった時に全部執務室が開かれていたら、何も機能しないわけです。その辺は、市民の理解は得やすい項目ではあると思うのでそのメリハリみたいなところをもう少し比較表でもそういったところを出していただくと機能が明確になるのかなと思いました。

佐藤：

ありがとうございます。

村山：

市役所の本庁舎と区役所の話とか色々出ましたので、少しだけ補足をさせていただきます。先ほど申し上げた通り、市民協働の旗振りをしていましたが、地域にかかわる様々な協働、地域づくりも含めて、単なる行政機能だけではなくて、そうした地域づくりに関

わる地域の区民の皆様との協働というのは、基本的に区役所に頑張ってもらおうと旗振りをしていました。区役所のまちづくり機能とか、地域づくり機能は、基本的に強化すべき方向に今あると思います。そういう前提で本庁舎は何かといわれると、本庁舎も含めてですけど、特定の地域、区に関わらず、政策横断的な、あるいは政策分野的なものには実はシフトしています。市民協働の分野で言いますと、男女協同参画、これは地域関係ないですよ。NPO活動、消費者活動、そういうものは地域協働とは別に、全庁的に応援すべきものとして中心部に施設があったり、全庁的な応援をしていくという話です。そういう意味で、市役所の新庁舎の行政部分、市民協働とかかわる部分というのは、実は前提としては多分あるのですが、資料にはそこまで書き込んでないので、一般の市役所の庁舎と同じように市民が一般的に来て賑わうとか、そうしたいろんなものがごっちゃになってしまうのではないかと思います。ほとんどの地域住民は、区役所に行くので日常的に今は、市役所に行っていないはず。では、新庁舎ができた時に誰が行

手島：ありがとうございます。では、同じような視点から一馬さんにちょっと補強してもらって宜しいでしょうか。

一馬：同じような視点じゃない話を、今準備しようとしていて……

手島：いいですよ。

先ほどの遠州先生の問いであったような、差し迫っている危機に対してどう向き合いかということと、それとその前提でおっしゃっていただいた、「みんなで目標を設定して、選択をするとか決めるというプロセス」を、都市ビジョンをつくる時に仙台という都市の中にどうインストールできるのだろうかということを考えていました。

福岡の例でいうと、(福岡市長さんとはまだお目にかかっているのですが) たまたま僕は、福岡市の今の市長さんが替わった後、

し申し上げたのですけれども、組織はまず一つ声大きい、個人は声が小さいとしても、クレーマーとかそういうことになると個人なのにもものすごく大きくなってしまいうのがあるので、それを上手に取捨選択する場所であるとか、それからその人たちの思いをきちんと聞いて誤解を解いてあげる方が間にいないと、運営とか経営がしづらと思います。その機能は、本来であればその町内とか、狭いエリアごとの議員さんとかがその役割をひょっとしたら担っていたかもしれないのですが、今それがないので、そういう社会現象が出ているのかなと思っています。以上です。

遠藤：ありがとうございます。だから、議員さんもテーマに少し特化して詳しい方がいるといいなと。プラス地域のお声を聞きながら、そこをちょっと調整して下さるような、誤解を解いて下さるような、そういう役割も議員さんにあつたらいいのではないかなという感じですかね。ありがとうございます。では、鈴木さんどうでしょう。

くのだという話になります。今、行っている人だけでいいのかというと、そうではなくて先ほど杉山先生がおっしゃったような、政策とつなぐ部分があってもいいですし、政策分野的な協働部分を市役所庁舎でやってもらった方がいいでしょう。ただ、スペースがあればいいというものではないので、役所的に一番苦手なのは、部局ごとの市民協働の分野、市政情報だったり、男女協働だったり、これを一つの塊として情報発信できるようなものがほんとは、そこに一緒にあると一番いいのですが、そこが一番難しいところなのです。多分、庁舎建て替え準備室だけでやるのは難しいと思っており、そこをどういう塊でコンテンツ機能としてそこに持ってこられるのか、そこが一番重要なところだと思っています。

佐藤：ありがとうございます。

杉山：

2013年ぐらいに福岡に何度か行きあの辺の話を聞いてきたことがあって、彼らがやったことは、福岡市役所がかなりのお金を出しているけれども、いわゆるシンクタンクを官民でつくって、その代表者は麻生セメントがなって、それで麻生さんが要するに頑張ってくれて、そこで先程の目標設定を官民でやり、それをあとはもうお互いに役割分担しながらやって、しかも世の中的にはインバウンドが来ると分かっているからインバウンドでやると決めて、実際それでやらなくたってきっとインバウンドは来たのを我々の手柄だというふうに言い、もっと護岸をつくらなくちゃいけないってコンクリートが売れるという、最高なことをやったわけですよ。

しかし、(そんなスーパー官製談合みたいなことはしなくていいと思いますが)、仙台の中で、そのようなダイナミズムや、どうやって都市として強くやっていくのかみたいなことを決められるものがなかなかないと片一方では思っています。それともちろん市民が、市民とか我々と言ったほうがいいのか、小さいことをやるというのを外側に開いてみんなで一緒にやっていくということは、もちろんまちでいっぱい起きていることではあると思うので、それも大切にしながらだけれども、何か僕は、一番初めに速

鈴木：今、横山さんのお話を聞いていて、仙台という社会の中で、どういうアクターが必要なのかというのを描いている人ってどのぐらいいるのだろうかというのはすごく思いました。それは、多分一つの社会の中にいろいろな機能であったりとか人が存在すると思うのですけれども、多分それを俯瞰して見ている人が本来行政であったりとか議員さんなのかというふうにも思うのですけれども、もちろん我々もそういう部分は見てなきやいけないと思うのですけど、ちょっと自分でも先ほどの発言を顧みながら、私でいくと子供とか若者とか教育福祉というところの側面からどうしても発言しがちですけれども、ただ自分の意見をわあわあ言っても意味がないので、全体像を理解した中で、自治体は何をやっている、行政は何をやっている、NPOはどこでとか、じゃあ産業の部分はどこになっていてとあって、そういう全体像をきちんと理解することであったりとか、勉強するという機会がほほはないなと思っていて、教育である現代社会とか公民というのは、もう暗記科目みたいなもので自分は来てしまったので、本当の実社会という部分をほとんどきちんと勉強していない中で、多分これから若い世代がこういう市民社会とか地域社会を考えていかなきゃいけない

今のお話、大変示唆に富んでいまして、病院が昔、外科病棟、内科病棟だったものが統合されたことで、総合化によるメリットもあるけど複雑になるという問題も生まれます。市役所でも、河川課の階に広瀬川関係のNPOなりの協働スペースがあり、都市計画課の階には街づくり系のNPOなりの協働スペースがある、といった形で別べつに設けるという形もあると思いますね。ただ、なかなかそうもいかないということで、やはり1階の行きやすい場所に集約し、多種多様なNPOや市民活動の交流/活動/協働スペースがある、という形なのだろうと思います。とは言え、河川に関わっている方々は、直接その階に行って打合せをすることも多いと思いますので、そうした受け皿として小さなミーティングスペースなどは、行政エリアの中に、ブラックボックスとせず、ちゃんと市民協働のスペースは用意しておく必要があるのだと思います。

佐藤：

Table A2

みんなで共有した都市ビジョンを
どう位置づけるかを、みんなでも考える

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から
「公共を担う仕組み」を考える

Table C2

低層部を中心にレジャーし、
低層部の必要機能を考える

Table A2

みんなで共有した都市ビジョンを
どう位置づけるかを、みんな
で考える

州先生が言った目標、何か選択をすることとかの場がこのまちはない、もしくはそれをずっと避けてでもずっと来たこの仙台みたいなものがあるのかなんて、今まで話を聞いていたところでございました。

すみません、司会進行の役を下りて気が楽になって、好きなことを言っています。

手島：

ありがとうございます。どうでしょう、どなたか意見がある人はどんどん言ってもらえるような形にしたいですけども、笠間さん、何かありそうなのでお願いします。

笠間：

先ほど福岡の話が出ていて、要は都市のブランディングということに近いですけれども、私はあくまでも、MBAホルダーというわけではないですけども、マーケッターとしてはやはりそのミッション、ビジョン、バリュー、ストラテジーにはこだわりたいと思っています。このフレームワークは、プロセスが大事だと同じように、やっぱりフレームワークを共有したいと思って

います。

もう少し説明をわかりやすく言ってみると、ミッションって、例えば松下電器さんだったら、あそこのミッションとは要は「誰でも家電を買えるようにする」というのがまずミッションでした。では、ビジョンはどうかといたら、「家電がまるで水道のように誰でも買えるようにする」と言っていて、それでバリューは何なのといったときに「良いものを安く」と、ストラテジーは販売店、当時は家電の販売店はなかったの、販売網を全国にやりそれでみんなに届けるといって、ミッション、ビジョン、バリュー、ストラテジーをやったと。そのときに彼らが何をやったかという、「いや、これは水道哲学です」という一言でブランディングをしたのです。我々はそういうものを水道哲学ということで皆様に貢献しますということやって、それは一言ですごくわかりやすく、みんなが「ああ、松下さんの買うとそうなんだ」ということになる。多分、仙台市のいわゆる計画が、いろいろ総合計画とか立てているものが知られていないのは、単純にその水道哲学じゃないですけども、何かしらのブランディングがあれば多分それで、(計画などが) あるのだということが皆さん認識されたとは思っています。

Table B2

「市民と議会と行政」の
関係から「公共を担う
仕組み」を考える

のですけれども、どうしてもやっぱりその部分というのを、きちんとまず全体像であったりとか、議会の役割、行政の役割というのを理解できていないというのは非常にまずハンデだなということを、ちょっとお話ししながら感じていました。

②に関してちょっと私が調べてきたというか、こういうのを今日発言したいなというところでいくと、若者議会みたいなところというのが、まずやっぱり必要だなというふうに思っています。先ほど、なりわいを経験した方が議員にというようなお話もあったかと思うのですけれども、そうなったときに、じゃあ子供のことの専門家って誰といたら、それは子供自身ですよ。本来であれば、今日この会場にも高校生であったり大学生が是非いてほしかったなというふうに思うのですけれども、ちょっと他のテーブル等もこの前見たのですけれども、やはり全然若者がいないというのは非常に問題だなというふうに思っていて、これからの公共を考えるのであれば、絶対に若者は必要だと思っていて、今日はワークショップなのだというところですけども、実際愛知の新城市ですとか、あと山形の遊佐なんかは、若者議会、少年会議みたいなものがあって、実際に予算もついて、図書館の改修についての議決をしたりですとか、そういったことをやっている

というのがあって、なかなか人口規模も違う、100万人都市と地方都市で違う部分があるので、全く同じことができるかというとなかなか難しい部分ではあるのですけれども、こういった市民社会を考えるというときに、どうしても若者がいない。それは、我々大人だけの責任ではなくて、若者側もやっぱり興味がない。

若者が興味ないのも、彼ら自身にもあるかもしれませんが、先ほどその現代社会とか公民の話をしましたけど、これまでそういった地域社会とかということは一切きちんと教わらずに来た子たちがほとんどで、じゃあその子たちが大学生とかになって、割と自由にいろいろ活動できなくなったときに、何でもいいよ、何でもやっていいよというふうに言われても、社会が何かというものをわからないのでは結構困る。そういった部分を防いでいくというか、市民としての成熟度を上げていくためにも、例えばこういった市役所を建て替えるというときのそのプロセスに若者が参加したりとか、若者議会のような形で高校生のうちからそういった社会のあり方、地域のあり方というのをきちんと権限を持って、見せかけの参加ではなくてきちんとした参画のところまで踏み込んだ設計をして、若者が地域社会をつくっていくような社会になればいいかなというふうに思っています。

Table C2

低層部を中心にレジャーし、
低層部の必要機能を考える



それで、この議論を聞いていて思ったのが、都市ビジョンといったときに、行政さんが持っているビジョンの話なのか、それとも市民全体で持っているような「この仙台という都市がどういうポジションなんだ」みたいな話なのかでは全然話が違うような気もちょっとして、もしも行政さん側としての都市ビジョンだということであればもっと具体的な話で、例えばミッションとしては商業を活性化するのがミッションですというのならば、ではビジョンとしては2つありますよねと。大手企業を誘致してグローバルにやる都市にするというのもビジョンだろうし、いやいや、中小企業を、そういう人たちがいっぱい集まって多様なお店がある、というのも一つのビジョン、そういうまちもビジョンでしょうと。じゃあ、バリューとしては、いろいろな人がチャレンジしていて、そういうアントレプレナーシップ（起業家精神）があつてとか、それだったらじゃあストラテジーとしてはそういう商業を活性化するような施策をしますみたいな形でどんどんやっていくよと、かなり具体的にイメージがつくと。これが今日、一馬さんに最初話をいただいたときにはもっと何か大きな都市ビジョンという話だったので、これが行政の範囲でのビジョンを語ればいいのか、それとも市民としてもっと大きな視点でやりたいのかなとか、

遠藤：

ありがとうございます。やはり、学校から出て、暗記で済んでいたのに、働いて会社以外のことがよくわからないって、本当にそうですね。確かにそこから私たちが勉強して、今あるっていう感じでもんね。やはり、未来のこと、子どもの専門家は子どもであるっていう、その若い人たちの議会なんかもぜひやっていきたいということですね。全国的にはやっている事例があると思いますので、そういったところも少し提案していくとかということもあるでしょう。仙台市議会も多分若い人との意見交換はやっているかと思うので、その次はまだですかね、若者議会まではまだされてないですかね。

あと、今回は若者が議員さんにインターンをする支援をする団体・ドットジェイビーさんにお声がけしたのですけれども、今日同じ日にイベントがかぶっているってということで、ちょっとご参加いただけなかったのですね。はい、ありがとうございます。

では、緑上さんお願いします。

緑上：

ありがとうございます。そういう意味では、市政へのアクセスのしやすさ、わかりやすさみたいなものがもう少し前面に出て、場所としてどこかというのは、色々あるので目的に従ったところに行くということでもいいかと思えますけど。

杉山：

その、どこに行けばいいかわかりやすい作り、という意味では、1階部分にインデックスゾーンがまずあり、そこで得られる情報よりさらに深い情報や相談が必要な場合は各階に行ってもら、といった構成が必要なのだろうと思います。

佐藤：

ありがとうございます。

伊藤：1

今回は、行政サービスの話は置いておくと、市役所って、やはり、

そこがちょっと私も途中で何かわからなくなってきた、だんだん具体的な話になったねというのはあります。

一方で、平野先生から今、要は交通の集中によってまちの中心が変わってしまうというような話があつて、それは私も実はすごく感じていて、私は商業支援をする立場でもあり、仙台市の産業振興事業団というところで相談もやっています。そうすると、これって駅前の方にどんどんいってしまうと、あの建物とかのいろいろなことを考えると、私がサポートしている中小事業者さんが非常に商いがしにくいまちになってしまうということで非常に危機感がある。一方で、先生がおっしゃったとおり、仙台市役所というところが、何千人、何万人という方があの周辺で就業されているということであると、周りに新しい役場、新庁舎もある意味で集客施設というのでしょうか、サービスをやっているような、提供しているようなそういう施設であるし、商業サービス施設みたいな視点もあると思うので、やはり私の立場としては、行政の、もしもその後、ビジョンとかの話であるのであれば、よりそういうまちの将来を見据えて、そういう具体的なことを何か一つでもやっていただけるといいのかな、というふうには思っていたところなんです。何か余り取りとめのない話でしたけれども。

未来志向的と言われて、なかなか難しいなと思ったのですけれども、やっぱり多様化というのを少し考えたほうがいいのかなとはちょっと思っていて、仙台市はそれでもまだ女性議員さんの数は多いですが、地方に行けばほぼほぼ男性というよりもおじさんの塊になってしまいますよね。今いろんな議員さんも、授乳中の議員さんがお子さん連れて議場に入ってクレームつけられたり、ちょっと喉が渴いたからのど飴なめたらすごい侮辱だと怒られたりと、結構なかなかそういうのもあつて、旧態依然としたというところがまだ多いのかなというふうには思っています。

このやっぱり多様化の、今女性だけでなくどちらでもない方々がいたりとか、障害を持った方がいたり、年齢層もさまざまであったりと、いろんな方がやっぱり議会の場にはいるべきだと思います。いろんな方の意見をやっぱり聞き入れなければ、皆さんに優しいまちづくりというのはできないのではないかなと思っていて、やっぱり普通に市に、地域に暮らしている方々の意見を取り入れた上で一緒に地域づくりができるような環境の整備というのが大事なかなというふうには思っています。

生協では、皆さんの意見を取り入れてこういう懇談会とかでもやっているのですが、今これ仙台市長さんとの懇談会もしていますし、

どうしてもサービス向上が一般的に言われます。しかし、今後、その行政サービスというのは、ほとんどネットとかで、意味がなくなってくるわけです。銀行なんかもおそらく5年以内になくなるだろうといわれていて、大手銀行の改修なんかでは、いわゆる一般的な昔の手続きのカウンターなどは、ほとんど改修し始めています。大きい個人ブースみたいなのが6ブースくらいしかないような、もう今までのサービスカウンターがない銀行になっている。ですから、サービスという概念がそもそも様変わりしたときに、市役所って何なのだといったときに、やはり今言っていた、協働や相談などといった業務が多分、メインになってくるのだと思います。だからこれからは、市役所の一丁目一番地は、行政サービスではなく、市民協働なのだと、サービスから協働へという風にイメージを変えないといけないのだと、主張したんですが、前の事例では、そこまでいかなかった。今回の場合には、まさに本庁の仕事自体が、市民との協働であったり立案であったり、協議を実はしているわけですから、それが今までなかなか見えてこなかっ

Table A2

みんなで共有した都市ビジョンをどう位置づけるかを、みんな考えて

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から「公共を担う仕組み」を考える

Table C2

低層部を中心にレジャーし、低層部の必要機能を考える

Table A2 手島：

みんなで共有した都市ビジョンを
どう位置づけるかを、みんな
で考える

ありがとうございます。末さん、何か一言お願いします。

末：
予定調和にない話を少ししたいなと思っていて、先ほど大泉さんがお任せ民主主義を肯定するようなご意見だったので、報道者からそういう話が出てくるのはちょっと驚きだったのですが、「たかが市役所」という話というのは、だから「よきに計らってもらえばいいよ」というような、そういう意識があるとまあそうなよね、というようなことを問題提起していただいたのかなとは思いますが、やはり市役所は大事ですよ。というのは、都心部のかなり大きいエリアのど真ん中を、しょうもない利用で埋めてもらっては困るという意味で、とても大事な施設だと思っています。

それで、どういう利用がされているべきなのかというところ、実は仙台市の中でも議論はされていて、リノベーションまちづくり構想というのをつくっていて、ちゃんとビジョンとしては打ち出せているとは思っています。

ただ、次のページにいくと、新総合計画の策定はまちづくり政策

局のほうでやっていて、リノベーションまちづくりのほうは都市整備局がやっていて、今回の本庁舎の建替えは財政局がやっているとこのふうになっている。それで、今日のラウンドテーブルの前半の議論では、その辺の内部の話もしていただいていたけれども、これが、放っておくとばらばらになってくるというようなことかなと思っていて、特に本庁舎の建替えの基本構想、去年つくられたのを見てみると、この辺のリノベーションまちづくりで言われている都心をどうしていくのかみたいな話にはほとんど触れられていないというところが問題だと思っていて、先ほど僕のほうから少しお話しした中で言っていたこととして、本当は複合的に課題が解決できるはずのものなのに、市役所の庁舎の建築の話だけになるというようなことが起こり得る話で、リノベーションまちづくり構想などが全然引用されていないというのは、まさにそれが起こりつつあるのかなというところが問題なので、もっと大きなビジョンを持っておくべきなんじゃないのというような話が出てきているのかなと思います。

それで、中身としては、次のページで、現状、その都心部のグラウンドレベルがどうなっているのかというのをちょっと絵として書いてみましたが、右側にある白い四角と黒い四角がそれぞれ200

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から
「公共を担う仕組み」を考える

宮城県知事さんとの懇談会というのも宮城県連の生協連のほうと一緒にやらせていただいているのですが、今回市議から国会議員になられた方から、これから市会議員から離れてしまったら、皆さんの意見を聞く機会がすごく減ったとおっしゃっていたんですね、国会議員になってしまうと。聞こえてくるのは、秘書さんとか地域の後援会の方たちの身内の方の意見がほとんどで、それじゃない方の声ってなかなか届いてこないのですというので、ぜひ生協で懇談会を開催してくださいというふうにお申し出があって、今年初めて国会議員の方と懇談会やってみることはなかったのですが、やはり議員の皆さんにもこういう生の声を届ける機会というのすごく大事なんじゃないかなというふうに思っています。

なので、私たちも声を届ける、議員の皆さんも声を拾う、その中でいろんな意見を踏まえて活動できる場をつくれればなというふうに思っていました。

やっぱり、あと行政のほうですが、先ほど横山さんも言った公の窓口、政党とか会派にこだわらないワンストップでもないですけど、結構何でもやる課とかいろんなことをやっている、ありますよね。何でもそこに行けば何とかしてくれるみたいな、1つの窓口というものがあつたら、市民の皆さんもより一層声を上げやす

くなるのではないかなと、お話を聞いて思っていました。以上になります。

遠藤：

緑上さん、ありがとうございます。やっぱり議員さんいろいろな方がいたほうが、いろんなご理解とか進むのじゃないかという点では、さっき横山さんが言ってくださったいろんななりわいの方、専門性を持つ方ということもそうですし、鈴木さんがおっしゃってくださった若い人たちが若者議会をやるというの、若い人の意見をきちんと聞くということですね。そういう意味では、今その議員さんに集まっている声の多様性が実は足りないのじゃないかということも考えられますね。そうすると、場合によっては、先ほど冒頭で先生がおっしゃっていただいたような、少し議員改革のようなことも含めて、この市の庁舎のあり方と一緒に考える必要があるのかもしれないですよ。ありがとうございました。

では、谷津さんお願いいたします。

谷津：

皆さんのお話を聞いていて、いろいろ考えたのですけれども、ま

Table C2

低層部を中心にレジャーし、
低層部の必要機能を考える

た。杉山先生がおっしゃっていた、ブラックボックス化したものをいかに見える化するのかという、ショールーム化することによってそれらの活動状況自体が、ある種シティブロモーションに繋がっていくのだと思うのです。そういう風に市役所のつくり自体が、ガラッと変わっていけば、いいのではないかと考えています。ただ、市役所自体が、各課の理論を優先し、「うちの占有スペース」という概念を持ち続けられると、それはなかなか難しい。市役所は、あくまでもワークスペースと協働スペースで構成して、市民と交流する時は、1階、2階でやるのだということが、運用も含め、何かしらプログラムが組めれば、ちょっと他にはない、ショールーム化した、行政の仕事が見える、市民協働が見える、これらかの市役所の形が見えるかなと、今ちょっと思ったりもしています。

佐藤：

ありがとうございます。

山田：

ちょっと的外れの話をするかもしれないですけど、実は先ほどお話をした各種審議会をできるだけ1カ所で市民の方がそれに接触できると思いますか、参加できるようになるということをお話しましたが、実は重要なことは、中継みたいな形がどんどんオープンになっていくかどうかということにかかっている、例えばここにいらっしゃる方で議会の傍聴に行ったことありますか？みたいなことを聞くと、実はほとんどないだろうと思います。

ところが、こういう議論をすると、開かれた議会になってもらわなきゃ困るとか、こういうわけですけれども、仕組みからいっても、かつては議会の中継というのは役所の中、庁舎の中でも局長室にある専用のテレビで中継が見られるというのが最初のスタートで、今はネット配信されていますのでライブ中継が、職員によっては自分の机の上のパソコンで見られるということになるわけです。そうすると、担当者も含めてうちの課長、何か格好いいこと言っていたけれども議会の答弁は、あんなものかということも実は起

メートルずつなので、大体400メートルぐらいを表しています。そういう意味では、仙台駅とか勾当台公園とか市庁舎のところまでは直線距離で大体1キロぐらいで、西公園までが大体2キロというふうなぐあいですよ。歩くとき大体30分圏という感じですけども、ここの中が歩いて楽しいかどうかというところがあって、グランドレベルがちゃんと表に開放されているまちというのが多分楽しいまちということになるのだと思います。そこら辺をリノベーションまちづくり構想なんかでもやっていきたいと思いますという話はされていて、市庁舎とか、定禅寺通り南側のところに主に目がいって、つくっていた当時はそういうものが出ていた。ただ、今回、市庁舎を現位置で建て替えましょうという話になったのであれば、それをきっかけとして、さらにこの都心部をどうしていくのかというところを考えられるはずですよ。

次のページに、勝手に「仙台都心部の開放されたグランドレベル」と書いていますが、20XX年にはもう少し、現状よりは地面のレベルにいろいろなものが出てきていて、そこでいろいろな活動が行われている。マンションの1階部分の閉じられたロビーというのではなくて、そこでも何らかの人の活動が見えたり、あ

ず私たち自身が行政との付き合い方を学ぶ、学ぶというか変えていくのがすごく大事なと思っています。というのも、やはりどうしても行政と対立の構図になってしまうと、仙台市の職員皆さんはディフェンスをかためて、何を言われるのだからこの人からとか、今度は何を要望されるのだみたいに構えてしまがちで初めましての行政の方で構えてしまうことがあるのです。そうではなく、私たちは別に闘いたいわけではなく、一緒に問題を考えてほしいという対等の関係など、協働のあり方とかという部分はやっぱりもっともっと市民の力で成熟していくべきだろうとは思っています。

そう考えたときに、行政との連携とか協働は、私はこれまでずっと仲間と一緒にうまくやってくることができたというふうにして、そう考えると行政と議会ってどういう関係性なのだろうというのはとても気になります。例えば、私たちは行政の方たちに課題とか現状とかお話をし、要望書も出しているのだから、そのわかっている行政の方が、じゃあこの議員さんと一緒に考えてもらおうなどつないでもらうことによって、私たちが超党派を気にせず、議員さんをご紹介いただいて、日頃から一緒に考えていただいくということができるといいのではないかな

こり得るわけです。同じように、いろんな審議会の議論が限られた人しか傍聴できないような仕組みでいるのが、日常的にその議論が中継をされて市役所に行けばその中継が見られるという、あるいは本当は各家庭で見られればいいのですが、見られるということが実は議論を深めるというか、その委員の方も、こんな発言をしたぞというようなことが、知り合いの一般市民の方から言われましたとか、そういうお互いに刺激を持つことで、いろんな政策の議論がより深まるかなと思います。そういう意味で、フロアのどこにとか、ガラス張りであるとか、そういうことは別に情報をどうやって日常的な場面でオープンにできていくかと、こういう仕組みのほうも結構大事かなと思います。

それからもう一つ全然議論になってきませんが、市役所のまちへの影響という意味でいうと、実は職員の数というのが非常に大きな意味を持ちます。かつて今の市役所をほかの場所に移転するかもしれないと言ったときに、一番町から早速反対の声が上がりました。それはあれだけの人数の昼飯を食べてもらった人がいなく

るいは市庁舎の1階レベルが南側の市民広場とつながってやられていたり、そういったことが徒歩であったり自転車であったりというふうなところで回れるようになっていくというふうな、そういうまちであれば楽しいですよというふうなところが共有されてきたりするといえ、そういうことを交通の面からも、都市整備の面からも、こういった市庁舎のような公共建築物の建築という面からも、それぞれ一つの歩いて楽しいまちをつくってほしいというふうな、そういうビジョンに向かって、それぞれができることをやっていって、それぞれが連携していくというふうな、そういう形ができてくるというのがいいのではないかなと思っています。

ですので、そういったきっかけになるはずの大きな事業であるので、そういったことも、建替えの建築計画そのもの以外の分野とのつなぎ方とかいうのも、財政局の施策ではありますけれども、やっていただきたいというのが仙台市民としての思いであります。

手島：ありがとうございます。具体的に、まちづくりのビジョンとい

いうのを、今お話を聞いて思いました。やはり、私も横山さんが言ったように、NPOというのがあるので、一市民としてはやってもいいのだと思うのですが、NPO法人として政治活動をしていると誤解を受けてしまうのではないかと、やっぱり怖いと思ってしまいます。議員さんの発言などはとても興味関心を持って見ますし、選挙のときはどういう思いで選挙に臨むのかとか、どういうマニフェストを持っているのかなというのを見て投票しているつもりですが、会派を超えられるとよりよい関係をつくれるかなと思います。

あとは、エネルギーを使ってつながるというのは、できる人できない人がいるので、日常の中で何か知らないうちに気づいたらつながっていたとか、無理をしないで生活の動線の中に組み込まれていくと、構えずに良き関係とかをつくれるのかなというのは改めて思いました。

遠藤：ありがとうございます。やはり、NPOの皆さん、行政と協働でいろんな施策を進めて協働でやっているときに、そのやり始めってやっぱりお互いの文化が違うし、言葉も違うし、持っているお

なるとか、夜の飲み会がパツとなくなって違う場所に行ってしまう、これは非常に大きな話で消費者としての非常に大きな塊を市役所は抱えているわけで、外に職員が出歩くようにならなくて庁舎の中で自己完結型になってしまうと、これもまたひどい話で、確かに福利厚生で食堂をちゃんとつくっていきましょうというのもあるでしょうけれども、別の見方で地域との繋がりというのは、実は職員の相当な人数による大きな消費ボリュームといえますか、それはまちとの影響があるのかなと思います。だから、庁舎の中にサービス機能で入れるものも少しそういう観点で考えたほうがいいかなと。地域の人も商売になるような、ということかなと思います。

佐藤：ありがとうございます。

杉山：

Table A2

みんなで共有した都市ビジョンを
どう位置づけるかを、みんな考えて

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から
「公共を担う仕組み」を考える

Table C2

低層部を中心にレジャーし、
低層部の必要機能を考える

Table A2

みんなで共有した都市ビジョンをどう位置づけるかを、みんなでも考える

ますか、そういったものを示していただいたと思います。縦割りの話でいうと、まさにそのとおりですね。行政機構上とか、しょうがないのかもしれませんがね。役割分担をしなくては、全部をやるひとはいないですからね。市長が全部やるかといったら、それは絶対やれないでしょうがないのですけれども。でも、それを役所内での違うプロジェクトが、あるいは民か官か関係なく違うばらばらなプロジェクトが、「10年後にどこか同じところにたどり着きたい」というために必要なのが都市ビジョンなのかと思うので、そういう意味では今の話はもしかするとまちづくりの都市ビジョンとしてはすごくわかりやすく、あるいはそれが実現もしやすいというような話だったのかなと思います。さて、その話を受けてどなたか。大泉さん、よろしいですか。

大泉：

今日の役割が、建築ご専門の方々が多いので、あえて第一球に「たかが市役所」と、「たかが総合計画」と言ったのですが、でも一方で実はあるのは、やはり「されど」なのだと思います。

それで、皆さんある意味プロの方なので、こういった建替えのまちに対するインパクトが、単なるハードだけではなくて、交通動

線だけではなくて、いろいろなものに波及するがゆえにちゃんとしなくちゃいけないということはそのとおりだと思います。一方で、そういったことに関しての素人的感覚でいうと、ある意味、専門家の方々の意見を素人は越えないから、専門家の人に任せればいいよね、というのが一方であるような気がします。建築は建築の人、土木は土木の人がいるし、大学の先生もいるし、その人に任せておけばいいじゃないというのと、皆さんが今おっしゃっている、みんなと共有したいだとか、みんなの思いを束ねていきたいというプロセスが何かうまく噛み合う方法を考えたいなと僕は思っています。先ほどからの震災の復興の現場でのお話は、それこそ現実に突きつけられた「俺たちどうするんだ」というのがあるからみんなが議論に関わって、ある意味で本気の議論ができたと思うのですが、逆に言うと、こういう市役所は、関心はあるかもしれないけれども、本気になるには何か人ごとっぽい感じがあり、その熱だとか、本気度だとか、そういったのを喚起するためには何ができるのだろうか。

それで、我々が報道の立場でたまにあるのは、「こんな市役所でないんですか」、「これって、こんなふうにはどうっておいたら大変なことになりますね」みたいな、ある意味すごくどぎつい、「もう仙

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から「公共を担う仕組み」を考える

金の量ですとかスタッフ体制も違うので、やっぱり戸惑うことだらけですね。ですから、そういったときの最初に学ぶ機会があるといいのじゃないか、行政と。

谷津：

私たち自身が、行政とどう、対立ではなくて良い協働関係をつくるためにはどうすればいいのかという心構えとかを学びたいというか、こっち側の問題ですね。

遠藤：

NPO法人は政治活動はしちゃいけないというのがあるので、どの程度議員さんと接触していいのかもちょっと怖い。もしかしたら何か指摘されて、特に谷津さんの団体は認定を取得されていますから、認定取り消しなんてなったらちょっと困りますよね。そうなる余計ちょっとタッチしづらい。そういったところで、個人は応援したい、でも党派ではなく、そこを超える何か仕組みが、その未来型で何か考えられないかということですかね。

河村先生に1つ、今谷津さんのご質問の中で、市と協働していると、良好に協働していて、それが議員さんとどうつながっているのだ

ろうか、市役所の中で、議員さんと行政マン。行政の方と谷津さんは協働していると。行政は議員さんとその協働事業の中でどうつながっているのかというのはどうなのでしょう。

河村：

基本的には、現場の人に聞いたほうが多分わかると思いますけれども、ただ基本的に現場の方々の中で、要するに議会で、例えば条例とか予算の場合は賛成してもらわなきゃいけないわけですから、きちんとブリーフィングをして資料を出して、こういう協働をやっていますとご説明をして、でも困るのは全員が聞きわけがいいとは限らないので、皆さん徹夜で資料をつくって頑張っているというのが実態だと思いますし、ただ政党によっては、上とつながって国会議員のほうに情報を流して、政党のほうから情報を流してもらって、逆にいうと仙台市から国へ何か言わなきゃいけないというときに、当然国の担当部局だけではなくて政治の、いわゆる国会議員の筋のほうとか政党の筋のほうにやっぱり連絡してもらってメッセンジャーをやってもらっているというのが実態だと思うのですよね。

ただ、認定をもらっている団体とかっていうのは、むしろ全部の

Table C2

低層部を中心にレジャーし、低層部の必要機能を考える

議会の話が出ましたので…。今の議会が面白くない大きな原因は、委員会で議論を行い、その結果報告を議会でして採決して終わり、というのがほとんどだからです。議会の開催方法は各自治体で決められますので、議会を議論する場にするとか、イギリスの市議会などのように、傍聴に来ている市民に意見を求めるとか、それによって市民が参加しよう、傍聴しようという気を起こさせる、様々な改革を行う必要があると思います。

今回の新しい市役所の議会のことをどうするのか、という議論についても、議会の特別委員会の中でのみ行われていて、(このラウンドテーブルがつながっている) 検討委員会では、議会のあり方の検討ができないんですよ。新しい議会の姿について議会の特別委員会は何を考えているか、広く公開して市民の意見もフィードバックさせながら進めていってほしいと思います。

佐藤：

ありがとうございます。

伊藤：

ここに議会をよんだらいいのではないのでしょうか？ 皆さんが選んだ議員ですから

佐藤：

事務局として、お声掛けはしたようです。

錦織：

議会の話が出ていたのでそこからですけど、やはり私も低層部にあった方がいいと思っているのですが、その議会のそもそもの起源は、広場に集まってみんなで話し合って決めるところからきている訳で、今回の計画では広場も結構重要な市役所に近いところにあるのでそういう意味では低層部にあるのがいいのかなと思っています。私も今回初めて検討委員会の委員になって庁舎を訪れたという経緯がありまして、やはり来たことがない人がすごく多

台市役所、ピンクになるんだって」というような、そうするとみんなが「杜の都に合うわけないだろう」という話になったり、何かよほどの変化、または「これすごいよね」と、「世界に誇れるよね」というような話だとみんなが乗ってくるか、ある意味、すごくバラ色か、すごくだめかじゃないと多くの人がスルーするような気もしています。

専門家の方々だけに任せなくてもいいのだとみんなが思えるためには何ができるのかなという、その「たかが市役所」と言ったのは、そう思われてしまうもったいなさは回避したほうがいいと思うのです。ですから、最初に「たかが市役所、されど市役所」と一緒に言ってしまうばよかったのですけれども、「たかが」だけを言ったので、曲解されてしまいました、やはりそこをみんなでちゃんとやっていくために、我々メディアとしても、そこは議論の場にならずにちゃいけなし、それを専門家の議論だけにしないためのわかりやすい表現を専門家の方々と一緒に考えなきゃいけないですし、そういう役割こそ地元紙の役割なのだろうと思います。本当に「たかが市役所」だと思って紙面をつくるわけでは多分ないと思います。

議員さんたちをお願いをする形をとって、反応してくれるかどうかだけという形で、こちら側が絞るのではなくて、先ほど生協のやられているように、皆さんどうぞというやり方が基本的だとは思っていますね。そうすれば、行政の側からすると、行政も政治的中立ってありますし、実際新幹線のときには、与野党ともに国に陳情に行くのです。国に関わるような話は、むしろ与野党でもう合意して、これは大事なのだという圧力をかけたほうが、キャリア官僚の人たちは逆に動くというのが過去の事例であるので、だからそうして考えると、特に復興なんかそうですね、今。復興は、もうどうしようどうしよう、政治的に関わっちゃまずいかな、ではなくて、もう議員の先生方皆さん、すいませんお願いします、ご協力くださいという形で、そこがまさに地域丸となってやるときに議員さんを使う必要があるし、やっぱり議員さんってもう1つはオピニオンリーダーという側面があるのです。だから、とりあえず行政とこうやっていると、団体と行政の間はすごい密になっていくのですけど、他の市民に訴える力というのは、実はそれほど見えてこない。こういう会もそうですけど、議員さんが出て、議員さんが何か言って、河北新報がニュースに書いて、一気に拡散をするということを見ると、やっぱりそういう議員

だと思います。それはどういう風に本庁舎を使えばいいか、わからないということが一つあると思います。来たことのない人に対しても、どういう風に使いこなしていけばいいのかのマニュアルづくりを、さっきのギャラリーというので空間として展示として見せるというのがありますし、WEBのコンテンツとして、また動画として書籍として広める必要があるのかなと感じています。皆さんの話を聞いて、窓口がなくなっていく、という話も出ていましたが、

新しい仕組みとか市庁舎の在り方を決めるいいタイミングだと感じていて、それを現実化するためにはどういうチームなり、検討委員会もあるのですが、組織を作っていくのかをうかがってみたいと思いました。

佐藤：
それは市の方に聞いてみるという感じですか。

手島：
ありがとうございます。本来は、ファシリテーターはあまり自分の意見を言うべきじゃないのですが、僕はももとの出身が岡山で、どちらかというとなんとなく個人がどんどんやっていくべきだと思っているほうの生まれだったのですが、震災復興でいろいろお手伝いをしていて思うのは、やはり西の、例えば福岡を比較に出しましたけれども、彼らは例えば勝手勝手に自分の利益を追求してやっていくのがすごく得意だと思うのです。土地柄もそうだし、実際友達を見てもそうなのです。それで震災復興を見ていると、東北の強みとは、共同体の中で何かひとつの結論を導くノウハウだと思っていて、そういう静かな合意形成で地域を運営する能力はすごいと思います。大阪でこれをやれといっても絶対できない。それが多分、この地域の力だと思います。

それで、僕がやはり「都市ビジョン」をこの市役所建設に活かしたいと個人的に思うのは、福岡だったら多分そんなことする必要はないと思います。個人個人の自由度をどれくらい上げるかが彼らにとっての最大のメリットだし、「こっちに向こう」ということは、誰かが「こっちに行く」と儲かるぞ」ということを示すことが多分都市ビジョンだと思います。しかし、仙台の場合は恐らく、市民

さんの位置づけというのが、非常に専門性という部分だけで見るとではなくて、やっぱりそういう地域のオピニオンリーダーという性格もありますよというところで、要するにもっと専門的にいうとアジェンダセッターと言ってますけれども、地域の課題、議題をセッティングしてやるという性格があって、議員さんの多数派がそれを言い出すと、団体と行政が小さくやっていた話が一気に話が膨らんでいくというのは、まさにそういうところがあるので、そういうのが政治的なテクニクとして実際に存在するということですよ。

遠藤：
さっき緑上さんが、生協さんは超党派で全部の議員さんにご案内を送っていると。その後で鈴木さんも、やっぱり議会も行政も一緒に視座を上げなくちゃいけない。それを超党派でやるといいのじゃないかみたいなこととつながる感じですかね。仙台市の重要な施策として国に伝わりやすくなるということですかね。ちょっと菅原さんも、行政マンとして、今のNPOと行政で協働事業をやっている、それが議員さんとどうつながっているのかというのを、もし補足してちょっと教えていただければ。

錦織：
あとはOBの方もいらっしゃるの、もし何かアイデアがあれば聞いてみたいと思います。

佐藤：
こういったのを具現化していくにどういうやり方でやったらいいのかというのは、何かアドバイスがあれば。

村山：
先ほども言いましたが、それぞれ縦の部局の役割にぶら下がる仕事は一生懸命やるのですが、それを一つにまとめようとしたときにこれが一番難しいのです。従来にないものを新しく作るという、議会との関係とか、各部局がミーティングするときのありようとか、こういう従来にないものを一つにまとめていくのは非常に難しいので、これはだから、庁舎建て替え準備室ではないような気もします。総合計画は確かに上位の計画ですけど、概念だっ

Table A2
みんなでも共有した都市ビジョンを
どう位置づけるかを、みんなでも考える

Table B2
「市民と議会と行政」の関係から
「公共を担う仕組み」を考える

Table C2
低層部を中心にレジャーし、
低層部の必要機能を考える

Table A2

みんなで共有した都市ビジョンを
どう位置づけるかを、みんな
で考える

力という話にしても、震災復興の合意形成の力にしても、そういうものではないのです。

東北の皆さんは、「そんなのダサイ」と思ってしまいあまり本気にしないのですが、僕らのように外から来た人間からすると、「何でこんなにすごいことができるのだろう」というようなことを感じます。何十人も合議して行ってひとつの結論をつくっていく。他の地域でしたら、みんなばらばらに「俺はこれだ」「俺はこれやる」と言って絶対まとまらないような気がしています。それができる力というのをこの仙台市役所の建替えて、もし発揮できれば、それはすごい財産になると個人的には思います。

一馬：

笠間さんにこの話に入る前に入り口で言っていた、総合計画の話なのか、エリアの計画なのかとかという、あとはさっきの大泉さんの「されど」みたいな話ですが、総合計画が最上位、まちのビジョンになっているという状態は、僕は違うのではないかと考えています。

総合計画は、市民も含めたみんなで決めたものの中の、行政計画としてはこれをやると、それで位置づけにもしもできるなら、役

割分担がちゃんとできていて。ということは、でもそれができるほど市民の力があるのかというのは片一方ではあって、あの網羅的なものを市民ができるのかと。ただ、そうじゃないと、やはり総合計画にどう打ち込むかとか、事前のメールのやりとりの中で某平野先生の「いや、それは市長の選挙のときにやるしかないじゃないか」みたいな話でしなくなっちゃうというのも何か寂しい話だなと思っていて、どうやったらその都市ビジョンをつくる、もしくは遠州先生的な表現で言えば「選択することが我々市民でできるのか」、或は、それは選挙でしかないのかとか、今の沖縄みたいに住民投票するしかないのかということじゃない何か方法はないのか、とは思っています。女川はあれぐらいの規模だからできたかもしれないけれども、では仙台はもう大きすぎるからやめようという話なのか。

平野：

こういうまちづくりの議論をしているときに、市民という言葉がマジックワードになっていて、僕はなるべく使わないほうがいいのではないかと実は思っています。先ほど申し上げた、例えば中心市街地全体のビジョンだとかストラテジーをどう考えるかとい

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から
「公共を担う仕組み」を
考える

菅原：

何かうまく説明できないかもしれないですけど、おっしゃっていただいたとおりで、我々のほうで特定の議員の方を、相談が来たから、じゃあこの人というようなつなぎという、先ほどお話を聞いたと思うんですけど、それは基本我々はしてないと思います。直接市民の方の声でもあるので、それはその場で我々に対応しなきゃいけないのじゃないかなという責任はあると思いますし、あとおっしゃっていただいた、その議員の方が予算とかの執行をするので、そっちに振り回されるというか、そっちに力を注いでいるということも正直あると思いますし、私今年室長になったばかりですけど、室長というのになる前までは、正直周りに議員がいないからあれですけど、全然会いもしないし、ほぼ話もしないし、同じ建物にいますけど、仕事上絡むことってほぼないのですよね。課長とかそういう管理職みたいな感じになって初めて、何か折衝するとかお話しするという立場になるのが多くて、実際は市民の皆さんが、その議員との距離があるというのは、実は行政の中の職員も結構距離があるのだよという実態があると思います。

復興のときとかみたいに、超党派でみんなが協働でやるときもあるというのは、そのとおりだなとは思っています。実際に、震災復興のときは政党なんか関係なくて、もう地域のためにとって皆さん動いていたのを私は見ていたので、そういうところはあるのじゃないかなと思います。

ちょっと皆さんの話を聞いていて思ったのは、やっぱり情報機器とかがすごい発達したものの、結局人と人がうまくつながっていないのだなというのがよくわかりました、皆さんの話を聞いていて。全然思いがあっても、うまく回らないというか、うまく流れていかない感じが、すごく皆さんのお話の中で感じられました。以上です。

遠藤：

ありがとうございます。谷津さん、そんな事情があるそうなんです。では、今野さんからも伺いたいのですけども、先ほど市と県のつなぎのことですか、あとは党との関わりも難しいということですか、あと行政ともいろんな地域課題で連携しなくちゃいけない。それを考えると、今後はじゃあどういう形に行政、議会がなったらいいかなというのを教えてください。

Table C2

低層部を中心にレジャー、
低層部の必要機能を考える

たり、コンセプトだったりするので今のような議論というのは、やはりプロジェクトとして取り組むものだと思いますけれどもね。庁舎建て替えということではありますけれども仕組みとか、機能とか、こういったことも含めてより強い提案があれば、役所としてはプロジェクトとして引き受けて、それなりの取り組みをしつかりするということになるのだと思います。

佐藤：

ソフトとしての提案をしていかないと、ということですね。

高野：

総合計画と言ったのは、総合計画のものではなくて総合計画をつくる方で、今、区役所単位でいろんな市民が集まって総合計画に意見を吸い上げるような場を展開していると思いましたが、そういうものの市役所バージョンがあってもいいのではないかと思います。このあいだ検討委員会を傍聴したのですが、大体役所の絡

みの人と設計関係の人くらいで、10名か20名いるかないかくらいのかたちです。今日は結構皆さんたくさんいらっしゃると思うので、こういう場があるか、わかるかわからないかというか、そういうところが、先ほど区役所単位で協働の場を設けているのであれば、区役所に全面協力してもらって、区役所単位での意見吸い上げを求めるのも一つの手かなと思います。結構母数が多ければ議会も動くのかなとか、区単位での管轄の議員さんもいらっしゃると思いますのでさっき、洞口さんが設計事務所とかまちづくりコンサルがお金自由にやっているという話をされていたと思うのですが、僕からしてみると議会がらみがこういうものって重要で議会をどう説得するか、議会がうんと言わなければ何も進まないのです。それで断念しないといけない大人の事情とかあるはずなので、でもそれが開かれていて、市民から直接意見を言えれば、多少は変わるのではないかと思うのでそのあたりではないでしょうか。



Table A2

みんなで共有した都市ビジョンを
どう位置づけるかを、みんな考えて

今野：

非常に勉強になっていました、今日ね。町内会活動というのは、今でもやっぱり議員さんが、昔の人と今の人は違うと言われたように、区長会と町内会ってやっぱりあるのですよね。私青葉区の連合町内会とか仙台市の連合町内会もちょっと役員やっていて、いろんなことやっているんですけど、そこでいっぱいやっぱり違うのですね。私として、片平に帰ったときには、要するに行政のひも付きにはなりたくないということで、やっぱり町内会の自主運営を念頭に置いてやってきたのですね。そういうことですけども、じゃあ議会とどうだと言われると、やっぱり地域の議員さんとか付き合わないのですよね、何かやるときね。それはやっぱり問題だなという話をうんと感じますね。

先ほど、いわゆる生協さんとか何とか、公の場ですかね、そういうことをやられているというのは非常にうらやましいなとか、それを考えていかなきゃだめだなというのをうんと思いました。それをやれそうだなと思っているのは、今我々この町の中でやっていたときに、やっぱり端的に言えば市民センターをどうしようかなということを考えなきゃいけないなと思っているのです。要

佐藤：

ありがとうございます。議会をどう、うまく味方していくか、というところが、キーになりそうだなというところを伺いました。次の資料の説明を、かなりすごく大事なコンセプトの話をずっとしていただいたのですが、配置の話に入らせて頂いて、またその中で機能的な話もしていただければと思います。

では、説明をお願いします。

高橋：

資料6をご覧ください。

今、こちらに掲載（図示）している資料になります。低層部にどういったものをつくっていくか、入れていくかという議論のほか、配置の議論もしています。まず現在の市役所の敷地の東側に建てる案というのがひとつになります。模型で今示していただいているのですが、この案の特徴は、既存市役所の低層部分だけを解体することでできるということです。議会の先行解体が要らない、

するに、我々まちづくりをやっていたときに、持続可能な体制づくりという、やっぱり事務局体制どうしなきゃならないということで、その事務局をやっぱり若手を入れたいとか何とかということもずっと考えてはいるのですが、今切実に思っているのは、やっぱり市民センターの機能をどう活用していくか、つまり今のままではだめだなと思っています。いわゆるひと・まち交流財団のほうを強くいってますからね。じゃあコミュニティーセンターにすればいいんじゃないかという話になるかもしれないですけど、その辺のところはまだ私勉強し切れていないのですけれども、ぜひまちづくりとか何とかというその事務局体制は、市民センターでもコミセンでもいいのだけど、そういうところでのちゃんと専門的にやれる人をまちづくりの中に置かないとだめだなというのを何とかでですね。そこを通じて、議会とも、議員さん個人個人じゃなくて、やっぱり議員さんの集まりと、そのいわゆるまちづくりの集まりをどうつないでいくのだというのをできるような格好にしていかないとだめだなということで、その辺のところをきっちり考えていきたいなというふうに今実感しております。

遠藤：

市役所の敷地の中での建て替えのやりくりなのでどうしても高層棟部分を使いながらつくらざるを得ないので、まず低層階部分を解体すると、この東側配置というのが可能ではないかというのが東側配置の特徴です。

資料9です。中央配置から話させていただきます。一方で議会棟と低層棟を先行解体しまして、現在の市役所のような一番町商店街からの正面性を帯びた場所に配置していくというのがこの中央配置の案になっています。そうなったときに、通り抜けをしたほうがいいとか、この屋外広場がこういうふうに繋がるだとか、そういう議論もできたらなと今日、思っていました。これは裏表ができてしまうような形になっていて、裏手側に平置き駐車場、あと駐車場を地下につくってというような案になっています。続いて、先ほど出なかった敷地内の西側に寄せるという案も出ています。この場合は、一番町商店街からの軸に正面はなくて、どちらかという、市民広場と屋外広場をつくるとしたらなんすけれども大きくするような、そういった広場がメインになったよ

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から
「公共を担う仕組み」を考える

Table C2

低層部を中心にレジャーし、
低層部の必要機能を考える

Table A2

みんなで共有した都市ビジョンを
どう位置づけるかを、みんなでも考える

うと、やはり中心市街地で業をなさっている皆さんが相手であって、決して市民全般ではなく、まず巻き込むべきは、そのプレーヤーたちだと思いますよね。それで、この市役所が建替えをするときに、その影響する範囲、市役所の外構のつくられ方だとか、勾当台公園駅との結びつき方だとか、アーケードとの結びつき方が決まるわけですよね。その影響する範囲で実際に商売をしている方々と一緒になり「こうじゃなきゃ困る」みたいな話をすると、実は結構合意もとりやすいし、話も決まりやすいと思うし、それがビジョンを共有しているので、「こういうふうには市役所でできているから、俺たちもちょっと協力してこうやっていこうか」というふうにはまちも変わっていくきっかけになると思うのです。

「市民」って、漠として何か選挙権者全員みたいに言ってしまうと多分うまくいなくて、市民全体で共有すべきは、多分将来この人口減少の中で、「東北という消費地の拠点でしかない仙台」というポジションに今の仙台の産業構造というのはなっていて、卸売と小売が中心になっているのはそこですよね。それで人口が減るということは、もう仙台の根幹が揺らいでいるわけですよ。そうなのだけれども、実はまだ仙台市そのものが余り人口減少に直面していないので、皆さんあんまり深刻に考えていない。けれども、

仙台の産業基盤の根幹が揺るがされている。そこでの議論というのは本当に選挙権者全員が、どうやってこのまちは生き残るのかと、あと50年、100年、この繁栄を維持し続けるのかというところを議論するのであれば、それこそ選挙権者全員になる。ですから、やはりエリア・エリアで主役となる人たちをちゃんと切り換えて、全部をばくっと「市民」と呼ぶことはやめませんかという感じです。本当であれば、中心市街地全体で市役所をどこに置くのかという議論ができればよかったのですが、もう場所は現地で決まっちゃったので、そうすると先ほど申し上げたように行政としてできるのは、交通をどう担保して今回の決断を持続可能なものにするかということ、現位置周辺にどう相乗効果を出していく、どんなプレーヤーがいて、どう巻き込んでいくのか。ですから、第一生命というのは、まさに影響を受けるプレーヤーの一人なわけで、一緒になってより価値の高い都市空間をつくってもらい、第一生命ビルの価値も上げてもらえばいいわけですね、一緒に。ただ、行政は特定の地権者に対してプラスになるようなことは大変やりにくいのですが、そこは河北新報さんあたりが後押しをしてもらえると、そのエリア全体の価値が上がっていくと思うのです。そこを、「特定の地権者に媚びて税金使うのか」みたいなこととして

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から
「公共を担う仕組み」を考える

そうすると、今ちょうど議会と行政との未来志向的にどうあればいいかということを考える中で、もう実際に市民センターのことを考えていきたいという、実際にもうネタがあるというか、検討していきたいものがあるということですよ。それを、じゃあ行政と議会とどうやっていくかというときに、先ほどのご意見がとても参考になって、活用できそうだということですかね。

今野：

そうですね、だからやっぱり地域のところに、まとめられるようなその組織という、今のところやっぱり市民センターとかそういうところしかないと思うのですよ。もちろん、それぞれの自主活動で、町内会だけじゃなくて社会福祉協議会だとか体育振興会とかPTAとか、いろんな活動はあるけれども、それはそれとして、その人たちはまちづくり会の中に取り込んではいるので、いろんなことを考えていくときに、でも、それをじゃあ議会にどう反映させるとか何とかなんかというのは、今のところやっぱり地域の代表者である誰々さんって連れてくるから、その人がたまたまどこかに入っている会派の人だから、うんと偏るなどというのがあって、避けよう避けようとしてきているのですね。でも、やっ

ぱり議会と行政とその市民協働みたいなことを考えていっていただければ、その辺のところをどううまくつなげていくかというのを考えなきゃならないかなというのを考えています。

遠藤：

そうですね。やっぱり市民センターは全市的な仕組みですから、その機能強化とか機能を養っていくということになると、もしかすると条例改定ということになると、その市民センターをさらに使いやすくするための、その改定の政策提言をどういうふうに進めるか、いろんな方のお知恵を集めながらどう進めていくかということですかね。このあたりも、じゃあちょっと皆さんからもお知恵いただいて、先生からもお知恵いただきたいと思いますが、坂口先生が考える行政、議員、議会、市民の未来型、将来的にはどんな状態だといいたいですかね。

坂口：

今いろんな方々がお話されたことは、僕も全くもったもだと思えます。自分が関わっている、やっている現場の話にちょっと戻してお答えしますと、仙台市のような結構都部の、例えば音楽ホー

Table C2

低層部を中心にレジャーし、
低層部の必要機能を考える

うな配置計画になっております。裏の平置き駐車場と一体的に視界が広がるような配置になっています。

続いて、2棟の場合もまだ検討案としては残ってしまっていて、最初に既存の市役所をどこも解体しないで東側の今噴水がある広場にA棟を建設して、その後、A棟にもともの高層棟部分の機能を移転してから全解体して2棟を建てるという案です。

考え方は一緒ですけども、議会棟、低層棟を先行解体して、先行解体した部分に同じように高層棟部分を移転させたA棟をつくって、そして、後ろの高層棟解体後にB棟をつくるというちょっと平たい高層化を抑えた2棟案というのがあります。このフットプリントとの関係性になるかと思うのですけれども、あと、屋外広場を先ほどから屋内広場的な市民広場とは性格を分けた市民協働エリアだとか、市民が日常的に利用できる空間にするだとか、そういった議論とも関連すると思うので、屋外広場なのか、屋内広場に低層部がなり得るのか、そういった視点からご意見とかお話いただけたらと思います。

佐藤：

ありがとうございます。

資料6の一覧に戻っていただきたいのですが、検討委員会のほうでは、この案がどうこうという話は委員の方から一切出てきませんでした。何が議論されていたかという、この一番左の評価する評価軸と、そういうのも○×△で本当にいいのというおっしゃるとおりのご指摘とかもあったのですが、これを評価する視点がこれだけではないのではないかとご意見があったというところで、配置の検討については次回かなというような結論でした。

何となくもう少し突っ込んだ議論してもいいのではないかと、私も聞いていて思ったのですが、この評価軸に関わらず、今までお話しいただいた、やはりコンセプトをしっかりと持っていき、特にサービスから協働へという話の中でそれにふさわしい配置ですとか、あるいはどういう配置であってもそういったことはもちろん、可能になってくると思いますし、それから市民との接点とし

たたかないようにしていただけると、エリアとしての価値は高まっていくと思います。

遠州：

先ほどの渡辺さんの意見に対して、ちょっと私の考えていることを言いますと、平野さんのおっしゃったことは、私はちょっと違います。違うというのは、半分一緒ですけども、つまり都市ビジョンという議論と市役所のリニューアルということ、ここは都市ビジョンの議論をするという話だとすると、余り過度に結びつけないほうがいい。お題は、要するに「大きな都市ビジョンをどう形成するかをみんなで考える」という話になっているわけですから、そのことと、市役所のリニューアルということを直接的に結びつけるというふうにしてしまうと、そこで言っている都市ビジョンという議論とはちょっとずれてきますよねという話です。

ですから、平野さんがおっしゃっているように、本当に議論しなくちゃいけないのは、先程言っているように、例えば水道の民営化の問題が何で問題かというのは、その背景におっしゃるような人口がどんどん減少していくと、高齢化も進んでいくと、そういうプロセスの中で、そもそも従来インフラを整備していくときは、

これからどんどん人口も増えていき、産業も成長していきますという前提の中で、整備する財源は新しくこれからやって来る人たちに負担してもらいますと、それで借金をしてインフラを整備して増えた人たちが払う税金と、それから新しく経済が拡大して入ってくる事業税と、そういうものでペイさせていくという仕組みで動いてきたわけですよ。それが動けなくなるという話になるわけですね。なおかつ、水というのはそういう膨張型の条件の中で水の需要はどんどん増えていきますという前提で開発をしたのだけれども、実は非常に過剰に開発をしてしまった。その結果、水に限らないけれども、要するに過剰なインフラと、一方でどんどん減っていくという人口と、それから地域格差が広がって、一方はシュリンクしたり、一方は集中したり、そういう都市構造とどうやって整合させていくかということが問題になってきているわけです。ですから、必ずこれからはインフラのダウンサイジングをしていかなきゃいけないし、そのダウンサイジングしていったものをどうやって地域構造とマッチングさせていくかという議論がどうしても必要になってくる。そのときに、民営化でやりましょうという話を知事が言い出すわけですよ。

一方、それでやってしまったらどうなるか。問題はインフラとい



ての屋内広場、外の広場と屋内広場、あともう一つ、もちろん、市役所の機能の延長としての機能というのがもちろん、一義的にありますが、一方で、やはりこの勾当台の場所性です。この場所を何か最大限生かせるような配置というのはないのか、あるいはそういった広場の取り方というのはないのかというあたり、その辺が洞口さんに最初に言っていただいたような、やはり町の賑わいと市役所直接の機能じゃないけれども繋いでいくために必要な取り方というのも一方の視点としてはあるのではないかなというふうにも思っていますが、ほかのことでも結構ですが、いかがでしょうか。補足を。

高橋：

今日、この場で日常利用についてもご意見伺いたいなと思っております。この市民広場はほぼ毎週利用されるようなイベントとはいえ、もはや日常化したイベントが行われるような場でもあります。一方で、この定禅寺通りのほうで洞口さんにおっしゃって

ただいたようなたまに起こる公共の場所を使ったようなイベント、そういったものが一連として繋がっていくような場になってほしいと今までの議論を踏まえて皆さんが思っているのではないかなというのは、仙台市側としても感じております。

その日常利用というものが一体何なのか、先ほど前半でお話ししていただいた行政と市民の協働の場がそういったものになり得るのか、はたまた、洞口さんにおっしゃっていただいたような、日常で市政にまるで興味のないような方たちも訪れるようなきっかけになる場としても設けていくべきなのかだと、そういうところもお聞きしたいなというふうに考えておりました。

佐藤：

いかがでしょうか、あるいはこの配置と議会の関係でもよろしいかと思えます。

杉山：

Table A2

みんなで共有した都市ビジョンを
どう位置づけるかを、みんな考えて

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から
「公共を担う仕組み」を考える

Table C2

低層部を中心にレビューし、
低層部の必要機能を考える

Table A2

みんなで共有した都市ビジョンを
どう位置づけるかを、みんなでも考える

でも命の水ですから、もともとは典型的な公共財で、民間が供給できないものを公共がやってきたわけで、それを民間に任せる以上は、必ず民間はもうかる仕掛けをつくってやらないと民間は引き受けられないわけですよ。ではどうということが起きるのか、しかも一旦渡してしまえば行政部門の中にそれを扱える人材はいなくなります。20年間運営権を渡せば、その20年間、要するに今まで水道事業を担ってきた人たちは役所内に要らなくなるわけですからいなくなる。それでうまくいかなかったから再公営化しようかというのがヨーロッパで沢山起きていたのだけれども、では再公営化をしようかといったときにもう公共には人がいないという状況になるわけです。そうなることがわかっている選択が、今迫られているという状況になっているわけです。その背景には、おっしゃるように人口がどんどん減っていくという中で、それを誰がどうやってうまくメンテナンスしていくのかと。これからはどちらかといえば、今住んでいる人と出ていく人に費用負担をさせてやっていくという仕組みをつくらなくともうまくいかないというプロセスになっていくわけで、そういう中でどういうまちのあり方を考えるのか、ということの本気で議論しないといけないと思います。

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から
「公共を担う仕組み」を考える

ルをどうするか、大規模な話と、福島のごく集落のような、非常に例えば町議会の定数が20人弱のようなどころとかなり違うのですが、議会のあり方というか、もっと具体的には議会の構成メンバーというものを、一つはどう考えるのかというところがあるなと思っています。例えば、100万人仙台市が住んでいて、じゃあ100万人が、さっき河村先生がお話しされていた、いろんな技術的なことが発達していくと100万人の意見を一気に聞く局面というのも多分できるようになってきたりとかするときに、もちろんその制度上、例えば住民投票がどうか、ちょっと棚上げしたとしても、技術的に多分できることになってくると思いますし、そうすると、そもそも何か物事を意思決定したりとか意思決定の仕方と、そもそもそれはどういったことかという議論する局面と、その前段のそもそもどんな課題があるかという、何か3つぐらいフェーズがあると思うのですが、意思決定の局面に関して言うと、本当に議員、さっきお話があった選ばれた人たちだけで決めなきゃいけない部分と、もう1つはとりあえずその状況を確認してみようというか、みんなどう思っているのというふうなことを聞くような局面というものが、何か技術的にはもっとできるとすれば、そもそもその議員の役割というものが、さっきお話が

Table C2

低層部を中心にレジャーし、
低層部の必要機能を考える

配置を考えるうえで私が違和感を覚えるのは、一番町からの軸線を建物で受けるという発想です。現在も一番町からデジタル時計が見えているので、何かしらのアイストップを設けるのは良いと思いますが、一番町からまっすぐひたすら一直線にやってくる人の導線を建物で大きく受けようとし過ぎると、配置計画を見誤るような気がします。多くの方は、地下鉄の出口のある、東二番町通り沿いの豊かな緑地を通してアクセスすると思いますし、勾当台公園からも、北からも来ます。では、何を大事にして配置を考えたら良いのかと言えば、(航空写真があればいいのですが)より大きなスケール、つまり、勾当台公園および県庁前の緑地、そして市民広場、これらまとまった広場、緑地に対してどう受けるかというランドスケープの発想が求められると考えます。今回の配置案の中で言えば西配置案が、大きな緑地、広場の拡がり、合同庁舎と県庁とともに、西向きの市役所によって囲む形となり、緑地、広場が活きる都市景観になります。これぐらい大きなスケールで杜の都らしいフロントを持つ市役所が誕生すると魅力的です

一馬：

そうすると、一番大きな選挙民全体である市民の私たちは、そういった大きな決断をするのは選挙でしかないのか、ほかの方法は何かあるのか。

遠州：

例えば、住民投票条例をつくってほしいという運動がありましたよね。だけど、それは一部の人の運動だというふうにとらえられがちです。一方行政は、もし条例が成立したらそれから考えましょうという話にするのか、それともそういうところに対して、自治体として今後生きていくときに、その位置づけをどう考えるのかと、やっぱり態度をはっきりさせるということもあり得るのです。それで議論を組織するということもあり得るのです。ですから、水道のことについては、今は市長さんが、本当に安くなるのかということちゃんと証明してくださいと知事さんに問い掛けをしているのだけれども、その回答が来た後に、どういうアクションになるのかということです。仙台市は4分の1ぐらいを県から買うわけで、その選択をいずれ迫られるわけです。

あったようにちょっと変わってくるのじゃないかなとか思うのがあります。

一番最初の、そもそも今誰がどんな課題を抱えているのかと、さっきあった市民センターそのものとか、どういったコミュニティーにどんな課題があるかということに関しては、これはなかなか多分議員の方じゃ難しいなと思うところがあるので、それは何かそういった問題を顕在化してくるような、それはさっきお話があったリサーチセンターみたいなものなのか、あるいはワンストップの窓口なのか、というものも多分あると思うのです。

もう1つ、今日の話で言うと、市役所が建て替えられるときに、これはそもそも市役所の中に議会棟があるから、どういった話をするかだなと思います。その具体的な、例えば議会棟のあり方までいなくても、あるその市庁舎の中に議会の、あるいは議会に他の人たちが集まる場所と、その市民の人が普段行けるような局面をどうつくるかというのは、ちょっと実験的に今回の市庁舎の中でも、最終的にどうなるかということは別に、何かトライ・アンド・エラーというか、未来志向の議会のあり方はいろいろ多分持たれていると思うので、さっき鈴木さんおっしゃった若者議会もそうだと思うのですが、何か1回ちょっとやってみて、だめ

ね。一番町からの軸線に対しては、もっと小さな20～30mぐらいのスケールのガラスアトリウムで受けるとかで、あまり大きな建物を一番町のような細い道に対して正対させるのは違うのではないかと思います。また、低層部の作り方については、あの場所に作るからには市民広場の活性化に資するにぎわい機能も当然必要ですが、市役所の1階だから必要となる、「せんだいシティフォーラム」をどこに置くかといった議論も大切だと思っています。

佐藤：

ありがとうございます。

高野：

そもそも今、配置計画なのかなというのも正直あるのですが、秋ぐらいまでにつくる計画書だと理解していますが、先ほどからいろんなソフトの話とか、低層部の話とか、そういうところが解決しない状況でこのまま進めていいのかなというのを正直思ってい

ですから、そういう問題があることに對して常に議論が進んでいくような仕組みというのを考えていく必要があります。それで、そういうことをやれるような場としての市役所ということはどう考えるのかという議論をやっていく。

私は、今の行政の仕組みをそのままにしておいたならば、あまり関係ないと思っています。これはここで議論をしてもしようがないけれども、地域別の総合行政がやれるような仕組みに変えていかなければいけないと思っており、そういうものができ上がってきたときに、それをどう具体化するかという場として市役所を考えていくという話になるのです。

いずれにしても、そういうことがきちんとやれるということが前提になって市役所のあり方が出てくるという話であり、ビジョンと市役所と、そのまま直接結びつけるという考え方は違うのではないですかということです。

一馬：

その裏打ちするものがなさそうだなという話と、裏打ちを、私にとっては裏打ちされたけれども、誰々にとっては裏打ちされていないという話が前回すごく多かったので、何かどの点で立脚して

だったら戻ってみるといような、何かトライ・アンド・エラーの場の持ち方みたいなものは、今回のこの計画のプロセスの中にも少し盛り込めるところもあるのかなというふうにお話聞いていて思いました。以上です。

遠藤：

ありがとうございます。私もちょっと感じる、私なりの意見もあるのでちょっとご紹介させていただけたらと思うのですが、NPOの支援のお仕事なんかもしてまして、そのときに政策提言、市民の方向けに政策提言の講座とかをするのですが、そういうときに、その文脈の中でいろいろ考える中のことの一つが、NPOの人たちはやっぱり暮らしの中から課題を見つけて、それを何とかしようということで活動をして組織化しているわけですね。だから、議員さんは政務活動費があるわけだから、その政務活動費を効果的に使って、1つのNPOだけでなく、例えば鈴木さんたちみたいな子供の貧困というのがあったら、貧困をサポートしている団体複数と共同研究をするとか、共同調査をするとか、そうやってそのNPOとも議会が、一議員ではなくて、その組織としての議会、チームとしての議会として共同研究

て、それは建替室の人にも考えてほしいのですが、一旦ストップしてもいいのかなと思っています。中身のほうがまとまってから進めてもよろしいのかなというのが一つ大前提としてあるのですが、あとは、先ほど杉山先生もおっしゃったように、僕も最初にも言いましたが、範囲がちょっと狭過ぎる。これは大きいと思います。先ほどグリーンループの地図、マップがあったと思いますが、あれぐらいの規模でもいいのかなと正直思います。西公園なり、錦町なり、あの辺の一角が（模型を見て）それですね、そのぐらいを見て考えられてもよろしいのかなと。やはり市民広場をどうするかということもあるし、あとは、先ほどの話もあるのですが、申し訳ないですが、これをつくった人が仙台市を余り知らないのかなと感じてしまう。先ほど言ったように、じゃ、どうやってアクセスするのかとなったときに、やっぱり歩いていく、一番町のほうから歩いていくというよりは、やはり地下鉄なり、バスなり、バス停との絡みももうちょっと大きくフィーチャーしてもいいのかなと。仙台市の駅から市役所前を通るバスって相当

話しをするのだろうなということや、その区域での分権を進めていってやっていくというふうに大きくつくっているはずの仙台のビジョンなのに、建物そのものは今いる人数が豊かに暮らせるぐらいの大きさをつくろうとされていて、職員減るのにどうしてかとも思います。そういうこともあり、何のビジョンをもとに話しているのかというのが前回あり、先程末さんに出していただきましたけれども、3つの違うところが違う形で話をしているからそれでは話はまとまらないだろうと、それをこちら側、ここの場に投げ込まれてもわからないよねという話だったという気もしました。

笠間：

先ほど大泉さんが、やはり専門家に任せてだけではということで、市民が何か関わる方法がもっと、専門家ではない方法があるのではないかというのを受けて、多分平野先生が、もっとセグメントを絞って、ニーズ、ウォンツなどを吸い上げることをもっとやっていいのではないかと思いました。

一方で、遠州先生の話の住民投票であるとか、あるいは一馬さんのほうからは選挙でやるというように、いろいろな市民の意見

をすれば、それは政治活動ではないと思うのですよね。政策研究というか政策マーケティング、それが前からできないかなと思ったのですが。私もちょっと議員さんと面識があまりないのでそういうことを議員さんには、議会議長さんだったら提案しやすいかもしれないのですが、何かこう一議員さんに言ってもいいものかなとか思いながら、議員じゃない人にはつづやっていたのです。ちょっとそういう可能性がないかということも将来的には期待したいなということと、あとはそういった研究とか調査もそうなんですけれども、協議の場を、その地域に問題があったときにいろんな人が集まって、やっぱりその問題の協議をする、話し合いをするということが意外にされていないのですよね。仙台市は、事業協働は進んでいます、いろんな提案制度とか助成金の制度もありますし、事業協働は進んでいるのだけれども、その事業が決まる前の話し合いや協議をする部分が、本当にそれが必要なのか、その手法が効果的なのか、アジェンダセッティング自体が間違っているのじゃないか、もっと違うほうが効果的なんじゃないかななどの検討が充実してないのじゃないかという疑問があるのです。ですから、そういう協議の場を一緒に、市民もいれば、例えば心理学の人もいれば、経営学の人もいれば、そういった観点から見

の数があるはずですが。それに対して、今、バス停の待合のスペースみたいところが正直ひどい。バス停の位置も南北なのかな、広くありますし、待合みたいところ、屋内で待てるスペースもないような状況で、市役所も閉じているので、先ほどのちょっと低層部の話にも入りますが、もうちょっとバス停との絡みも考えていただければいいかなと。長距離バスの幾つか発着にもなっているはずなので、そういうところも含めるとちょっと、僕も待ったことありますけど、日陰も余りないし、寒いし、なので市役所にちょっと避難しようかなと思っても市役所の廊下みたいところにしかならないので、待つスペースもないしということであるかなと。

あとは、先ほど日常利用のことを考えると、定禅寺通りとの絡み、市民広場との絡みは必要で、かつ屋外広場をつくる場合にはちょっと検討していただきたいのが芝生広場を検討してもらえないかなと個人的には思っています。というのは、勾当台公園にしろ、市民広場にしろ、今、座ってみんなが時間を過ごすような場所って

Table A2

みんなで共有した都市ビジョンを
どう位置づけるかを、みんな考えて

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から
「公共を担う仕組み」を考える

Table C2

低層部を中心にレビューし、
低層部の必要機能を考える

Table A2

みんなで共有した都市ビジョンを
どう位置づけるかを、みんなでも考える

入れる方法があると思うのですけれども、そうすると、とはいっても一方で建て替えること自体が所与のものだとなってしまうと、マーケッターの立場として普通に考えると、何がニーズかウォンツかわからない、分からないのであれば聞くしかないかな、ということでもリサーチをするというのが誠実なマーケッターとしての立場だと思います。例えば市民全員などに、アンケートではなくて、1次商圈、2次商圈と、商圈という言葉が適切かわからないけれども決めてしまって、要は市役所の、実際にあの庁舎を使う人のニーズとは何だろう、ウォンツとは何だろうと探る。その中で、でもその人って、本当は仙台市民としてはどういようなまちになってほしいのだからかと並行して聞くと、聞くことによって多分、「ああなるほど、事業者のセグメントで見ると多分こういうニーズ、ウォンツがあるし、こういうまちになってほしいのかな」と、「活性化して人が集まるまちだ」と言うだろうし、あの周辺に住んでいる住民の半径1キロ、2キロを1次商圈としたら、そこに住んでいる人は、「そうはいつでもやっぱり静かなまちにしたいね」と言うかもしれないし、というような形で、いろいろなニーズ、ウォンツがわかると思うのです。そういう意味では、行政さんがやるアンケートは、(私も他の都道

府県さんのを設計したことがありますけれども) 大体アライバいくりに使われてしまいます。ところが、そうではなくて、建物のコンセプトをどういう位置づけでどういうポジションにしようかなという今の段階であればすごく有用なデータが出ると思うので、例えばですけれども、アンケートとかをしっかりと設計して、それでいろいろなニーズ、ウォンツを発掘するなどというの、市民がある意味関わることにもなるだろうし、住民投票とかとは前の段階で、また違ういろいろな生の意見も出るのではないかなと思ったところはありました。

小島：

笠間さんが先ほど、行政が持つ都市ビジョンと民間が持つ都市ビジョンというのは、何か議論していると違うのかなとおっしゃいました。いや、違っはまずいのだと思っているのですけれども、私が民間の方々とお付き合いしてつくづく思っているのは、今回、平野先生と大体同じ考えなのですが、民間の役割と行政の役割というのがあって、行政の役割というのはだんだん少なくなっています。まさしく、ハード系というのは漢字の街づくりで、社会基盤を整備する。どちらかという行政がやらざるを得ないと

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から
「公共を担う仕組み」を考える

ることで、本当に仙台のこの地域資源で解決するには何が必要だろうかということ、やっぱり議員さんも交えて検討する必要があります。自分で成果を持っていくのじゃなくて、この公共の場の成果として執行できるような、そういうことができないかな、と考えたりしています。

では、いろいろ今未来志向でこういうことができたらなということ、皆さんお話しいただいたのですが、河村先生からも、皆さんのいろんな未来志向の考え方に対するコメントですとか、あと先生もこうなっていったらいいのじゃないかというふうなお考えもあると思うので、両方教えていただけたらと思います。

河村：

人口規模は10分の1以下ですけれども、石川県の加賀市でやっている話というのは、先ほど出た町内会からすると、結局議員さんのお仕事はできる限り市全体のほうに持っていきけるようにすること、例えば家の前を除雪してくれというのは議員さんの仕事じゃないですよというふうなことをやっていくわけですね。それは、例えば全戸のまちづくり協議会なんかがあれば、もうその予算でやってください、特に小さい町村ではよくやっている

話ですね。それは2つ効果があって、1つは地域の人たちが自分たちで自分の地域をよくするという、地方自治は民主主義の学校だっというのですけど、それが実践できる。議員の先生方は、どちらかというときさっき言った古い時代の議員像から脱皮して、政策中心でやっぱり勝負するよう時代になっていくということ。

理想を言うと、これは選挙制度を変えなきゃいけないので無理ですけれども、政党中心の選挙になっていけば、さっきのシンクタンクにしよ、要するに政党は議会の議員さんのシンクタンクですし、住民の声も政党の党員も含めて聞いてくれているし、実は今の日本の地方議員の選挙って個人中心でやっているの、すごいあちこちで破綻が出てくる。大きい自治体になればなるほど、自民党は複数いるとか、民進党系の人たちも複数いるとあっていて、ルートが複雑になっちゃうので、みんな誰に言ったらいいでしょうみたいなことが起こっているというのが多分実態です。

でも、まずやっていかなきゃいけないのは、どこまで住民のその手で、先ほど出た市民センター単位でやれるもの、それはそこに予算をつけて、自分たちである程度管理をして、自分たちのお金と混ぜ合わせながら自治をやっていただくかということが多分課題だと思うのです。よくごみ捨てて使わせる、使わせないみた

Table C2

低層部を中心にレジャーし、
低層部の必要機能を考える

ないと思います。ベンチが少し置いてありますが、そこだけで、それも日陰じゃないからなかなか難しいし、足を伸ばして子供がいてみたいところがない気がします。まさにオガール広場のようなのもうちよっとなあっても、市民広場利用率、とても高いと思うのですが、日常的に使う、日常利用という感じには正直なくて、土日だと思うのです。最近壊されたライブラリーパークもあの一角だけで、日常的には多分とどまるところがなくて、中に入らなきゃいけない状況だったのでそういうところも考えていただきたいなど。配置計画はそれからかなと思っています。

佐藤：

ありがとうございます。

村山：

配置の話ですけど、先ほども先生がおっしゃったように、ここに正面性という記載がありますが、あえてなぜこの概要のところ

に正面性というキーワードで、それぞれの配置を特徴づけるのかなと。勾当台通りに対して正面性がある、ない、というのが、どういう意味を持つかが、多分よくわからないです。どの案がいいとは申しあげませんが、もう少し広い目で見れば、確かに緑の塊っていう点で西側配置という考え方もあるでしょうし、それからもう一つ、広場の空間、広場の使われ方としてみたときに、ある程度建物で囲まれた、囲われ感というのがあります。パーッと広がった広場で活動するのと、一定の面積で建物に囲まれた広場空間、という意味もあるのです。どちらも要素としてあるので、その時の正面性というのでしたら何となくわかる気がするのですが、そういう話が少ないので。だから、ここに正面でファサードがあるというよりは、新しくできる屋外広場、あとそれにつながる屋内広場に対して何か一定の囲われ感、空間として作っていくという意味での建物配置っていうんだったら、なんか考えようもあるかと思うのですが、そういう記述にはなっていないので、少し、深堀が必要かなと思います。

いうところがありますけれども、今はもう例えば都心の道路とか環境を見ると、平成6年からすると交通量というのは8割になっています。こんな広い道路は要らないのです。それで、広瀬通がもう一気通貫しましたので、道路に色分けすればいいわけです。例えば、個人的に私は広瀬通というのは車中心でいいと思っていますけれども、定禅寺通と青葉通は違うなど、そういったところは市民感覚でどう思うかということを考えるべきで、行政というのは、その規制というものを単に法律を運用するという意味ではなくて、弾力的運用ということでどんどん変えていけばいいのです。変えられることはできるはずで、それをやるべきだと思っています。

そうすると、市民と行政の役割という視点で見た場合に、今、岡崎市のまちづくりが結構おもしろいところをやっている、そこをやっている民間の方の言葉ですけれども、いわゆる民間というのは、市民の市民生活の欲求を追求する、それでいいのだと。では、行政のそれに対する役割は何か。都市経営課題なり都市経営に置き換えてあげる、行政用語に翻訳してあげると。どうしても、ビジョンというのは行政的に位置づけしないと、財政的な裏付けとかをとれないので国からお金がもらえないということがあります。で

いな話が出ますけれども、でもよく考えてみると、あれば一番自治の基本なわけなので、そうすると市全体のこと、ないしは最低でも区ぐらいのレベルの課題を議論していただくような形に、その事業仕分けをしていく必要があるだろうというのがあるわけですね。ただ、そういうことをやろうとすると、絶対反対が出るのが無駄遣いだってという話が出る。でも、無駄遣いだったら選挙止めればいいのです。実は一番、今度漁業もあれですよ、海区調整委員会もなくなっちゃいました、農業委員会も選挙止めちゃいますけど、選挙止めちゃえば、実はこれ実際起こっている話ですけど、農業委員会って全部男だったのが、指名制になったら女性の委員が増加した、逆説です。なぜかという、個人に頼った選挙をやってしまうと、男性のほうが財産、人間関係、要するに我々からいうと選挙資源、政治資源と言ってますけど、ポリティカルリソースと専門用語で言ってますが、政治資源というのは人間関係であったり財産であったり、そういうことが、ないしは友人関係、高校のOB会の地盤なんか全部男性のほうが多い構図になっちゃっている。終戦直後、女性参政権が認められたときは、国会議員って女性はすごく多くて、次の年に中選挙区制で1人1票しか入れられなくなったとたんに、がんで女性の国会議員減るの

佐藤：
ありがとうございます。

洞口：
私も、ちょっと今の時点で配置はどれってはっきりいえないのですけれども、定禅寺通りでイベントがあった時に庁舎とのその1階までの盛り上がりの距離感、作れる距離感みたいなものもあると思うので、そこであまり遠すぎない方がいいのかとか、そういうのも出てくるかなとは思っています。それは、どういうコンテンツが入るかによってだいぶ変わってくる話だとは思っています。あとは、さっきいった日常的に利用されるということとか、イベントとかいうものが、ほんとに海外のマーケットみたいな感じに日常的に産直のものが売っているとか、そういう状態を作れるような広場というものを目指せるといいかなとは思っていますが、その場合とかには、例えば、コンセントとか、定禅寺通りにもコン

すから、どうしても行政用語に切り換えて、意義づけ、位置づけというのをしなくてはいけません。そうすると、今の総合計画なり都市計画マスタープランというのは、行政用語ばかりなので。それで市民が見てもさっぱりわからないと。だけど、リノベと一緒にやっている方々は、「俺はこういう商売をここでやりたい」と言う。実はそれは、例えば北町のにぎわいにつながってくるか、あるいはここで止まっている人の流れが向こうに行くかもしれないということがあるじゃないですか、行政側が翻訳すると。それらは行政の役割だと思のです。そこに接点を見出していくということが大事で、行政が上から目線で「都市ビジョンをこういうふうにしました」というのがだめなのだろうと。ここからは遠州先生の話になりますけれども、プロセスを無視しているというのがありますから、そこをどうしていくか、です。

今日は行政の立場じゃなくて民間の立場で来ていますけれども、この市役所の建替えということを切り口として都市ビジョンをどうするかということになりますけれども、そういう視点で、仙台市も主催者になってこれを設定しているということは、今後のいわゆる基本計画の中にかに反映させていくかということが非常に大事だと思います。そういう問題提起をする、問題提起だけで

です。要するに、今の地方議員の選挙や中選挙区制というのは、女性が勝ち切れない選挙構造の仕組みになっているのです。だから、本当はだから選挙制度を変えるしかないんですけど、ただそれが無理ならば、議会はそういうゆがんでいるかもしれないけれども、そのクォーターと言っていますけれども、さっき若者の議会もそうですけど、割り当て型のその議論の場をつくってやる。ないしはその審議会をやるときに、これは行政の人に言いたいのですけど、行政はしばしば我々のように、ある程度実績がわかった、我々も村ですけど、選挙村であったり、多分文化財、文化施設村だと思のですけど、要するに村の社員になっちゃう。であると、その村以外のところの声をどういうふうな形で聞いていくかというところも掘り下げていかなきゃいけない。

民主主義というのは、よく言うのですけど、無駄を許容しているのと、野党を許容している、少数の意見を許容しているということが民主主義の一番大事なこと。議員さんが選挙で選ばれていると言いますが、女性が少ないということは、女性の声は届いていないし、LGBTの人たちの多分代表が出てないとなると、その声が聞こえていないので、そうすると行政はその声をどうやって聞いていくかという体制を整えなきゃいけないし、でも今はま

セントとか設置してあると思うんですけど、そういうインフラとか、イベントがすぐに開催できるような、そういうものもあった方がいいかなという風には思います。あとは、例えばキッチンカーとか、日常的に入ってこられるような仕組みとか、私もちょっと提案で、まちなかにコインパーキングがかなり増えてしまっているというところで、まちの魅力が下がってきてしまっているんで、今そういうコインパーキングをキッチンカーとかに貸して、道沿いを賑わせるような提案とかも作っていたのですが、そういうような事を市役所の広場で先駆的に出来たら面白いかな、という風に思っています。例えば、東京国際フォーラムとかだとその中央のところに結構、日常的にキッチンカー乗り入れて、皆さんランチを買いに来たりとか、という光景があったりと思はいますが、やはり仙台の今、まだ起業を始めたような小規模の、若者みたいな人たちは、やはり店舗を待つまでいかな人とか、というのが結構これからキッチンカーとか、一番初期投資が抑えられて、自分の活動ができるというところで入りやすいところが

Table A2

みんなで共有した都市ビジョンをどう位置づけるかを、みんな考えて

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から「公共を担う仕組み」を考える

Table C2

低層部を中心にレジャー、低層部の必要機能を考える

Table A2

みんなでも共有した都市ビジョンを
どう位置づけるかを、みんなでも考える

はなくて、行政計画としてそれを消化すること、それが大事なかなと思いました。

手島：

ありがとうございます。小島さんの行政経験者としての意見で、本当にそのとおりだと思います。そのときに僕が課題だと思うのは、結局、震災復興の現場でいろいろ見てきたこともそうですが、上位計画なりとの整合性は、下位の計画にいくと必ずそれが求められますよね。要は、上位計画がないと下位の計画がつかれない。例えば市民である立町の人が「こういうまちをつくりたい」ということを、上位計画に戻ってからまた下ろすことってできないのではないかという気がしますが、そうでもないですか。

小島：

それは違いますね。例えば、そうなってしまうと、総合計画という都市ビジョンがないと、つくり替えないとできないとなってしまいます。しかし、各計画というのは10年計画なり5年計画というのがあって、総合計画と策定期がずれてきます。そうすると、既往計画として当然上位計画を見ますけれども、その時点での社

会情勢の状況というのを的確にキャッチをしてそれを反映していく。逆に言えば、下位計画であったとしても、将来見直すであろう総合計画にそれを入れ込んでいくという作業を行政側としてもやるのです。ですから、別にひとつの一連の流れに、流れがあるというわけではない。やはり応用問題としていろいろと出てくるというふうに見るべきなのだと思います。

手島：

ありがとうございます。

平野：

復興計画は、復興庁が財務省に説明しやすい資料が欲しかったからそれを求めただけであって、実は日本の全総（全国総合開発計画）もそうでしたし、都市マスもそうだと僕は思っていますけれども、上位計画に上位性はありません。都市マスがこうつくったから、都市計画事業はこうあるべきである、こうでなければならぬという法的な縛りは一切ございません。ですので、全部ボトムアップで決まっています、逆に欧米の都市計画を勉強した方から見ると、日本の都市計画というのは何の意味もないということ、全部ボト

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から
「公共を担う仕組み」を考える

だまして、今のようにつながるようになったのは1980年代です。それ以前は、役所はつながらないと、本当のごく一部の議員さんたちとかと、ごく一部とつながっていて、声を聞こうという仕組みができたのは、実は1970年代から80年代にできて、今がある。それでゼネコン汚職があって、仙台でも情報公開するプロセスの中から今の制度ができてくるので、あのときって実は平成が始まったころですけど、僕、実はこの研究を始めようと思ったのは、仙台でゼネコン汚職の、市長と知事が捕まるのがきっかけですね。そのときは、まさに仙台で最先端を行っている情報公開都市で、住民の声とかにもそういう情報を提供できる都市で、すごいいろいろあっちこっちから視察に来た時代だったと思うのです。それが、今こういうことをやっているということは、逆にいうとその先頭で走っていたのだけど、今ちょっと二番手集団、三番手集団に下がってきちゃったのかなと。

ですから、そういう住民参加の政令指定都市の中での新しい取り組みのやり方というのはやらなきゃというのやらなきゃいけないし、奥山市長が実は女性の初めて政令指定都市の市長になったのですが、ヒラリー・クリントンと一緒に、ガラスの天井を打ち破った。だから、女性が政治家をやるというのに少し否定的だっ

たのが、実は奥山市長というのは、ある部分女性の市長の道というのをかなり広げた。そういうような市民性ってあるわけですから、そこはちょっと考えなきゃいけないだろうと。信長の時代は、大体「鳴かぬなら殺してしまえホトトギス」だったわけですから、小さい人、声聞かないよ、俺に反対する人はもうバシッ、みたいな時代だったのが、そうじゃないところがあるので、そこはきちんとやっていく必要があるだろうというふうに思います。あと、もう1点だけ。先ほど議員の方々の超党派のという話があったのですが、自治体によっては会派を超えて複数の会派の先生方が議会報告会というのをやって回っている。もちろん、その自分の言いたいところをそれぞれ会派で調整するのですけれども、先ほど出た共通で出してくれという自由参加ではなくて、議会全体がそういうような形で議会報告会をやっているような積極的な自治体もあるわけですね。だから、そこはやらなきゃいけない。というふうには。

遠藤：

それは、仙台市はまだされてないのですかね。

Table C2

低層部を中心にレジャーし、
低層部の必要機能を考える

あったりするんで、そういうところでキッチンカーとかの活躍する場を作っていくって、仙台オリジナルの起業みたいなものが生まれる拠点になればいいのかなという風に考えています。あとは、さっきの話に戻ってしまうかもしれませんが、1階部分は確かに市役所としての役割というところプラス市民利用ということ、そんなに、あまり区画せず、ガラス張りですら区画しなくてもいいのであれば、私はその方が使いやすいと思うのですが、もう少し、オープンカフェのような雰囲気、例えば、ちょっとワーキングスペースみたいな感じで、市民の人がフラッと来て、コンセント差してパソコン作業ができたとか、その流れで同じテーブル上に、どこかの課の人と市民の人が打合せしているみたいな感じの雰囲気になる、というのもすごく面白いかなという風に思っていました。例えば南池袋公園とかの使われているイメージがすごくいいと思うのですが、あれも聞いた話だと、スタバも公募で出していた、というところでスタバの方が高い賃料を払ってくれたのですが、結局そこは地元のカフェを入れた、という

ころも将来的なところの地元で落ちるお金というものを意識してそのコンテンツを選んでいるというところは、見習った方がいいのかなという風に思っていました。ちょっと話がそれてしまいましたが。

佐藤：

ありがとうございます。そういう意味で言うと、平置き駐車場というところも何か、作りようによっては、あるいはコンテンツによっては、かなりにぎわうマーケットの場になる可能性もあるというふうな事ですね。

洞口：

駐車場イコール裏みたいな感じの考えにならなくてもいいかなと。やはりどの方面から見ても何かいい佇まいになっている、というようなことも大事だと思うので、その中で今みたいな駐車場自体が少し違う役割にも転用できるような設え方というか、そういう

ムアップで決まっています。
逆に言うと、予算取りするときにそれに乗っていると楽なので、全総なんてまさにそれに使われましたけれども、自分たちの持っている個別のプロジェクトをどう書いてもらうかのほうに集中して、最初から理想的に日本の国土がどうあるべきかというふうにできた計画ではないのです。都市マスもまさにそうなっているので、何の影響力も持っていません。

手島：
でも、それはそれで、微妙ですね、かなり。

平野：
いや、なのに、都市局がそういう余計な仕事をふやしているというだけの話なのです。欧米コンプレックスを持っている役人さんたちが、「やっぱりマスタープランないとだめだよ」と言って都市マスをつくらせる。余計な仕事がふえて疲弊するばかり。ああ、言い過ぎました、すみません。でも、日本のマスタープランとか総合計画というのは、そういう状態にある。もっとプロジェクトベースで現場は動いています。

河村：
どうですかねという話で、でも皆さんが聞いてないとなれば、やっぱりそこはもう一つ挑戦できるだろうと。
あと、もう一つ、そういうことをやっていると、今度市民提案制度みたいなことのその窓口を、例えば議会のほうにきちんと置いて、議会のほうで各党派が受け取ってどう反応するかというレスポンスまでを書かせるような形にしなきゃいけないし、じゃあそのためには議会の事務局の職員の質を上げてやらなきゃいけないので、実際に自治体によっては、これは議会事務局とは限らないのですけど、今僕も法科大学院で教えていますが、法科大学院で弁護士会に登録できなくて余っている人が大勢いるのですよ。法律がわかる、条例とか質問したら添削できる、そういう人材が余っていて、東北大にいますから、そういう卒業生。だからそういう、逆にいうと仙台市というのは、東北の他に比べればそういう高学歴な士業の人たちを活用できる自治体でもあると。だから、そういうところの法律の専門家を議会にあてがえば、じゃあ今度議会が条例とか手を抜いていけば、議会やってないじゃないかって言えると。そうすると、そういう職員の割り当てとか小さい工夫で、やっぱり議会改革というのはできると思うので、大きな改

ものも可能では、とっていました。

佐藤：
ありがとうございます。

錦織：
私も検討委員会で委員として参加していて、建替推進室の方にも少しお聞きしたりもしましたが、やはり今の段階で配置を決めるのは結構、難しいと思います。スケジュールとかプロセスをもう一度見直す必要があるのではないのかなとも思うのですが、お話を聞くといったんはFIXしないと次に進めない、中の部分まで決められないということもあるという風にも伺ったので、その辺のどういう風に進めていくのかということをもう一度ご提示いただけると一番いいのかなという風には思っています。それから先ほど杉山先生が、一番町のアーケードからクランクしてアクセスするというをおっしゃられていましたが、私はその形状自

末：
先ほどの小島さんの話で、おっしゃるとおりなのでそうだと思うのですが、少しつけ加えさせていただきたいということがあって、中身が見えないという話と、中身がないとか乏しいという話はちょっと違うと思っており、現在の仙台の都心部のビジョンなりミッションなりというのが見えていない、あるけれども見えていないという話なのか、あるいは中身が乏しいという話なのかというのとはちょっと区別して考える必要があるかなと思ってます。リノベーションまちづくり計画の中でしっかりと考えていただいているので、僕はあるとは思っていますけれども、そのところが、ちゃんと計画書としても出して、あるのだけれども、そこがまだそれほどの力を持っていないというところはあるのかなと思ってます。

先程のパワーポイントの中でも勝手に定禅寺通を緑色に塗っていましたが、そういうふうにもっと歩行者中心のまちの軸になっていったらいいとか、そういう話なんか議論はされましたよね。そういったところなどをもっと見えるようにするということと、あと中身をもっと詰めていくという話というのは

革じゃないですよ、1人雇用だけですから、それも専門職員を3年任期で。大体多いのは3年任期で雇って、3年で弁護士会の会の枠が空くので、そこへ行ってもらおうというようなことをやっているところは実際あるので、複数の自治体で。だから、やっぱりそういうスペシャリストを議会のほうでも増やす、ないしは議会のそのさっき言った窓口を、行政とは必ずつながるので、行政じゃなくて議会のほうにもつながる窓口というの、議会事務局にもう少しそのスペースをつくってやってあげるといのは大事なんじゃないかなと思います。すみません。

遠藤：
ありがとうございます。議会の中に、議会事務局のところに提案制度を置いて、提案されたことを検討してというようなことも考えていくことが必要だと。小さい自治体ではやっているところもあるが、大きい自治体は政党が窓口になりやすいということですね。あと、市民の皆さんとかNPOの皆さんも、政党になってしまふとちょっと関わりづらい、ちょっと怖いということが出てくるということですね。議会にあれば安心して提案できるかもしれないということですね。はい、ありがとうございます。

体も不自然な気がしていて、今ある市民広場自体もデザインし直した方がいいのではないかなという風には思っていますので、市役所を建てる時には、市民広場と一体で、意見がたくさん出ていますが、やはり計画すべきじゃないかという風に思っています。そうするためには、いろんな部局の方との横断的な協働体制というのが必要になってくると思うので、そういうチームづくりも含めたデザインというのが重要なのではないかな、という風に思っています。あとは、さっき、若い人が気軽にお店を出せるようになっていう話が、駐車場の使い方とか出ていましたが、1階の食堂を外に出してはどうかという話もあったのですが、期間限定のチャレンジショップみたいなものを1階に作ってみてはどうか、という風に思います。新しい仙台市の産業だとか、人だとか、市役所で働いている人を含めて、住民も含めて、市庁舎が育てていけるような状況が作れるといいなと思っていて、そういう意味でのコワーキングスペースだとか、あとはそれを実現化するのがちょっと手助けできるようなチャレンジショップだとか、そういったも

Table A2

みんなで共有した都市ビジョンを
みんなで作るかを、みんなで作る
どう位置づけるかを、みんなで作る

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から
「公共を担う仕組み」を考える

Table C2

低層部を中心にレジャーし、
低層部の必要機能を考える

Table A2

みんなで共有した都市ビジョンを
どう位置づけるかを、みんなでも考える

両方やらないといけないと思いますが、そこら辺がもう少し市民に、手づからというか、手に触れられるような、そんな形のこの都心の将来のありたい姿というものを見せていくというような、見えるようにするということがそういうことなのかと思っていました。

今までの計画の中で、仙台市の中でちょっと足りていないというのは、多分空間の計画として表現されていないというところがあって、これをもう少し、もっと洗練された形や、あるいは工夫された形で表現していこうというような努力が必要なんじゃないかなと思っていて、それがあつたら初めて河北さんとかほかの新聞社さんにも取り上げてもらいやすくなるし、市民の中での議論というのが深まっていくことだと思います。そういうのができるのは、やはりそれなりにちゃんとお金があつて、それで専門的なスタッフもそろっている、市の経営の専門家である市役所であり、それぞれの分野の専門家と一緒に考えていって、それを表現していくというのは、やはり出発点としては行政の役割として重要なものがあるのかなと思っていました。それに乗かって自分たちが「市民生活に対するどんなサービスを提供していけるか」を考えるが民間の事業者さんの役割であり、そういったところを材料として

出していくとか、論点を整理していくとか、声を上げていくというのは専門家としての役割があつて、それは期待されているのかなと思っています。

手島：

ありがとうございます。それに続けてもう一つ。私は建築の専門家なので、そういう意味でこの先どうなるかということを見ていくと、今は、基本計画でも、基本構想でも、市役所本庁舎がまちの中でどういう役割を果たすかということは白紙の状態ですけれども、多分、設計者が選ばれて、設計の段階になったときには多分、その設計者がつくっていくことになります。そのときに、市の側に「このまちをこのようにしたい」という大きいビジョンがないままに計画だけが進んでいくようなことになると、今は無いと言われている都市ビジョンの一部をつくれるチャンスを逃してしまうのではないかと危惧しています。

それで、今僕らがこうやって何年かかけて、「こういうふうなまちになりたい」というイメージを何となくみんなで合意してつくっていき、それで設計者が選ばれたときにうまくそことコミットして何か大きな形をつくっていくというのが、多分私たちが現実的

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から
「公共を担う仕組み」を考える

では、この後望ましい議会像や議会のゾーンですね、建物のところにもちょっと近づけていきたいと思うので、ここで菅原さんから、ちょっと5分ぐらいで、他の自治体ではじゃあどういう意図を持って、どんなふうな設計にしているのかなんていうことをご紹介いただけたらなと思います。ではお願いします。

菅原：

私のほうで、市民と議会、議会棟の関係というのを結構市議会の方々といろいろ打ち合わせをさせていただく中でつくった資料を、ちょっと使わせていただこうかなと思います。

それで、ちょっとごめんなさい、皆さんに全然お配りしてないのでわかりにくいのですが、市議会の中に調査特別委員会というのを設けて検討してもらっているのですけれども、その中で去年、答申というのが出されました。その中の基本的な考え方というところがありまして、赤線をちょっと2つ引かせていただいています。見えないと思うのでちょっと読みます。

1番目のところ、基本的な考え方一番最初のところに「市民に身近で開かれた議会とする」ということが書いてあって、目指そうとはしているのですが、じゃあ具体的に何がどうなったら市

民に身近で開かれた議会になるかって、実は議員の方々もすごい悩んでいる状態です。なので、できれば今日皆さんにそういう、今日たくさんお話いただいたので、それも聞いてもらおうかなと思って、実はそのの後ろに紙が書いてある席があるのですが、そこに市議会の議員の方々をお呼びしたのですが、今日残念ながらゼロです、来られなかったというところで。いろいろPRしたのですが、ちょっと私のPR不足だったのかもしれないです。あと、もう1つ、4番目のところにあるのですが、これが「市民への広報や議論の活性化を意識したICT環境の整った施設とする」というのが書いてあって、簡単に言うと、直接会って話ができない人だっているじゃんということなので、いろんなデバイスとか使って、どんどん市民の方々にアプローチしていこうという姿勢は見えるんじゃないかなというふうに思います。

ちょっと関係ないところでもあるのですが、すごい昔の、今の市役所の一つ前の市役所を壊すときに、河北新報に投稿した方が、当時の設計担当の方ですけど、その方が議論として書かせていただいている昭和40年の話。なので相当前の話ですけど、その人が何を言っているかという、「市の庁舎は市民が安易に出入りできる役所でなければならない」今と一緒になんですよ。肩を張った

Table C2

低層部を中心にレジャーし、
低層部の必要機能を考える



に選択できる最良の方法なのかなと個人的に思っています。このラウンドテーブルの通過地点としてそういうゴールがあるとして、僕らは今ここでうまく、現実的に選択可能な都市ビジョンをつくれなければ、結局そのチャンスも二、三年後には逃してしまうということになると思っています。なので、ぜひこれを、今後何回かやりながら、大きな話ですで大変ですが、チャレンジしていきたいと思っています。

平野：

幾つかそのスケールを分けて考えなければいけなくて、その位置を決めるところから決められるのであればいろいろなビジョンと関わってくると思います。要は、中心市街地をどう戦略的につくっていくのかということの戦略として市役所は非常に重要な駒になります。でも、場所を決めてしまったので、かなり限られたエリアのビジョンをきっちり出していくというのがまず一番大事なことで、それは先ほどから申し上げたように位置的に不利で、交通の担保がないところで市役所を建て替える、もう50年、100年、あそこでやるということを決めてしまったので、交通を担保することがまずひとつ目です。ですから、勾当台公園などやバ

ものでは役目を果たさない」と、同じことを言っているのじゃないかなと思います。

ここに出てきているそのストックホルム市庁舎が、市民のための庁舎として先駆をなしたという話を書いてあって、ちょっとそれ調べてみようかなと思って調べたのが、これからの例ですけど、これがストックホルム市の市役所です。ぱっと見わからないと思うのですが、この1階のホールというのがノーベル賞の受賞した人の晩餐会って、飯を食べるこういう広場があって、市役所の中にあるんですよ。そういうところが市役所の中に入っているというやつです。

これ議会ですけど、2階に市議会があって、議員の数が101名だったはずですけど、傍聴席が200個あって、ちょっとわかりにくいのですが、ここ、上のほうですね、上の階のところこの階段状になっているところに傍聴席がある。そして、月に2回、市議会のその議員の人たちの討論会、今日みたいに言いたい放題言う場、議論があって何かするのじゃなくて、討論をするという場があるみたいです。議場の天井がかっこいいからちょっと書いただけですけど、ちょっと特殊なのが、その議員席の議員数101名いるうちの、男女数はほぼ同じだというふうに書いてありました。

のがあるといいのでは、と思いました。

佐藤：

ありがとうございます。

山田：

皆さんたちと同じですけども、低層階の機能が決まらない限り、配置の評価もなかなか難しい、と思っています。いろんなケースが考えられますが、一番シンプルというか、配置でものを言えるとしたら、市民広場の延長に低層階が純粋に屋内型の広場になる、できることなら、屋内型の公園になるといいのですが、そういう前提であると、既存の市民広場とセットでこの低層階というのが一体のものとして評価をするというような見方もあるのでは、と思います。そうすると、変に屋外広場のありなしとか、配置も市民広場との連続性を考慮したときに低層階の配置がうまく繋がるのかとか、そんなようなことの評価になっていくのでは、と思

スの停留所などと一緒に設計をして、拠点性を持った県庁市役所バス停にしていくかというのがひとつ。

もうひとつは、空間的に、先ほど申し上げましたように動線がどうつながっていくのかが極めて大事なので、担保された交通動線、交通拠点と市役所との関係、市役所の広場とアーケードとの関係、定禅寺通との関係ということで、要は交通局と道路部隊とセットになって空間デザインをしていくというような体制がきちんと組まれることは極めて大事だと思います。残念ながら土木屋そのものが、交通やっている人は交通を渋滞なく流すにはどうすればいいかには詳しいのだけれども、自分がこの道路の1車線潰したらまちがどう変わるかとか、こちらにバスを通し直したらまちはどう変わるかということに詳しい人が多くないのも問題ですし、空間デザインに至ってはもうちゃんどできる人が全然いないという大問題もありますが、それでもやっていかないとまちとのつながりというのはきちんとできていかないとというのが私の認識で、そのためのビジョンというのは、やはり交通とどう結びつくか、まちとどう動線という形で結びつくかということをきちんと表現することだと思います。

もうひとつ、景観の専門なので、あの一番町のアーケードから見

なので、50名が男性、女性が51名なのか、逆なのかという話はありませんけど、ほぼ同じ数で男女比があると。

その市役所の中に、こういう舞踏会をする場所とか、あと結婚式をするときの、披露宴じゃなくて結婚を証明しますという証明書を発行するというイベントをやるような場所があったりというふうに、その市議会とか市役所が市民の方をどうやって引き寄せるかという設計をしている。

それは中の工夫ですけど、次がパリの事例ですけど、ここにおいて、この辺にノートルダム寺院とか、こっちにルーブル美術館とか観光地があるところのすごい近くに市役所があるのですが、パリ市なので、東京都庁と同じレベルです。なので、県庁とかそういうの、首都のかい建物ですけど、仙台市と同じように市民広場みたいなのが前にあります。そこにスケートリンクをやったりとか、あとはイベントがあってテントをやったりとか、こういう昔ながらのそういう広場を使った空間で人を呼ぶという空間をつくっている。歴史を調べたら、ここの広場で犯罪人を公開処刑したりとか、何かそういう見せ物スペースみたいな感じになっていた時代もあるらしいです。こういうスケートリンクがあったりメリーゴーランドがあったり、そういう風景写真の、これちょ

ます。どれがいいかというのはちょっとわからないです。

佐藤：

ありがとうございます。

伊藤：

我々もプロポーザルを出すときに、先ほどあった正面性、一番町商店街通りからの軸線みたいな話は、地元の方に聞いてむしろかなり気にしました。委員会の中でもそうですし、先ほどの前回はそうですし、でも軸の話をする方が必ずいて、そんなに小さい話だという風には聞こえてないのですが、歴史的には、やはりこういう流れというのがあり、むしろ広場の方が変形したわけであって、本来であれば、ある種の歴史的正面性というか、そういうものがあるのではないかと考えました。そういう感覚からすると、西側配置の方が、むしろ、そっぽ向いている、という感じがして、裏を作っている感じがあります。たまたま中央配置というので、

Table A2

みんなで共有した都市ビジョンを
どう位置づけるかを、みんなでも考える

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から
「公共を担う仕組み」を考える

Table C2

低層部を中心にレジャーし、
低層部の必要機能を考える

Table A2

みんなが共有した都市ビジョンを
どう位置づけるかを、みんなでも考える

ると真正面に市役所の敷地があるのですが、残念ながら今の市役所は全然その正面性を意識していない建物になっていて、建替計画案を見ても、低層階と高層階のバランスでどうなるかわかりませんが、この正面性は意識してもらえるのかどうかというのはちょっと悩ましい。そこはぜひ考えてほしいなと思います。ただ、関係者もいるので大きい声では言わないようにしますが、うちの農学部キャンパスみたいな正面性、新キャンパスね、ああいう格好悪い表現はやめてほしいと思いますけれどもね。

手島：

ありがとうございます。青木さん、お願いします。

青木：

末さんがリノベとかいろいろな部局のつながりのお話をされましたけれども、ちょうどこの前の委員会の中でも、防災とか災害のときにどうみたいな話があって、翌日に防災拠点の都心部、中心部にというようなお話も出ていたので、これからいろいろな周辺に建っていくものとかの機能とかというのをどこで合わせながら議論していくのだろうかというのがすごく気になったという

のを思い出したところです。ビジョンのところにも紐づいていくのだと思いますが、一気にほかの、音楽堂の話もあるので、その辺りを含めると都心部のビジョンに全部つながってくるのかなというところは気になります。

増田：

大きな都市ビジョンをつくる機会ではないかという議論ですけれども、先ほど笠間さんからあったレベルでいうと、ミッション、ビジョン、バリュー、ストラテジー、どのレベルのものを考えるかなというのが一つ気になっているところです。

もう一つは、リノベの話もあり、建替えはあまり議論していませんが、例えば商工会議所が1990年代以降、何度も都心回遊型を高めるまちづくりプランみたいなものを出していたり、仙台都市総研がいろいろなプランをつくって都心交通をどう改善するのかという議論をしていたり、多分それぞれの段階ではいろいろなアイデアが出ていたりもして、でもそれはなぜかその後につながっていかないのですが、例えば都市マスから出てきた景観計画も、グランドレベルの何とかのある一部はもう既に議論として立ち上がっているところもあるので、本当はそういうのも総レビューし

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から
「公共を担う仕組み」を考える

と有名な方の写真ですけど、パリ市庁舎前でキスとか、そういう感じの使われる場所になるというところも、一つ市役所のあり方なのかなと思っています。

さっきは海外の話だったんですけど、次は他の国内の都市の議場の配置の計画をしているという内容で、これは千葉市の例です。千葉市は、ちょっとわかりにくいのですが、こちら側の左側の白い部分が行政の建物で、くっついているんですけど右側のこちらの緑色の部分のところが議会棟になっています。こんな感じで、建物はつながっているんですけど、議場が議会棟の上の一番上のところに入っていると。ここです、議場があって、行政の部分と出入りができるようになっています。その上の階に傍聴席があって、さらにその上に議会の図書室とか庭園があって、市民の方がアプローチしやすいように、その議会の上の屋上庭園とか議会図書室から議場のほうにアプローチできるようになっているという形です。

次が川崎市の例ですけど、川崎市はもう超高層のビルをつくるという形で、議会どこにあるかわかりにくいんですけど、一目瞭然になるようにこの辺ちょっと金色っぽい色になっていて、ここがちょっと何か議会の部分になっているという状況です。最上階の

ところに何があるかというところ、議場とか議会関係の他に展望ロビーというのがありまして、最上階に展望ロビーがあって、そこに市民が来る、そしてそこから議場にアプローチできるようにという設計になっています。これが22階、23階、23階に議場があるのですけれども、24階には傍聴のロビーとか傍聴席があって、そのさらに上に展望ロビーがあると。なので、市民の方々が展望ロビーに来て、お茶とか飲みながら吹き抜けるのほうを見ると、一つ下の階に議会の傍聴ロビーがあって、議会を見ようと思えばすぐ下りてきて見ることができるつくりになっているという形です。

次が横浜市ですけど、横浜市は2棟の建物になっていて、奥のほうのその超高層、これ120メートルぐらいあるんですけど、これは行政の建物で、手前のこの何か白くて船みたいな感じのやつが議会棟になっています。議会棟の部分のところの入り口のところは全部共通で、行政にも議会にも行けるようになっているという形です。すごくわかりにくいんですけど、この辺が出入り口になっていて、こっちが議会部分、こっちが行政部分でなっています。こんな感じですよ。ここが3階ですけど、1階と2階は全部お店が入っているんです。お店が入っていて、商業施設が入ります。食堂とか喫茶店とか、市役所の公務員用の食堂をつくらなかり

Table C2

低層部を中心にレビューし、
低層部の必要機能を考える

私どもはプロポーザルで出したのですが、これが必ずしもすごい正解だとも思っていないのですが、折角なので杉山先生どうでしょうか。

杉山：

私の個人的な感覚かもしれませんが、一番町から時計が見えたり、あるいは昔のタワーがあったり、という思い出から、何かしらの視覚的なアイストップが欲しいという方は多いのではないのでしょうか。しかし、一番町から真っ直ぐに市役所に向かって大量の人間が、黒ビルの西側の寂しい道を通って進むことを受けて正面性を作るというのは違うと思います。将来的に10年、20年、50年後まで黒ビルがあるとは限りませんが、もちろん市民広場も変わっていくでしょうから、決して一番町からの流れを否定するわけではないんですが、それにしても、人の動線と、高層建物の正面性をどこに向けるのか、という話は別のだろうと思います。建物としての正面性は、先程も言いましたが、もっと大きなスケール

で見て、周辺の緑地や県庁、議会棟、合同庁舎まで含めて考える必要があると思います。

佐藤：

軸線についてご意見ありますか。

錦織：

折角なのでいろんな意見が出た方がいいかと思って、私の個人的な意見を話させていただこうと思います。軸線はあってもいいかなという風には思っていて、というのは、東側の歩道というのは、歩きやすい分、スピードも早いというか、通り過ぎていくような感じのイメージがあります。色々ぶらぶらしたりだとか、あちこち見て歩いたり、ということ考えると、アーケードから延長線上にあるような通り道が市役所までであるといいのではないかなという風に思っていました。それから、引きを取るかどうか、ということですが、逆にもしかしたら建物がある方が寄り付きやすいの

て、どういう観点が出ているのか、足りなかったところは何なのかというのをやらなきゃいけないというのは、大学がやるのか、どこかでやらなきゃいけないという気もしていました。

もうひとつ、今回の議論でその次につながることでいうと、今回ここで建て替わりますけれども、建て替わった後、既存の庁舎敷地がまちの中に空き地となってきます。一番近いところは北庁舎ですけれども、それ以外にも集約してくるところがあり、そこを種地にその次のプロジェクトはどうするのかというのはいずれ議論しないといけないですけれども、土地を売ってしまって好きにやっってくださいというのは、それはそれでお金を稼ぐ意味であるのかもしれませんが、でも何か別の活かし方もあるのかもしれない。

さらに言うと、音楽ホールや市民会館の話もありました。あともう少し行くと、交通局のバスプールはあそこであのような土地利用でいいのかどうかですね。震災復興記念館もあそこにあのまま残すのか、リニューアルするのか、もう年度が来たら廃止するのかという、公共施設全体のプランも多分あと10年、20年後にはいろいろところで求められてくるので、少しそういうまちなかのリノベとリニューアルのアイデアを議論する場所がそろそろ欲し

に1階と2階に食堂とか物販店とかを入れて、市民の方も使える、そして3階が上がってくると行政のアプローチができるし、上のほう、このオレンジの部分のところが議会へのアプローチになっているという形です。

議会、ちょっと面白いのが、これ8階の部分ですけど、このオレンジの部分のところに市議会の議長とか副議長が入る空間です。同じフロアに普通いないんですけど、市長とか副市長がこの同じフロアにいて、行こうと思えばこの扉を開けて向こう側に、普通に廊下を通っていけば議長と市長がやりとりをできる関係って、なかなか今までなかったんじゃないかなと思うんですけど、そういうちょっと斬新なつくりになっていると思います。

次が京都市ですけど、京都市はもともとある建物を文化財的に残そうということで、こちらは残して、このど真ん中に議会があるのです。なので、京都市役所イコール、もういきなり議会みたいな感じになっています。新しい庁舎は裏側につくるので、全然アプローチができないかという、そうじゃないよということ、上空通路をつなげてやりとりができるようになっていて、ちょっとわかりにくいんですけど、議会がここにあって、すごく古い建物なのでバリアフリーも何もしないで、今回の

ではないかなという風にも思ったりしています。今の県庁自体はなかなか、近寄りやすい雰囲気があるので、もう少し市民が出入りしやすいようなことを、広場だけではなくて建物で考えていてもいいのではないかなとちょっと思ったりもしていました。一意見としてとらえて頂ければと思います。

洞口：

私も一意見ですが、さっきも低層部の使い次第で配置も変わってくるのではないかという話はあった中で、逆に言うと高層部というのはランドスケープ上で結構、そこで決めてしまってもいいのかなというのがあって、一番は、アーケードって囲われて屋根もあってという中で正面に見えてくる、時計塔のイメージとかは結構、象徴的でいいかなとは思っていて、そういう意味で例えば、黒ビル側に高いものを全部寄せてしまって市民広場とか県庁よりの道っていうのは高層のものではなくてもう少し、低層で市民に開かれたようなイメージもあるのかなと。例えば西側配置案の低

くて、そのスタートポイントとしてここをぜひ使いたい、そんな感覚です。

大泉：

また「されど役所」のお話ですけれども、やはり今のお話を考えると、増田先生はそういったまちづくりの課題の総レビューを大学がやるべきなのかなという、ある意味そういう先生から発言が出るのもありがたいなと思いつつですけれども、一方でそれは行政の大きな役割なのではないのかなと期待も込めて思います。いろいろな仕事がある意味縦割りとはいえ担っている。でも、今の話だと縦割りだと全体が総レビューできなくて、自分のセクションのレビューはしているけれども総レビューができないと考えると、やはり古くて昔からの課題ですけれども、どうかその縦割りを越えた職員の、むしろ僕は機構というよりはマインドだったり、視野だったり、感性だと思いますけれども、先ほどの交通局さんはこうだとか、景観がどうだとかという、それをある意味、自分は専門じゃないけれども、そういう人の声は聞いてみようというマインドを持っていたり、だったらあの人に聞けばその話が聞けるかもしれないという人脈だったり、アンテナだったりという、

改修と増築でバリアフリー化を進めるという形になっています。傍聴席は上の階で、市民のモニター室とか授乳室を併設するというふうな形になっています。

国内ですけど、議会部分と市民利用部分の関係ということでちょっとまとめたものがありまして、千葉市の場合だと、その議会機能を低層棟の上層部に配置して1・2階は市民利用、川崎市は最上階につくってしまうので展望ロビーからアプローチできるようにすると。横浜市の場合は、1・2階をお店にして3階部分にロビーとか案内所を設置。京都市のほうは、バリアフリー化を図ったり、あと説明してなかったんですけど1階部分にお店を入れたりかしています。そんな感じの取り組みを他の都市でもやっているという状況でした。

すいません、長くなりました。

遠藤：

ありがとうございます。横浜の1階は物販店、レストランというのも面白いですね。

では、残り15分を切ったということですので、皆さんから、今まで議会と行政と市民の関係、こうだったらいいなという皆さんか

層部分をL字型に曲げたようなものとかで、もう少し県庁側の道、東二番町通りに低層部分がはみ出してきたような形でその部分が市民に開かれているっていうのもあるかなと思っていて、そうすると結構道を歩いている人にとっても建物が近く感じて、かといって圧迫感がないっていうのがあるので高いボリュームは、全部今の黒ビルにある方に寄せてしまって、そっちの広場の方には低層のもので市民に親しみやすい機能を入れてしまう。外観的には圧迫感のないものをもとというのも、L字型案みたいなものも可能性があるのかなとなんとなく思いました。西側の高層部分をこっちに寄せて、なんか道にはみ出すようなイメージもありかな、とは何となく思っていました。一つの意見です。

高野：

先ほど、配置は後でと言っていたのに言いにくいのですが、もしやるのであれば、僕は駐車場も含めてもっと低層ってありかなと思っています。検討委員会でも、姥原先生だったかが言われたと

Table A2

みんなで共有した都市ビジョンを
どう位置づけるかを、みんな考えて

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から
「公共を担う仕組み」を考える

Table C2

低層部を中心にレビューし、
低層部の必要機能を考える

Table A2

みんなで共有した都市ビジョンを
どう位置づけるかを、みんな
で考える

そういう職員さんが増えれば増えるほど、それに少しずつは近づくだらうなと思います。「たかが」と言ったものの逆説的ですけども、職員さんが、ある意味そういう気概だったり、自分たちが描く姿が市民の人生だったり、暮らしだったりを大きく左右するというマインドを持ってそこをやっていたらいいなと、すごく期待を込めて思います。

それはある一方で、行政に任せると言っているわけではなくて、それぞれの専門分野で聞かれたときは、「俺はこう思うよ」とか、「一生活者としてこうあってほしいな」という職員さんとのやりとりを、それを官民癒着などつまらないことを言わずに、どんどん業者さんとも会って、どんどん折半でゴルフもして、飲み会も行って、もっともっとその垣根を越えてもいいのかなと。行政の方と飲みに行くと何かすぐに、「いや、業者の方々とは」みたいな感じのその線引きが残念で仕方がなくて、今日語られている話のもっとも一緒にテーブルに乗ってやりましょうよという話だけでも、現実の仕事は、業者とは会ってはいけないとか、名刺はここでしか受け取れないとか、部屋に入るとかですね、違うのかなと思います。

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から
「公共を担う仕組み」を
考える

らのご提案も出てきていますので、やっぱりこういう機能やこういう関わりを今後つくるためには、庁舎としてもこうあったらいいんじゃないかみたいなことをセットでお話いただけるとありがたいなと思います。1人2分ぐらいでお願いできたらと思います。

じゃあ、今野さんから行きますかね。

今野：

いい例を見せていただいたわけですが、私やっぱり今の議会棟は入りにくい、それは非常にやっぱりまずいなと思っています。傍聴席には何回か行って話は聞いたことあるのですが、行くのはやっぱり大変だな、構えて行かないといけないという感じですよ。やっぱりこういうふうに、フラットに行けるようにしてもらえると非常にいいかなというふうに思いますね。

あともう一つ、今の市民広場はやっぱりそれなりに活用していますよね。あの市民広場は市民広場としてやっぱりちゃんと確保してもらった上で、そういいかなと思いますね。

あと、私思うのは、やっぱり仙台市が防災都市宣言しているの、そういうことも何か考えた上でというか、屋上へリポートをつく

Table C2

低層部を中心にレジャーし、
低層部の必要機能を考える

思いますが、やはり縦移動って結構難儀です。横移動のほうがしやすいというところもあると思うので、上層の機能を考えても、極論を言ってしまうと、もう屋内の空間、広場をつくるのであれば、フットプリント全部でもいいぐらいのフルでやって、フルだと一番低いってどこなのって、周りよりも低いぐらいで、逆に屋上を開放するというのもありだと思えます。そういう極論の案があってもいいのではと、正直思います。何か概念ぶっ壊してもいいのかなと。それで意見を聞くのであれば、そういうのがあっても、役所イコール高層みたいなものってどうかとも思うし、仙台市の規模なのでなかなか難しいとは思いますが、例えば1階、2階の手前側、定禅寺通り側をアトリウムみたいな感じにしてみるといいかなと。あるいはピロティという考えもあると思うし、車寄せも中に入れてしまって、駐車場は場合によっては地下に埋めてしまって、みたいなことをしてしまうと、あるいは駐車場は屋上でもいいぐらいだと思っているので、何かもう全部の配置計画が駐車場のボリューム多いなというのも気になっ

小島：

リノベーションまちづくり計画を褒めていただきありがとうございます。私が現役時代に、私がつくったわけじゃないですけども、あれは公民連携のまちづくりの実践として、実は行政計画に位置づけしていないのです。要は、行政計画に位置づけすると財政というものが出てきます。先ほど平野先生から、財務省という話がありましたけれども、「財政的に裏付けをするとやりやすい」ということもあります。そうすると足の引張り合いになってきます。おもしろくないんです。全くおもしろくなくて、総花的で何やっていいかわからないようなところも出てきてしまうとかですね。あのリノベの計画については、委員会形式は当然ありましたけれども、委員の選定は市民さんをお願いし、毎回委員を替えていきました。結局、そのプロセスと「こういうまちをつくらう」という問題提起を計画にした。ですから、それが出発点なのです。どうしても計画というのは、それをつくって職員連中はみんな疲弊してしまいます。「ああ、終わった終わった」というふうになってしまいます。そうではなく、「民間の力に委ねよう」という、行政はそういうつくり方をしたので、だから恐らく民間の方々もおもしろいというふうになってくるのかなと思っていて、そうい

るとか、何かそういうようなことも含めて議会棟を考えてもらいたいというふうに思いますね。

遠藤：

ありがとうございます。谷津さんお願いします。

谷津：

一般の市民からすると、多分身近なのは区役所で、本庁ってなかなか、何をしに行くのだからというのがあると思うので、一般の市民の方たちも行きたくなるような、そういう場所になるといいなというのがまず第一で、あと障害の部分で言うと、障害者保健福祉計画というのを仙台市につくっているのですが、そこに「共生の都・共生する社会」というのがあるのです。「仙台はこういうことを大切にしている」というのがわかるような建物になるといいなというのも思います。

そう考えたときに、先ほど高層階の上に展望台があって議会を見られるというのもすてきだなと思うのですが、例えば車いすの方が上まで見に行くと、24階とか25階で被災してエレベーターが止まったら、下までどうやって避難するのだろうかと思うと、やっ

てはいたので、そういうところを、今配置計画をやっている中でいろんな要素が出てきていると思うので、それを一旦ソフト側の検討にもう一回戻していただいて、配置計画を一旦ストップしてまた戻す、みたいなのをやるべきだと思います。両方やらないといけないのもわかりますし、何かしら形を決めないと次の検討が厳しいという話もわかるのですが、これができるのが10年後とかの話なので、今やらなくていつやるのというところだと思うのでその辺、やってほしいと思います。

佐藤：

あと10分になりましたので、ご自由にどうぞ。

伊藤：

プロポーザルで考えている時に、先ほどあった西に寄せた時に、西側にもすごく巨大な壁と裏を作りだすのですが、それは気になりませんか？

う意味では、それを踏まえて我々のこの会合は意義づけすればいいのかなと思います。

もうひとつは、そういう意味で見ると、この間のそのリノベの委員で、計画についても、今ブラッシュアップしていますが、そこで出るキーワードは、役所だと「社会基盤の整備」という言葉があって「物をつくと」ということになっていますけれども、今の時代は、そんな言葉は全く出てきません。社会基盤の整備など一切出てこない。雇用、子育て、あとは起業、創業ですね。若者の定着、人材育成、循環型社会、循環型は環境面だけでなく域内循環です。経済的な域内循環、要は中央資本に搾り取られないようにしようという話です。そういうことに対して、そのまちづくりというのでしょうか、ソフト面のまちづくりをどうする、どう絡めていくかというところが出てきて、回答はなかなか出せないですけども、結局、持続可能な社会・仙台というものをするためには、中央資本じゃなくて、意義づけというか、潜在的な需要もある市民力というものを活かしながら、その循環型社会を実現するというのがリノベのひとつの精神かなと思っています。そのプロセス、実践が我々だというふうに思っており、私は今日参加させていただいております。

ばり命を守るという視点や先ほど言ったみたいに、わざわざ行かなくても議員さんとすれ違ふとか、行政の方と議員さんがわざわざセッティングしなくても日常的に話ができるようになるというのを漠然と思いました。以上です。

遠藤：

ありがとうございます。仙台市庁舎が、仙台市のさまざまな計画でうたっていることを体感できる施設ですね。あとは、議員さんと行政と市民がすれ違ふような建物というイメージ。ありがとうございます。

では、緑上さん。

緑上：

安全上の問題、セキュリティとかいろいろあって、ある程度の制限はあるのでしょうけれども、私も皆さんが言っていたように、同じ空間に議員さんも行政の職員さんも市民の皆さんもいられるような場づくり、あとお子さん連れのベビーカーでもすっと入っていて、授乳しながら議場の様子が見られたりとか、お茶飲みながら議員さんの話をお茶のみ話しながら議場の様子を眺めら

高野：

個人的な意見ですが、そこまで気にするような人たちがそこにいるとは余り思えないです。その人たちが市役所に対して何かというのを聞いたことが余りないとか、今はそういう状況だからかもしれないし、実際の大きな壁ができてみないとわからないというところはあるかとは思いますが。

伊藤：

多分これの半分くらいの高さの一般的に31mとか、40m弱くらいの建物が道路に面して寄るといのは何となくあり得る、と思うのですが、80m級のものになった時に一般的にはそっちに寄るといのはなかなか考えにくい。

佐藤：

そのあたりの皆さん、定禅寺通りにみんな流れるイメージではな

末：

もう一つ問題提起したいのは、先ほど増田先生の話にも出てきたように、あちこちに分散している市有地をどういうふうを活用していくかということですが、これも含めて今回の建替えプロジェクトの中では議論をしていただきたいところではあります。後からという話ではなくて、先ほど僕が指摘させていただいたように、本来は一緒に考えて、複合的に課題を解決できるはずのものひとつだと思います。

例えば、市民参加型のまちづくりをやるということを考えたときに、高層階の上のほうに市民参画を所管し、市民参画を応援するような部署が上のほうにいつてしまえば、本当にそういうものが見えるのかということではあります。東北大学の研究室でサンプルプランを検討されていたという話は前回にもご紹介いただきましたけれども、その中の提案のひとつには、メディアテークのここにそういう市民参画の部署を置いたほうがいいのではないかというような、そういう意見とかプランが出ていたというお話もありました。それはすごく自然だと思っており、一々何でひとつの建物の上のほうに追いやる必要があるのかということ

れたりとかということ、市民がくつろぎながらも議員さん、議会の場と触れ合えるような空間づくりというのをしていただけると、より身近になるのかな。議会のためじゃなくて、行ったついでに議会が見られる、そんな感じのものがあるといいのかなというふうに思いました。

遠藤：

ありがとうございます。鈴木さん、お願いします。

鈴木：

建物自体に関しては、もう正直決まっている部分とかもあるのじゃないかなというのちょっと思いつつ、これをつくるまでのプロセスに本当に多くの人、それこそ若者であったりとか、いろんなマイノリティーの方であったりとか、そういった方々が関わってつくったというストーリーがすごく大事なんじゃないかなというふうに思っていて、今から変えられるものなのか、もうある程度進んでいるものなのかというのはあるかと思うのですが、そのプロセスのところであれば、今回ちょっと残念ではありましたが、その議会の方がいて、じゃあここに若者もいて、例えば障

いですか、そっちの市役所に対してというか……。

伊藤：

意外に裏の話が出ないので不思議だないつも見ているのですが。

杉山：

中層2棟案がありましたけれども、あの2棟案をL型に配置し、東南のまとまった広場を囲むくらいのほうが、いろんな意味でバランスが良いと思います。

高野：

1階、2階が開けていればいいのではないのでしょうか。壁じゃなくて、例えばガラス張りじゃないけど、アトリウム的な感じになっていれば、壁はそんな目線を上に上げるかということ、そうでもない気がして、1階、2階レベルの話だと思うので、あと日陰が落ちるか落ちないかとか、そういう根本的な話だと思うので、場合

Table A2

みんなで共有した都市ビジョンを
どう位置づけるかを、みんなで考える

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から
「公共を担う仕組み」を考える

Table C2

低層部を中心にレジャーし、
低層部の必要機能を考える

Table A2

みんなで共有した都市ビジョンを
どう位置づけるかを、みんなでも考える

すよね。市民参加が本当に仙台らしさというのであれば、本来その形が本当に見える地面のレベルにそういった部署があって、そこで市民との協働の姿が具体的に見えるという形を表現することによって高層階が1層減るし、余り使われていないと言われてこのメディアテークを有効活用するというようなことにもつながるし、実際にこの定禅寺通の地面レベルからそういった形が具体的に見えるというふうになることによってさらに、気づいていなかった市民の方々が自分も何かやってみようというふうなきっかけになるかもしれない。そういった部分も含めて議論されていますか、それとも建築物の計画をしているのですかということがあって、本来、基本構想はその辺りのどうあるべきかみたいな話があるのではというような議論が前回の議論の結論で、それを今日議論しましょうという話だったと思いますけれども、そういったところを本来はやるべきなのかなと思っています。複合的な課題をいかに解決していく、その手段とすることができるとかという方向からも、この市庁舎の建替えがいかにあるべきかを考える必要があるのではないかとことだけは言っておきたいと思います。

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から
「公共を担う仕組み」を考える

害を持った方とか、性的マイノリティーの方がいらっしゃったりとかっていうふうになって、そのプロセスの中で、じゃあそのシンボリックなものをみんなでどうしていこうということをやることのその議論自体が、多分その先の例えば施設であったりとか、まちづくりを考えていく上ですごくいいものになるのじゃないのかなというのを、今日この場にきてすごく感じて、ああ、いい場だなというのをすごく感じさせていただきました。ありがとうございました。

遠藤：

では、横山さん、よろしくお願ひします。

横山：

ハードのことは、やっぱり空間ってすごく大事なもので、例えば議員さんがステータスのある職業であれば、やっぱりステータスのある空間でなければいけないと思うのですが、私はもう今のその地方の議員さんというのは、ステータスというよりは、サラリーマンをやっている方が仕事を終った後に大事なことを議論しに行くとか、子どもたちも、小さい子は遅い時間はだめですが、学校

Table C2

低層部を中心にレビューし、
低層部の必要機能を考える

によっては市役所のアンケートでもとってもらって、その方々を集めてもらって話を聞くというのものもあるかもしれないですけど、大変だと思いますけど。

佐藤：

ありがとうございます。

周辺住民の方との対応も多分いろいろあるでしょうから、市役所としては厳しいのかもしれませんが。そのほかご意見ありますか。

高野：

佐藤さんに聞きたいのですが、ご存じない方もいらっしゃると思いますが、市民広場は、都市デザインワークスさんがいろいろなこれに関するイベントで市民広場との関係性というか、そういうのを何度もやられていると思うので、そういう立場からのご意見もここで言っていただけるといいのではないかと思います。

手島：

ありがとうございます。まちなかに市役所機能を分散するというアイデアは、前回のラウンドテーブルでも出ていましたし、僕もあると思いますけれども、それをもし本当にやるのであれば、今、市役所のいろいろな部署がまちなかに分散していることによって、まちづくりの効果が本当に起こっているかどうかを検証すれば、それはもうわかると思います。分散することによってそういう役場機能が何らかのまちづくりの拠点になるかどうか。僕は多分なっていないのではないかと思います。今はただ単に借りたビルだから、という話はあるかもしれないですが、実際にあの二日町界隈でそういった効果があるというふうには何となく思えない。しかしあるのかもしれないですから、あるのかどうかはきちんと検証し、もし芽があるとなれば、それはそれだと思います。

平野：

末さんが言っていたのは、今ある施設の中に放り込んで小さい分庁舎をそっちに使えと言っているんじゃないので、確実に投資効率はプラスになるものとは思いますが。アエルの上階のほうにも仙台市は床を持っていますから、無駄に使うのではなくて、そう

終わった後に行くみたいな、そういう方が議員になるような時代を期待しています。これは北欧などでおありになると聞いています。私はステータスではなく、市民がともにそのまちをつくっていく役割としての議員というところまで、全国に先駆けて行っていいのではないかと思います。ということで、その議会像のゾーンは、谷津さんがおっしゃっていたような、本当にその肩肘張らないですれ違う、ハードルなく一緒に語るみたいな、だから議会中の議会棟と、それから議会議中じゃないときと、同じ空間だけれども、上手に空気を変えていくというか、そういうことをすることで、市民と行政と議員さんとのディスカッションも、こういうワーキングなんかができたりするのもすごく理想的だと思います。それからもう一つ、前回も言ったのですが、組織を持っている人は比較的議員さんだろうが行政だろうが話通りやすいと思いますが、個人でいろんな思いがある人、それもきちんと建設的な意見や考えを持っている個人の人の声をちゃんと聞いてもらえる場所がすごく必要だと思っていて、前回のこのワーキングでシティーギャラリーという言葉で東北大学の杉山先生おっしゃっていたのですが、そういったシティーギャラリー、みんなが話し合える場所、知的な場所、お話ができない方は紙に書いて

佐藤：

去年の基本構想段階の時から、多分、広場の関係性が一番、市民側からすれば関心が高いだろうな、ということでそう思ってやってきています。この2棟案の話も我々のワークショップの時にも出ていました。ただやはり、色々この辺で活動していると、実はこのあたりの意見というのも聞こえてはきています。あまり寄ってほしくないというのは直接、私も聞いたこともあるので、結構きびしいのかなというのは、正直なところありますね。

確かにさっきのプロポーザルで拝見した、あの低層部の考え方というのは、我々のワークショップの中でも出てこなかったもので、すごくこういう風になれると確かに何か可能性があるという風には、実は思いました。ただその案が今、検討には入っていません。低層部を切り離して考えるといったときに、今日のご意見にもあったのですが、屋内広場をしっかり取る、ということですよ。あるいは、中庭のようなものを取るというような案もあったので、今色んな配置でかなり広くとっているのですが、もう少し広場の

いうところに該当部署はどんどん出して、本庁舎のボリュームは小さくするというのはすごくいい発想だと思います。分庁舎は、あんな細かいのをごろごろ持っている維持コストがかかるので、それは潰したほうがいいと思いますが、既にもう維持コストがかかっているところに入っていきというのはいいと思います。大泉さんの話に刺激を受けて、仙台市はもう少し人事をしっかりと考えればいいのかと思いました。これだけのピックプロジェクトをやるのだから、当然ながら、局としては財政局で担当するけれども、実は人事異動はちゃんとあって、建築職だけでなく、土木職だとかまちづくりをやってきた人材を集めて、分野横断型のスペシャルチームをちゃんとつくって、外から見ると縦割りだけれども、でも中身は完全に分野横断のスペシャルチームで、すごくまちづくりのことも一緒になって考えるというふうにするばいいのに、とは思います。

大泉：
今のお話、特に末さんのお話を聞いていてやはり、例えばほかの市有地の、震災復興記念館だとか、アエルだとか、そういうところまでを包含して今回の市役所の建替えを考えますというメッ

送る、データでどこかに出すみたいな、そういうところになると、すごく開かれていて、かつ建設的なものができると思います。以上です。

遠藤：
ありがとうございます。河村先生お願いします。

河村：
今、政令指定都市の事例を出してもらったのですが、震災後に建て替えたという、僕はちょっと長岡市と仕事を一緒にやってたのですが、長岡市はあそこに矢印ありますけど、イベント会場というか、1階にイベントができるようになっていて、AKBが来てそこでコンサートやったりするのですが、その下に議場があるのですよね。カーテン開けちゃうと丸見えです。要するに、開かれた議会議場って、議場を見えるかって、インターネットにしたって見えないわけで、たまたまそこを歩いた人に見られているというほうが、議員の先生方には非常に大きいという話を聞きました。だから、イベントができる空間と、議会が見える環境をつくるというのは一つの方法としてあるのだからというのでは

スケールは、こっち側の広場のスケールをブレイクダウンしてもいいのかと思っています。当然ここの引きはあるので寄ってくるとちょっとつらいのですが、そんなにここのスペースが大きくななくてもいいのだから、私も個人的意見ですけど、その分を中にアトリウムか何かで広場をとってあげるとするのがすごくいいのかなと思っています。あとはここの道路です。土日くらいだったら歩行者天国くらいできるのではないかと、という話があって、非常に期待しているのですが、とは言っても普通の日は、車を通さないといけないですからそのしつらえですね、街路樹も含めて、この辺もやるのであれば、相当レベルも含めて多分やり直すとか、当然のことながら一体の設計にして変えていただかないといけないというふうには思っています。多分ここのしつらえがうまくいけば、引きをあまりとらなくても充実したものにできるのではないかとと思っています。

村山：

セージを受けたときに、単に建物の建替えではないのだと、まちをどうするか議論なのだ聞いたときに、わくわくする人や、「だったら俺、こういうこと言いたい」という人はいると思うのです。今は、何かそういう需要喚起するメッセージではなくて、どちらかというと「市役所を建替えます」という話だけになっているのはもったいない。むしろ何かみんなにわくわくしてもらったり、「俺にも言わせろ」という人が増えたり、ただ、取りまとめる人たちは大変だから小さく仕事したほうがいいよねという感じも事務方としてはする気もしますけれども、そこは一步乗り越えて、いや、俺たちの仕事ってそれが本業だよということに根っこを持って、もっとプレーヤーというか、発言者が広がる、もう何か大風呂敷を広げてくれれば、もっとわくわくするかなという感じが、今の皆さんの話を聞いていて思いました。

手島：
ありがとうございます。ちょっと平野先生と末さんの話について思うのですが、女川みたいな小さい場所だとそういう小回りした政策はできると思います。ただ、仙台ぐらいになると大きな計画で、まず誰か決裁する人がこれはここに集めましょうと、それはもう

あって、だからその議場の空間のどこか、要するにガラス張りにしてあげる。秘密会議だったら、別にカーテン閉めればいいだけの話ですから、それを基本にするというのは一つの提案としてありじゃないかなと思います。

もう1点、ちょっと資料にべたんとくっつけたのですが、皆さん議事録見たことありますかっていう話です、仙台市の市議会の議事録。ほとんど大変で見たことがないのですよね。我々今、これ宣伝ですけども、大学のほうで議事録のデータを、例えば全文検索で、例えば議員さんがオリンピックと言った人は、例えばどここの議員さんはこんなことを言いましたよというのを出してやるような研究をやっているのですね。仙台市だけの単体だったらすぐできる話。だから、情報公開をしますではなくて、情報公開最先端だった仙台市の立場からすると、情報を出すのじゃなくて、もう一つ先へ行くようなものを、仙台市の議会の新庁舎にあわせてつくってくれたら、例えば政務活動費も、領収書のコピーをインターネットで見せられたってしんどいだけ。だけど、この人タクシー券どれくらい使ってるのかな、パチパチっと検索したらすぐ出てくる、そっちのほうをやっぱ開かれた議会になる。だから、インターネットに情報を出すというところは、仙台市は

配置から離れていいですか。

佐藤：
はい、結構です。

村山：
今日、これだけは意見を申し上げないと、思っていましたコンテンツの話を見せて下さい。

杉山先生の資料にもありましたが、実は仙台の歴史というか、まちづくりの歴史というのを外観できるところというのが実はないのです。震災復興としては震災復興記念館というのがあるのですが、大正、昭和、平成、現時点、震災もありましたけど、そういうような仙台のまちがどういった人たちによってどういったふうにつくり替えられてきたか、できてきたかというような、実はそういったものをまとめて定点観測できるようなものがないので、これはぜひ、デジタルアーカイブでもいいのですが、そうした機能

Table A2

みんなで共有した都市ビジョンをどう位置づけるかを、みんなで考える

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から「公共を担う仕組み」を考える

Table C2

低層部を中心にレビューし、低層部の必要機能を考える

Table A2

みんなで共有した都市ビジョンを
どう位置づけるかを、みんなでも
どう位置づけるかを、みんなでも

A 4判1枚ぐらいに書いてあるぐらいで、イエスカノーかというぐらいの簡単さじゃないと通らないというか、決裁ができないのだと思うのです。これはこれで僕はしょうがないと思っています。

小島：

ここからはもう、市役所のOBとしてですが、私が現役時代だったら、こういうラウンドテーブルのようなシンポジウムはできなかったですよ。逆に、今は財政局に置かれていますけれども、土木担当がいたかどうかはちょっと分かりませんが、室長は建築職であるし、技術系はちゃんと入っていて、まちづくりもやっています。平野先生はご存じだと思いますけれども。そういう意味では大いに期待していいスタッフだと思っています。ここまでやるというのはなかなかできないですよ。ですから、主催者ですから、我々のこの声も十分に施策としてどう位置づけるか、それは増田先生と相談しながらやっていただけるといふふうに思っています。

手島：

わかりました。もうタイムアップのようなので、以上で議論はお

しまいになります。どうもありがとうございました。
以上

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から
「公共を担う仕組み」を考える

これまで最先端でいったけれども、議会の、議会棟もそうですけれども、本庁舎のその執行部のほうもそうですけれども、使いやすい、今オープンデータって言葉がありますけれども、オープンデータで使いやすいようなこともあわせてソフトの面でやってもらえるといいかなと思います。

以上です、ありがとうございます。

遠藤：

ありがとうございます。ガラス張りっていうのも面白いですね。では、坂口先生もちょっと短めに一言。

坂口：

1つだけ言いますと、さっき河村先生が、ゼネコン汚職という話があって、多分その結果できたのがこの仙台メディアテークで、ここは公開コンペで、全くそのプロセスが公開されてできた。要するに、そのプロセス自体がどうこれからつくるかとかと密接に絡んでくるので、そこはぜひ頑張ってもらいたいのが1点と、もう1つはやっぱり広場というか、市民広場がどう使うかあれですけども、低層棟になったときに、その傍聴席と議場の区別がなくて、広場

そのものが議場になるような形も一つあるのかなというふうに思いました。以上です。

遠藤：

それはまた画期的な提案ですね。ありがとうございます。

私も皆さんのお話を聞いていて、あとは議員改革が仙台市ってどうだろうっていつも思うのですよね。ですから、人の行動というのはある意味環境がつくる部分もありますよね。だから、その庁舎の議会ゾーンに入れば議会改革を進めたいかなるような庁舎の議会ゾーンのその設計やインテリア、あとは机なんかをもっと機能的でいいと思うのです。他の自治体の議会のお部屋をちょっと使わせていただくことがあると、全く使いにくい。重いし動かないし、さっきステータスというお話ありましたけれども、ステータスのためであって全く機能的でない。それを議会休会中に市民が、一緒に議論をする人が使えるような機能的なもの、その未来を志向して今の社会の変化にしっかり適応して未来を望めるような建物が必要でしょう。その場が旧来だったら思考だって旧来にならざるを得ないんじゃないかと思うのですよね。ですから、そういった意味で未来を先取りするような空間、環境というのは

Table C2

低層部を中心にレジャーし、
低層部の必要機能を考える

を入れていただけると、仙台市民あるいはいろんなところから来られた方の仙台のまちへの愛着、まちづくりへの関心、こういうものが高まるなと思っています。ここは何か、市政情報との関係もあるのですが、こういった機能はぜひ、新しいコンテンツにもなるんでぜひお願いしたいなというのが一つ。

あと、私の立場でいうと、観光というのがありますので、広場、屋内広場ができたときに空間があるプラスアルファ、観光に関わる様々なコンテンツ、情報提示ができるような、これはデジタルで構いませんけど、そういったものも広場に併設されてくると、なおいいな。新しい人を呼び込むという意味では非常にいいなと以上です。

佐藤：

ありがとうございます。コンテンツのほうでも構いませんので最後に一言お願いします。

錦織：

最後にこれは言っておこうと思っていることがありまして、もちろん、機能としては入っているのですが、やはり託児所がほしいなと思います。私も6ヶ月の子どもがいるのですが、今日、ここへ出てくるのも結構大変でした。今日のラウンドテーブルの場に洞口さんがお子さんと一緒に来られているのも結構いいなと思います。来られない人も来られるようにしてほしいです。

佐藤：

ありがとうございます。

高野：

僕も村山さんと同じで、やはり観光系のジジットセンターみたいな、そういうものが市役所にはあるべきではないかと思っています。今後、インバウンドも今、力を入られているので、そういうものが駅にも余りないという感じで、ちょっとブースがあるかなと

Table A2

みんなで共有した都市ビジョンを
どう位置づけるかを、みんな考えて



やっぱり人間の感覚にも訴えかけますので、ぜひそういった議場にしていだきたいなと思います。あとは皆さんからあったように、やっぱり超党派の議員さんですとか議会がチームとして市民と向き合う、課題と向き合う、そういうマルチステークホルダーで話し合えるようなところが、議場の、アレンジして使えるというのでもいいのですけれど。そういうところを休会中も活用できるとかですね、そういった意味で来やすくなるということもあるのじゃないかなというふうに思いました。

では、最後ちょっと駆け足になりましたけれども、皆さんからちょっといろんな視点で、この建物についてのご意見もいただきましたし、関係性ですね、議会と行政と市民の関係性というの、今日お持ち帰りいただけるようなところもありましたし、あと今日各地の事例に詳しい河村先生もお越しいただいているのでぜひお名刺交換して帰っていただいて、ぜひいろんなやり方なども教えていただけたらと思います。

では、何かこれ言い忘れたというのはありませんか。大丈夫ですか、どうぞ。

河村：

いうところなのでもったいないです。よく仙台に来られた人、友人とかを案内するとき、すごく困ります。観光するということも余り出てこないですし、仙台のことを教えることも余りできないので、そうすると、松島方面に行く感じなのでそういうところが欲しいです。

佐藤：

ありがとうございます。

杉山：

先ほど屋内広場という話がありましたが、冬の厳しい東北地方では非常に有効だと思います。仙台市には、既にアエルやガス局、そしてこのメディアテークにもアトリウムや屋内広場がありますので、新しい市役所にできると「4つの冬の広場」になります。これらをうまく連携して情報発信の役割分担などもしつつ、「仙台市には4つの暖かい広場…ホットパークがあります」みたいな宣

新庁舎つくるときに、ネットを無線でつなげるようにしてほしいです。今、僕は選挙管理のほうもやっているのですが、無線がつかないところが多くて、横浜市も実は庁舎建て替えと同時に無線を入れるという話になっていて、やはりその回線の場所のスペースの問題もあるのですが、でもやっぱり今無線で使って、フリーワイファイとかっていつの時代になってしまうと、内部で使うものと外部で使うもの、示し合わせてそういうふうなことをやってくれるといいなと思います。

遠藤：

やっぱり、これから何十年使うかで、その技術変化も見据えて市庁舎に入れていくということになるのじゃないかなと思います。皆さん、どうもありがとうございました。

以上

Table B2

「市民と議会と行政」の関係から
「公共を担う仕組み」を考える

伝でも打って見たらどうでしょうか。

佐藤：

ありがとうございます。

本当に長い時間、いろんなご議論いただきましてありがとうございました。

これで終了したいと思います。

Table C2

低層部を中心にレジャーし、
低層部の必要機能を考える

主催

仙台市財政局理財部本庁舎建替準備室
 一般社団法人 宮城県建築士会
 一般社団法人 宮城県建築士事務所協会
 公益社団法人 日本建築家協会東北支部宮城地域会

企画委員会

菅原 大助	仙台市財政局理財部本庁舎建替準備室
高橋 香奈	仙台市財政局理財部本庁舎建替準備室
吾妻 光	仙台市財政局理財部本庁舎建替準備室
石原 修治	宮城県建築士事務所協会
中居 浩二	宮城県建築士事務所協会
佐々木 昌喜	宮城県建築士事務所協会
大宮 利一郎	宮城県建築士事務所協会
川口 裕子	宮城県建築士事務所協会
奥山 和典	宮城県建築士事務所協会
栗原 將光	宮城県建築士事務所協会
高橋 直子	宮城県建築士会
清本 多恵子	宮城県建築士会
小林 淑子	宮城県建築士会
錦織 真也	宮城県建築士会
石井 順子	宮城県建築士会
辻 一弥	JIA 宮城地域会
松本 純一郎	JIA 宮城地域会
手島 浩之	JIA 宮城地域会
安田 直民	JIA 宮城地域会
阿部 元希	JIA 宮城地域会
佐伯 裕武	JIA 宮城地域会

報告書編集

安田 直民 JIA 宮城地域会

付記

本誌に掲載されている登壇者等の肩書、所属は各回の仙台ラウンドテーブルが開催された当時の物です。

宮城県建築士事務所協会とは「一般社団法人宮城県建築士事務所協会」を、宮城県建築士会とは「一般社団法人宮城県建築士会」を、JIA 宮城地域会とは「公益社団法人日本建築家協会東北支部宮城地域会」を指します。

本誌に掲載されている事例報告、各団体等の活動報告、ならびにラウンドテーブルの討議録は、当日の録音及び発表原稿をもとに文字におこしたものです。一部、録音の不鮮明な部分、口語体で理解が難しい部分については加筆をおこなっています。

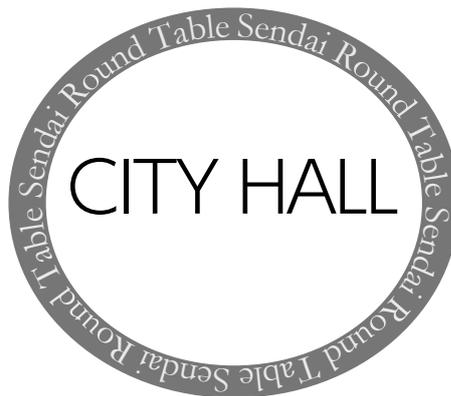
内容については上記の文責のもとに原稿を作成いたしました。

市民と専門家による仙台市役所本庁舎建替シンポジウム

CITY HALL

第2回仙台ラウンドテーブル

「みんなの市役所(シティホール)を模索する」



2020年8月17日 第一刷発行

著作・監修： 仙台市
一般社団法人 宮城県建築士会
一般社団法人 宮城県建築士事務所協会
公益社団法人 日本建築家協会東北支部宮城地域会
発行所： 公益社団法人 日本建築家協会東北支部宮城地域会
〒980-0811 仙台市青葉区一番町4-1-1
仙台セントラルビル4F
<http://www.jia-tohoku.org/archives/author/miyagi>
電話 022-225-1120 FAX 022-213-2077

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

本書の無断複製（コピー）は著作権法上での例外を除き禁じられています。

また、代行業者等に依頼してスキャンやデジタル化することは、
たとえ個人や過程内の利用を目的とする場合でも著作権法違反です。

© 2020 City of Sendai, Miyagi Society of Architects & Building Engineers, Miyagi Association of Architectural Firms, Miyagi Association, the Japan Institute of Architects Tohoku Chapter
ISBN978-4-903378-31-2

本書の内容に関するご意見・ご感想は下記までお寄せください。
仙台市財政局理財部本庁舎建替準備室
E-mail : zai003075@city.sendai.jp